

「アダム・スミスの価値尺度論」に関する  
海外における諸研究

— 19世紀末から1970年代末 —

(下)

中 川 栄 治 著

広島経済大学

地域経済研究所

1 9 9 5

広島経済大学研究双書 第15冊

「アダム・スミスの価値尺度論」に関する  
海外における諸研究

— 19世紀末から1970年代末 —

(下)

中 川 栄 治 著

広島経済大学  
地域経済研究所  
1995

# 「アダム・スミスの価値尺度論」に関する

## 海外における諸研究

—— 19世紀末から1970年代末 ——

### 下 巻

### 目 次

39. F. ベーレンス (1962年) .....	337
40. J. オーザー (1963年) .....	341
41. P. L. ダナー (1964年) .....	345
42. W. J. バーバー (1967年) .....	372
43. I. H. ライマ (1967年) .....	389
44. E. G. ウェスト (1969年) .....	398
45. G. ローゼンブルース (1969年) .....	401
46. C. ナポレオーニ (1970年) .....	404
47. A. S. スキナー (1970年) .....	414
48. H. W. スピーゲル (1971年) .....	427
49. M. ドップ (1973年) .....	432
50. M. ボウリー (1973年) .....	443
51. S. ホランダール (1973年) .....	454
52. S. カウシル (1973年) .....	467
53. T. サウエル (1974年) .....	476
54. V. W. ブレイドウン (1974年) .....	480
55. D. P. オブライエン (1975年) .....	499
56. R. B. エーケルンド Jr. と R. F. エベール (1975年) .....	518
57. G. ラウス (1975年) .....	523
58. V. W. ブレイドウン (1975年) .....	525
59. D. A. リースマン (1976年) .....	558
60. R. H. キャンベルと A. S. スキナー (1976年) .....	570
61. P. シロス-ラビーニ (1976年) .....	572

## 目 次

62. B. ショシュキチュ (1976年) .....	621
63. M. オラルドと R. トルタジャーダ (1976年) .....	626
64. H. D. クルツ (1976年) .....	630
65. P. L. ダナー (1976年) .....	632
66. L. デュモン (1977年) .....	636
67. W. ジャツフェ (1977年) .....	644
68. J. T. ヤング (1978年) .....	647
69. P. ディーン (1978年) .....	650
70. H. アルント (1979年) .....	655
おわりに .....	658

あとがき

## 〈上巻内容〉

序. 本書の成立経緯ならびに方法

1. J. K. イングラム (1888年)
2. F. von ヴィーザー (1889年)
3. J. ボナー (1893年)
4. W. リープクネヒト (1902年)
5. C. M. ウォルシュ (1903年)
6. A. C. ウィッテカー (1904年)
7. R. カウラ (1906年)
8. H. J. ダウンポート (1908年)
9. C. リスト (1909年)
10. L. H. ヘイニー (1911年)
11. R. A. マクドナルド (1912年)
12. C. M. ウォルシュ (1926年)
13. H. H. ルービン (1926年)
14. P. H. ダグラス (1927年)



## 目 次

15. E. キヤナン (1929年)
16. A. グレイ (1931年)
17. Д. И. ローゼンベルク (1934年)
18. M. ボウリー (1937年)
19. E. ロール (1938年)
20. V. W. ブレイドウン (1938年)
21. A. H. ジェンキンズ (1948年)
22. H. ミント (1948年)
23. J. F. ベル (1953年)
24. J. A. シュムペーター (1954年)
25. J. P. ヘンダースン (1954年)
26. É. ジャム (1956年)
27. R. L. ミーク (1956年)
28. H. M. ロバートスンと W. L. テイラー (1957年)
29. L. ロビンズ (1958年)
30. S. アムビラジャン (1959年)
31. R. ルカッチマン (1959年)
32. D. F. ゴードウン (1959年)
33. M. ブラウグ (1959年)
34. E. ウィッテカー (1960年)
35. W. フェルナー (1960年)
36. O. H. テイラー (1960年)
37. A. K. ダース・グプタ (1960年, 1961年)
38. M. ブラウグ (1962年)

### 39. F. ベーレンス (1962年)

1962年にその初版が刊行された F. ベーレンス (F. Behrens) の一著書 (Fritz Behrens, *Grundriss der Geschichte der politischen Ökonomie*, Band 1, *Die politische Ökonomie bis zur bürgerlichen Klassik*, 2., berichtigte und ergänzte Auflage, Berlin: Akademie-Verlag, 1981 [1. Auflage 1962]). なお, ここでは上掲の第2版を使用するのであるが, ここで取り扱うベーレンスの研究の発表年の区分については, 同じ刊行機関から上掲書の初版が刊行された年, 1962年をとり, そして, 以下では, 上掲書第2版を Behrens [1962] と略記することとする) のなかでベーレンスはつぎのような見解を示している。

① スミスは, 彼の分業論に, 富裕はもはや自己の労働の生産物に存するのではなくてその生産物と交換されうる他人の労働の量に存するのだという発見を, 結びつけ<sup>(1)</sup>, そして, 「したがって, およそ商品の価値は, それを所有していても自分では使用または消費しようとはせず他の商品と交換しようと思っている人にとっては, その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しい。それゆえ, 労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である」 (WN, p. 30. 大河内訳 < I >, 52ページ) としている。

② しかしながら, スミスにおいては, 価値についての二つの異なる<sup>(2)</sup>たし<sup>(3)</sup>かも互いに調和させることのできない<sup>(3)</sup>把握が, 併存しており, 商品の生産に必要な労働量による商品価値の規定 (Bestimmung, 決定) と, 「それをもって商品を買うことができるところの生きた労働 (lebendige Arbeit) の量による, または同じことであるが, それをもって一定量の生きた労働を買うことができるところの商品の量による」商品価値の規定とが, 混同されている (Marx, *Mehrwert* < I >, S. 41. 大内・細川訳『剰余価値学説史』< I >, 50ページ)。それゆえ, マルクス (K. Marx) の指摘しているように, スミスは, 労働量による商品の価値の規定を, 労働の交換価値によるすなわち賃金による価値の規定と混同している, なぜなら, 賃金は, 「一定量の生きた労働で買われる商品の量に等しく, あるいは一定量の商品で買うことのできる労働の量に等しい」からである (Marx, *Mehrwert* < I >, S. 41. 大内・細川訳『剰余

価値学説史』〈I〉, 50ページ)。だが、労働の価値——あるいはより正確には、労働力の価値——は、「他の諸商品の価値から特別に」区別される点はないもない、それゆえ、スミスは、一商品の価値を、他商品の原因にまた度量標準にしているのである。スミスは——別の言葉ではあるが——、すべての商品の価値を、一商品すなわち労働力の価値に、依存させるのである。したがって彼は、価値を価値によって規定することによって、一つの循環論法をおかしているのである (Marx, *Mehrwert* 〈I〉, S. 41-42. 大内・細川訳『剰余価値学説史』〈I〉, 50ページ)<sup>(4)</sup>。

③ また他方でスミスは——別の言葉ではあるが——、現在では——資本主義的商品生産のもとでは——ある一定量のすでに対象化された労働はより大きな量の生きた労働と交換される、ということを発見したのであるが、それがもとで彼は、「労働条件が土地所有と資本との形態で賃金労働者と対立するようになれば、もはや労働時間は、諸商品の交換価値を規制 (regeln) する内在的尺度 (das immanente Maß) ではなくなるということ」 (Marx, *Mehrwert* 〈I〉, S. 44. 大内・細川訳『剰余価値学説史』〈I〉, 53ページ)<sup>(5)</sup> を、結論するのであった。

#### (注)

- (1) なお、ベーレンスによれば、スミスがそのようにすることによって、生産者の生産物に対象化された労働 (vergegenständlichte Arbeit) が事実上、すべての他の生産物に対象化された労働と同一視されそして商品のなかに含まれている社会的労働としての労働を規定するということとなった、とされる。Behrens [1962], S. 211.
- (2) Behrens [1962], S. 211-212.
- (3) ベーレンスによれば、そのことの原因は、スミスをして資本の歴史的特性およびその範疇と法則を理解することを妨げているところのスミスの体系のなかに存する矛盾にある、とされる。(Behrens [1962], S. 212.) このことに関するスミスの体系のなかに存するとされる矛盾については、Behrens [1962], S. 209-211 を見よ。
- (4) Behrens [1962], S. 212. なお、ベーレンスは、この循環論法の原因はスミスの基本的な考え方のなかに、すなわち、彼の階級的性格の結果として生じている彼の理論の観念論的な形而上学上の基本的考え方のなかに存在する、とし、さらに、このことに関連してつぎのような説明をくわえている。すなわち、「[「かりに、すべての労働者が商品生産者であり、単に自分たちの商品を生産するだけでなく、それを売りもすると仮定しよう」 (Marx, *Mehrwert* 〈I〉, S. 42. 大内・細川訳『剰余価値学説史』〈I〉, 51ページ)。その場合、] すべての商品がその価値どおりに、したがっ

て、そのなかに含まれている必要労働時間どおりに売られるならば、「そのときには、労働者は、12時間労働の生産物である一商品をもって、他の一商品の形態での12時間労働を、すなわち他の一使用価値に実現されている12時間労働を、再び買うのである」(Marx, *Mehrwert* < I >, S. 42. 大内・細川訳『剰余価値学説史』< I >, 51ページ)。したがって、労働者の「労働の価値」は、「彼の商品の価値」に等しいのであり、そして、交換をつうじて、商品の価値ではなくて使用価値の姿だけが変わるのである。それゆえ、第一に、対象化された労働の等量が交換され、第二に、一定量の生きた労働は、それと等しい量の対象化された労働と交換される、ということになるのである。スミスは彼の分析において、すべての労働者が商品生産者でありまたそれゆえすべての生産者は商品所持者としてのみ相対するといった仮定から、出発した。この前提のもとでは——すなわち、単純商品生産という前提のもとでは、なぜなら、まさしく明らかに、その前提は、すべての生産者が商品生産者として相対するといったこと以上のことを意味しないのであるから——、マルクスの言っているように、「労働の価値」は、「商品に含まれている労働量とまったく同じように、商品の価値の尺度として通用し」えた (Marx, *Mehrwert* < I >, S. 43. 大内・細川訳『剰余価値学説史』< I >, 52ページ)。したがって、スミスは、前資本主義時代における商品の価値規定の真実を、提供してはいるのである。Behrens [1962], S. 212-213.

- (5) Behrens [1962], S. 213. このことについてベーレンスはつぎのような説明をしている。すなわち、スミスにとって単純商品生産の立場からは真実だと思われることが、資本主義的商品生産の立場からは彼にははっきりしないものとなる。すなわち、「言い換えれば、彼にとって単純商品の立場では真実だと思われることが、単純商品に代わって、資本、賃労働、地代等々のいっそう高度で複雑な諸形態が現れてくるやいなや、彼にははっきりしなくなるのである。このことを彼はこう表現する。すなわち、商品の価値がそれに含まれている労働時間によって測られたのは、人間がまだ資本家、賃金労働者、土地所有者、借地農業者、高利貸等々としてではなく、ただ単純な商品生産者および商品交換者として相対していたにすぎなかった市民階級の失われた楽園においてである、と」(Marx-Engels Werke, Bd. 13, „Karl Marx, Zur Kritik der Politischen Ökonomie,“ S. 44-45. 大内・細川訳『マルクス＝エンゲルス全集』第13巻, 「カール・マルクス 経済学批判」, 44ページ)。スミスは、資本と賃労働との交換では、「一般的法則が直ちに廃棄されて、諸商品は……それらが表す労働量に比例して交換されない」、ということを発見した。現在では生産の対象的諸条件が一方の階級に属し、労働力は他方の階級に属する。「労働の生産物またはこの生産物の価値は、労働者のものではない」のである。スミスは——別の言葉ではあるが——、現在では——資本主義的商品生産のもとでは——ある一定量のすでに対象化された労働はより大きな量の生きた労働と交換される、ということ

発見した。そこで彼は、「労働条件が土地所有と資本との形態で賃金労働者と対立するようになれば、もはや労働時間は、諸商品の交換価値を規制する内在的尺度ではなくなるということ」を、結論するのであった (Marx, *Mehrwert* < I >, S. 43-44. 大内・細川訳『剰余価値学説史』< I >, 52-53ページ)。Behrens [1962], S. 213.

さらにベーレンスはつぎのような説明をくわえている。すなわち、一方での単純商品生産における商品の商品に対する交換、他方での資本主義的商品生産における商品の商品に対する交換、におけるこの矛盾を、スミスは、解決することができなかった。彼は、自己の労働が自己自身の生産物に対象化されている生産者たちが相対し、生産者たちが自己自身の労働の量としての価値を等しい量の他人の労働と交換するときに、価値法則は通用するだけである、と推定した。そして、外見上、直接の生産者が彼らの生産手段から離脱することは、この法則の廃棄へと導くこととなるのである。スミスは、価値を歴史的に生成した一つの生産関係として把握しなかったために、また、階級的に制約をうけた彼の基本的な考え方そのものを理解することができなかったために、この矛盾を解決することができなかったのである。Behrens [1962], S. 213-214.

なお、ベーレンスは、スミスの議論には生産に必要な労働の量による価値規定、支配しうる生きた労働の量による価値規定 (賃金による価値規定) とならんで、第三の価値規定すなわち分配から価値を演繹しようとする企てといったものが存在するとして、それについての検討をなしている。それについては Behrens [1962], S. 214-216 を見よ。

## F. ベーレンス (1962年) についての覚書

ベーレンスがスミスの議論における価値尺度に言及するとき、その価値尺度は事実上、諸商品の交換価値を規制しその大きさを内在的に測定する内在的尺度として問題にされるのであった。

そして、ベーレンスの議論の示すところによれば、スミスは一方でそのような意味での尺度を労働時間に求めるのであるが、そのさいスミスは、「商品に対象化された労働の量」と「商品によって支配されうる生きた労働の量」とを混同し、したがって労働量による価値の規定を、論理的には循環論法となるものであるところの賃金による価値の規定と混同するとともに、さらに他方でスミスは、事実上の資本主義的商品生産のもとではうえの二つの労働量は一致しないということから、労働時間が諸商品の交換価値を規制する内在的尺度として妥当するのは単純商品生産のもとにおいてのみであり、資本主義的商品生産のもとではもはやそれは妥当しないと考えていた、ということになるのであった。

## 40. J. オーザー (1963年)

1963年にその初版が刊行された J. オーザー (J. Oser) の一著書 (Jacob Oser, *The Evolution of Economic Thought*, New York & Burlingame: Harcourt, Brace & World, 1963. 以下, Oser [1963]と略記する。なお, その第2版は1970年に同じ出版社から出され, 1975年にはその第3版が W. C. ブランチフィールドとの共著の形で出版されている。Jacob Oser and William C. Blanchfield, *The Evolution of Economic Thought*, 3rd edition, New York, etc.: Harcourt Brace Jovanovich, 1975. 以下, この第3版を Oser & Blanchfield[3rd ed.]と略記する。なお, 1988年には第4版も出されている。ただし, 出版社名は第3版と同じであるが, 共著者は Stanley L. Brue) のなかでスミスの議論が取り扱われるさい, 「価値」という項において概ねつぎのような見方が示されているといえる。

① スミスによれば価値には使用価値と交換価値という二種類の価値があるのであるが, そのうちの交換価値, すなわち, 商品の所有がもたらすところの他財貨にたいする購買力が, 市場経済が発達して以来, 経済学の中心的な問題の一つであってきた。<sup>(1)</sup>

② スミスの議論では商品の交換価値を決定 (determine) するものは, その商品が真に費やさせるもの, すなわち, たんに貨幣ではなくて, 「それを獲得する労苦と骨折り」であった。そして, これを測定 (measure) するもの, すべての商品の〔交換〕価値の真の尺度となるものは, 労働なのであった。<sup>(2)</sup>

③ しかしながらスミスは, 労働の質には相違があるため仕事の難しさや労働が行われるさいの熟練や創意に対する斟酌が加えられなければならないとし, そしてこの問題に対して, 「市場のかけひきや交渉」がそれらの相違を調整する, とした。<sup>(3)</sup>

④ だがたとえこの労働の質の相違という問題はおくとしても, 労働価値説 (labor theory of value) には生産における資本の投資という困難な問題があるのであり, 資本の成長が単純な労働価値説を無効にしてしまうであろう。<sup>(4)</sup>

ということを理解していたスミスは、「資本（stock）の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態において」のみ、諸商品が、それらを生産するのに必要とされる労働量に比例して交換されるとし、そして、資本投資が見越せないこととなりまた土地が私有財産になった社会では諸商品の価格は賃金、利潤および地代をまかなうものになるとした。諸商品の真実価値（real value）はもはやそれらの商品に含まれている労働によっては測定されえないのである。しかしながら、それらは、「それらの各々が購買または支配しうる労働量」によって測られる。商品が買うことのできる労働の量は、利潤と地代の分だけ、その商品の生産に具現された（embodied、実際に投下された）労働の量を超過するのである。<sup>15)</sup>

⑤ ところで、もしスミスにしたがって我々が一商品とその商品が購買するであろう労働との間にひとつの相当関係を組み立てるならば、我々は、その均等関係を裏返し、そして、労働の価値はその労働が購買するであろう諸商品によって測定されるということが出来る。ある意味で、価値についてのスミスの定義は、国民の福祉（well-being）の国際比較に利用される。すなわち、もし合衆国では一労働者は5時間の労働で1足の靴を買うことができ、他方ソビエト連邦ではそれは20時間の労働を要するとすれば、このことは、ひとつの意味のある比較となるのである。<sup>16)</sup>

（注）

(1) Oser [1963], p. 53. Oser & Blanchfield [3rd ed.], pp. 72-73.

(2) Oser [1963], pp. 53-54. なお、第3版では、これに対応する部分は概ねつぎのような形で叙述されている。すなわち、商品の交換価値を決定するものは何か。たんに貨幣のタームでだけでなくその商品を獲得する労苦と骨折りというタームでもその商品が真に費やさせるものである。労働とはやっかいなものであり、可能なかぎりできるだけ回避されるであろう。富は人をして、労苦と骨折りを他の人々に課することによってそれらを回避することを可能にする。それゆえ、スミスによれば、それを所有しているがそれを他の諸商品と交換したいと思っている人にとってのそのようなすべての商品の価値は、「その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しい。それゆえ、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である」のである。

Oser & Blanchfield [3rd ed.], p. 73.

(3) Oser [1963], p. 54. Oser & Blanchfield [3rd ed.], p. 73.

(4) それについてのオーザーの説明（あるいは、オーザーおよびブランチフィールド

の説明)については, Oser [1963], p. 54 (Oser & Blanchfield [3rd ed.], p. 73) を見よ。

- (5) Oser [1963], p. 54. Oser & Blanchfield [3rd ed.], pp. 73-74.
- (6) Oser [1963], pp. 54-55. なお, 第3版ではこの部分は削除されている。

また, オーザーは, いま本文でみた指摘につづいて, (また, オーザーおよびブランチフィールドは, 先の本文④でみた指摘につづけて,) スミスによれば需要は諸商品の価値に影響を及ぼさないのであり, 賃金, 利潤および地代からなる生産費のみが長期 (long run) において価値を決定するのである, ということを指摘し, さらにそのようなものとしてのスミスの議論に対して若干の論評をくわえている。それについては, Oser [1963], p. 55 (Oser & Blanchfield [3rd ed.], p. 74) を見よ。

なお, 以上でみてきたオーザーの (また, オーザーおよびブランチフィールドの) 所論においては, スミスの議論における「交換価値の決定の問題」と「交換価値の測定の問題」との論理的関係といったことは必ずしも明らかな形では示されていない。だが, オーザー自身は (また, オーザーおよびブランチフィールド自身は), スミスの議論では「資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態」においては商品の生産に「投下された労働量」によってその商品の交換価値が決定されるとともにその商品の交換価値が測定され, しかもその「投下された労働量」はその商品が「購買しうる労働量」に等しいとされており, それにたいし, 資本の蓄積と土地の占有の行われる社会状態では商品の交換価値は「投下された労働量」によって決定されるのではなく, 長期的には賃金, 利潤および地代からなるその商品の生産費によって決定され, 他方その商品の交換価値はその商品が「購買しうる労働量」によって測定されるとされている, とみているともいえるであろう。

## J. オーザー (1963年) についての覚書

1963年のオーザーの所論においては, スミスの議論における「交換価値の決定の問題」と「交換価値の測定の問題」とのあいだの関係といったことについてのオーザーの見方ということは, 必ずしも明らかな形では示されていないものではあるが, そこで示されているオーザーの論述からして, オーザー自身は, スミスの議論では「資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態」においては財貨の生産に「投下された労働量」によって, 当該財貨の所有がもたらす他財貨に対する購買力としてのその財貨の交換価値が, 決定されるとともに, その財貨の交換価値が測定され, しかもその「投下された労働量」はその財貨が「購買しうる労働量」に等しいとされており, それにたいし, 資本の蓄積と土地の占有の行われる社会状態では財貨の交換



価値は「投下された労働量」によって決定されるのではなく、長期的には賃金、利潤および地代からなるその財貨の生産費によって決定され、他方その財貨の交換価値はその財貨が「購買しうる労働量」によって測定されるとされている、とみているともいえるのであった。（そしてまた、以上の点については、1975年のオーザーおよびブランチフィールドの所論についても概ね同様なことがいえるのであった。）

## 41. P. L. ダナー (1964年)

1964年に博士論文として承認され1965年にその著作権が成立した P. L. ダナー (P. L. Danner) の一労作 (Peter Lyn Danner, *An Inquiry into the Social Aspects of Adam Smith's Theory of Value*, Ph. D. dissertation, Syracuse University, 1964, ©1965, Ann Arbor, Mich.: Xerox University Microfilms, 1976. なお、この労作の著作権が成立したのは1965年ではあるが、そこに示されるダナーの研究の発表年の区分については、上掲労作が博士論文として承認された年、1964年をとり、そして、以下では、上掲論文を Danner [1964] と略記することとする) のなかには、ダナーのつぎのような見解を見いだすことができる、といえよう。

① 「諸商品の exchangeable value (交換価値) を規制する原理を究明するために、私はつとめてつぎの諸点を明らかにしようと思う。」「第一に、この exchangeable value (交換価値) の真の尺度 (measure) はなんであるか、すなわち、すべての商品の真実価格 (real price) はいったいなにに存するか」と『国富論』第1篇第4章の終わりのところ (WN, p. 28. 大河内訳 < I >, 50ページ) で述べられているように、価値についてのスミスの議論には、価値の、ある絶対的な標準 (standard) の追求ということが含まれていた。<sup>(1)</sup>

② ところで、スミスの価値理論 (theory of value, value theory) の背景となった諸価値理論を検討してみると、<sup>(2)</sup> 一つの価値理論は、究極的には、(1) 価値とは本来なんであるのか、(2) 価値の諸原因 (causes) とはなんであるのか、(3) 価値の尺度 (measure) とはなんであるのか、という三つの関連のある質問に対する解答ということに帰着するのであるが、これらの質問にアプローチするさい現代人は、哲学的な諸問題を回避して、道徳的、心理学的、社会学的諸問題を含めて多数の、経済学以前の諸問題を与件として取り扱ったり、あるいはそれらを見放し、除外する傾向があるのにたいし、スミスはまさにそれらの問題にたずさわったのであり、彼は価値を、経済学的な観点からというよりも彼の社会哲学の観点から、考えたのであった。そしてまた、そのような一社会哲学者としての彼のアプローチは、経済的連関の厚生

(welfare) にかかわる諸局面からのものであったのであった。ただし、スミスの場合、このような関心は、いっぽうで、彼の分析のなかに、価値を有する事物と価値そのものとの混同という最も根本的な混同をもたらすことともなり、かくして、商品の原因が、価値の原因となり、また、価値の尺度が、ともかくも必然的に、〔商品の〕原因と関連づけられることとなるのである。そして、このような意味で、価値についてのスミスの問題のたてかたは、経済学的には明確性を欠くものとなったのである。<sup>(4)</sup>

③ スミスの問題の捉え方にはそのような難点があるとはいえ、とにかくスミスはいっぽうで、exchangeable value の、ある絶対的な標準を追求していた。そして、スミスにおいては、フィートあるいは歩幅が長さに関する距離の自然的な尺度であるのと同じように、労働が exchangeable value の自然的な尺度であるのであった。なお、その場合の労働とは、生産力を有するものとしてのそれを意味していたわけでも、エネルギーの支出あるいは時間の経過といったようななんらかの物理的な要素を意味していたわけでもなく、労働の不効用、労苦、骨折り、人の安楽と幸福の犠牲といった純粹に心理的なものを意味していたのであり、この意味での労働が、すべての事物の究極的な費用であるとともにすべての事物の真の尺度である、とされるのであった。<sup>(6)</sup> スミスにおいては、exchangeable value とは、労働にたいする支配力を与える物質的な生産物の一性質であったのであり、exchangeable value が支配させるもの、exchangeable value がその所有者をして他者に移転することを可能にするものは、労働の不効用であったのであり、またそれゆえ、その exchangeable value の究極的な尺度は、労働の心理的費用、労働の労苦と骨折り、つまり、労働の不効用であったのである。<sup>(7)</sup>

④ ところで、スミスによれば、労働がいかに根本的で本質的なものであるとはいえ、労働の熟練、訓練状態、厄介さ等々の相違がおびただしいためにある特定量の労働がそのまま標準として用いられうるというわけではなかったのである。そしてこの問題にたいしてスミスは、「市場のかけひきや交渉」をつうじて、日常の業務をしていくには十分なほどの、うえの諸相違についてのおおざっぱな釣り合いや評価、相対的な価格の一覧表——スミスでさえ、価格から脱出することができなかった——がもたらされる、とした。すなわち、スミスは、労働の不効用を基数的な意味で確定することは認めはしなかったのであるが、「市場のかけひきや交渉」にしたがってのおおよそ

の序数的な意味での確定を認めたのである。<sup>8)</sup>

⑤ また、スミスは、彼にとって経済的發展の基本的な原理であった分業化 (specialization) と機械の導入がある所与の量の労働が実行しうる生産率を必然的に変えてしまうであろうということを、事実上、認識していたのはあるが、その場合にも彼は、それによって労働の価値が変化してしまうというわけではなくて労働がそれと交換されるところのものの価値が、変化するのであると考えた。<sup>9)</sup> スミスは、人間は生存や生活に必要な物質的事物を手に入れるためにみずからの力を犠牲にするのでありそしてこれが究極の費用なのであるという究極的な経済的現実<sup>10)</sup>に、注目しているものであり、労働の不効用は、それと交換されるものの多少にかかわらず、つねに同一であり、労働の不効用こそが究極的な価値尺度である、と考えているのである。

⑥ このようにスミスは労働の不効用を究極的に真の、そして普遍的な価値尺度と考えたのであるが、労働不効用とははっきりしたものではなくそれを測定するには多くの困難が伴うということからスミスは、ヨリ実用的かつ通常的な価値尺度を、おのおのの時と場所において受け容れることができるような形で生活を維持するのに必要な主要食物という観点からみた場合の正常な報酬という意味での、労働の維持費に、求めた。このようにして、スミスにとっては、食物の主要品目としての穀物がヨリ良い尺度ということになるのであり、そしてその理由は、穀物は労働の不効用よりも規格的な取り扱いを受けやすいものであるとともに長い諸期間 (long periods of time) にわたっては一つの標準として相対的に安定的なものでありつづけるということであった。しかしながら、それでも、スミスは、穀物を主要品目とする食物という点からの労働の維持費、生計費は、異場所間においても異時点間においても可変的である、<sup>11)</sup>ということを認めていたのであった。

⑦ なお、スミスが最低限の住や衣を含めた全体としての最低限の生活水準ではなくて基本食品 (穀物) を標準としたのは、住や衣といった項目がいかに必要なものであるとしても、それらの項目は経済状態の良好な時期および劣悪な時期をつうじて基本食品よりもはるかに多くの変動にさらされやすい、<sup>12)</sup>ということによるのであった。

⑧ 他方、スミスは、銀の量〔社会における銀の量〕は年から年にかけてはそれほど大きくは変動しないということから、比較的短い諸期間にわたっては標準的な通貨単位としての銀が、穀物よりも良好な価値の尺度であるか

もしれない、ということを読めた。しかしながら、ヨリ長い諸期間にわたっては銀の稀少あるいは豊富はヨリ大きな変動にさらされる、とするのであった（WN, pp. 36-37, 210-211. 大河内訳〈I〉, 62-63ページ, 342-344ページ<sup>13)</sup>）。

⑨ このようにスミスは、労働の不効用を測定することの困難性ということから短期については銀を、長期については「1単位の労働を支配できる食物量、したがってまた1単位の労働を支配できるところの、食物の主要品目としての穀物量、という意味での」労働の維持費、生計費を、ヨリ実際的な尺度として持ち出すのであるが、同時にスミスは、労働は穀物でも銀でも変動的な賃金を受け取るであろうということを、認めるのである。しかしスミスは、このことは労働の価値の変動を指し示しているのではなく、穀物のまた銀の価値の変動を、それらのものの相対的豊富さおよび稀少さの変動を指し示しているのものであるということ、を、強調するのである。スミスにおいては、価値の本当の尺度、あらゆるものの究極の費用は、労働の不効用なのである<sup>14)</sup>。労働は、実用的な尺度としてはいかに不適切なものであろうとも、真の価値尺度なのであり、そして、長期では穀物がまた短期では銀がヨリ便利な尺度ではあるけれども、それらのものが究極的に指し示すものそしてそれらのものの究極の基準となっているものは、労働に伴う余暇の犠牲および骨折りなのである。労働の維持費、銀の購買力は変動するかもしれない、だが、労働の不効用はけっして変動しないのである。<sup>15)</sup>

#### (注)

- (1) Danner [1964], pp. 168-169. なお、ダナーは、つぎのような指摘をくわえている。すなわち、スミスは、いま本文で引用された文章にみられるように、「諸商品の exchangeable value (交換価値) の真の尺度はなんであるか」ということと「すべての商品の真実価格 (real price) はいったいなにに存するか」ということを同一視している。こんにち、どんな商品も、その exchange value (交換価値) の尺度は、その商品を獲得するのに引き渡されなければならない購買力の大きさであるように、どんなものの尺度も、そのものにとっては外在的なものである。すなわち、価値とは、ひとつの相対的なもの、他のすべての財貨にたいする一財貨の交換比率なのである。ところが、スミスにとっては、「真の尺度」あるいは「真実価格」とは、それに照らしてすべての商品が測定されうところのある一つの永続的で絶対的なものであるとともに、この永続的で絶対的なものはさらにまた、一つの原因に関する道すじにおいても、商品と結びつけられるものでもあったのである。

Danner [1964], p. 169.

なお、スミスのこのような態度に比較しての現代の経済学者たちの価値の取り扱いおよびマルサス (T. R. Malthus), リカードウ (D. Ricardo), マルクス (K. Marx) の取り扱いについてのダナーの見解については, Danner [1964], pp. 169-178 を見よ。

- (2) それについては, Danner [1964], pp. 178-185 を見よ。
- (3) このような態度をとる現代のアプローチがそれら三つの質問に対して与えている解答についてのダナーの説明については, Danner [1964], pp. 185-186 を見よ。なお, そこには, 現代人にとっては, 価値 (value) とはたんに, 瞬間価格 (immediate price) であろうと短期価格であろうとあるいはまた長期価格であろうととにかく供給と需要とによって決定されるものとしての価格なのであり, そして, 供給および需要の諸原因となるものが価格の諸原因なのである, といったダナーの見方も示されている。
- (4) Danner [1964], pp. 185-187. 本章の前出注 1 も見よ。なお, ダナーは, 価値についてのスミスの理論はスミスの経済分析を彼の社会哲学に関連づけるさいに枢軸的な役割を演じるのであり, そして, exchangeable value (交換価値) についてのスミスの議論は, たとえそれが経済学的にはどんなに混乱したものであったとしても, スミスが営業に関する自由主義の諸原理を明確に表現するさいにあるはっきりとした役割を演じていた, とみるのであった。Danner [1964], pp. 171, 187, 201-202.

なお, ダナーは, スミスのいう exchangeable value (交換価値) という用語にかなり特徴的な解釈を与えている。以下において, それを見ておくこととする。

ダナーは, スミスのいう exchangeable value という用語に関してつぎのような見方を示している, といえる。

(1) まず, スミスは, value in exchange および exchange value というもっと通常の用語をよく知っていたはずであるにもかかわらず, exchange value という用語は非常にまれにしか用いず, また, value in exchange については, 価値のパラドックスにおいて何回か value in use (使用価値) と対比させているが, 価値のパラドックスにつづくパラグラフ, それにつづく第 5 章での議論さらに一般に『国富論』をつうじて exchangeable value という用語のほうを好んで用いている。このこと自体は, 語法上の一つの特徴であるにすぎないかもしれない。だが, その対照的な用法はきわだったものであり, また, スミスがこの exchangeable value という用語を好んで用いているということは, スミスの考えへの一つの根本的な手掛かりを与えるものであるかもしれない。というのは, exchangeable value とは, 字義どおりにとれば, たんに, value in exchange と同じものを意味しているわけではないからである。後者は, たとえば交換において 5 個のりんごは 2 個のオレンジに値するといったように, 交換のプロセスにおいてまた交換のプロセスから発生するある値打ち

もしくは評価を含意しているのであって、その場合、厳密に言えば、価値が等しいがゆえに価値そのものが交換されるというわけではないのである。それにたいし、exchangeable value とは、交換されることのできる価値のことを言っているのである。すなわち、スミスは、厳密な意味での価値について語っているのではなくて価値を有する諸事物あるいは価値を有する諸商品という不精確な意味での価値について語っている、ように思えるのである。Danner [1964], pp. 187-188.

(2) あいにくスミスは、彼が exchangeable value によって何を意味したのかということを正確には定義してはいない。しかし、『国富論』のなかで示されている exchangeable value 概念に関係する諸断片をあつめて考えてみれば〔これについては、Danner [1964], pp. 188-190 を見よ〕、スミスの exchangeable value 概念に関してつぎのような点を指摘することができる。

(2-i) スミスにおける exchangeable value とは、触知することができた相対的永続性をもつ物質的な事物のひとつの性質である。すなわち、①スミスの exchangeable value 概念における最も基本的な要素は、exchangeable value とは物質的な事物に内在する性質である、ということである。②なお、スミスは、exchangeable value における相対的な要素を否定しているわけではない。というのは、スミスは、exchangeable value は他の諸商品に対する支配力をまた究極的には他の諸商品を生産するのに必要な労働支出に対する支配力を与えるということをし、主張しているからである。したがって、exchangeable value は、諸商品間のある比率もしくは関係を、確立するのである。③しかし、スミスは、この比率そのものには、それほど多く注意を向けているわけではなく、それよりはむしろ、その関係が構築されている土台に、すなわち、物質的な事物に内在する性質に、注意を向けるのである。④この性質は、一方では効用すなわち諸欲望を満足させる能力ということである。他方では、スミスにおいてはより重視される点であるが、永続性(permanence)ということである。すなわち、生活にとって有用なある物を生産するさいにひとたび労働が物質的事物のうえに支出されると、その労働は、労働の支出が終わってしまったあとでも存続する永続的な事物のかたちで、固定されつづけるのである。スミスにおける exchangeable value とは、触知することができた相対的永続性をもつ物質的事物がもつところの、欲望を満足させる力およびその力の永続性という性質のことなのである。Danner [1964], pp. 190-191.

(2-ii) スミスにおいては、exchangeable value とは、他の生産要素の力かかりた労働によって原料のなかになんらかの永続的な形で固定される性質、永続的な欲望充足力という性質、のことなのであるが、スミスは、物質のなかにこのような性質を永続的な形で固定させる労働を生産的労働と呼び、他方、たとえばオペラ歌手のサービスのよう物質のなかにこのような性質を永続的な形で固定させることなく労働の支出とともに欲望充足力が消え去ってしまう労働を不生産的労働と呼ん

#### 41. P. L. ダナー (1964年)

で、それらを区別するのであった。Danner [1964], pp. 190, 191-192, 253.

(2-iii) 他方、スミスにおける exchangeable value はまた、ある真の純生産物 (a true net product) という意味を含んでいた。すなわち、①スミスにおいては、exchangeable value は、総額では、ある真の「国民生産物 (national product)」, ある真の「国民所得 (national income)」として、あるいはスミスの言葉で言えば「一国の住民の真の富と収入」として、あらわれるのであったのである。なお、スミスにおいては、リカードウにおけるのとはちがって、ひとつの資本ストックとしての富 (wealth) と、富あるいは労働からのひとつのフローもしくは所得としての収入 (revenue) との間の明確な区別といったことはなされてはいないのであるが、その理由は、スミスの意味では富も収入もともに exchangeable value をもつ、ということにあったのである。スミスは富という用語を、1人当たり所得あるいは収入、また、資本財の一ストック、という二つの異なる道すじにおいて用いており、そしてスミスは、exchangeable value の永続性ということに注目していたというまさしくこの理由のゆえに、富という用語をそのような二つの異なる道すじで用いることにたいしてはなんの迷いをも表しはしなかったのである。②したがって、年々の生産物のうち、生産的労働を維持するためにかあるいは資本ストックを置換もしくは増加させるためにか使用される部分は、追加的な exchangeable value をもたらし、自らを再生産さらに増殖させるのであり、他方、企業家たちや地主たちによって彼らの地位に要する必要物をこえての生計に支出される部分、不生産的労働に支出されるものは、たとえそれがどれほど必要なものあるいは品位を高めるものであろうとも、自らを再生産しないことによって、exchangeable value を破壊するのであったのであり、そしてスミスにとって重大なことは、この商品とあの商品との交換関係といったことや労働と生産物との間の交換関係といったことではなく、一国の住民たちがそれから、また、それによって、生活の必需品、便益品および贅沢品を手に入れるところのストックあるいはフローの純増加ということであったのである。Danner [1964], pp. 95, 188-189, 191, 192-193. [なお、ダナーは、つぎのようなスミスの文章を引用している。「それゆえ、資本が増減するたびに、勤勉の実際の量、すなわち生産的な働き手の数は自然に増減する傾向があり、またしたがって、その国の土地と労働の年々の生産物の exchangeable value、その国の全住民の真の富と収入は、自然に増減する傾向がある。」(WN, p. 321. 大河内訳 I), 528ページ。傍点の付されている部分は、ダナーが強調のアンダーラインを付している部分。)

Danner [1964], p. 192. また、ダナーによれば、リカードウにおいては riches (富、富裕) と value (価値) とは別のものであったのにたいし、スミスにおいては、それら二つのものはほとんど同じものであった、すなわち、スミスにおいては一国民は exchangeable value の額に応じて、生活の必需品および便益品をもたらす労働にたいするその国民の支配力に応じて、富んでいた (rich) あるいは貧しかったり



(poor) するのである、とされる。Danner [1964], pp. 175-176. ただしまた同時にダナーによれば、資本主義的搾取についての理論の展開といったことを考えようとしていたのではなくて社会的調和および経済的利益の配布ということが支配する社会の発展といったことを考えようとしていたスミスにとっては、exchangeable value の増加、諸国民の富 (wealth of nations) の真の増加ということを試す適切な試金石となるものそのものは、1人当たりの増加、生活の必需品および便益品の単なる絶対的増加ではなく平均的増加、ということなのであった、とみられる。Danner [1964], p. 215.] なお、スミスの議論における純生産物としての exchangeable value という点に関するダナーの所説については、Danner [1964], pp. 213-219, 220 も見よ。

- (5) ダナーは、つぎのようなスミスの文章を引用している。「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう。……彼の熟練と技能が通常程度であれば、彼はつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一部分を犠牲にしなければならない。」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 57ページ。) Danner [1964], p. 194. またダナーは他の箇所でもつぎのような叙述をなしている。すなわち、『「それ自身の価値においてけっして変動することがないため、それだけがすべての商品の価値を時と場所のいかんを問わず評価し比較することのできる究極で真の標準である」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 58ページ) ところの、労働者にとっての労苦と骨折り。」 Danner [1964], p. 189.
- (6) なお、ダナーによれば、スミスの議論では、この意味では、生産的労働も不生産的労働もともに、価値があるのであり〔なお、ダナーはつぎのようなスミスの文章を引用している。「これら（不生産的労働）のうちで最も下賤な者の労働も一定の価値をもつのであって、この価値は、他のあらゆる種類の労働の価値を規制するのと同じ原理によって規制される。」(WN, p. 315. 大河内訳〈I〉, 518ページ。( )内はダナー。)], 労苦と骨折りという同じ自然的な費用を伴うのであり、したがってまたそれらの労働はともに報酬を与えられなければならないということになっている、とされる。Danner [1964], p. 194, p. 194n. 51.
- (7) Danner [1964], pp. 101, 193-194, 253. なお、ダナーによれば事実上、スミスの議論では、exchangeable value は、労働が価格付けの対象となる唯一の生産要素であるといった未開社会においてのみ、「投下された労働 (labor-embodied, 具体的に生産に投入され・生産されたものに体化された労働)」の不効用に等しいということになるのであるが、すべての発達した経済においては土地と資本も exchangeable value の生成に貢献するだけでなく報酬を与えられもするのであり、そして exchangeable value の生成に投下された労働、土地、資本という生産要素の各々に対する報酬そのものは究極的には、それらの各々の報酬が支配できる労働の不効用のタームで評価されるのであって、当該 exchangeable value の生成に投下さ

#### 41. P. L. ダナー (1964年)

れた労働、土地、資本という生産要素に対する諸報酬を合計したものは、当該 exchangeable value の生成に「投下された労働」の不効用そのものよりもより大きな労働の不効用を支配でき、そこでは、exchangeable value の大きさの程度は、「投下された労働」の不効用によって示されるものよりも大きい、ということになっている、とみられる。Danner [1964], pp. 101, 219.

なお、また、ダナーによれば、スミスの議論においては、労働は、未開社会における exchangeable value の唯一の原因であるのであり、また、資本の蓄積と土地の占有の行われる社会では土地、資本も exchangeable value の原因として現れてくるのではあるが、それでも、それらを用いてあるいはそれらと協同的な形で結合することによって exchangeable value を生成させる exchangeable value のいわば動力因としての原因となるものは労働なのであって、スミスの議論では、労働は、それなくしてはいかなる exchangeable value も生成されえないという意味で、独特なものであったのではあるが、スミスは、リカードウやマルクスがそうであったという意味での労働価値説論者ではなかったものであり、その点ではむしろ生産費価値説論者というほうが適しているかもしれない、とみられる。このような点を含めスミスの議論における exchangeable value の原因、源泉としての労働ということに関連するダナーの所説については、Danner [1964], pp. 95, 101, 199-219, 253 を見よ。

- (8) Danner [1964], pp. 101, 194.
- (9) ダナーはつぎのようなスミスの文章を引用している。「彼（労働者）が支払う代価は、それと引き換えに彼が受け取る財貨の量がどうであろうと、つねに同一であるにちがいない。……変動するのは、それらの財貨の価値であって、それらを購買する労働の価値ではないのである。」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 57-58ページ。( )内はダナー。) Danner [1964], p. 195 n. 53.
- (10) Danner [1964], pp. 194-195. なお、ダナーは、満足の量は物的生産物の量におおよそ比例するであろうということのスミスが仮定していたということに留意しておくことが重要であるがそれにくわえて、スミスは労働不効用の量を価値の一原因としてではなく価値の一尺度として考えていたのだということに留意しておくことも重要である、とし、そのことに関して、本書前出「22」でみた H. ミント (H. Myint) の研究に触れつつ、説明をなしている。その説明の内容は概ねつぎのようなものであるといえよう。すなわち、スミスは物的生産物の量と満足の量との間のおおよそその比例ということを決定的にしている。しかし、労働の不効用が「産出物のなかに含まれている主観的な社会的所得の尺度」であるということをミントが否定するとき、ミントは、スミスの議論における原因としての労働と尺度としての労働との間の相違ということを忘れてるように思える。「600単位の労働が1,000単位の賃金財を生産することができる」というふうに述べることは、スミスの考えをリカードウの投下労働といった型へともっていくことであって、これはまったくのところ

スミスの考えていたことではなかったように思える。スミスの場合、その1,000単位の生産物の原因は、労働の不効用ではなくて、土地および資本を相伴う労働の生産力なのである、そして、物的生産物の量と満足の大きさはおおよそ比例するのであり、その生産物の価値は、〔その生産物の量とおおよそ比例する〕総満足が、不変なものである労働不効用をどれだけ支配できるかということによって、測られるのである。このような意味において、支配される労働不効用は主観的な社会的所得の一尺度なのである。なお、賃金率そのものは、労働の生産性や分配に伴う他のすべての要因に応じて変動するであろう、しかしながらその場合には、労働の不効用が変動しているのではなくて、不変なものである労働の不効用が、〔より多くの物的生産物の量におおよそ比例する〕より多くの満足の量とあるいは〔より少ない物的生産物の量におおよそ比例する〕より少ない満足の量と交換されているにすぎないのである。労働の不効用が、究極的に真の、そして普遍的な尺度であるのである。Danner [1964], pp. 195-196.

なお、うえてみたようにダナーは、スミスは満足の量は物的生産物の量におおよそ比例するであろうということを仮定していた、とするのであるが、そのダナーによればまた、スミスの議論では事実上、財貨の諸物量と、それらの財貨から得られる満足とは正比例するのであり、そしてスミスは、価値を、単に経済財間の交換比率にすぎないものとして考えていたのではなくて、人間努力の、生活の物質的手段との根本的交換といったもの、また、生活の物質的手段のための人間努力の根本的犠牲といったものとして、考えていたのであり、さらにまたスミスの究極的な交換比率とは、「労働の不効用」と「諸事物からの欲望充足」との間の交換比率であった、とされる。Danner [1964], pp. 100-101, 201, 219.

- (11) Danner [1964], pp. 196-197, 253. なお、ダナーの議論そのものでは最後の点はつぎのような形で示されているといえる。すなわち、ダナーによれば、スミスの議論では、労働は貧しい国におけるよりも富んだ国におけるほうが通常より豊かな食物をもって報いられるという点で富んだ国と貧しい国との間には相違があるということが、また、標準的な食事は「自然的に、……それらの国々が前進しつつあるか、停滞しているか、あるいは衰退的であるかによって、規制される」(WN, p. 190. 大河内訳〈I〉, 313ページ)ということが、認められている、とされるのである。そしてまたダナーによれば、それどころかスミスは、その量および構成の両面において小作人あるいは労働者の食事を、経済的進歩の相対的状態についての一つの重要な基準にしているのであり、主要食物という点からみた労働の報酬は、富んだ経済にせよ貧しい経済にせよいずれの経済についても成長しつつある経済におけるほうが停滞的な経済におけるよりもより高いであろうし、また、停滞的な経済におけるほうが衰退的な経済におけるよりもより高いであろう、とするのである、また実際、スミスは明確に、繁栄ということを、必需品が豊富で贅沢品が稀少であるような経

#### 41. P. L. ダナー (1964年)

済状態として定義し、窮乏の時期はその逆の状態であると定義している (WN, p. 190. 大河内訳 < I >, 315ページ) のである、とされる。Danner [1964], pp. 196-197.

- (12) Danner [1964], p. 197. なお、ダナーはさらに、つぎのようなスミスの文章を引用している。「国の人口密度は、その国の生産物が衣と住をまかないいう人口数に比例するのではなく、それが食物を供しうる人口数に比例するものである。食物さえ得られるなら、必要な衣と住を見つけるのは簡単なことである。」(WN, p. 163. 大河内訳 < I >, 272ページ。)  
「それゆえ、我々は、以上すべての理由から、いかなる社会状態、いかなる改良〔ダナーが示している引用文では development となっているが、スミスの原典では improvement となっている〕の段階にあっても、等量の穀物は他のいかなる等量の土地の原生産物よりも、いっそうよく等量の労働を代表し、また等量の労働に対応することになるであろうということを安んじて確信してよいであろう。したがって穀物は……他のどんな商品、どんな商品群よりも正確な価値の尺度なのである。」(WN, p. 187. 大河内訳 < I >, 309ページ。〔 〕内は中川。) Danner [1964], p. 197.
- (13) Danner [1964], p. 198.
- (14) なお、ダナーは、この脈絡のなかで、スミスの議論ではさらに、労働の市場価格が労働の自然価格から乖離するといったことは一時的なものであって、それは供給と需要の局所的な事情によるものであり、市場価格は結局のところ、自然価格へとひきつけられまたつねに自然価格を中心にして変動することになるとされている、という指摘をなしている。Danner [1964], p. 198.
- (15) Danner [1964], pp. 198, 253.

#### P. L. ダナー (1964年) についての覚書

ダナーは、スミスの価値理論の背景となった諸価値理論を検討してみると一つの価値理論とは究極的には、(1)価値とは本来なんであるのか、(2)価値の諸原因とはなんであるのか、(3)価値の尺度とはなんであるのか、という三つの関連のある質問に対する解答ということになる、とするのであるが、またそのダナーによれば、現代人がこういった質問にアプローチするとき、彼らは、哲学的な諸問題を回避して、道徳的、心理学的、社会学的諸問題を含めて多数の、経済学以前の諸問題を与件として取り扱ったり、あるいはそれらを見無視、除外するといった傾向があるのにたいし、スミスはまさにそれらの問題にたずさわっていたのであり、スミスは価値を、経済学的な観点からよりもむしろ彼の社会哲学の観点から考えたのであった、とみられるのであ

た。

ただし、ダナーは、スミスはそうのように彼の社会哲学の観点から価値についての議論を展開した、とみ、さらにまた、その際におけるスミスの関心事は厚生にかかわる諸局面にあった、とみるのであるが、同時にまたダナーによれば、スミスの場合そのような彼の関心は一方で、価値を有する事物と価値そのものとを混同させることともなり、かくして、商品の原因が価値の原因となり、価値の尺度が、ともかくも必然的に、〔商品の〕原因と関連づけられることとなり、そしてそのような意味で価値についてのスミスの問題の捉え方は経済学的には明確性を欠いた混乱を含むものとなった、とみられるのであった。

なお、スミスの問題の捉え方の難点ということに関するうえのダナーの所説そのものには理解するのが難しい面があるようにも思えるのであるが、我々がみてきたダナーの議論のなかに見いだすことのできる諸点を考慮に入れつつダナーのこの所説をみてみれば、そこではダナーは事実上つぎのようなことを考えていた、ということができるかもしれないであろう。すなわち、本来、商品の価値（交換価値）とは、相対的なもの、つまり、他のすべての商品に対する当該商品の交換比率のことであり、それは、交換のプロセスにおいてまた交換のプロセスから発生するところの、当該商品の他のすべての商品に対する交換比率としての値打ちあるいは評価——たとえば、交換において1単位の商品Aは、2単位の商品B、3単位の商品C、……に値する、といったように——、ということの意味するのである。（なお、その場合、価値が等しいがゆえに価値そのものが交換されるというわけではないのであって、たとえば交換において1単位の商品Aと2単位の商品B、3単位の商品C、……と価値が等しいゆえに、1単位の商品Aと2単位の商品Bあるいは3単位の商品C、……、とが、交換されるのである。）そして、そのようなものとしての値打ちあるいは評価を成立させたもの、したがってまたその成立の因果的説明ということにあずかることになるものが、価値の原因なのである。これに対して、生産のプロセスにおいてたとえば1単位の商品A、2単位の商品B、3単位の商品C、……の生産を実現させたもの、したがってまたその実現の因果的説明ということにあずかることになるものが、商品の原因なのである。したがって、商品の原因と価値の原因とは、関連を持ちあはすけれども、それら自体は互いに別個のものなのである。他方、商品の

価値とは、交換において1単位の商品Aは2単位の商品B、3単位の商品C、……に値するといったように、他のすべての商品に対する当該商品の交換比率としての値打ちあるいは評価のことであるのであるから、その1単位の商品Aの価値の大きさは、その1単位の商品Aと交換されうる2単位の商品B、3単位の商品C、……によって表示されうるものであり、したがって一般的にはその1単位の商品Aの価値の大きさは、その1単位の商品Aを獲得するのに引き渡されなければならない購買力の大きさとして表示されることができるのであって、この意味で、当該商品を獲得するのに引き渡されなければならない購買力の大きさが、当該商品の価値の大きさを表示する尺度を提供するのである。そしてその購買力の大きさがより大きければ、そのことは、その商品の価値がより大きいということを、またその購買力の大きさが増大すれば、そのことは、その商品の価値の大きさが増大していることを、示すのである。ただし、何故に1単位の商品Aは交換において2単位の商品B、3単位の商品C、……に値することになるのか、1単位の商品Aを獲得するのに何故にそれだけの大きさの購買力が引き渡されなければならないのかということを因果的に説明することにあずかることとなるものは価値の原因であって、価値の尺度ではないのであり、この意味で価値の原因と価値の尺度とは別個のものなのである。すなわち、価値の原因の働きをつうじて交換比率としての値打ちあるいは評価といった価値が成立させられて当該商品を獲得するのに引き渡されなければならない購買力の大きさが決定され、そしてその購買力の大きさが、当該商品の価値の大きさを表示するのであり、そして、価値の原因と価値の尺度とは別個のものではあるけれどもこのような意味で、それらは、したがってまた価値の原因の問題と価値の尺度の問題は、関連を持つのである。しかしまた同時に、価値の尺度自体は、このように、交換のプロセスにおいてまた交換のプロセスから発生するところの他のすべての商品に対する交換比率としての値打ちあるいは評価といった相対的なものとしての価値についての表示、測定をなすものであって、それ自体は、他のすべての商品との交換比率といったことから離れての、商品の原因の働きをつうじて生産のプロセスにおいてまた生産のプロセスから発生したその量が決定されるものとしての商品そのものについての表示、測定といったことをなすわけではないのである。したがってこの意味で、価値の原因の働きをつうじて成立させられた価値の大きさを表示、測定するものという点で価値

の尺度は価値の原因と関連を持つのにたいし、そのような形では、価値の尺度は、商品の原因とは関連を持たない、ということになるのである。ところが、スミスの場合、うえのような彼の関心は一方で、彼をして、価値を有する事物を価値そのものと混同させることとなってしまったのであった。そこでは、価値は、価値を有する事物そのものでもある、したがって、他のすべての商品に対する当該商品の交換比率としての値打ちあるいは評価といった相対的なものであって当該商品を獲得するのに引き渡されなければならない購買力の大きさでもってその大きさが表示、測定されるものというよりも商品そのものでもある、ということにもなるのである。かくして、商品の原因が——本来、生産のプロセスにおいてたとえば1単位の商品A、2単位の商品B、3単位の商品C、……等々の生産を、その働きをつうじて実現させたものとして解されるべきものとしての「商品の原因」が——、価値の原因——本来それは、たとえば交換において1単位の商品Aは2単位の商品B、3単位の商品C、……に値するといったように交換比率としての値打ちあるいは評価を、その働きをつうじて成立させるもの、として解されるべきものである——でもある、ということともなる。したがってまたそこでは、価値の尺度は、価値の原因の働きをつうじて成立させられた商品の価値の大きさを表示、測定するのとまさに同じように、商品の原因の働きをつうじて生産のプロセスにおいてまた生産のプロセスから発生したその量が決定されるものとしての商品そのものについてのなんらかの意味での表示、測定をなすものでもある、ということにもなるのである。それゆえまた、価値の尺度が価値の原因の働きをつうじて成立させられた価値の大きさを表示、測定するという点で価値の尺度は、価値の原因と関連を持つのとまさに同じように、価値の尺度は商品の原因の働きによって発生させられその量が決定された商品そのものについての表示、測定をなすものでもあるという点で価値の尺度は、商品の原因とも関連を持つことにもなるのであり、そしてこのような意味で、価値の尺度が、ともかくも必然的に、「商品の原因」と関連づけられる、ということにもなるのである。そしてまた、以上でみてきたような意味で、価値についてのスミスの問題の捉え方は経済学的には明確性を欠いた混乱を含むものであった、ということになるわけである。かくしてダナーはまた、価値についてのスミスの議論には価値の、ある絶対的な標準の追求、ということが含まれていたのであり、そして『国富論』第1篇第4章の終わり

のところでスミスはそのような意図を表明しようとするのであるが、そこで言及されている「真の尺度」あるいは「真実価格 (real price)」とは事実上、それに照らしてすべての商品が測定されうるところのある一つの永続的で絶対的なものであるものであったのであり、そして「真の尺度」あるいは「真実価格」としてのその永続的で絶対的なものはさらにまた、一つの原因に関する道すじにおいても、商品と結びつけられるものでもあった、といった内容の見方を示しもした、というわけである。

そして、事実上以上のようなことを考えていたと思えるダナーによれば、スミスが価値についての議論において考察の対象としている「価値」、exchangeable value とは、事実上、厳密な意味での価値 (交換価値) というよりも、「交換されることのできる価値」、「価値を有する諸事物」あるいは「価値を有する諸商品」といった不精確な意味での価値、であった、とみられるのであるが、そのダナーによる、exchangeable value という言葉によってスミスが事実上意味していたことの具体的内容ということについての、所説の内容は、つぎのようなものとして捉えることもできるものであった、ということもできるであろう。すなわち、スミスの言う exchangeable value とは事実上、まず、触知することができた相対的永続性をそなえた物質的事物に内在する永続的な欲望充足力という性質のことであったのであり、そしてまた、そのような性質のゆえに exchangeable value は他の諸商品に対する支配力を、また究極的には他の諸商品を生産するのに必要な労働支出に対する支配力を与えることになるのであるが、スミスの言う exchangeable value は同時にまた事実上、人々が実際に享受することができるものとしての、そしてまたそのような永続的な欲望充足力という性質を内在的に有するところの触知することができた相対的永続性をそなえた物質的事物という諸生産物からなるものとしての、真の純生産物そのもの、一国全体としてみた場合には、事実上、そのような物質的事物という諸生産物からなるものという意味での真の「国民〔純〕生産物」にあたるものそのもの、したがってまたそれに対応するものとしての真の「国民所得」にあたるもの、でもあるのであった。したがってまたそこでは、その真の純生産物とは (さらに、事実上、一国全体としてみた場合のその真の国民純生産物とは)、永続的な欲望充足力という性質を内在的に有するところの触知することができた相対的永続性をそなえた物質的事物という諸生産物 (物的生産物) からなるので



ある。そして、そのような物質的事物という諸生産物からなるものとしての真の純生産物の有する **exchangeable value** は、その真の純生産物を構成しているそのような物質的事物という諸生産物全体が内在的に有する永続的な欲望充足力という性質であるとともに、そのような性質を内在的に有するところのそのような物質的事物という諸生産物からなるものとしての真の純生産物そのものが、**exchangeable value** でもある、ということになるのである。

なお、ダンナーによれば、スミスの議論では、物質のなかに永続的な欲望充足力という性質を永続的な形で固定させる労働が生産的労働と呼ばれ、それに対して、物質のなかにそのような性質を永続的な形で固定させることなく労働の支出とともに欲望充足力が消え去ってしまう労働が不生産的労働と呼ばれ、それらが区別されている、とされるのであるが、そこでは事実上、触知することができた相対的永続性をそなえた物質的事物に内在する永続的な欲望充足力という性質をもたらす労働、そのような永続的な欲望充足力という性質を内在的に有するところの触知することができた相対的永続性をそなえた物質的事物という生産物を、またそのような物質的事物という諸生産物からなるものとしての真の純生産物を、もたらす労働が、スミスの議論における生産的労働として捉えられているのであった。

そしてまたダンナーの議論の示すところによれば、すでにうえでも触れられたようにスミスは **exchangeable value** は他の諸商品さらに労働に対する支配力を与えるということを主張していることからみてスミスはたしかに、**exchangeable value** における相対的な要素を否定しているわけではなく、**exchangeable value** は商品間の、ある比率あるいはある関係といったものを確立するということになるのではあるが、スミスはそのような比率そのものにはそれほど多くの注意を向けているわけではなく、むしろ、そのような関係を基礎づけているものということに注意を向けたのであって、そしてそれが、触知することができた相対的永続性をそなえた物質的事物に内在する永続的な欲望充足力という性質、というものであったのであり、さらにまたスミスにとって重大なことであったのは、商品間の交換関係といったことよりも、人々が実際に享受できるものとしての、永続的な欲望充足力という性質を内在的に有するところの触知することができた相対的永続性をそなえた物質的事物という諸生産物からなるものとしての「真の純生産物」そのもの（「真の純生産物」そのものとしての **exchangeable value** ）を、人々がヨ

り多く享受できるようになること、人々が実際に享受できるものとしてのその「真の純生産物」を構成しているそのような物質的事物という諸生産物全体が内在的に有する永続的な欲望充足力という性質（「真の純生産物」が有するものとしての exchangeable value）を、人々がより多く享受できるようになること、exchangeable value の増加、ということであったのであり、しかも、資本主義的搾取についての理論の展開といったことを考えようとしていたのではなくて社会的調和および経済的利益の配布ということが支配する社会の発展といったことを考えようとしていたスミスにとっては、一国の「真の純生産物」の、またそれを構成する諸生産物全体が内在的に有する永続的な欲望充足力という性質の、単なる絶対的増加ではなく国民1人当たりの増加、平均的増加ということこそが重要なことであったのである、ということになるであろう。

なお、我々はスミスの議論における exchangeable value の原因ということについてのダナーの所説を詳しく取り扱うということとはしなかったのであるが、我々がみたかぎりでのダナーの所説からすれば、ダナーは事実上つぎのような見方をしていた、ということになるであろう。すなわち、スミスの議論における exchangeable value の原因とは事実上、触知することができまた相対的永続性をそなえた物質的事物に内在する永続的な欲望充足力という性質（その物質的事物が有するものとしての exchangeable value）の原因であるとともに、人々が実際に享受することができるものとしての、そのような性質を内在的に有するところの触知することができまた相対的永続性をそなえた物質的事物という諸生産物からなるものとしての「真の純生産物」（一国全体としてみた場合には、そのような物質的事物という諸生産物からなるものとしての真の「国民純生産物」にあたるもの、したがってまたそれに対応するものとしての真の「国民所得」にあたるもの）そのもの（「真の純生産物」そのものとしての exchangeable value）の、原因でもある、ということになるであろう。その原因は、触知することができまた相対的永続性をそなえた物質的事物に内在する永続的な欲望充足力という性質（その物質的事物が有するものとしての exchangeable value）をそれだけの大きさのものとして成立させるものであるとともに、人々が実際に享受できるものとしての、そのような性質を内在的に有するところの触知することができまた相対的永続性をそなえた物質的事物という諸生産物からなるものとしての、そ

れだけの大きさの「真の純生産物」そのもの（「真の純生産物」そのものとしての exchangeable value）の生産を実現させたものでもあるのである。そして、スミスは事実上、そのようなものとしての exchangeable value の原因を、未開社会については労働のみに求め、それに対し、土地の占有と資本の蓄積の行われる社会では土地、資本も exchangeable value の原因として現れてくるとしつつも、それでも、それらを用いてあるいはそれらと協同的な形で結合することによってそれだけの大きさの exchangeable value を生成させる exchangeable value のいわば動力因としての原因となるものは労働なのであると考えたのであり、スミスの議論では、労働は、それなくしてはいかなる exchangeable value も生成されえないという意味で、独特のものであったのである——ただし、スミスは、リカードウやマルクスがそうであったという意味での労働価値説論者ではなかったのであり、その点ではむしろ生産費価値説論者というほうが適しているかもしれない——。なお、ここでのそのようなものとしての労働とは exchangeable value を生成させる労働であって、その労働は生産的労働のこと、ということになるであろう。そしてそこでは、ある大きさの exchangeable value は、exchangeable value に対してある高さの生産性をもった生産的労働がある量だけ投入されることによってはじめて生成されるのであり、また、分業の進展さらにまた協同する土地、資本の増大や質の向上等々によって生産的労働の生産性が向上したり、投入される生産的労働の量が増大したり、あるいはその両方のことが同時におこるときには、ヨリ大きな exchangeable value が生成されうる、ということになるのである。

さて、ダナーの所説の示すところからすれば、このように、スミスは事実上、未開社会では exchangeable value に対してある高さの生産性をもつ労働がある量だけ投入されることによって、また、土地の占有と資本の蓄積の行われる社会では、その占有されている土地また蓄積されている資本を相伴った、exchangeable value に対してある高さの生産性をもつところの労働が、ある量だけ投入されることによって、ある大きさの exchangeable value が生成される、とした、ということともなるわけであるが、では、スミスの議論では、そのように生成される exchangeable value の大きさの程度を表示、測定するものは何であったのか。ダナーは、スミスは価値についての彼の議論の一部として exchangeable value の尺度を追求していたとみて、その間

題についてのスミスの議論を取り扱うのであった。

なお、うえで我々がみてきたことからして、スミスの議論におけるその尺度とは事実上、触知することができた相対的永続性をそなえた物質的事物に内在する永続的な欲望充足力という性質としての *exchangeable value*, つまりその物質的事物が有する *exchangeable value* の大きさの程度についての表示、測定をなすものであるとともに、人々が実際に享受できるものとしての、そのような永続的な欲望充足力という性質を内在的に有するところの触知することができた相対的永続性をそなえた物質的事物という様々な生産物からなる「真の純生産物」(一国全体としてみた場合には、そのような物質的事物という諸生産物からなるものとしての真の「国民純生産物」にあたるもの、したがってまたそれに対応するものとしての真の「国民所得」にあたるもの) そのものとしての *exchangeable value* の、大きさの程度についての表示、測定をなすものでもあった、ということになるであろう。それゆえまたその尺度は、そのような「真の純生産物」そのものの大きさの程度(「真の純生産物」そのものとしての *exchangeable value* の大きさの程度)についての表示、測定をなすとともに、その「真の純生産物」を構成している物質的事物という諸生産物に内在する永続的欲望充足力の総計の大きさの程度(「真の純生産物」が有するものとしての *exchangeable value* の大きさの程度)についての表示、測定をもなす、ということにもなるであろう。なお、ダナーのみるところでは、スミスの議論では、満足(欲望充足)の量は物的生産物の量におおよそ比例するであろうということ、物的生産物の量と、それらの物的生産物から得られる満足の量とはおおよそ正比例するであろうということが仮定されていた、ということになるのであった。スミスの議論では事実上、うえの「真の純生産物」そのものの大きさの程度(「真の純生産物」そのものとしての *exchangeable value* の大きさの程度)と、その「真の純生産物」を構成している物質的事物という諸生産物に内在する永続的欲望充足力の総計の大きさの程度(「真の純生産物」が有するものとしての *exchangeable value* の大きさの程度)とは、おおよそ正比例する、ということになっている、というわけである。それゆえまたそこでは、一社会全体としてみた場合のその「真の純生産物」(したがってまた、それに対応するものとしての真の「社会的所得」)そのものの大きさの程度と、その一社会全体としての真の純生産物を構成している物質的事物という諸生産物に内在す

る永続的欲望充足力という性質の総計の大きさの程度とは、おおよそ正比例する、一社会全体としての「真の純生産物」そのものの大きさの程度（一社会全体の「真の純生産物」そのものとしての exchangeable value の大きさの程度）と、「主観的な社会的所得」の大きさの程度（一社会全体の「真の純生産物」が有するものとしての exchangeable value の大きさの程度）とは、おおよそ正比例する、ということになるのである。

さて、すでにみたように、ダナーは、スミスの議論では、触知することができた相対的永続性をそなえた物質的事物に内在する永続的な欲望充足力という性質のゆえに exchangeable value は他の諸商品に対する支配力を、また究極的には労働に対する支配力を与えるということとなっている、と考えたのであるが、そのダナーの所説からすれば、スミスは、exchangeable value の大きさの程度は「支配労働量」、しかも不効用としての労働の量によって自然的に表示、測定されるとした、ということになるのであった。exchangeable value の生成という脈絡のなかで言及された労働は、exchangeable value の生成のために投入された労働であり、そしてその労働は exchangeable value に対して生産的な労働、exchangeable value を生成させるという意味で生産力としての労働であったのであって、そこでの労働は、exchangeable value に対する生産性という観点からみられたものとしての労働であった。それに対し、ここでの労働とは、支配される労働であり、そしてその労働は不効用としての労働であったのであって、ここでの労働は、その労働の不効用という観点からみられたものとしての労働であった、というわけである。

また、スミスがそのように考えた際の論理を、ダナーは概ねつぎのようなものとして捉えていた、ということができよう。すなわち、人間は生存や生活に必要な事物を手に入れるためにみずからの力を犠牲にするのであり、労働に伴う労苦と骨折り、安楽と幸福の犠牲といったものがすべての事物の究極的な費用である。そして、exchangeable value が究極的に支配させるもの、exchangeable value のゆえに究極的に他者に移転できるようになるものは、そのような労苦と骨折り、安楽と幸福の犠牲であるのである。しかも、そのような労働の心理的費用、労働の不効用は、時空をつうじて不変なものなのである。かくして、exchangeable value の大きさの真の程度は、支配することのできる不効用としての労働の量、労働不効用の量によって自然的に表

示、測定されるのであって、労働の不効用こそが、exchangeable value の自然的で、究極的に真の、そして普遍的な尺度を提供するのである、というわけである。

そしてまたダナーによれば、スミスの議論では、exchangeable value に対する生産性という点で生産的労働と不生産的労働とは区別されるのではあるが、労苦と骨折り等々といった自然的費用、労働不効用という点では生産的労働も不生産的労働も同じであるのであって、したがってまたそれらはともに報酬を与えられなければならないものということになっている、とみられるのであった。さらにまたダナーによれば事実上、スミスの議論では、exchangeable value の大きさの程度は、労働が価格付けの対象となる唯一の生産要素であるといった未開社会においてのみ、「投下された労働〔生産的労働〕」の不効用の量によって示されるものに等しいということになるのであるが、すべての発達した経済においては土地と資本も exchangeable value の生成に貢献するだけでなく報酬を与えられもするのであり、そして exchangeable value の生成に投下された労働、土地、資本という生産要素の各々に対する報酬そのものは究極的には、それら各々の報酬が支配できる労働の不効用のタームで評価されるのであって、当該 exchangeable value の生成に投下された労働、土地、資本という生産要素に対する諸報酬を合計したものは、当該 exchangeable value の生成に「投下された労働〔生産的労働〕」の不効用の量そのものよりもより大きな量の労働の不効用を支配でき、そこでは、exchangeable value の大きさの程度は、「投下された労働〔生産的労働〕」の不効用の量によって示されるものよりも大きい、ということになっている、とみられるのであった。

ダナーの所説の示すところからすれば、スミスの議論では、exchangeable value の大きさの真の程度は、支配することのできる不効用としての労働の量、労働不効用の量によって自然的に表示、測定されるのである。したがってまたそこでは事実上、一方で、触知することができた相対的永続性をそなえた物質的事物に内在する永続的な欲望充足力という性質としての exchangeable value、つまりその物質的事物が有するものとしての exchangeable value の大きさの程度は、その物質的事物と交換に支配しうる不効用としての労働の量でもって自然的に表示、測定されるとともに、人々が実際に享受できるものとしての、そのような永続的な欲望充足力という性

質を内在的に有するところの触知することができた相対的永続性をそなえた物質的事物という様々な生産物からなる「真の純生産物」（一国全体としてみた場合には、そのような物質的事物という諸生産物からなるものとしての真の「国民純生産物」にあたるもの、したがってまたそれに対応するものとしての真の「国民所得」にあたるもの）そのものとしての exchangeable value の大ききの程度も、その「真の純生産物」そのものが支配しうる不効用としての労働の量によって自然的に表示、測定される、ということになるであろう。

したがってまたさらにそこでは事実上、一社会全体としてみた場合のその「真の純生産物」（したがってまた、それに対応するものとしての真の「社会的所得」）そのものの大ききの程度——一社会全体の「真の純生産物」そのものとしての exchangeable value の大ききの程度——が、その一社会全体の「真の純生産物」そのものが支配しうる不効用としての労働の量によって自然的に表示、測定されるとともに、その一社会全体としての真の純生産物を構成している物質的事物という諸生産物に内在する永続的欲望充足力という性質の総計（真の「主観的な社会的所得」）の大ききの程度——一社会全体の「真の純生産物」が有するものとしての exchangeable value の大ききの程度——も、その一社会全体の「真の純生産物」そのものが支配しうる不効用としての労働の量によって自然的に表示、測定される、ということになるであろう。ダナーのみるところでは、スミスの議論では、満足（欲望充足）の量は物的生産物の量におおよそ比例するであろうということ、物的生産物の量と、それらの物的生産物から得られる満足の量とはおおよそ正比例するであろうということが仮定されているのである。

ところで、exchangeable value の大ききの程度をそのように、支配しうる不効用としての労働の量でもって表示、測定するとするならば、そこでは賃金率ということが関連してくることになるであろう。ダナーのみるところによれば、スミスの議論では事実上、賃金率の大ききそのものは変動しうるものであるのであった。しかしまた同時にダナーによれば、人間は生存や生活に必要な物質的事物を手に入れるためにみずからの力を犠牲にするのでありそしてこれが究極の費用なのであるという究極的な経済的現実注目するスミスは、労働の不効用こそが究極的な尺度を提供するものであり、そして労働の不効用はそれと交換されるものの多少にかかわらずつねに同一であ

る、と考えた、とみられるのであった。そして、そのことについてのスミスの議論に関するダナーの所説の示すところからすれば、たとえば、賃金率が上昇して1単位の労働が、もし、ヨリ多くの物的生産物を（したがってまたそれにおおよそ比例するヨリ多くの満足の量を）獲得するときには、1単位の労働に伴う不変な大きさの不効用が、ヨリ多くの物的生産物と（したがってまたそれにおおよそ比例するヨリ多くの満足の量と）交換されているのであって、そこでは1単位の労働に伴う不効用の大きさが変化しているのではなくて、それと交換される物的生産物の労働不効用に対する支配力が低下しているものであり、そして、そこでは、究極的な尺度である支配しうる不効用としての労働の量で表示、測定した場合その物的生産物の *exchangeable value* の大きさの程度は低下している、ということになるのであった。

ただし、うえのような論理からすれば、つぎのようなこともありうる事となるであろう。すなわち、たとえば物的生産物の物的純生産量そのものが現実増加したとしても（したがってまたそれにおおよそ比例して、享受しうる満足の量そのものが現実増加したとしても）、もしその増加率よりも大きな率でうえのような賃金率の上昇があるときには、究極的な尺度である支配しうる不効用としての労働の量で表示、測定した場合、量の増加したその物的生産物全体の *exchangeable value* の大きさの程度は低下した、ということになるのである。あるいはまた、永続的な欲望充足力という性質を内在的に有するところの触知することができた相対的永続性をそなえた物質的事物という様々な生産物からなる一社会の「真の純生産物」そのものの大きさの程度——一社会全体の「真の純生産物」そのものとしての *exchangeable value* の大きさの程度——も、その一社会全体としての真の純生産物を構成している物質的事物という諸生産物に内在する永続的な欲望充足力という性質の総計（真の「主観的な社会的所得」）の大きさの程度——一社会全体の「真の純生産物」が有するものとしての *exchangeable value* の大きさの程度——も、その一社会全体の「真の純生産物」そのものが支配しうる不効用としての労働の量のタームで表示、測定するとすれば、たとえその一社会全体の「真の純生産物」そのものの物量に増加があったとしてもその増加率よりも大きな率でうえのような賃金率の上昇があったときには、一社会全体の「真の純生産物」そのものとしての *exchangeable value* の大きさの程度も、一社会全体の「真の純生産物」が有するものとしての



exchangeable value の大きさの程度も、ヨリ小さいものとして示される、ということになるのである。もっとも、もし1単位の労働に伴う不効用が、永続的な欲望充足力という性質を内在的に有するところの触知することができまた相対的永続性をそなえた物質的事物という生産物の安定的な量と交換されるとき、1単位の労働に伴う不効用と交換される物的生産物の量が安定的なとき、この意味で賃金率が安定的なときには、このような事態は避けられうるであろう。ダナーは、たとえば、スミスの議論では労働は穀物でもあるいはまた銀でも変動的な賃金を受け取るであろうということが認められてはいるがしかしまた同時に、労働の市場価格が労働の自然価格から乖離するといったことは一時的なものであって、それは供給と需要の局所的な事情によるものであり、市場価格は結局のところ、自然価格へとひきつけられまたつねに自然価格を中心にして変動することになるとされている、といった指摘をなすのであった。

以上のように、我々が理解してきたものとしてのダナーの所説からすればスミスの議論には事実上うえのような問題が存在するということになるのではあるが、とにかくダナーのみるところによれば、スミスの議論では、賃金率は結局のところその自然的な水準にひきつけられまたその自然的な水準を中心に変動するのであり、そしてあらゆるものの究極の費用であり時空をつうじてその大きさが不変なものである労働の不効用こそが、本当の尺度を提供するものである、ということとなっている、ということになるのである。かくして、すでにみたようにダナーは、スミスが考察の対象とした「価値」、exchangeable value とは、触知することができた相対的永続性をそなえた物質的事物に内在する永続的な欲望充足力という性質であるとともに、そのような性質を内在的に有するところの触知することができた相対的永続性をそなえた物質的事物という諸生産物からなる「真の純生産物」そのものでもあった、とし、そしてスミスにとって重大なことであったのは、人々が享受するそのような exchangeable value の1人当たり増加、平均的增加ということであった、とみつつも、ダナーはまた、スミスは「価値」を単に経済財間の交換比率にすぎないものとして捉えていたのではなく、人間努力の、生活の物質的手段との交換といったもの、また、生活の物質的手段のための人間努力の根本的犠牲といったものとして、考えていたのであり、さらにまたスミスの議論での究極的な交換比率とは、「労働の不効用」と「諸事物か

らの欲望充足」との間の交換比率であった、とするのであった。

なお、このようにダナーは、スミスの議論では、あらゆるものの究極の費用であり時空をつうじてその大きさが不変なものである労働の不効用が exchangeable value の自然的で、究極的に真の、そして普遍的な尺度を提供するものであり、支配される不効用としての労働の量、支配される労働不効用の量が exchangeable value の大きさの程度を表示するということになっている、とみるのであるが、同時にまたダナーによれば事実上、スミスの議論では、異なった労働に伴う異なった程度の不効用という問題については、それはおおよそのところで、「市場のかけひきや交渉」から生じる諸労働間の賃金率格差（諸労働の相対的な諸価格）に照らすことによって処理できる、ということになっている、とみられるのであった。そして、そこでのダナーの所説は事実上つぎのようなことを言っているものとして理解することもできるものであった、ということができであろう。すなわち、スミスの議論では、おおよそのところより多くの不効用を伴う労働1単位はより高い賃金率を得るのであって、その意味で、異なった労働に伴う異なった不効用を基数的な意味では確定することはできなくともそれらはおおよその序数的な意味では確定できるのであり、したがってまた、そのような賃金率格差に照らすことによって、ある等級の不効用を伴う労働というものを特定することができるのである、そしてその労働に伴う不効用自体は、時空をつうじてつねに同一である、ということとなっている、というわけである。

ただし、このようにダナーの所説の示すところからすればスミスの議論では事実上、「市場のかけひきや交渉」から生じる諸労働間の賃金率格差に照らすことによって、異なった労働に伴う不効用の大小の等級を、序数的な意味での労働不効用を、おおよそのところで確定することが、したがってまたそのような賃金率格差に照らすことによって、ある等級の不効用を伴う労働というものを特定することが、できる、ということになっているのであり、しかも、その各々の労働に伴う不効用それ自体はそれぞれ時空をつうじて不変、ということになっている、ということになるのであるが、しかしまたダナーによれば、それでもなお、労働不効用自体の測定にまつわる諸困難ということから、スミスはさらにまた、尺度を提供しうるものとして労働不効用よりもより実用的なものを求めようとした、とみられるのであった。そしてそのことについてのダナーの所説は事実上つぎのようなことを言っているも

のとして理解することもできるものであった、ということもできるであろう。すなわち、すでにみられたように、スミスの議論では、人間は生存や生活に必要な事物を手に入れるためにみずからの力を犠牲にするのであって、労働に伴う労苦と骨折り、安楽と幸福の犠牲といったものがすべての事物の究極の費用なのであり、そして、exchangeable value が究極的に支配させるもの、exchangeable value のゆえに究極的に他者に移転できるようになるものは、そのような労苦と骨折り、安楽と幸福の犠牲であるのであり、しかもそのような労働の心理的費用、労働不効用は時空をつうじて不変なものであるものであって、exchangeable value の大きさの真の程度は、支配することのできる不効用としての労働の量、労働不効用の量によって自然的に表示、測定されるのであり、労働の不効用こそが、exchangeable value の自然的で、究極的に真の、そして普遍的な尺度を提供するものであるものであった。そしてまたスミスの議論では、物的生産物の量と、それらの物的生産物から得られる満足の量とはおよそ正比例するということが仮定されていたのであり、また、スミスの言う exchangeable value とは、単なる経済財間の交換比率にすぎないものといったことに関係するものというよりも、人間努力と生活の物質的手段との根本的な交換比率、生活の物質的手段のための人間努力の根本的犠牲、さらに、「労働の不効用」と「諸事物からの欲望充足」との間の交換比率、といったことに関係するものであったのであって、exchangeable value の大きさの程度そのものは、そのような交換比率をつうじて表示、測定されるべきもの、支配しうる人間努力の量、支配しうる不効用としての労働の量によって表示、測定されるべきものであるものであった。したがって、スミスが、exchangeable value の尺度を提供しうるものとして、労働の不効用というはっきりしない面をもつものよりもより規格的な取り扱いをすることのできるより実的なものを求めようとしたとしても、そのもの自体は、人間努力、労働不効用と、生活の物質的手段あるいはそれらの物質的手段からの欲望充足との間の交換比率そのものを安定的に反映しうるものでなければならない、ということとなる。そしてスミスは、長い諸期間にわたっては、1 単位の労働を支配できる食物量、したがってまた 1 単位の労働を支配できるところの、食物の主要品目としての穀物の量、その意味での（食のほかに住や衣を含めた全体としてのという意味での、ではなく）生計費、労働の維持費は、相対的により安定的である、と考えたのであった。かくしてスミス

の議論では、長期では、生活の物質的手段あるいはそれらの物質的手段からの欲望充足が、それだけの穀物量をどれほど多く支配することができるか、ということを示すことによって、相対的により安定的に、生活の物質的手段あるいはそれらの物質的手段からの欲望充足がどれだけの量の労働と、したがってまたどれほどの多さの人間努力、労働不効用と交換されうるかということを示すことができる、ということとなるのである。そしてこの意味で、穀物は、長期では、より規格的な取り扱いをすることのできるより実用的な、しかも相対的に安定した尺度を提供しうるものとしての機能を果たしうる、ということになるのである。そしてまたこれに対して、短期については、スミスは、穀物よりも相対的により良好にそのような機能を果たしうるものとして、標準的な通貨単位としての銀を考えたのであった。ただし、うえでも触れられたように、スミスの議論では、そのような機能を果たすものとしての銀や穀物が究極的に指し示すもの、そしてそれらのものが尺度という脈絡のなかで考えられるさいの究極の基準となっているもの自体は、労働の不効用であったのである。つまり、銀や穀物が尺度という脈絡のなかでその機能を果たしうるその成功の程度は究極的には、ある一定量の銀あるいは穀物が支配しうる、1単位当たり不変な大きさの不効用を伴うものとしての労働の量の安定性、ということに、銀あるいは穀物の量がどの程度において安定的に、不変な労働不効用を反映することができるか、ということに、かかっているのであって、スミスの議論では、不効用としての労働、労働の不効用は、たとえ実用的な尺度の提供という点では不十分なものであるとしても、真の尺度を提供するものということには変わりはないのである、というわけである。

相当するものを、案出するということが、スミスの価値分析におけるより大きな関心事であったとするのであるが、パーカーはさらに、このような問題に対するものとしての、「価値尺度としての労働」というスミスの考えに関連して、つぎのような見方をしている。】：

① 一見したところでは、「労働にたいする支配力」というスミスの考えは、こうした指数問題に一つの解答を提供するかのようにみえた。すなわちそれは、総産出高をそれが購買しうる労働単位数のタームで表すことによって、二時点間の総産出高の変化についての比較陳述が可能になるということ、暗に意味していた。一次接近としては、そのような労働単位数のタームでの表現は、貨幣タームで表されている総産出高を基準賃金<sup>9)</sup>で割ることによって得られるであろう。そして、もしもそうした計算による第2期の値が第1期の値を上回っていたならば、成長が起こっていたということが主張されうであろう、さらにまた、その経済の総産出高にどれだけの変化が生じたかということも、確定できるであろう。だが、このようなものとしての「労働にたいする支配力」という公式には、もしも賃金率が第1期と第2期との間で変化するならば、他のすべての諸価格および所得諸分け前がそれと同一割合で変化していたということも仮定できないかぎり、さきの計算から得られる値の比較はもはや不可能であろう、という難点<sup>10)</sup>、さらに、労働生産性が上昇するケースをうまく取り扱うことができないという難点<sup>11)</sup>が、存在する<sup>12)</sup>。

② スミスは経済的変化を測定するための不変の標準を案出することを試みたのであるが、彼は、統計的な目的にとって好都合な手法を案出することを試みることによってこの問題をさらに追求した。すなわち、スミスは一貫して、「労働にたいする支配力」が概念的には正しい接近法であるとしたのであるけれども、彼は、それは実際に適用するには厄介なものであるかもしれないということを認めていた。そこで彼は、ついに、食用穀類（food grains）——彼の用語では「穀物（corn）」——の入手可能性が、たいていの実際目的にとっては、一つの代用物（proxy）とみなされてよいという結論をくだしたのであった。スミスの見解では、穀物は生活資料の主要な構成要素であったのであり、それゆえその入手可能性は、労働にたいする支配力を実際に行使するための一つの必須条件であるのであった<sup>13)</sup>。

③ 労働をもって基本的な価値尺度とするやり方は、スミスの手で、さらにもう一つの変容を遂げた。すなわち、スミスはさらに、事実上、労働の労

苦と骨折りのために余暇を割愛するときに労働者がこうむる犠牲の安定性ということ<sup>(14)</sup>を述べるのである。たしかに長期にわたって見た場合、このような安定性の仮定の現実性ということに対しては異論が生じるかもしれないし、また、事実、労働の苦痛感はかなり変わってしまうかもしれない<sup>(15)</sup>。だが、たとえそうであるとしても、スミスはこんにち長期の経済的变化の分析においてほとんど直接的な注意をはらわれていない非常に当を得た点に、すなわち、経済的な改善の程度は財貨の総体規模の変化によってだけでなくその総体を生産するのに要した努力 (effort) によっても判断されるべきであるということに、注意を促していたのである。スミスの「価値尺度としての労働」のこの別形においては、1単位の労働投入がより多量の財貨にたいする支配力をもたらし、ときに経済的な改善が生じているとみなされうるのである<sup>(16)</sup>。

(Ⅴ)「以上でみてきたように、パーバーによれば、スミスは、一つの代用物という脈絡で穀物にふれつつも、労働を、個々の商品の価値さらに長期にわたる社会の経済的变化を測定するための基本的な尺度としようとした、とされるのであるが、パーバーはさらにまた、そのようなものとして労働を用いることに伴う問題という形で「異質労働の問題」を捉えつつ、そのような脈絡のなかで問題にされることになるものとしての「異質労働の問題」に対するスミスの対処という形で、スミスの議論に関してつぎのような見解を示している。」：価値分析へのスミスの労働接近法は後の経済諸学派によってきびしく批判されてきたのであるが<sup>(17)</sup>、スミスの接近法に対しては、つぎのような相対的により重大な批判をも浴びせることができる。それは、彼の労働単位の取り扱いにおけるある矛盾ということに関係するものである。すなわち、彼も認めていたように、労働をなすものとしての一つの総体 (labour force, 労働力) といったものは、等質的なものから構成されているわけではないのであった。その総体を構成するもののうちのあるものは、他のものよりも熟練している（したがってまた、より生産的である）のであった。では、これらの相違は、どのようにして、ある共通するものへと、還元されるべきであったのか。スミスは、こうした相違の調整は「ある正確な尺度によってではなく、正確ではなくても日常生活の業務を処理してゆくには十分なおおよその同等性を目安にして、市場のかけひきや交渉によって」(WN, p. 31. 大河内訳Ⅰ), 55ページ)行われる、と答えた。言い換えると、市場で成立する賃金格差が、各種の労働投入単位にある共通の標準に還元する基礎を

提供するのであった。つまり、不熟練労働の1時間を標準単位とすると、2倍の賃金が支払われている労働者による1時間の労働は、2単位に相当するということになるのである。だが、そうすると当然つぎの疑問、すなわち、もしも価値を測定するための各種の単位を評価するためには市場検査で足りるのであるならば、何故に同じやり方が産出高そのものの評価に適用できないのか、という疑問が出てくる。そしてもしそういうやり方が適用できるとすれば、そのときには、価値（自然価格）と現実の価格とを区別するという問題は、完全に消滅してしまうことになるであろう。たとえスミスが近似法なのだとかあらかじめ通告したとしても、そのことによってこうした論理上の落とし穴から逃れることはできないのである。<sup>(19)</sup>

(注)

- (1) Barber [1967], p. 30. 邦訳, 34-35ページ。なお、パーバーは、スミスの分析目標についてのスミス自身による説明からして、スミスはたいていの経済学者がこんにち適切なものと考えるであろう諸問題からは幾分へだたりのある諸問題を提起していたということは容易にわかる、として、つぎのような説明をなしている。それによれば、こんにちの経済学者がある特定の商品の「価値」を的確に述べることを求められるときには、ふつう、その商品にたいしてどんな価格が市場で成立しているかを確定することを試みることによってすすもうとするであろう。これに対し、古典派の論者たちは、価格（price）と価値（value）はそうたやすくどちらにでも折りたたまれることのできるものではないということを主張しようと骨を折っていた。「価値」は市場の気まぐれからは独立したものとみられていた。名目価格（あるいは市場価格）は変動するかもしれない、しかし、価値は一定不変にとどまる、というのである。後の多くの評釈者たちは、こうした接近法を不必要な形而上学とみなしてきた。しかし、たいていの古典派の論者たちはこの区別をおおいに重んじたのであり、また、彼らの見解では、それは十分な正当性を持つものであった。Barber [1967], pp. 30-31. 邦訳, 35ページ。
- (2) なお、パーバーは、事実上、同様のことをいうために、たとえば、‘extended period of time’, ‘prolonged period’, ‘prolonged time period’, ‘long-period’ 等といった表現を用いもしている。
- (3) Barber [1967] p. 31. 邦訳, 35-36ページ。なお、パーバーは、『国富論』の中心課題という観点から、いまみた価値についてのスミスの説明の二つの仕事のうち、後者のものの重要性を強調する。すなわち、パーバーによれば、スミスの分析の中心課題は、彼の著書のフル・タイトルにはっきり述べられているように「諸国民の富

の本質と諸原因に関する一研究」ということであった、つまり、ヨリ現代的な用語でいえば、スミスはひとつの経済成長理論を展開することを課題にしていたのであった、とされるのであり、そして(スミスがそうであったように)長期にわたる経済的な伸張という問題を取り扱う分析者にとっては実際に成長が生じたのか否かということを確認することができるということが明らかに重要なことであったのであり、そしてこのことは、国民産出高の変動を測定するための手法を、価格変動が引き起こす歪みを除去するための手法を、ヨリ現代的な用語でいえば、指数(index number)もしくはそれに相当するものを、必要とした、というのである。(Barber [1967], pp. 27, 33. 邦訳, 30ページ, 39ページ。)そしてまたバーバーによれば、スミスが経済的变化を測定するための不変な標準を案出しようという彼の試みにおいて幾つかの厄介な障害に遭遇したとしても、彼が取り組んだ問題はやはり現実的であつた重要な問題であったのであり、同様な問題は経済成長についての現代の分析にも残されている、とされる。(Barber [1967], p. 35. 邦訳, 41ページ。)

なお、V. S. アファナセフ(V. S. Afanasev)によれば、バーバーを含むブルジョア的な経済成長論者たちはもっぱらスミスの理論の量的側面に専念しつつスミスの学説を分析するのであるが、このやり方は、つぎのような二面にわたる性格をもっている、とされる。一方で、このやり方は、資本主義の搾取的な本質ということに関係するスミスの科学的確認に反対する新しい闘争手段を供給する、すなわち、純粋に量的な考察方法は資本主義の社会経済的内容を消し去ってしまうのである。他方で経済成長の理論家たちは、資本主義経済の量的連関を反映しているスミスの科学的思想に飛びつくことに興味をそそられているのである。Vladilen S. Afanasev, *Adam Smith gestern und heute: 200 Jahre „Reichtum der Nationen“*, hrsg. von Peter Thal (Glashütten/Taunus: Detlev Auvermann, 1976 [© Akademie-Verlag, Berlin 1976]), Abschnitt 3.3—以下, Afanasev [1976]と略記する一, S. 177. 芦田 亘, 津波古充文訳『スミス経済学の歴史—経済的自由主義の系譜—』(昭和堂, 1981年), 203-204ページ。

- (4) なお、バーバーによれば、労働が「価値の尺度」であるというスミスの主張は、彼がすでに展開していた諸テーマとも容易に両立しうるものであったし、さらにそれは、彼の時代の知的風潮とも調和するものであったのであり、少なくとも、ロック(J. Locke)以来、イギリス思想の一つの有力な流れは、労働を経済過程への「基本的」ないし「根源的」な貢献者とみなす傾向があった、とされる。Barber [1967], p. 31. 邦訳, 36ページ。
- (5) なお、バーバーは、スミスが初期未開の社会状態を念頭に置きつつこの理解の仕方を用いている例を示すものとして、つぎのようなスミスの文章を引用している。「たとえば狩猟民族のあいだで、1匹のビーバーを仕留めるのに、1頭の鹿を仕留める労働の2倍がふつう費やされているとすると、ビーバー1匹はとうぜん、鹿2



頭と交換される、すなわち、鹿2頭に値することになるであろう。ふつう2日分または2時間分の労働の生産物であるものが、ふつう1日分または1時間分の労働の生産物であるものの2倍の値打ちがあるというのは、当然である。」(WN, p. 47. 大河内訳くI), 80ページ。) Barber [1967], pp. 31-32. 邦訳, 36-37ページ。

- (6) Barber [1967], pp. 31-32. 邦訳, 36-37ページ。なお、バーバーは、この後者の尺度の意味を、つぎのような仮説例を用いて説明しようとしている。すなわち、いま、ある特定量の産出高を生産するのに600単位の労働投入が必要であると考えてみよう、さらに、地主と資本家は、彼らの支配下にある生産要素の用役を提供するに際して、合計して、賃金支払額と同額の報酬を求める(言い換えると、生産の一条件として、利潤プラス地代は賃金支払額に等しくなければならない)と仮定しよう。そのときには、スミスの論法によれば、その総産出高の価値は1, 200労働単位——直接労働投入600単位プラス地代と利潤の受領者が「支配」しうる600労働単位——ということになるであろう。Barber [1967], p. 32. 邦訳, 37ページ。

- (7) バーバーは、スミスの議論においては「自然価格」が「価値」に相当し、生産物の真の値打ちを示すものとされているとみ、そして、価格形成メカニズムについてのスミスの考え方を理解する鍵は「自然価格」(すなわち価値)の構成要素についての彼の理解の仕方のなかにある、として、概ねつぎのような説明をなしている。すなわち、スミスの議論では商品の「自然価格」はその商品を市場にもたらすのに要した費用に等しい価格、すなわちそれに要したすべての労働、土地および資本に対する報酬としての自然率での賃金、地代および利潤という成分からなるものとされており、そして、市場価格はこのような明細事項と一致しないかもしれないが、そうした場合でも競争の諸力が作用して、市場価格を自然価格の方に押し戻していくとされている。つまり「自然価格」は、市場の競争諸力をつうじて現実の価格がそれに向かって収斂してゆく傾向をもつ「静止と持続の中心」とされており、スミスはここでは後の経済学者が「均衡」とよんできたきわめて重大な概念に近づいていたのである。[以上のような意味で、バーバーは、スミスが価値についての彼の説明は少なくとも市場価格の動きについての部分的な説明を提供すると考えていた、と述べたのであろう。]そしてまたバーバーによれば、市場価格と自然価格についてのこの議論は、その副産物として、市場の働きを妨げるような一切の行い——(たとえば、取引制限とか特許会社への特権の授与のような形で)政府によっておこされたものであれ、(独占とか徒弟奉公に関する諸規則のような形で)民間の関係者からおこされたものであれ——は社会的に非難されるべきものであって諸事が市場の「見えざる手」に導かれることによってはるかに良い結果がもたらされるという主張の根拠を提供している、とされるのである。Barber [1967], pp. 32-33. 邦訳, 37-39ページ。

なお、バーバーによれば、スミスの自然価格と市場価格との区別に類似した案は

低開発地域の研究に携わっているいくつかの欧米経済学者たちによっても援用されているのではないであろうか、とされる。すなわち、バーバーによれば、それらの経済学者たちは、低開発地域では労働の価格は高くつけられすぎており資本の価格は低くつけられすぎているということ、したがってもしも政府が、労働と資本の結合に関する事業家の意志決定は現実の価格によってではなくこれらの生産要素の「真の」稀少性をより正確に反映する「計算」価格によって行われるべきであると強く言い聞かせるならば、経済成長は加速されるだろうということを、主張している、とされるのである。Barber [1967], p. 38. 邦訳, 44-45ページ。

- (8) Barber [1967], pp. 32-33. 邦訳, 37-39ページ。なお、バーバーによれば、価値分析へのスミスの労働接近法に対しては後の経済諸学派からきびしい批判がくわえられてきたのであるが、それらの批判の一つは、スミスのその接近法は価格決定の十分な説明を提供していない、またとくに、市場の作用のうちの需要面を無視している、というものであった、とされる。[なお、バーバーは、このような視点からスミスに対して無遠慮な批判をなしたものの一例として、Emil Kauder, "Genesis of the Marginal Utility Theory: From Aristotle to the End of the Eighteenth Century," *Economic Journal*, vol. 63 (no. 251, September 1953), p. 650 にみられる E. カウダー (E. Kauder) の文言をあげている。それについては、Barber [1967], p. 52n. 21. 邦訳, 65ページ注21を見よ。] そして、バーバーは、このような批判に対してつぎのような見解を示している。すなわち、もしスミスが市場価格の形成についての体系的な分析を提出しようとしていたのであれば、こうした批判はもっと説得力のあるものになっていたであろう。しかしながら、実際には、この目標は、スミスの主要なプログラムにとっては末梢的なものであった。彼は、長期にわたる経済的变化を測定するという問題に対して力となるような諸概念を案出することにヨリ一層関心をいだいていたのであった。短期の (short-term) 市場価格の形成についてのより明快な分析を展開するための道具なら、彼にはすでにその用意はあったのである。すなわち、効用および需要という概念（それらの概念は後の一学派によってそれらの本来の目的のために用いられることとなったものである）は、彼がハチスン (F. Hutcheson) から吸収した教えの一部をなしていたのである。スミスが価値理論に対するこうした方向づけを受け入れなかったのは、おそらく、彼がそのようなものは彼の中心的な目的にとって関連がないとみなしたからであろう。Barber [1967], pp. 36-37. 邦訳, 43ページ。

なお、以上でみてきたバーバーの所説からつぎのことがいえるであろう。すなわち、バーバーは、スミスの議論では（交換）価値と価格とは区別されるべきものであり、（交換）価値は、市場価格（現実の価格）と区別される「自然価格」に相当するものとして取り扱われているとみるのであるが、バーバーは、どちらかといえば、「価値尺度の問題」と「価値の原因・決定の問題（価値の因果的説明の問題）」

との論理的同異といったことは問題にすることなく、市場の働きをつうじての市場価格の自然価格への収斂という形での市場価格の動きについての部分的な説明および長期にわたる集計的経済変動を測定するための一つの基礎の案出ということのスミスの価値分析の内容として捉え、そして、その分析を展開するさいにスミスは労働接近法をとった、としているということである。(また、バーバーは、このような意味でスミスの展開している議論をして「労働価値説」とみているようである。この点については、Barber [1967], pp. 37-38, 邦訳, 44ページでのバーバーによる「労働価値説 (labour theory of value)」という言葉の用法を参照せよ。)

なお、アフアナセフによれば、スミスの学説を成長理論として解釈することは、スミスの労働価値説を定量的に解釈するためにも、利用されているのであり、この場合には社会経済的な本質を失った労働価値説であるが、スミスの価値理論は、これとの関連では普通、それが現実の成長およびその様式を確認するための手段を提供できるかどうかということをめぐる、研究されている、とされる。そしてアフアナセフは、バーバーや一連の成長論者たちがもっぱら関心をもっているのは、このように、労働価値説を使って経済諸量の定量的比較を客観化できるかどうかを吟味することなのであるが、これはスミスの理論体系中での労働価値説の役割をゆがめるものである、として、つぎのような説明をくわえている。すなわち、スミスにとって、労働価値説は、資本主義のうちに大量的にあらわれる経済的関係についての研究の結果であったのであり、資本主義経済の諸現象を分析し、そしてその本質を明らかにするために多かれ少なかれ直観的に適用された方法的な手段であったのであり、労働価値説は決して、成長論者たちの考えつくようなたんなる「経済諸量の度量衡」に引き下げられえないのである。彼らは、資本主義的生産の量的な機能関係を分析するさいに、古典派の労働価値説のすべての主張を退けることはできないで、いやそればかりか、労働価値説を使って明らかにされた若干の量的な経済関係を、自分たちの分析に利用しようと努力すらしているのである。ただしその場合には、資本主義の経済学の因果関係の諸脈絡は無視、俗流化されているのである。Afanasev [1976], S. 179-180. 邦訳, 206-208ページ。

- (9) バーバーが原文においてここで使用している用語は、the basic wage である (Barber [1967], p. 34)。basic wage はふつう生活賃金 (生活給: 生活費を基準にした給与) や基本給と訳され、また、基本給とは実収賃金 earnings を構成する一賃金項目であって、実収賃金がどのような賃金項目から構成されているかをあらわす賃金体系という概念にかかわるものであるのたいし、賃金率 wage rate とはふつう、賃金形態の違いということから時間賃金率 hourly wage rate なり出来高賃金率 piece rate なりで定義されるのであるが〔熊谷尚夫、篠原三代平(代表編集委員)『経済学大辞典』(全3巻)(第2版、東洋経済新報社、1980年)、II, 68ページ r 参照〕、ここではバーバーはどちらかといえば、the basic wage という用語を、ある一定の

等級、種類の労働に対して支払われる(時間)賃金率、その意味で基準として用いられる賃金といったぐらいのことをあらわすものとして使用しているように思える。

- (10) パーバーによれば、もしもこういった仮定が置けない場合には、そのようなものとしてのスミスの公式から引き出される結論はまったく人を誤らせるものとなるであろう、すなわち、たとえば、もしも他の諸価格および所得諸分け前が以前と同一に留まっているのに賃金が下落したとすると、(労働にたいする支配力で表された)産出高は、現実には生産に変化が起こっていなかったときにさえ、増大したかのようにみえるであろう、とされる。Barber [1967], p. 34. 邦訳, 40ページ。

なお、本章の注6でみたパーバーの説明また注9でみたこと等を考慮に入れば、ここでのパーバーの議論は事実上つぎのようなものとして捉えることもできるかもしれないであろう。すなわち、スミスの議論では、貨幣タームでの総産出高、つまり、個々の生産物の価格と個々の生産物の量との積の総計(ここでは、簡単化のために、全体としての生産物の価格水準を  $P$ 、全体としての生産物の量を  $Q$  で表し、貨幣タームでの総産出高を  $P \cdot Q$  で表すこととする)は、その産出高を生産するさいの生産要素の用役の提供に対する貨幣タームでの諸報酬としての賃金所得( $W$ で表す)、利潤所得( $K$ で表す)、地代所得( $R$ で表す)の合計に等しい、ということになっている。つまり、

$$P \cdot Q = W + K + R$$

ということになっている。したがって、一次接近として、貨幣タームでの総産出高  $P \cdot Q$  を基準賃金となる(貨幣タームでの)賃金率( $w$ で表す)で割って、総産出高を支配労働単位数のタームで表現するとすれば、その支配労働単位数は、その総産出高を生産するさいの生産要素の用役の提供に対する諸報酬の受領者たちがその報酬で支配しうる労働単位数の合計に等しくなければならない、ということになる。つまり、

$$(P \cdot Q) / w = (W + K + R) / w$$

でなければならないのである。さて、いまたとえば、第1期と第2期との間でうえの賃金率  $w$  が変化したとしよう。そしてそのさい、賃金率  $w$  が変化するときには常に、他のすべての諸価格すなわち個々の生産物の価格もそれと同じ割合で変化している、したがって全体としての生産物の価格水準  $P$  も賃金率  $w$  の変化と同じ割合で変化している(したがってまた、生産物購買力という意味での実質賃金率は経時的に一定である)とともに、所得諸分け前、賃金所得  $W$ 、利潤所得  $K$ 、地代所得  $R$  も賃金率  $w$  の変化と同じ割合で変化している(つまり、貨幣タームでの賃金率が経時的に変化するときにはそれと同じ割合で貨幣タームでの所得も経時的に変化しているのであり、そしてここでは生産物購買力という意味での実質賃金率が経時的に一定であるのであるから、生産物購買力という意味での実質所得に経時的な変化が

あるときのみ所得の労働支配力は経時的に変化する), ということが仮定されている, としよう。その場合には, たとえうえのように第1期と第2期との間で賃金率  $w$  が変化しても,  $(P \cdot Q)/w$  の値は,  $Q$  の値が変動しないかぎり変動することはない, また,  $(W+K+R)/w$  の値も,  $w$  の値の変化そのものによって変動することなく,  $Q$  の値の変動に対応する  $W+K+R$  の値の変動によってのみ変動する, ということになる。たとえば, いま第1期と第2期との間で賃金率  $w$  が50%下落するとともに現実の生産物の量  $Q$  が20%増加していた, といった状況を考えてみよう。ここでは, 貨幣タームでの総産出高  $P \cdot Q$  には, 一方での賃金率  $w$  の50%下落に対応する  $P$  の50%下落と他方での現実の生産物量の20%の増加に対応する  $Q$  の20%増加が存在し, またその総産出高を生産するさいの生産要素の用役の提供に対する諸報酬  $W+K+R$  には, 一方での賃金率  $w$  の50%下落に対応する  $W+K+R$  の50%の減少と他方での現実の生産物量の20%増加に対応する  $W+K+R$  の20%の増加が存在することとなる。つまり,

$$(1-0.5)P_1 \cdot (1+0.2)Q_1 = (1-0.5)(1+0.2)(W_1+K_1+R_1)$$

ということになる。そしていま第2期における支配労働タームでの総産出高, その総産出高を生産するさいの生産要素の用役の提供に対する諸報酬の受領者たちがその報酬で支配しうる労働単位数を, 賃金率  $w$  を用いて算出するとすれば,

$$\frac{(1-0.5)P_1 \cdot (1+0.2)Q_1}{(1-0.5)w_1} = \frac{(1-0.5)(1+0.2)(W_1+K_1+R_1)}{(1-0.5)w_1}$$

ということとなる。また,  $Q$  に変化がなかった場合には,

$$\frac{(1-0.5)P_1 \cdot Q_1}{(1-0.5)w_1} = \frac{(1-0.5)(W_1+K_1+R_1)}{(1-0.5)w_1}$$

ということになる。ここでは, たとえ賃金率  $w$  が変化したとしても総産出高に対応する総所得が支配しうる労働単位数, 支配労働タームでの総産出高は現実の生産物量  $Q$  の動きを正確に指し示しうるということになるのである。それにたいし, もしもうえのような仮定が置けない場合には, たとえば, 第1期と第2期との間で, うえと同様  $w$  が50%下落しているが  $w$  のその50%の下落に対応する  $P$  の50%下落も  $W+K+R$  の50%減少もなくそれらが不変のままであるといった状況のもとでは, たとえ  $Q$  に変化がなかったときにも, 総産出高に対応する総所得が支配しうる労働量, 支配労働タームでの総産出高は第2期では第1期でのその2倍ということになってしまう。すなわち, そこでは,  $Q$  に変化はなくしかも  $w$  の下落にもかかわらず  $P$  が不変なのであるから, 第2期での貨幣タームでの総産出高は第1期でのそれ,  $P_1 \cdot Q_1$ , に等しく, また,  $Q$  に変化はなくしかも  $w$  の下落に対応したものとしての  $W+K+R$  の変化もないのであるから, 第2期での, 貨幣タームでの総産出高に対応する貨幣タームでの総所得は, 第1期でのそれ,  $W_1+K_1+R_1$ , に等しい, ということとなり, そして第2期での支配労働タームでの総産出高, それに対応する総所

得が支配しうる労働単位数は、

$$\frac{P_1 \cdot Q_1}{(1-0.5)w_1} = \frac{W_1 + K_1 + R_1}{(1-0.5)w_1}$$

ということとなり、現実の生産物の量に変化がなかったにもかかわらず、第2期の支配労働タームでの総産出高、総所得が支配しうる労働単位数は、第1期のその2倍ということになってしまうのである。そこでは、うえのような形で算出される支配労働量は現実の生産物の量の動きを正確に指し示すことはできないのである。

なお、パーバーによればまた、スミスは彼の議論の諸部分において、自然賃金率は長期についてみれば安定的となる傾向があるという立場をとることによって、みずからをうえのような難局から守っているかのように思われる、だが、そのようなスミスの見解自体は、改良の進行のあいだにおける賃金の推移についての『国富論』の他の箇所で示されている彼自身の考えと矛盾するものであったのである、とされる。Barber [1967], p. 34. 邦訳、40ページ。

- (ii) このことに関してパーバーはつぎのような説明をなしている。すなわち、そのようなものとしてのスミスの公式は、労働生産性が上昇するケース（すなわち、同一量の労働投入がより多くの産出量を生産する場合）を、うまく取り扱うことができない。つまり、たとえ賃金率が一定であるとしても、このケースでは達成目標とされているある産出水準の生産に必要な賃金総支払額は、以前よりも少ないということになるであろう。そして、もしそれゆえに諸産出物の価格の低落ということが次に起こるならば（このような状況のもとではよく起こることなのだが）、「労働にたいする支配力」による測定は、総産出量が実際には増大していたときでも、それが減少したかのような印象を与えてしまうかもしれないのである。Barber [1967], pp. 34-35. 邦訳、40-41ページ。

なお、このようにパーバーによれば、そのようなものとしてのスミスの公式は労働生産性の上昇があるケースをうまく取り扱うことができないとされるのであるが、同時にまたパーバーによれば、スミスは、個々の諸企業によって生産される産出量水準が変わるにつれて〔産出物1単位当たりの〕生産の諸費用（またそれらの費用に対応して、種々の階級間に分配されることになる〔産出物1単位当たりの〕所得という配当物〔生産諸要素の用役の提供に対する報酬〕）が次々に変わっていくわけではないと仮定することによって、暗黙裡に、このような異議からみずからを守っていた、とされる。Barber [1967], p. 35. 邦訳、41ページ。

ただし、パーバーによればまた、うえのようなことが仮定されるところでは、たとえば、靴1足当たりの費用は、1日当たり100足の靴を生産する設備のある工場においても1日当たり10足の靴を生産する工場におけるのと同じ、ということとなるのであるが、経済的世界が小規模生産者によって支配的な地位を占められていた近代工業制（industrialism）の揺籃期にあってはそのような見解はまったく信じが

たいものというわけではなかったのではあるけれども、そのような見解の正当性はその後の経験によって失われてきた、すなわち、多数の生産分野において、高度な技術が大規模な集中生産に適用されるときには単位費用が相当引き下げられるということが、その後、多くの実例によって証明されてきたのである、とされる。Barber [1967], p. 35. 邦訳, 41ページ。(なお、バーバーは、いまみたような意味で、スミスは個々の生産者の操業規模の変動が生産性に与える影響といったことを看過していた、とみるのであるが、スミスの議論における生産性の上昇ということそのものに関してはさらにつぎのような見方を示している。すなわち、スミスは、個々の生産者の操業規模の変動が生産性に与える影響といったことを看過していたのではあるけれども、全体としての経済の拡張がいちじるしい生産性上昇を生み出すということには気付いていた。経済体系の規模が大きくなるにつれて分業が伸展させられ、そのことが社会全体に利益をもたらす、ということになっているのである。スミスは、生産性のこの上昇がもつ効果はかなり一様に全生産分野に分配されると考えていたように思えるのである。Barber [1967], p. 35. 邦訳, 41ページ。ただし、バーバーによれば、「労働にたいする支配力」というスミスの公式そのものは、まあでみられたような意味で、(労働)生産性が上昇するケースをうまく取り扱うことはできないのである。)

(12) Barber [1967], pp. 34-35. 邦訳, 39-41ページ。

(13) Barber [1967], pp. 35-36. 邦訳, 41-42ページ。

(14) バーバーは、スミスがこのような言説をなしているものとして、『国富論』のつぎのような文章を引用している。「等量の労働は、時と場所のいかに問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう。彼の健康、体力、精神が普通の状態で、また彼の熟練と技能が通常程度であれば、彼はつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一部分を犠牲にしなければならない。彼が支払う代価は、それと引き換えに彼が受け取る財貨の量がどうであろうと、つねに同一であるにちがいない。」(WN, p. 33. 大河内訳 I), 57ページ。傍点の付されている箇所はバーバーがイタリック体にしてしている部分。) Barber [1967], p. 36. 邦訳, 42ページ。

(15) なお、バーバーは、長期において労働の苦痛感をかなり変えてしまうかもしれない事情の例として、変化しつつある経済での諸仕事の専門化の進行やそれらの仕事の相違の増加、また、賃金スケールにおける諸変更といったものをあげている。Barber [1967], p. 36. 邦訳, 42ページ。

(16) Barber [1967], p. 36. 邦訳, 42-43ページ。なお、バーバーは、ここでは、「価値尺度としての労働」のこの別形と先でみた労働尺度との関係といったことについては何もふれてはいない。

(17) バーバーがあげているそれらの批判の一例は、本章の注8でみたものである。

(18) バーバーは、スミスがこの問題を提起しているものとしてスミスのつぎのような

#### 42. W. J. バーバー (1967年)

文章を引用している。「1時間の辛い作業におけるほうが、2時間のやさしい仕事におけるよりも、いっそう多くの労働があるかもしれない。また、習得するのに10年の労働がかかる職業に1時間はむづかしいほうが、平凡なわかりきった業務で1ヶ月働けばあいよりもいっそう多くの労働があるかもしれない。」(WN, p. 31. 大河内訳〈I〉, 55ページ。) Barber [1967], p. 53n. 22. 邦訳, 65ページ注22。

- (19) Barber [1967], pp. 36-37. 邦訳, 43-44ページ。なお、アフナセフは、「異質労働の問題」に関するスミスの議論についてのバーバーの議論にもふれている。ただし、いまみたようにバーバーはスミスの議論に対して批判をくわえているのであるがそこではアフナセフはバーバーの議論をそのようなものとして捉えていないために、いくぶん議論にずれがある。しかし、そこには、つぎのようなアフナセフの認識が示されているといえることができる。すなわち、複雑労働とは、それ自身でもって単純労働と比較できるものではなく、複雑労働の生産物と単純労働の生産物との比較をつうじてのみ、単純労働と比較できるものであるものであり、また、商品の価格はそれらの商品の価値の貨幣的表現である。それゆえ、いずれにせよ価値についての説明を与えるものが必要であるとともに、つぎのような考え方、すなわち、産出高を評価するための単位としての労働の質の相違という問題は〔市場で成立する賃金格差という〕市場検査で処理できるのであるが、市場検査と同様なやり方は産出高そのものの評価にも適用できるはずである、そしてそうであるとすれば〔労働の単位数をつうじて確定されるものとしての〕価値と現実の価格との区別という問題は消滅してしまうことになる、といった考え方は、誤ったものであり、またそのような考え方においては、いかなる有用性も労働価値説から引き出されないということになる。Afanasev [1976], S. 179. 邦訳, 206-207ページ。

なお、バーバーは他方でまた、どういう「労働価値説」であろうとそれをけなすことが現代の経済学者たちにとっての流行になっているけれども、もっと寛大な読み方をするのが適当であろう、として、つぎのような見解を示している。すなわち、こんにち、経済学者たちが成長率の見積もりにあたって諸価格が安定的なままであることを仮定するとき、あるいはまた、米英ソの経済的健康状態についての比較陳述が、ある代表的な労働者が特定されたある1群の財貨——たとえば、靴1足、ラジオ1台、あるいはまた自動車1台——を購入するのに十分なだけのものを稼ごうためにはそれぞれの国においてどれだけの労働時間数が必要とされるかということに基づいてなされるとき、結局のところ、ほとんど同じ種類の知的営みがなされているのではないであろうか。Barber [1967], pp. 37-38. 邦訳, 44ページ。〔さらに、スミスの自然価格と市場価格との区別に類似した案はこんにちの低開発地域についての研究のなかでも援用されているのではないであろうかというバーバーの見解は、本章前出注7のなかで見たとおりである。〕



## W. J. バーバー (1967年) についての覚書

バーバーは、スミスの議論では価値〔交換価値〕と価格とは区別されるべきものであり、価値は、市場価格（名目価格、現実の価格）と区別される「自然価格」に対応するものとして取り扱われているとみ、そして、市場の働きをつうじての市場価格の自然価格への収斂という形で市場価格の動きについての部分的な説明を与えること、および、長期にわたる集計的経済変動を測定するための一つの基礎としての価値尺度を案出することを、スミスの価値分析の内容として捉え、また、経済成長を中心的なテーマとするスミスにとっては、後者のことがより重要なものであるのであった、とするのであった。

そして、バーバーによれば、スミスは事実上、仮説的な「初期末開の社会状態」については投下労働量が、他方、資本の蓄積、土地の占有の行われるより複雑な社会状態については支配労働量が価値の適切な尺度であるとした、とされ、そして、この価値尺度としての支配労働量というスミスの考えは、総産出高をそれによって購買しうる労働単位数のタームで表すことによって異時点間の総産出高の変化についての比較陳述が可能になるということ、を、暗に意味していた、とされるのであった。なお、バーバーによれば、一次接近としてはそのような労働単位数のタームでの表現は貨幣タームで表されている総産出高を基準賃金で割ることによって得られ、そして、各々の時点について同様の作業をして得られるそれらの値を調べることによって、それらの時点の間に成長が起こったかどうか、また、その経済の総産出高にどれだけの変化が生じたか、ということが確定できるということになるのであるが、このようなやり方そのものには事実上、たとえば、賃金率に経時的な変化がある場合にはそれと同一割合での他のすべての諸価格および所得諸分け前の変化の存在も仮定されなければならないといった難点〔つまり、スミスの議論においては事実上、貨幣タームでの総産出高はその産出高を生産するさいの生産要素の用役の提供に対する貨幣タームでの諸報酬としての賃金所得、利潤所得、地代所得という所得諸分け前の合計に等しく、したがってまた貨幣タームでの総産出高を貨幣タームでの基準賃金で割ることによって算出されるものとしての支配労働単位数のタームでの総産出高は、その総産出高を生産するさいの生産要素の用役の提供に対する諸報酬としての賃金所得、利潤所得、地代所得の受領者たちがその所得で支配しうる労働単位数の

合計に等しくなければならない、ということになっているのであるが、そこでは事実上、生産物購買力という意味での実質賃金率が経時的に一定であるとともに生産物購買力という意味での実質所得に経時的な変化があるときにのみ所得の労働支配力は経時的に変化する、といったことでも仮定できないかぎり、貨幣タームでの賃金率に経時的な変化が存在して貨幣タームでの基準賃金に経時的な変化がある場合には、総産出高を生産するさいの生産要素の用役の提供に対する諸報酬としての賃金所得、利潤所得、地代所得の受領者たちがその所得によって支配しうる労働単位数の合計に等しいはずの、貨幣タームでの総産出高を貨幣タームでの基準賃金で割ることによって算出される支配労働単位数は、現実の生産物の量の動きを正確に指し示すことはできない、といった難点〕、また、労働生産性に上昇があるケースをうまく取り扱うことができないといった難点〔つまり、たとえ貨幣タームでの賃金率したがって貨幣タームでの基準賃金を経時的に一定であったとしても、もし労働生産性に上昇があつて、生産物1単位当たりの賃金費用が減少し（またそれによって生産物1単位当たりの全体としての生産費が減少し）、その結果生産物価格が低下する、といったようなことがあれば、貨幣タームでの総産出高を貨幣タームでの基準賃金で割って支配労働単位数のタームで総産出高を測定するといった方法は、現実の生産物の量に実際には増大があつたときでも、その現実の生産物の量が減少してしまったかのような印象を与えてしまうかもしれない、といった難点〕、がある、とされるのであつた。

また、スミスの価値分析における穀物に関して、パーバーは、スミスは「穀物の入手可能性」を、支配労働尺度の相対的に適用のより容易な一つの代用物とした、とみるのであつた。さらに、パーバーによれば、スミスは労働の労苦と骨折りのために余暇を割愛するときに労働者がこうむる犠牲の安定性〔労働に伴う不効用の不変性〕ということを指摘するのであるが、スミスはそうすることによって、経済的な改善の程度は財貨の総体規模の変化によってだけでなくその総体を生産するのに要した努力によっても判断されるべきであるということに注意を促していたのであり、そこでは、1単位の労働投入がより多量の財貨にたいする支配力をもたらしたときに経済的な改善が生じているとみなされうることになる、とされ、そしてパーバーは、このような考えをスミスの「価値尺度としての労働」の別形として捉えるのであつた。ただし、パーバーは、「価値尺度としての労働」のこの別形と先の支配労働

尺度との論理的関係といったことをことさら問題にしようとはしていないのであった。

さらにまたバーバーは、一方で、スミスの労働接近法に対してなされてきた批判の例をあげつつその批判に対するスミスの議論への弁護を与えようとするとともに現代の経済分析のなかにもその労働接近法に類似した考え方が見いだされうるということを指摘しつつも、他方で、バーバーによれば、労働の単位数による測定に関連して異質労働の問題についての考慮からスミスは「市場のかけひきや交渉」ということに言及するのであるが、これは、労働の単位そのものは市場で成立する労働の市場価格の格差（市場で成立する賃金格差）に基づいて計算されるべきとするもの、つまり、価値を測定するための単位そのものを評価するために市場検査を持ち出すものである、だがもしそのようなことで足りるのであるならば、その単位によって測られる価値そのものもなんらかの形で市場検査によって評価されうるはずである、しかしそうだとすると価値（自然価格）と現実の価格（市場価格）とを区別する問題は消え去ってしまうこととなり、ここに論理上の矛盾が存在する、とされるのであった。

### 43. I. H. ライマ (1967年)

1967年にその初版が刊行された I. H. ライマ (I. H. Rima) の一著書 (Ingrid Hahne Rima, *Development of Economic Analysis*, 3rd edition, Homewood, Ill.: Richard D. Irwin, 1978 [1st edition 1967; 2nd edition (revised) 1972; 4th edition 1986; 5th edition 1991]). なお, ここではもっぱら, 同一の出版社から出された五つの版のうちの上掲の第3版を使用するのであるが, ここで取り扱うライマの研究の発表年の区分については上掲書の初版が刊行された年, 1967年をとり, そして, 以下では, 上掲書第3版を Rima [1967] と略記する, また, 第4版を Rima [4th ed.] と略記することとする) においてライマは, 一財貨と引き換えにその一財貨が他財貨に対してもつ支配力として彼女が定義する「交換価値」と, 一財貨の満足をもたらす力として彼女が定義する「使用価値」との関係ということに関連をもつところの, 『国富論』第1篇第4章の終わりのほうでの水とダイヤモンドの価値のパラドックスについてのスミスの言説を, 批判し, さらに, 交換価値としての「価値」の考察にさいして効用を正当に取り扱うことのできなかったスミスはつぎに『国富論』第1篇の第5章から第7章において価値の一決定因としての労働の役割ということに注意を向けるのであるがそこではスミスは労働と価値との間の関係について多くの点で矛盾, 混乱した説明を与えている, としつつ<sup>(1)</sup>, そのスミスの説明に関連してつぎのような内容をもった見解を示しているといえよう。

① スミスは一方で, 支配労働価値説 (labor command theory of value) と呼ばれてもよい考えを示しているのであるが<sup>(2)</sup>, それによれば, 商品は, その商品自体と交換に, その商品が直接的にあるいはなんらかの他の商品の形で間接的に支配しうる労働に等しい〔交換〕価値をもつことになるのである。なお, 労働がこの意味で用いられるときには, それは, 一つの価値尺度 (measure of value) として役立つのである<sup>(3)</sup>。

② しかしながらスミスは, 他の諸言説において同じほど明確に, 労働は価値の原因あるいは決定因 (the cause or determinant of value) であるとい

う考えを示しているのであり、<sup>(4)</sup>それらの言説は、労働はたんに価値尺度であるというよりもむしろ価値の原因あるいは決定因であるという一つの労働費用説 (labor cost theory) を提出しているのである。<sup>(5)</sup>

③ 以上のことに関連して幾つかのことが問題になりうる。第一に、もし労働が価値の尺度であるならば、何故に価値はふつう貨幣価格で表現されるのか。第二に、労働は価値の原因と価値の尺度との両方でありえないのか、すなわち、商品の価値をその商品が含有する労働量に従って定め、そしてその商品の値打ちを同量の労働を含有しているなにか他の商品もしくは商品群のタームで測定することができないのか。もしこのことが可能であるならば、労働費用説と支配労働説 (labor command theory) との間に矛盾は存在しないこととなる。第三に、スミスは労働価値説を「あの初期末開の社会状態」にのみ適用することを意図していたのであり、そして、土地の占有と資本 (stock) の蓄積以後は価値の原因は労働だけではないのではないかと考えていた、ということはあるようなことではないであろうか。<sup>(6)</sup>

④ 第一の問題についてのスミスの考えはつぎのようなものであった。すなわち、物々交換といったことが終わると商品を他の商品と交換するよりも商品を貨幣と交換することが自然的なこととなる。たしかに金や銀は最も満足のいく貨幣的媒介物である、しかし、それらは、それらを採鉱するのに要する労働量に依存しつつ、他のすべての商品と同様、価値において変化する、また穀物も価値の測定に使用されうるけれどもそれもまた、その生産に要する労働量に依存しつつ価値において変化するであろう (WN, pp. 35-36. 大河内訳 < I >, 61-62ページ)。したがって、価値はふつう貨幣のタームで表現されるという事実にもかかわらず、労働が、唯一の正確な価値尺度であるとともに唯一の普遍的な価値尺度なのである、すなわち、いついかなるところでも様々な商品の価値を比較することのできる唯一の標準なのである (WN, p. 36. 大河内訳 < I >, 63ページ)。<sup>(7)</sup>

⑤ また、第二および第三の問題に関係するスミスの考えはつぎのようなものであった。すなわち、④スミスは一方で、商品は、それが含有する労働の量および質しだいで、より大きなあるいはより小さな交換価値をもつであろう、とした。たとえば、スミスは『国富論』第1篇第6章の冒頭で、土地の私的所有と資本 (capital) の蓄積に先立つ「初期末開の社会状態」では商品はその商品に凝結された (congealed) 労働量に従って価値をもち、そして、

等量の労働を含有する諸商品は同等に、互いに交換されるであろう、としている。ところで、このような事情のもとでは、労働を価値の一原因および価値の一尺度の両方として用いることに關してはなんの困難も存在しはしない。というのは、労働以外の要素は存在せず、そして、すべての取引は等量の労働ということを伴うからである。商品の労働費用〔商品に凝結された労働量、商品が含有する労働量〕は、その商品の労働支配力に厳密に等しいのである。なお、スミスがこのような状態において存すると考えた唯一の問題は、等労働時間はそのまま等労働含有量ということにはならないという事に関係するもの、つまり、労働の質の相違に關するものであった。<sup>(8)</sup> ⑥土地の私有と資本 (capital) の蓄積に先立つ前資本主義時代についてのスミスの議論に關しては解釈上の問題は存在しない。生産の唯一の要素が労働であり、諸商品は、それらが含有する労働に従って互いに交換されるのである。かくして労働は、価値の原因でもあり価値の尺度でもあるのである。また、この状態のもとにおいては、全生産物は労働者に属する。それが分け合われなければならない地主も資本家も存在しないのである。しかしながら他方でスミスは、土地が私有されるようになりまた資本蓄積が行われるようになると、生産物のうちのある分け前は資本 (stock) の所有者と地主のもとへと行くこととなり、この状態のもとにおいては、労働の全生産物はつねに労働者に属するというわけではなくなる、とする。このことはスミスの労働価値説にとって大きな意味をもつ。というのは、もし労働者が生産物を資本 (stock) の所有者および地主と分け合わなければならないならば、つぎのいずれかのことが結論されなければならないからである。そのうちの一方のものは、進歩した社会では労働が全生産物を創造するわけではなく、そして、地主および資本家のもとへ行く分け前は、彼らが獲得してきた正当な報酬である、というものであり、もう一方のものは、労働者は、当然みずからのものである生産物の一部を、奪われている、というものである。前のほうの理解の仕方は、労働価値説〔事実上、本章の本文②、注4で触れられたようなものとしてのライマの言う「労働費用説」にあたるもの〕<sup>(9)</sup>を撤回するに等しい、少なくとも進歩した状態については、そうである。それに対し後のほうの理解の仕方が、スミスの立場に最も近づいているのか。このことについては、利潤および地代の本質、さらに、それらのものの、自然価格および市場価格に

対する関係についてのスミスの議論を検討することが助けとなるのであるが、そのスミスの議論からしてつぎのことがいえる。すなわち、スミスは、資本 (stock) の所有者が利潤を受け取り地主が地代を受け取るという権利を否定しているわけではなく、むしろ反対に、土地の私有と資本 (stock) の蓄積に先立つ「初期末開の社会状態」が過去のものになってしまうとこれらの分け前が存在することは「自然な」ことであると考えているのであり、そしてそのことは、価値問題の観点からすれば、スミスの議論においては、[そのようなものを費用項目として含めたうえでの] 生産費が価値の長期的な決定因でありがちであるということになる、ということを示しているのである。なおスミスの議論ではそのような価値の決定因としての生産費という考えが明確な形で示されているわけでも、労働価値説〔事実上、「労働費用説」〕が「初期末開の社会状態」に明確に限定されているわけでもなく、そこに明らかにジレンマが生じることになるのではあるが、労働がすべての価値を創造したそれゆえ地主や資本 (stock) の所有者のための分け前という控除分は労働者に当然属すべきものの搾取を表すのかといえ、スミスはこの方向での議論を展開しようと考えていたわけではない。なぜなら彼の考えていた社会とは、階級的利害の対立の存在しない恵み深い社会であったからである。だが、商品販売の総収入からの地代および利潤の控除は必然的にその商品の労働費用とその商品の労働支配力との間の不一致を意味するといったことを、その後、論じようとしたマルクス (K. Marx) のような人々に対して、階級闘争の理論への扉は開かれたことになるのであった。<sup>11)</sup>

(注)

- (1) 以上については、Rima [1967], pp. 80-81, 97-98 (Rima [4th ed.], pp. 80-81, 97) を見よ。

なお、本章においてライマの議論を取り扱うさい、本文でも断ったようにもっぱら前述のライマの著書の第3版を使用し、そしてこの注におけるように第3版中の箇所に対応する第4版中の箇所も併記するのであるが、ライマのこの著書については、うえの第3版、第4版とともに、第2版および第5版——以下、この第5版を Rima [5th ed.] と略記する——もみることができた。もちろん、それら第2、第3、第4、第5版相互の間には表現、論述の様式等において相違が存在するのであるが、いま本文で触れられたことに関連しては、第5版では、スミスは労働を諸国民の富の源泉、また、分業を労働の効率向上の主要手段としたのちに、商品の生産に必要

#### 43. I. H. ライマ (1967年)

とされる労働努力とその商品の交換価値との関係という問題を取り扱ったのであり、そして、国民の富から商品の値打ち（商品の値打ちということは、なによりもまず一人の道徳哲学者であるところのスミスにとっては、一つの中心的な問題であった）への焦点のその変更はスミスをして、商品の「使用価値」と「交換価値」とを区別することへと導く、といった見方を新たに加えたうえで、スミスの議論における「価値のパラドックス」ということに関する言及がなされている。それについては Rima [5th ed.], pp. 94-95 を見よ。

- (2) スミスがそのような考えを示しているものとしてライマは、つぎのようなスミスの文章を引用している。「したがって、およそ商品の価値は、それを所有していても自分では使用または消費しようとはせず他の商品と交換しようと思っている人にとっては、その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しい。それゆえ、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である。」(WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52 ページ。)  
「その価値は、それを所有しそしてそれをある新しい生産物と交換しようと思う人たちにとっては、そうした人たちがそれで購買または支配できる労働の量に正確に等しいのである。」(WN, pp. 30-31. 大河内訳〈I〉, 53 ページ。) Rima [1967], p. 81. (Rima [4th ed.], pp. 81-82.)
- (3) Rima [1967], pp. 81-82. (Rima [4th ed.], pp. 81-82.)
- (4) ライマはつぎのようなスミスの文章を引用している。「あらゆる物の真実価格 (real price), すなわち、あらゆる物がそれを獲得しようとする人にたいして真に費やさせるものは、それを獲得するための労苦と骨折りでである。」(WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52 ページ。)  
「資本 (stock) の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態のもとにおいては、種々の物の獲得に必要な労働量のあいだの比率が、これらの物を相互に交換するにあたっての原則 (rule) を提供しうる唯一の事情であると思われる。……ふつう 2 日分または 2 時間分の労働の生産物であるものが、ふつう 1 日分または 1 時間分の労働の生産物であるものの 2 倍の値打ちがあるというのは、当然である。」(WN, p. 47. 大河内訳〈I〉, 80 ページ。) Rima [1967], p. 82. (Rima [4th ed.], p. 82.)
- (5) Rima [1967], p. 82. (Rima [4th ed.], p. 82.) なお、ライマによれば、交換価値の決定を説明するという問題は、分析的には、価値を測定するという問題とは別個なものである、とされる (Rima [1967], p. 83. Rima [4th ed.], p. 83.) (第 5 版では、「交換価値を説明するという問題」は、分析的には、価値を測定するという問題とは別個のものである、とされる。Rima [5th ed.], p. 97. また、第 5 版では、まずスミスの議論における「労働費用説」の受容ということに関する言及がなされ、それにつづけてスミスの議論における「支配労働価値説」ということに関する言及がなされる、といった形がとられている。それについては Rima [5th ed.], p. 96 を見よ。)
- (6) Rima [1967], p. 82. (Rima [4th ed.], p. 82.)



- (7) Rima [1967], pp. 82-83. (Rima [4th ed.], pp. 82-83.)
- (8) Rima [1967], p. 83. (Rima [4th ed.], p. 83.) なお、本章の注5でも触れられたようにライマは、「交換価値の決定を説明するという問題」〔第5版では、「交換価値を説明するという問題」〕それ自体は分析的には「価値を測定するという問題」とは別個のものである、とするのであるが、そのライマによればまた、事実上、いま本文でみられたような論理を展開するスミスの議論のなかでは労働を価値の一原因および価値の一尺度との両方と考えることにはなんの難点もみられてはいなかった、ともされるのである (Rima [1967], p. 83—Rima [4th ed.], p. 83—を見よ)。

また、ライマは、異質労働の問題についてのスミスの取り扱いをつぎのようなものとして示している。すなわち、労働には、それに伴う困難、不快、危険、それが必要とする訓練、技巧、創意の程度に、相違があるため、等労働時間がそのまま等労働含有量ということにはならない。だが、このことは、際立った困難をもたらすものではない。というのは、労働の質のそのような相違は、異なる報酬に反映されるであろうからである。「社会の進歩した状態においては、普通以上の辛さや、すぐれた熟練に対するこの種の斟酌が、労働〔ライマが引用している文では *labourer* となっているが、スミスの原典では *labour*〕の賃金についてなされるのが通例であって、おそらくごく初期未開の時代にも、これと同種のなにかが行われていたにちがいないのである」(*WN*, p. 47. 大河内訳〈I〉, 81-82ページ。〔 〕内は中川)。スミスは、賃金率決定の市場の作用の結果、自動的に、各労働者によって遂行される労働と釣り合った賃金というものがもたらされるであろうということを、そして、賃金格差は商品諸価値のなかに反映されるであろうということを、もちろんのことと思っていた。このようにして賃金格差という論題が価値問題についての議論のなかに導入されるのである。その論題は後のほうの章までそれ以上に追求されはしない、しかし、スミスが、市場が諸商品のなかに体化された労働 (*labor embodied*) の値打ちにそいつつ商品諸価格を定めると信じていたということは、明らかである。かくしてスミスは、諸商品はそれらの商品の労働含有量 (*content of labor, labor content*) に従って互いに交換され、そしてその労働含有量とは時間、辛さ、さらに、創意といったようなことからなるのである、とするのであった。「たとえば狩猟民族のあいだで、1匹のビーバーを仕留めるのに、1頭の鹿を仕留める労働の2倍がふつう費やされているとすると、ビーバー1匹はとうぜん、鹿2頭と交換される、すなわち、鹿2頭に値することになるであろう」(*WN*, p. 47. 大河内訳〈I〉, 80ページ)。Rima [1967], p. 83. (Rima [4th ed.], p. 83.)

- (9) なお、ライマ自身が「労働価値説 (*labor theory of value*)」という概念そのものに与えている定義については、Rima [1967], p. 98 (Rima [4th ed.], p. 97) を見よ。第5版でも同じ定義が示されている (Rima [5th ed.], pp. 112-113)。
- (10) そのようなスミスの議論についてのライマによる検討については、Rima [1967],

pp. 84-86 (Rima [4th ed.], pp. 84-86) を見よ。

- (ii) Rima [1967], pp. 84-87. (Rima [4th ed.], pp. 84-87.) なお、本書前出「42」の注3のなか等で触れられた V. S. アファナセフ (V. S. Afanasev) によれば、スミスは資本による労働の搾取という思想に思い及ばなかったのでであろうとライマは主張するのであるが、現代のブルジョア経済学は利潤と地代を「労働者の生産物からの控除」とするスミスの見解を、自らの階級的制約性と弁護論的な志向のために曖昧にしたがっている、とされる。Afanasev [1976], S. 172-173. 前掲邦訳, 198-199ページ。

なお、アファナセフがそこで取り扱っているライマの著書は、本章で取り扱われているライマの著書の初版なのであるが (Afanasev [1976], S. 171 Anm. 10, 邦訳, 291ページ原注10を見よ), ライマは第5版では、スミスは土地が私的に所有されるようになりまた資本蓄積が行われるようになると生産物のうちのある分け前は資本の所有者と地主のもとへと行くこととなりこの状態のもとにおいては、労働の全生産物はつねに労働者に属するというわけではなくるとする、とみるとともに、それゆえまた初期未開の経済状態をこえてのうのような経済状態への展開ということは、スミスの価値理論にとっただけでなく分配理論また労働者の搾取という問題にとっても、大きな意味をもつ、といったことを指摘したうえで、ライマはこの第5版では新たに、論点として、もし労働者たちが彼らの生産物を資本家たちおよび地主たちと分け合わなければならないとするならば「初期未開の社会状態において」のみ労働だけが価値を創造するのだということになるのか、あるいはまた、もし進歩した社会では労働者たちは彼らの生産物を資本家たちおよび地主たちと分け合わなければならないのであるならば労働者は搾取されているのであるのか、といった問題を提示し、そしてその問題に対するスミスの解答を示すといった形で、事実上、そのような問題に関するスミスの立場についての本文でみられたようなライマの解釈の正当性を論証しようとしている。それについては Rima [5th ed.], pp. 98-102 を見よ。なおまた、そこでライマによって示されているものとしてのスミスの解答のなかには、進歩した社会では賃金、利潤、地代が大多数の商品の価格の構成部分となるのであるが価格のそれらの構成部分の真実価値 (real value) そのものはそれらの各々が「支配しうる労働の量」によって測定されるといった内容に関する事項も見いだされる。

## I. H. ライマ (1967年) についての覚書

ライマによれば、スミスの議論では金や銀さらに穀物は、それらの採鉱あるいは生産に要する労働量に依存しつつその価値が変化するため正確な価値尺度ではありえないとされ、商品の交換価値の唯一の正確かつ普遍的な尺度

は、その商品と交換にその商品が直接的にあるいはなんらかの他の商品の形で間接的に支配しうる労働であるとされており、そしてこのような意味で、そこでは、支配労働価値説と呼ばれてもよい考えが示されている、とされるのであった。

そしてまたライマによれば、スミスはうえでみたようなものとしての労働（直接的あるいは間接的に支配しうる労働）を価値の尺度としようとする（支配労働価値説）のであるがそのスミスの議論には他方でまた、労働が価値の唯一の原因であり諸商品が含有する労働量（ただし、労働の、時間、辛さ、創意等々といったことに関する考慮がくわえられたうえでの労働量。なお、労働の辛さ、創意等々といった労働の質的な相違は、市場の作用の結果、異なる報酬といったことに反映される〔なお、ライマの理解によれば、スミスの議論では、諸商品に体化されて諸商品が含有することになる労働の質の相違は、労働に対する報酬・賃金の相違に反映され、そしてこの後者の相違が、諸商品の生産に費やされる労働時間の相違とともに、労働含有量・労働費用の相違として、諸商品の交換価値のあいだの相違に反映されることになるのであった〕）、諸商品に凝結された労働量がそれらの商品の交換価値を決定するという考え（労働費用説）も見いだされる、とされるのであった。

そしてさらに、「交換価値の原因・決定の説明の問題」と「交換価値の測定の問題」とは分析的には別個の問題であると捉えるライマによれば、スミスの言う「資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期末開の社会状態」では商品に含有される労働量とその商品が支配しうる労働量とは等しくなり、労働を価値の唯一の原因・決定因と同時に価値の尺度とすることには論理上の問題はない、とみられるとともに、スミス自身そのこと自体についてはなんの難点もみてはいなかった、とされるのであるが、同時にまたそのライマによれば、労働を価値の尺度とするスミスは他方で、うえのような労働が価値の唯一の原因であり諸商品が含有する労働量・諸商品に凝結された労働量がそれらの商品の価値を決定するといった考えの妥当する範囲を明確に、「初期末開の社会状態」に限定していた、というわけではなく、また、価値の決定因としての「資本や土地に対する報酬を費用として含む」生産費といった考えを明確な形で示していた、というわけでもないのではあるけれども、資本の蓄積と土地の占有の行われる社会状態での利潤、地代の存在を「自然な」とと考えるスミスの議論そのものは、事実上そのような社会状態ではうえの

43. I. H. ライマ (1967年)

ような生産費が価値の長期的な決定因となる傾向があるということを暗に示しているのである、とみられるのであった。しかしまた同時にそのライマによれば、以上のようなものとしてのスミスの議論は他方で、利潤や地代の存在による商品に体化・凝結された労働量（労働費用）と商品の労働支配力との不一致、労働の搾取、階級的利害対立といったことを問題にしようとした人々に対して議論の端緒を提供することともなった、ともされるのであった。

#### 44. E. G. ウェスト (1969年)

1969年に刊行された E. G. ウェスト (E. G. West) の一著書 (Edwin G. West, *Adam Smith*, New Rochelle, N. Y.: Arlington House, 1969. 以下, West [1969] と略記する) においてウェストは、<sup>(1)</sup> スミスは事実上、「富 (wealth)」という言葉によって (資本という) ひとつのストックではなくしてある期間にわたっての (国民所得という) ひとつのフローのことを言っていたのであり、そして『国富論』という書物の予示されている目的は1人当たり実質国民所得を決定する社会的な諸原因の分析ということであったとしつつ、<sup>(2)</sup> スミスの価値尺度論に関連するつぎのような見方を示している。

① スミスは、『国富論』の第1篇第5章から第7章において価値あるいは価格付けに関する諸問題を取り扱うのであるが、スミスはそれらの諸章において、価値の<sup>(3)</sup> 尺度 (measure) の問題と価値の<sup>(4)</sup> 決定 (determination) の問題という二つの問題を議論した。

② 第5章においてスミスは、長期的実質所得 (long-run real income) を測定するための「労働支配力」標準 (a “labour-command” standard) を厚生の一指標として使用した。すなわち、各人がうんざりする労働を回避してそれを他人に課することができればできるほど彼は暮らし向きがより一層良いのであり、労苦をそのように移転させたいという欲望が分業を促進するのであり、富の究極の標準は、各人がその富でもって市場で購買する他人の労働の量であるのであった。<sup>(4)</sup>

③ ところで、価値の<sup>(5)</sup> 一指標 (index) としてあるものを使用することとこれと同一の「あるもの」が価値の唯一の<sup>(6)</sup> 原因 (cause) であると主張することとの間には決定的な相違があるのであり、スミスがここで労働価値説への混乱した試みをなしたというマルクス (K. Marx) の主張は、誤った解釈である。<sup>(5)</sup>

(注)

(1) なお、以下で取り扱われるウェストの議論はそのまま, Edwin G. West, *Adam*

#### 44. E. G. ウェスト (1969年)

*Smith: The Man and His Works* (Indianapolis, Ind.: Liberty Press, [1969], 1976)

——以下、West [1976] と略記する——のなかに再現されている。

- (2) West [1969], pp. 168-169. (West [1976], p. 199.)
- (3) West [1969], p. 169. (West [1976], p. 200.)
- (4) West [1969], pp. 169-170. (West [1976], p. 200.)
- (5) West [1969], p. 170. (West [1976], pp. 200-201.) なお、『国富論』第1篇の第6、第7章については、ウェストによれば、スミスはそこでは実際にはひとつの労働価値説を略述したのではなくて、ひとつの(総)生産費価値説 (a (total) cost of production theory of value) を略述した、すなわち、スミスは、長期的には品物の自然価格はその品物を作るさいに使用されるすべての要素に支払うべきすべての金額——賃金、利潤、地代——の合計であるということを主張したのであり、そして、スミスは彼の先行者たちの間に広くいきわたっていた労働費用価値説 (the labor cost theory of value) を退けることに骨を折っていたように思える、とされる。West [1969], p. 170. (West [1976], p. 201.)

なお、本書前出「42」の注3のなか等で触れられた V. S. アファナセフ (V. S. Afanasev) によれば、資本主義において進行する諸過程の社会経済的な内容を隠蔽することを本質とする俗流的で弁護論的なブルジョア経済学の流れのなかにある現代のブルジョア経済学は、スミスの理論のすべての科学的な言明に反対、とりわけ彼の労働価値説およびその、諸商品の生産に費やされた労働が商品価値の源泉をなしているという最も重要なテーゼに反対、しているのであって、そのような現代のブルジョア経済学は、労働価値説そのものを、なにかんずくスミスの分析を、否定、歪曲、黙殺するために大きな努力をかたむけているのであるが、ウェストのうえのような見解もその流れのなかにあるものである、と捉えられている。すなわち、スミスが価値は諸収入によって構成されているという見解を主張していたことは確かである、しかし厳密には、この変種は彼の理論体系の内部では二次的な役割しか演じていない、それにもかかわらず、スミスの諸学説のなかから彼の価値論の他ならぬこの非科学的な変種に特別の注意を払いスミスの「自然価格」というカテゴリーを歪曲しつつうえのような形で示されているウェストの見解は、価値論におけるスミスの誤りを現代の弁護論に使いやすいようにするという目的を追求するための荒っぽいこじつけである、というのである。Afanasev [1976], S. 169-170, 174-175. 前掲邦訳, 194-195ページ, 201ページ。

#### E. G. ウェスト (1969年) についての覚書

ウェストによれば、あるものを価値の一指標として使用することとそれと同じあるものを価値の唯一の原因とすることとの間には決定的な相違がある

のであり、スミスは『国富論』の第1篇第5章から第7章において価値尺度の問題と価値決定の問題という二つの問題を論じたのであるが、「富」という言葉によって事実上、国民所得という一つのフローのことを言っているスミスは、〔価値尺度の問題にかかわる議論を展開する〕第5章において、各人がうんざりする労働を回避してそれを他人に課することができればできるほど彼は暮らし向きがより一層良いという意味で、富、長期的実質所得を測定するための「労働支配力」標準を厚生の一指標として使用したのであって、〔価値の原因・決定の問題に関するものとしての〕労働価値説への混乱した試みをなしていたというわけではない、とされるのであった。

## 45. G. ローゼンブルース (1969年)

1969年に公表された G. ローゼンブルース (G. Rosenbluth) の一研究 (G. Rosenbluth, "A Note on Labour, Wages, and Rent in Smith's Theory of Value," *Canadian Journal of Economics*, vol. 2 (no. 2, May 1969), pp. 308-314. 以下, Rosenbluth [1969] と略記する) においてローゼンブルースは、スミスの分配理論は彼の相対価格理論と統合されていないといった批判、とくに、彼の地代論は、価格についての彼の生産費説と結びつけて考えると循環論法を含んでおりまたそれゆえ明確な結論を提出することができないといった批判、価値との関連での労働の役割についての彼の議論は矛盾を含むものあるいはもっとひどいものであるといった批判、さらに、彼は賃金率の決定に関していくつかの異なったまた部分的には矛盾した諸理論を主張したといった批判が、従来、スミスの価値論に関連してなされてきたけれども、そのような領域ではスミスのモデルは一般に言われている以上に、統合的な、矛盾のない、明確なものであったのであり、価値との関連での労働についての議論、賃金率についての議論、地代についての議論は、相互に関係づけられていたのだ、ということを示そうとするのであるが<sup>(1)</sup>、そのことを示そうとするローゼンブルースの議論のなかに、つぎのような見解が含まれている。

① スミスは、リカードウ (D. Ricardo) やマルクス (K. Marx) のように、労働含有量 (labour content) を、いかにおおよそのという意味においても相対価値 (relative values) を説明するものとしては、使用したわけではなく、商品が「購買または支配する」ことのできる労働の量を、価値の測定物差<sup>(2)</sup>として、シュムペーター (J. A. Schumpeter) のいうようにニュメレールとして、使用したのであり、相対価格 (relative prices) の説明 (explanation) としては、スミスは、ひとつの生産費説を提出したのである<sup>(3)</sup>。

② ところで、価値尺度 (measure of value) として労働を使用するということが確立されている『国富論』第1篇第5章においてスミスはたんに、「指数方法を知らなかったために」便利なニュメレールを見つけ出すことに関心



をいただいていたではなかった。スミスの目的についての道理にかなった一つの説明はゴードン (D. F. Gordon)<sup>4</sup>によって与えられており、彼は、スミスは商品が「購買または支配する」ことのできる労働の量を規範的な意義をもったひとつの絶対価値とみなした、という考えを提出するのである。二つの商品の絶対価値の比率がそれら二つの商品の「自然価格 (↔生産費によって説明される)」の比率に等しかったため、商品が「購買または支配する」ことのできる労働の量は、ニュメレールという役割も兼ねるのであったのである。なお、その規範的な意義は、労働の不効用は異時点間においても異場所間においても不変であるとみなされうるというスミスの仮定に、由来するのであった。ゴードンも指摘しているように、1人の人間が1着のスーツあるいは1足の靴を稼いで得るのにどれほど長く働かなければならないかということをも算定することによって我々が異なる諸経済における生活水準を比較するときには、こういった仮定はいまでもなされているのである。<sup>5</sup>

(注)

- (1) Rosenbluth [1969], pp. 308-309.
- (2) ローゼンブルースは、我々が本書の「24」で取り扱った J. A. シュムペーターの著書から、つぎのような文章を引用している。「スミスは、異場所間比較ならびに異時点間比較という目的のために、それぞれの商品の貨幣価格または『名目価格』[ローゼンブルースは、シュムペーターの原文において *this monetary or 'nominal price'* となっているこの箇所を、(the) *monetary or 'nominal price'* として引用している]に代えて、……実質価格 (*real price*) すなわちあらゆる他の諸商品のタームでの価格をもちだしてくる。そして、彼は彼の時代にすでに発明されていた指数方法を知らなかったために、これらの実質価格をさらに転じて、(穀物がその役割を果たすか否かを考察したのちに) 労働のタームで表現されている価格に置きかえる。換言すれば、彼は……ニュメレールとして、商品たる労働を選び出すのである。」Schumpeter [1954], p. 188. 前掲邦訳、第1分冊、392ページ。〔 〕内は中川。) Rosenbluth [1969], p. 309.
- (3) Rosenbluth [1969], p. 309.
- (4) ローゼンブルースは、我々が本書の「32」で取り扱った D. F. ゴードンの論文をあげている。Rosenbluth [1969], p. 311n. 11.
- (5) Rosenbluth [1969], pp. 309, 311.

## G. ローゼンブルース (1969年) についての覚書

ローゼンブルースによれば、スミスは、相対価格〔相対価値〕を説明するものとして労働含有量を使用したわけではなく、その問題については、ひとつの生産費説を提出したのであるが、他方でスミスは、商品が「購買または支配しうる労働量」を相対価値の測定物差し、ニューメレールとして使用したのであり、同時にまた、スミスにおいては、商品が「購買または支配しうる労働量」は、労働の不効用は異時点間においても異場所間においても不変であるという仮定から、規範的な意義をもったひとつの絶対価値を指し示すものでもあった、とされるのであった。

## 46. C. ナポレオーニ（1970年）

1970年にその原本初版が刊行された C. ナポレオーニ（C. Napoleoni）の一著書（Claudio Napoleoni, *Smith Ricardo Marx*, translated by J. M. A. Gee, Oxford: Basil Blackwell, 1975 [translated from Claudio Napoleoni, *Smith Ricardo Marx: Considerazioni sulla storia del pensiero economico*, 2ª edizione parzialmente rifatta, Torino: Boringhieri, 1973 (1ª edizione 1970)]）。なお、ここでは上掲の原本第2版からの英語訳版を使用するのであるが、ここで取り扱うナポレオーニの研究の発表年の区分については、原本第2版と同じ出版社から原本初版が刊行された年、1970年をとり、そして、以下では、上掲英語訳版を、Napoleoni [1970] と略記することとする）のなかでナポレオーニは、つぎのような見方を示している。

① スミスは、『国富論』第1篇第5章の冒頭において、支配される労働（*labour commanded*）が交換価値の真の尺度であるとしている。支配される労働というものそれ自体は、あきらかに、交換価値に、つまり、労働の価値すなわち賃金率に、依存する。したがって、支配される労働は財貨の一つの価値尺度としてはなんの困難性をも引き起こさないとしても、したがってまた、一つの計算単位として賃金率を用いることにはなんの難点もないとしても、循環論法なしには、支配される労働が交換価値を決定する要因であると考えすることはできないのである。スミスがこの問題に気付いていたということは、彼自身がそれでは支配される労働はどのようにして決定されるのかということを問うたという事実によって、はっきりと、示されている。<sup>(1)</sup>

② なお、その「支配される労働」がどのようにして決定されるのかという問題にたいするスミスの議論は不首尾なものであったのであり、その意味では彼の価値理論は不首尾なものであったのであるが、ある意味では、スミスの価値理論は、経済思想史上における一つのきわめて重大な段階を構成するものであった。そして、その意義を認識するためには、支配される労働という基準を交換価値の決定の脈絡におけるよりもむしろ（スミス自身が示唆した方向に沿って）資本主義的成長についての理論という脈絡のなかで考

えることが必要であったのであり、その支配される労働という基準は、成長それ自体の認定および測定のための一つの基準として使用されるものと考えられるものでもあったのである。<sup>(3)</sup>

③ なお、スミスの場合に、支配される労働という彼の概念が、どのような意味で、経済成長の問題にとって重要なものとなるのか、ということは、つぎのように示すことができる。すなわち、支配される労働は、交換価値を決定 (determine) する要因とは考えられえないけれども、そのような価値を測定 (measure) するためには完全に良好に使用されうるのであり、またとくに、価値のうちの剰余に当たる部分を測定するものとして使用されることができるのである。そして、スミスの場合、支配される労働は、それがひとつの尺度として使用されるとき、つぎのような形で経済成長の問題とかかわりをもつのである。つまり、④スミスによれば、労働が、その生存手段に加えてある価値 (利潤および地代の形で占有される剰余) を生産するときには、その労働は生産的労働であるのであった。したがって、支配される労働が体化された労働よりも大きくなるといった純生産物のもととなるものは、労働生産性である、ということができる。それゆえ、支配される労働は、体化された労働との比較で、たんに一財貨の価値についての一つの尺度を提供するだけのものではなくてその当該財貨が雇用の増加をつうじて一般的な生産物の増加にたいしてなしうるかもしれない貢献というものを測定する、といわれることも可能であるのである。⑤さて、たとえ支配される労働が体化された労働よりも大きかったとしても、必ずしもそのことによって稼働させられることになる付加的な労働もまた生産的労働であるというわけではない。そのためには、資本家や地主によって受け取られる「収入」が資本 (capital) に転換される——あるいは、スミスの表現を用いるとすれば、蓄積される——ということが、必要なものであり、しかも、スミスの場合、その資本の蓄積ということは付加的な生産的労働者への賃金支払いということをつうじて、現れるのであったのである。<sup>(4)</sup> ⑥ところで、スミスが総蓄積を生産的労働の賃金に還元しているという事実は、彼が成長を考察した道すじをきわだたせるのに役立つのであり、「価値」という用語が、スミスが彼の著書のこの部分でほとんどいつもそうしているように、全社会的産出高を指し示すために用いられているときには、とくにそうである。すなわち、スミスは、社会的産出高とその産出高が支配しうる労働量との間の関係を、一つの交換

関係として考えていた、と言うことができるのであり、そして、経済の達成 (performance) についての一つの基準としてのこの交換関係の重要性ということのゆえにスミスはたしかに、この交換関係に、様々な財貨の間の個々の交換比率ということに関連する交換関係にたいするよりもはるかに大きな意義を、付していたのである。かくして、もし社会的産出高が生産的労働の成果であり、そして、もし純生産物すなわち剰余が資本形成に支出されるならば、そのときには、社会的産出高と体化された労働との間の数量的関係は、その経済システムにもたらされる潜在的な付加的労働の量を測ることになるのであり、また、そのようなものとして、経済プロセスの成功 (success) の一つの尺度ということになるのである。<sup>(5)</sup>

④ なお、〔スミスの議論においては、社会的産出高にはそれに対応する支配される労働が対置され、その支配される労働と体化された労働との差が、その社会の剰余に対応するとともにその経済システムに新たにもたらされる潜在的な付加的労働の量を示し、そしてもしその剰余が資本として蓄積され使用されるときにはそれは現実の付加的な生産的労働者への賃金支払いとして現れ、そして生産的労働の量の増大は社会的産出高のいっそうの増大をもたらすということになるのであるが、〕スミスが経済プロセスの成功の程度そのものを考えるさいには、彼はそれを、少なくとも二つの異なる道すじで考えている。その一つは、資本蓄積の増進による賃金率の上昇、労働者の生活水準の向上ということであり、そしてもう一つは、資本蓄積の増進による雇用の増大ということである。<sup>(6)</sup>

⑤ また、以上のようなスミスの分析の意義を正しく理解するためには、その分析がかかわっていた歴史的背景を、すなわち、資本主義的蓄積プロセスということが重要な役割を演じた封建的な経済から資本主義的／ブルジョア的な経済への変化といったスミスの時代の社会という歴史的な背景を、考慮に入れなければならない。<sup>(7)</sup>

(注)

- (1) Napoleoni [1970], pp. 39-40. なお、ナポレオーニは、「支配される労働」の決定という問題に対するスミスの解答は二つの部分に分かれるとしつつその解答をつぎのようなものとして示している。すなわち、「労働の全生産物が労働者に属する」「資本 (stock) の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態」というスミスによっ

#### 46. C. ナポレオーニ（1970年）

て仮定された原始的状況のもとにおいては、体化された労働 (labour embodied) の量というものをある所与の財貨の生産にどうしても用いられなければならない労働の量を意味するものとすれば、 $\dot{\bar{A}}\dot{\bar{L}}\dot{\bar{L}}$ の量は、体化された労働の量に等しい。他方そのような段階から、財貨の価値が、賃金からだけでなく、資本 (capital) の蓄積ということをつうじて生起することになる利潤および土地の私的所有ということに起因する地代からも、なるといった段階へと移ると、そこでは、財貨が支配することのできる労働の量は、体化された労働の価値および利潤と地代との価値（すなわち、剰余 (surplus) の価値）とに対応することとなる。原始的な段階を離れると、 $\dot{\bar{A}}\dot{\bar{L}}\dot{\bar{L}}$ は体化された労働に等しいと言えないようになるのである。そして、スミスの議論によれば、財貨の価格は「究極的には」賃金、利潤および地代に「分かれる」のであり、また、「ここで注意しなければならないのは、価格のすべての異なる構成部分の真実価値は、そのおのおのが購買または支配しうる労働の量によって測られる、ということである」（WN, p. 50. 大河内訳〈I〉, 85ページ）から、その財貨によって $\dot{\bar{A}}\dot{\bar{L}}\dot{\bar{L}}$ の量は、賃金、利潤および地代の水準によって決定されるということになり、さらにまた、競争プロセスが賃金、利潤および地代のある所与の「通常率あるいは平均率」——スミスが「自然」率と呼び、また、一時的な市場の変動をこえて組織的にいきわたる傾向のある率——をもたらすのであるから、均衡においてある財貨が支配できる労働の量は、その財貨の「自然価格」によって、すなわち、その財貨をつくるのに使用される諸生産要素にたいして賃金、利潤および地代の自然率が支払われるときに成立する価格によって、決定される、ということになる。Napoleoni [1970], pp. 40-41.

そしてナポレオーニは、スミスの議論をこのようなものとして捉えたうえで、つぎのような論評をくわえている。すなわち、スミスの議論がこのようなものであるとすると、 $\dot{\bar{A}}\dot{\bar{L}}\dot{\bar{L}}$ を構成する諸要因というこの考えに関してある問題に出くわすこととなる。すなわち、賃金の自然率、利潤の自然率および地代の自然率は、それら自体が価値なのであり、したがってまた、こんどは、それらの自然率がどのようにして決定されるのかということをつきとめるが必要になるのである。したがって、スミスは、その諸要因それら自体は価値には依存しないという必要な、正式な要件を満足させる価値理論 (theory of value) を提供することには、成功しなかったのである。それゆえ、この意味においては、スミスの価値理論が不首尾なものであるということには、なんの疑いもありえない。すなわち、相対価値の決定の問題——その問題の解明は、剰余すなわち純生産物の価値を定めることができるか否かということに、かかっている——は、未解決のままなのである。Napoleoni [1970], p. 41.

また、ナポレオーニはさらに、スミスが彼の交換理論のなかで取り扱った理論的に大きな重要性をもつ問題として、つぎの二点をとりあげ、その各々について説明

をくわえている。それによれば、第一の問題は、利潤と地代の本質にかかわるものである。スミスは、地代と利潤の双方を、労働の生産物からの「控除分」として定義している（WN, p. 65. 大河内訳〈I〉, 111-112ページ）。地主による土地所有のゆえに、また、資本家による生産期間のあいだの労働の維持のための資本の前払いのゆえに、地主と資本家はそのような控除を実行することができるのである。この定義は、剰余労働——労働者たちの生存に必要な労働の量をこえた労働者たちによって行使される労働量——の成果であるというマルクス（K. Marx）によって十分に展開されることとなった理論を先取りするものである。そして、剰余についてのこの考えは、体化された労働が交換価値の決定要因であるという原理を資本主義社会にも一般的に適用できるものにするにとって——リカードウ（D. Ricardo）とマルクスによって試みられた一般化、しかし、スミスが可能だとは考えなかった一般化——、根本的なものなのである。つぎに、第二の問題は、すべての価格は賃金、利潤および地代に分解しようという考えに関係するものである。スミスは、これら三つの構成部分への価格のその分解は究極的にのみ生じるのだと主張しているのではあるけれども（したがって、これら三つの要素とは別に他の諸要素も存在しようと考えてもよいということとなる）、時として彼は、あたかも価値は直接的に賃金、利潤および地代から成り立っているかのように論じている。すなわち、あたかも、その時々に支払われる賃金、利潤および地代が一財貨の価値を取り尽くしてしまうかのように、したがってまた、あらかじめ生産手段——その価値は当該財貨の価格の一部とならなければならない——の生産において支払われている賃金、利潤および地代といったものを考慮に入れる必要がないかのように、論じているのである。こういうことから、たとえば、スミスはつねに、国民生産物の年々の価値を、それと同一年度の間に賃金、利潤および地代の形で分配される諸所得の合計と考えているのである。Napoleoni [1970], p. 42.

- (2) 本章前出の注1を見よ。
- (3) Napoleoni [1970], pp. 41-42.
- (4) ナポレオーニは、つぎのようなスミスの文章を引用している。「年々貯蓄されるものは、年々費消されるものと同じように規則的に消費され、またほぼ同じ時期に消費される。だがそれは異なる一群の人々によって消費されるのである。富裕な人の収入のうち彼が年々費消する部分は、たいていは、怠惰な客人や家事使用人によって消費されるのであって、この人たちは自分たちが消費するのと引き換えにあとにはなにものも残さない。ところが、富裕な人が年々貯蓄する部分は、利潤を獲得するためにただちに資本（capital）として用いられるのであるから、うえと同じようなやり方で、またうえとほぼ同じ時期に消費されはするが、異なった一群の人々、すなわち、労働者、製造工、手工業者によって消費されるのであって、この人たちは自分たちの年々の消費の価値を利潤とともに再生産するのである。この富裕な人

#### 46. C. ナポレオーニ（1970年）

の収入がこの富裕な人に貨幣で支払われると仮定しよう。もし彼がその全部を費消したならば、この全部で購買しえたであろう衣食住は、前者の一群の人々〔不生産的労働者〕のあいだに分配されたであろう。だがその一部が貯蓄されると、その部分は彼自身か他のだれかの手で、利潤を獲得するためにただちに資本として用いられることになるから、その部分で購買しうる衣食住は、必然的に後者の一群の人々〔生産的労働者〕のためにとっておかれる。消費そのものは同じであっても、消費者が違うのである。」（WN, pp. 321-322. 大河内訳〈I〉, 529ページ。〔 〕内は中川。）Napoleoni〔1970〕, pp. 43-44.

なお、ナポレオーニは、このようなスミスの考えにたいしてつぎのような指摘をくわえている。すなわち、すべての蓄積された資本（capital）は付加的な労働者たちの賃金ということに（したがってまた、付加的な労働者たちの消費ということに）帰着させられるというこの考えは、スミスが時おり採用した価値は直接的に三つのタイプの所得から構成されるという趣旨の考えのなかに含意されている見地と類似した見地を、示しているものであり、蓄積された資本のうちの生産手段という価値構成要素は、それが一商品の価値の一構成部分に含まれていないのと同じように、無視されているのである。なお、(a)一財貨の総価値と、賃金と剰余の結合価値との、厳密な区別、(b) ((a)のことから出てくることであるが、) 社会的産出の総価値と、その生産期間のあいだに分配される諸所得の価値との、厳密な区別、そして最後に、(c)総蓄積と、その総額のうちの賃金前払いからなる部分との、厳密な区別といったことは、マルクスにおいてはじめて見られるものである。Napoleoni〔1970〕, p. 44.

また、ナポレオーニによれば、スミスは所得を生産物の価値と同一視しているがゆえに国民所得についての彼の概念規定は欠点のあるものであり、また、賃金前払いと資本形成との彼の同一視は満足のいくものではない、とされる。Napoleoni〔1970〕, p. 58. 本章前出の注1も見よ。

なお、ホルンダー（S. Hollander）は、1973年の彼の著書、『アダム・スミスの経済学』の、第5章「分配の理論」のうちの「国民所得計算」という節において、たしかにスミスはいくつかの箇所で、個別企業による年間のすべての支払いは土地、労働および資本という諸要素に対してなされる諸支払いに還元せられるという立場をとり、減価償却を独立の費用範疇として扱うという考えは退けられるということとなっており、さらに形のうえでは、スミスはそのような見方を国民所得にまで拡張してはいるが、国民勘定の問題そのものに関しては、『国富論』をつうじて固定資本の償却に大きな注意が払われているということからみて、減価償却を考慮にも入れた、賃金、地代および利潤からなる純国民所得を粗国民所得から区別するアプローチのほうが、スミスの熟慮のうえでの見解というものをよく反映しているかもしれないとしつつ、国民所得計算という視点からの、スミスの議論についての検討



を行っている。それについては、Samuel Hollander, *The Economics of Adam Smith* (Toronto & Buffalo: University of Toronto Press, 1973), pp. 144-147, 小林 昇監修, 大野忠男, 岡田純一, 加藤一夫, 斎藤謹造, 杉山忠平訳『アダム・スミスの経済学』(東洋経済新報社, 1976年), 210-213ページ, 250-251ページを見よ。

(5) Napoleoni [1970], pp. 43-44.

(6) Napoleoni [1970], pp. 44-46. なお、ナポレオーニは、それら二つの道すじのおのについてつぎのような説明を与えている。

まず、資本蓄積の増進による賃金率の上昇、労働者の生活水準の向上ということに関する説明はつぎのようなものである。すなわち、スミスによれば、賃金水準は、労働需要の絶対的な水準ではなく労働需要の変化率に依存する (WN, pp. 68-74. 大河内訳 < I >, 117-124ページ), つまり、労働需要の増加率が大きければ大きいほど賃金はより高く、他方、労働需要のこの増加率は資本の蓄積に依存するのであるから、賃金の水準は、資本蓄積率に依存するということになるのである。そして、賃金は社会の圧倒的大部分の人々の所得を構成するのであるから、賃金率あるいは労働の自然価格の上昇は、社会的繁栄の一つの本質的な要素なのである。Napoleoni [1970], p. 45. [ナポレオーニは、つぎのようなスミスの文章を引用している。「それゆえ豊かな労働の報酬は、富の増大の結果であるが、同じくまた、人口の増加の原因でもある。それについて不平を鳴らすのは、最大の社会的繁栄の必然的な結果や原因について泣きごとをいうのと同じことである。」(WN, p. 81. 大河内訳 < I >, 138ページ。) Napoleoni [1970], p. 45. なお、ナポレオーニによれば、蓄積が賃金にたいして及ぼすかもしれない二つのありうる効果を区別する必要があるのだが、そしてスミスはつねにそれらの効果に区別立てをしていたわけではないけれども、スミスはそれら二つのありうる効果の双方を議論していたのであり、そしてその議論はつぎのようなものであった、とされる。第一のものは、当時広く受け入れられていた見解を反映しつつスミスが自然的水準をこえての賃金の上昇は人口増加を刺激するであろうと主張した短い期間 (short period) に関係するものであり、そしてこの人口増加による労働供給の増加は賃金を引き下げる効果をもち、それゆえ賃金は再びその自然率に一致することになる、といったものである (WN, p. 80. 大河内訳 < I >, 136ページ)。もう一つのありうる事態は、賃金水準にたいする蓄積の効果は永続的なものであることができ、またそれゆえ労働の自然価格そのものが上昇させられる、といったものであり、そのことはつぎのスミスの文章のなかにも見られる。「一方の経費の使い方 (生産的労働の維持ということに帰着することとなる経費の使い方) は、他方の使い方 (不生産的労働の維持ということに帰着することとなる経費の使い方) よりも、一個人の富裕にとって有利であるように、それと同じことが一つの国民の富裕にとってもいえる。富裕な人の家屋、家具、衣服は、下層階級や中流階級の人々にとって、ほどなく役に立つものになる。

#### 46. C. ナポレオーニ（1970年）

彼らは、上流の人たちがそのようなものにあきてくると、それらのものを購入することができるのであり、こうした経費の使い方が財産家たちのあいだで普及するようになると、人民全体の一般的な暮らし向きもまたこのようにして次第に〔この引用分では *generally* とされているがスミスの原典では *gradually*〕改善されるのである。……かつてのシーモア家の館は、いまではパース街道に面した一軒の宿屋になっている。大ブリテンのジェームズ1世の結婚用ベッドは、主権者から主権者へ贈るのにふさわしい贈物として、彼の王妃がデンマークから持参したものであるが、これが数年前には、ダンファームリンのある居酒屋の装飾品になっていた。」（*WN*, p. 330. 大河内訳〈I〉, 543-544ページ。（ ）内はナポレオーニ。〔 〕内は中川。）  
Napoleoni [1970], p. 45.]

つぎに、資本蓄積の増進による雇用の増大ということに関する説明はつぎのようなものである。すなわち、スミスはまた、蓄積が雇用の増加をもたらすという理由から、蓄積に賛成した。生産的労働の維持に向けられるファンドへの剰余の転換は、社会の年々の生産物の支配労働価値 (*labour commanded value*) を組織的に増大させることによって、ますます多くの人々がその雇用を見いだすことを、可能にするのであり、このようにして、貧困に陥った失業者の増加よりもむしろ、報酬を受ける労働者総数のいっそうの増大が存在するということになるのである。Napoleoni [1970], pp. 45-46.

そして、ナポレオーニによれば、以上のことは、「すべて浪費家は公共社会の敵であり、節約家はすべてその恩人であるように思われる」（*WN*, p. 324. 大河内訳〈I〉, 533ページ）というスミスの周知の判断の理由を説明している、とされる。  
Napoleoni [1970], p. 46.

- (7) Napoleoni [1970], p. 46. このことについてナポレオーニはつぎのような説明をしている。すなわち、スミスの分析の意義を正しく理解するためには、その分析がかかわっていた歴史的背景を考慮に入れなければならない。スミスの時代の社会は、封建的な経済から資本主義的／ブルジョア的な経済へと変化しつつあった、そして、この変化において、資本主義的蓄積プロセスということが重要な役割を演じたのであった。すなわち、封建主義的なタイプの経済組織は、その生産プロセスが特権階級の消費欲求の充足に向けられているということから生じてくる一つの危機を経験しつつあった。つまり、そのような消費は時間の経過とともに大きなものになっていくかもしれないとしても、それでもなおその増大は限られた程度のものであるにちがいないのであり、したがってそこには、自然的に増加する人口のうちのますます多くの部分が雇用されないままに留まることになるという可能性が存在することとなる。スミスの用語で言えば、このことはつぎのように言うことができる。すなわち、封建的な社会に生じる剰余はほとんど全く不生産的労働者に支出されるゆえに、社会は停滞的なものであらざるをえない、そしてそれゆえ、雇用の増大や労

働者の生活水準の向上といったことは、全く存在しないかあるいは無視しう程度のものであるかのいずれかである、ということになるのである。かくして、スミスにとっては、蓄積ということをその本質的な属性としてもつ資本主義経済が、深刻な歴史的危機の解決にとって欠くことのできないものと、思われることとなったのである。スミスの名声は、彼の歴史意識および、資本主義的な組織化によって古い社会構造のうえにつくりだされた根本的な諸変化というものについての彼の認識ということのなかに、あるのであり、そして、新しい社会の分析において政治経済学 (political economy) がその現実的な洞察力をもって取り組むことのできるきわめて重大な課題というものは、こういったことと結びつけて考えられるものなのであったのである。〔ナポレオーニは、つぎのようなスミスの文言を引用している。『政治経済学は、およそ政治家あるいは立法者たるものの行うべき学の一部門としてみると、二つの異なった目的をもっている。第一に、人民に豊かな収入もしくは生活資料を提供すること、もっと適切に言えば、人民にそうした収入や生活資料を自分で調達できるようにさせること、そして第二に、国家すなわち公共体にたいして、公務の遂行に十分な収入を供給することである。政治経済学は、人民と主権者の双方をともに富ませることをめざしているのである』(WN, p. 397. 大河内訳〈Ⅱ〉, 75ページ)。〕 Napoleoni [1970], p. 46.

### C. ナポレオーニ (1970年) についての覚書

ナポレオーニによれば、スミスは「支配される労働」を交換価値の真の尺度であるとするとともに他方でその「支配される労働」(の大きさ)がどのように決定されるか、つまり、交換価値はどのように決定されるかということを問題にしているのであり、そしてこの後者の問題に対するスミスの議論は不首尾なものではあったが、彼の「支配される労働」という概念は資本主義的経済成長それ自体の認定および測定のための一つの基準を提供するものとして解釈することができ、またその意味で価値についてのスミスの議論は経済思想史上における一つのきわめて重大な段階を構成するものであった、とされるのであった。また、ナポレオーニによれば、スミスのいう「支配される労働」というものをこのようなものとして解釈することがスミスの議論に即していることになるのであって、社会的産出高とその産出高が支配しうる労働量との間の関係を一つの交換関係として考えていたスミスは、経済の達成度を測る一つの基準としてのこの交換関係の重要性ということのゆえに、様々な財貨の間の個々の交換比率ということに関連する交換関係にたい

するよりもこの交換関係にはるかに大きな意義を付していた、とみられるのであった。

そしてナポレオーニはそのようなものとしてのスミスの議論の特徴、問題点を指摘しつつ、スミスが展開している議論によれば、「支配される労働」という尺度は、たんに一財貨の価値を測定するだけでなくその価値のうちの剰余に当たる部分を測定するものとしても使用されうることによって、みずからの生存手段に加えてある価値（利潤および地代の形で占有される剰余）を生産するものとしての「生産的労働」という概念とあいまって、その当該財貨が（生産的労働の）雇用の増加をつうじて一般的な生産物の増加にたいしてなしうる潜在的貢献の度合いをも測定しうるということとなり、そしてさらにこのスミスの議論においては、社会的産出高にはそれに対応する支配される労働が対置され、その支配される労働と体化された労働との差が、その社会の剰余に対応するとともにその経済システムに新たにもたらされる潜在的な付加的労働の量を示し、そしてその剰余が資本として蓄積、使用されるときにはそれは現実の付加的な生産的労働への賃金支払い、（生産的労働の）雇用の増加として現れ、そしてそのことが社会的産出高の現実のいっそうの増大をもたらすということになっている、とみるのであった。

なお、ナポレオーニによれば、スミスが経済プロセスの成功の程度そのものを考えるさいには、少なくとも二つの異なる道すじで、すなわち、資本蓄積の増進による賃金率の上昇、労働者の生活水準の向上という道すじ、そして、資本蓄積の増進による雇用の増大という道すじで考えている、とされるとともに、このようなスミスの分析の意義を正しく理解するためには、その分析がかかわっていた歴史的背景を、すなわち、資本主義的蓄積プロセスということが重要な役割を演じた封建的な経済から資本主義的／ブルジョア的な経済への変化といったスミスの時代の社会という歴史的な背景を、考慮に入れなければならない、とされるのであった。

## 47. A. S. スキナー (1970年)

ペンギン・ブックス社から刊行されたアダム・スミスの『国富論』(第1篇-第3篇)への編者の「序文」(Andrew [S.] Skinner, Introduction to *The Wealth of Nations*, Books I-III, by Adam Smith, edited by Andrew [S.] Skinner, Pelican Classics, reprinted with revisions, Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1974[published in Pelican Books 1970, reprinted 1973, reprinted with revisions 1974, Introduction copyright © Andrew [S.] Skinner, 1970, 1974]). 川島信義, 小柳公洋, 関源太郎訳『アダム・スミス社会科学体系序説』[1974年の「序文」の邦訳], 未来社, 1977年。なお, ここで取り扱う上掲「序文」そのものは, うえのように1974年のものであるが, そこに示される A. S. スキナー (A. S. Skinner) の研究の発表年の区分についてはその序文の最初の著作権が成立した年, 1970年をとり, そして, 以下では, 上掲「序文」を, Skinner [1970] と略記することとする。また, 上掲の『国富論』(第1篇-第3篇)そのものは1986年に, Adam Smith, *The Wealth of Nations*, Books I-III, edited, with an Introduction by Andrew [S.] Skinner, Penguin Classics, London: Penguin Books, 1986 [published in Pelican Books 1970, reprinted with revisions 1974, reprinted with revisions 1979, reprinted in the Penguin English Library 1982, reprinted in Penguin Classics 1986, Introduction copyright © Andrew [S.] Skinner, 1970, 1974, 1979], という形で出されることとなったのであるが, そこでの編者の「序文」は, Skinner [1970\*] と略記することとする) のなかで編者スキナーがスミスの価値・価格分析に言及するさい, 彼は, そのスミスの議論を, 『国富論』第1篇第5, 第6章にその主要な部分が示されているものとしての価値論 (value theory) に関する議論と, 第6, 第7章にその主要な部分が示されているものとしての価格 (price) とその決定因に関する議論からなるものとして把握し, そのようなものとしてのスミスの議論についての彼の理解を示しているのであるが<sup>1)</sup>, そこにはつぎのような見解, 見方が含まれている。

〔Ⅰ〕価値論に関するスミスの議論は、異なるものではあるが関連のある二つの問題を取り扱う。第一の問題は、一財貨あるいは一財貨の数単位が他の財貨と交換されるその比率を決定 (determine) する諸力に関するものである。<sup>(2)</sup>ところで、この第一の問題は、個人が交換をつうじて他商品の特定単位を獲得するために一商品の数単位を手放そうと思うその比率を決定するであろう諸要素についてのものなのであるが、スミスは、そのような交換価値の問題それ自体を目的として論じたのではなく、彼は交換価値の問題を、個人が生産したその個人が交換において用いようとするところの諸財貨の総ストックの価値を左右する諸要因を明らかにする手段として、論じたように思われる。このような事情から、価値論に関するスミスの議論で取り扱われる第二の問題は、基本的には、個人によって生産された諸財貨の総ストックの価値を我々がそれによって測定 (measure) することができた他人との交換において使用されるところの手段、ということに関するものであった。<sup>(3)</sup>

〔Ⅱ〕この第二の問題についてのスミスの議論、すなわち、個人によって生産された諸財貨の総ストックの価値を測定し他人との〔諸財貨の〕交換において使用される手段に関するスミスの議論は、つぎのようなものである。

(Ⅱ-1) うえてみたような方向で交換価値の問題を考察するスミスは、諸財貨のあいだの交換比率の決定因についての議論にくわえて、つぎのような考えを示している。すなわち、スミスは、個人が処分しなければならない諸財貨 (事実上、彼の所得) の実質価値は、彼が支配しうる、またすべての (個々の) 交換がいったん行われた後に彼が現に受け取る、(労働単位のタームで示された) 諸財貨の量によって、測定されなければならない、とするのである。<sup>(4)</sup>

(Ⅱ-2) スミスのこの結論は、彼の言っている原始的な物々交換経済<sup>(5)</sup>におけるケースを考えることによってはっきりさせることができる。すなわち、そこでは、個人はただ一つの種類の (完成) 生産物を生産しそしてその生産物が彼の私的な (処分可能な) 財産となる、ということが仮定されている。そして、いまでも、スミスが言ったように、〔このような経済においては〕諸財貨のあいだの交換比率がそれらの財貨に体化された労働の割合につねに等しいならば、そのときには、諸財貨の総ストックの交換価値は、その総ストックを生産するのに要した労働に等しいにちがいないということになる。換言すれば、個人が生産した諸財貨のストックに体化された労働は、〔その

諸財貨のストックと交換に〕受け取られる諸財貨——すなわち、その個人が生産した諸財貨のストックによってその所有者であるその個人が購買または支配できる量の諸財貨——のなかに体化されている労働に等しいにちがいないのである。そうだとすると、以上の議論が二つの重要な要点をもっているということが、明らかになるであろう。第一に、スミスはつぎのことを言っているのである。すなわち、物々交換経済においては、個人が費やし（*expend*）そしてその個人の生産する財貨のなかに体化される労働は、等量〔の労働〕と交換される、あるいは、等量〔の労働〕を支配するにちがいない、ということである。要するに、このような状態のもとにおいては、体化された労働（*labour embodied*）は支配される労働（*labour commanded*）に等しいのである。ただしそのさいの基本的な前提はすべての財貨はある所与の（うえて明示された）比率で交換されるということおよび労働が唯一の生産要素であるということ、なのであるが。第二に、スミスはつぎのことを言っているのである。すなわち、個人が自分の生産物を他人の生産物と交換することによって自分の必要を満たすことができるその程度は、その個人が交換において受け取る（労働単位で測った）他人の産出物の量によって確定されなければならない、ということである。明らかに、これは、諸個人の経済的厚生（諸財貨に対する支配力）を測定する一つの方法であり、しかも、厚生を實質タームで測定することの必要性を指し示すものである。<sup>6</sup>

（Ⅱ－３）ところで、スミスが注目したように、物々交換経済と近代の経済とのあいだのひとつの明白な相違は、前者においては諸財貨と諸財貨とが交換されるのに対し、近代の経済においては諸財貨はまずある額の貨幣と交換され、そしてその後、この貨幣が他の諸財貨を購買するために費やされるという事実のなかに、見いだされる。スミスが考えていたように、そのような近代の経済という状況のもとにおいては個人は、（労働という「労苦」に耐える見返りとして受け取られた）彼の収入の価値を、ごく自然に、彼の収入を支出することによって彼が獲得しうる諸財貨の量というタームでよりもむしろ貨幣のタームで評価する。だがこれに対し、スミスは、厚生（すなわち、自分の欲望を満たしうる自分の能力）の真の尺度は、貨幣よりもむしろ「貨幣の値打ち」のなかに見いだされるべきである、ということを苦心して主張しようとしたのであり、そしてその場合その「貨幣の値打ち」は、個人やグループが購買しうる生産物の量（「支配される」労働）によって確定<sup>7</sup>

されるのである。<sup>(8)</sup>

(Ⅱ-4) このような論拠に基づいて、スミスはさらに進んで、所得の nominal 価値と実質価値とを区別し、そして、もし近代における(貨幣)収入の三つの「本源的な源泉」が賃金、地代および利潤であるとすれば、そのばあいそれらの各々の実質価値は、究極的には、「そのおのおのが購買または支配しうる労働の量によって」(WN, p. 50. 大河内訳〈I〉, 85ページ)測定されなければならない、ということを目指したのであった。<sup>(9)</sup>

(Ⅱ-5) 実質所得と貨幣所得との区別を確立するとともに、スミスはさらにまた、いかなる一時点においてもまた通時的にも所得の実質価値を測定しうるような唯一の安定的な基礎として、労働単位を擁護しようとしたのであり、かくしてスミスは、価値の絶対的尺度の(たぶん無駄な)追求——リカード(D. Ricardo)やマルクス(K. Marx)によってうけつがれることとなった研究——を、開始したのであった。<sup>(10)</sup>

(Ⅱ-6) なお、そのようなものとしての労働単位に関するスミスの議論の要点はつぎのようにまとめることができる。すなわち、①もし我々が異時点間の実質所得水準を比較しようとするならば、ある安定的な測定単位いいかえれば価値係数を用いる必要があるということは明らかなことなのであるが、スミスの見解では、労働単位のみが安定的であったのであり、そしてその理由は、労働の不効用は通時的に不変であると言えるということであった。このことからして我々は、スミスの労働単位とは不効用の観点から述べられているものであって、(直接的に)人時(man hours, 延べ労働時間)の観点から述べられているものではない、ということに気付く。②単位のその選択は、〔事実上〕賃金単位の諸問題を〔扱うスミスの議論を〕考察することによってさらにはっきりさせられる。なお、そこでは、〔事実上、〕賃金単位は、1労働単位当たりを支払うべき報酬すなわち個人をして労働に伴う不効用を忍ばせるために(「自分の安楽と幸福とを放棄」させるために)必要な報酬として、示される。この角度からながめて、スミスは、貨幣タームで表された賃金単位を、短期(short periods, short run)については適当であるが、長期(long periods, longer run)については、貨幣はその本位貨の品質低下(悪貨)によってであれアメリカの鉱山の発見のような諸発見の結果によってであれその価値が変化しやすいという理由から、適当でないと考えた。他方、スミスは、長期については賃金財(穀物)のタームで表された賃金単



位を適当とみなしたが、短期については適当でないと考えた。短期についてそのように考えた理由は、短期（数年間）の場合には労働者の実質賃金は経済成長率とともに変化しがちである、ということであった。それにたいし、長期では賃金は生存費水準に向かう傾向があると思われたがゆえに、長期の場合には、関連財（穀物）単位が適当であると考えられたのであった。したがって、スミスは、貨幣単位あるいは穀物単位の有用性を否定したのではなく、彼は、労働はつねに、（こうむる不効用という点からみて）それの価値が安定しているがゆえに、労働単位が比較の基礎となりうる唯一の普遍的で不変な標準（standard）であるということこそ、主張していたのである。

③他方スミスは、労働の不効用はあらゆる仕事に従事するあらゆる個人にとって同一であるというわけではなく、諸仕事のあいだには、その快適さあるいは不快さ等々の点で質的な相違があるということを、認めていた。そうであるとする、1時間の「激しい」労働に伴う不効用を、普通の労働力（labour power）の単位数で表すことが必要になる。スミスの議論によれば、その適切な割合は、市場の「かけひきや交渉」によって確立される貨幣賃金格差によって十分に表現されるということになるのであった。<sup>(11)</sup>

（注）

- (1) Skinner [1970], pp. 47-58. (Skinner [1970\*], pp. 47-58.) 邦訳, 100-129ページ。
- (2) この第一の問題に関するスミスの議論についてのスキナーの見解については、Skinner [1970], pp. 47-49 (Skinner [1970\*], pp. 47-49), 邦訳, 101-105ページを見よ。
- (3) Skinner [1970], pp. 47, 49. (Skinner [1970\*], pp. 47, 49.) 邦訳, 100-101ページ, 104-105ページ。なお、スキナーによれば、スミスは異なるものではあるが関連のあるこれら二つの問題を取り扱うさいに「交換価値（exchangeable value）」というただ一個の用語しか用いていないのであり、そしてこのことが、第1篇におけるスミスの議論が幾分あいまいなままになっていることの大きな理由である、とされる。Skinner [1970], p. 47. (Skinner [1970\*], p. 47.) 邦訳, 100ページ。
- (4) Skinner [1970], pp. 49-50. (Skinner [1970\*], pp. 49-50.) 邦訳, 105-106ページ。なお、スミスがこのような考えを示しているものとして、スキナーは以下のようなスミスの文言を引用している。「およそ商品の価値は、……それを所有していても自分では使用または消費しようとはせず他の商品と交換しようと思っている人にとっては、その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しい。それゆえ、労働

はすべての商品の交換価値の真の尺度である」(WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ)。(個人にとっての)一つの財貨の価値は、「それによって彼が購買または支配しようところの、他の人々の労働の量、またはこれと同じことであるが、他の人々の労働の生産物の量」に、つねに比例しているにちがいない、「あらゆる物の交換価値は、つねに、こうした力の大きさに正確に等しいにちがいない」(WN, p. 31. 大河内訳〈I〉, 54ページ。傍点の付されている箇所はスキナーがイタリック体に行っている箇所)。Skinner [1970], p. 49. (Skinner [1970\*], p. 49.) 邦訳, 105-106ページ。

これらの文言は、スミスが、個人の保有する諸財貨〔のストック〕の実質価値、個人の所得の実質価値はその諸財貨〔のストック〕、その所得によって支配しうる諸財貨の量、ただし労働単位の数で示された諸財貨の量〔結局、支配しうる労働単位数〕によって測定されなければならないと考えていた、ということを示している、とスキナーはみるのである。

なお、いうまでもなく、異時点間の比較を考える場合には、「支配しうる諸財貨の量」の異時点間での増減と「支配しうる、労働単位の数で示された諸財貨の量〔支配しうる労働単位数〕」の異時点間での増減とは必ずしも同歩調をとるとはかぎらない、すなわち、後者の増減は必ずしも前者の増減をそのまま反映しているとはかぎらない。そのためには、それらの時点をつうじて、諸財貨の労働に対する購買力が一定、逆にいえば実質賃金が一定でなければならない、そうでない場合には、それら二つの量は必ずしも同一方向にさへ動きはしない。

- (5) なお、スキナーによれば、この物々交換経済とは、分析を簡単化するためにスミスが用いた、歴史上のそれとは別のものとしての分析的装置であった、とされる。Skinner [1970], p. 47. (Skinner [1970\*], p. 47.) 邦訳, 100ページ。

- (6) Skinner [1970], p. 50. (Skinner [1970\*], p. 50.) 邦訳, 106-107ページ。なお、スキナーは、いまみた二つの点に関連して、いまみた第一の帰結についてのスミスの所説が、第二の帰結の意味を彼が明らかにする助けになった、ということ、そしてまた、スミスは、前者は限定された妥当性を、後者は普遍的な〔なお、Skinner [1970] では、universal, となっているが、Skinner [1970\*] では、wider (より広範な)、に変更されている〕妥当性をもつものと考えた、ということこの2点を、注目するに足るものとして指摘している。そしてスキナーはさらに、後の方の点に関してつぎのような説明をくわえている。すなわち、そもそも、近代の経済においては労働はもはや唯一の生産要素ではなく、「こうした事態のもとでは、労働の全生産物はつねに労働者に属するとはかぎらない」(WN, p. 49. 大河内訳〈I〉, 84ページ)、ということは明らかである。もちろんこのことは、諸財貨のあるストックを我々が所有することに基づく支配される労働は、資本と土地の貢献にたいしてなされなければならない斟酌のゆえに、つねに、それらの諸財貨に体化されている(直

接) 労働を上回らざるをえない、ということの意味しているのである。要するに、体化された労働と支配される労働とのあいだの均等性ということは、原始的な(物々交換の)経済に妥当するものであって、他のいかなる経済にも妥当するものではない、と思われるということなのである。しかしながらスミスは、この真理を認めることが彼の第二の帰結——すなわち、所得の実質価値は、その所得を得た人がその所得で購買または支配できる(労働単位で測った)他人の労働の生産物によって確定されなければならない、という帰結——になにか損傷を与えることになるとは考えなかったのである。Skinner [1970], pp. 50-51. (Skinner [1970\*], pp. 50-51.) 邦訳, 107-108ページ。

(7) 本章の前出注4を参照せよ。

(8) Skinner [1970], p. 51. (Skinner [1970\*], p. 51.) 邦訳, 108-109ページ。

(9) Skinner [1970], p. 51. (Skinner [1970\*], p. 51.) 邦訳, 109ページ。なお、以上でみてきたようなスキナーの所論は、若干の部分的差異を伴いつつも、1979年のスキナーの著書 Andrew S. Skinner, *A System of Social Science: Papers Relating to Adam Smith* (Oxford: Clarendon Press, 1979) の第7章中にも示されている。また、スキナーのその著書については邦訳として、田中敏弘、橋本比登志、篠原久、井上琢智訳『A.S. スキナー アダム・スミスの社会科学体系』(未来社, 1981年)があるが、以上のような形でスキナーの所論を示すにあたってはこの邦訳も参考にさせていだいた。

(10) Skinner [1970], p. 51. (Skinner [1970\*], p. 51.) 邦訳, 109ページ。

(11) Skinner [1970], pp. 90-91n. 28. (Skinner [1970\*], pp. 90-91n. 28.) 邦訳, 112-113ページ注28。なお、スキナーは、その注のなかでさらに、以上の問題については、『国富論』第1篇の第5章と第11章を結びつけて読むべきこと、および、我々が本書の「38」, 「M. ブラウグ (1962年)」で取り扱った M. ブラウグ (M. Blaug) の著書 (ただし、スキナーのあげているのは初版の pp. 48-52) を参考にすべきことを、指示している。

なお、所得の実質価値をいかなる一時点においてもまた通時的にも確定しうるような唯一の安定的な基礎としての労働単位にたいするスミスの擁護という形で示されてきた以上(II-6)でみてきたスキナーの見解は、必ずしも、明らかなものとは思えないのであるが、おそらくそこではスキナーは以下のようなことを言っているであろう。

A: 異時点間の実質所得水準を比較しようとする場合にはある安定的な測定単位を用いることが必要である。スミスの見解では、労働の不効用は通時的に不変であるという意味で、労働単位のみが安定的な測定単位であるのであった。所得の実質価値は、その所得によって購買しうところの、労働単位で測った諸財貨の量によって、その所得が労働単位何単位に相当する諸財貨を購買しうるかということによ

って、結局のところ、その所得が支配することのできる労働単位数によって、確定されるのであり、異時点間の実質所得水準の比較は、それぞれの時点における所得が支配しうる労働単位数の比較によって、なされるのであった。

B：このように、スミスの議論では、所得の実質価値の確定、異時点間の実質所得水準の比較は労働単位を用いてなされることになるのであるが、スミスはさらに、通時的に労働に対する支配力が安定している事物、通時的にある安定的な量でもってある安定的な労働単位数を支配しうる事物を、問題にしている。これは事実上、労働単位1単位当りに支払うべき報酬すなわち個人をして労働に伴う不効用を忍ばせるために（「自分の安楽と幸福とを放棄」させるために）必要な報酬としての賃金単位の問題に関係をもつ。ところで、通時的に労働に対する支配力が安定している事物、通時的にある安定的な量でもってある安定的な労働単位数を支配しうる事物ということは、通時的にある安定的な量でもって労働単位1単位を支配する事物ということとなり、この意味で、その事物は、通時的に不変な不効用を伴う労働1単位を支配するのに必要な報酬としての賃金単位の大きさそのものを通時的に安定的なものにする事物ということになる。したがってまた、この事物の量で示された所得の通時的な増減は、この事物の量で示された所得をこの事物の量でその大きさが示される安定的な大きさの賃金単位で割ることによって算出される労働単位数つまり労働単位数で示された所得の大きさ・所得の支配しうる労働単位数・所得の実質価値の大きさ・所得の実質水準の通時的な向上、低下を、安定的に、比例関係を保ちつつ、反映することとなる。なお、スミスは、以上のようなことを可能にさせる事物の候補として貨幣と賃金財（穀物）をとりあげるのであるが、彼によれば、短期については貨幣が、長期については賃金財（穀物）が適している、とされるのであった。そしてそこでのスミスの論理はつぎのようなものであった。

〔B：短期：賃金財（穀物）〕：スミスによれば、短期（数年間）では、労働者の実質賃金は経済成長率とともに変化しがちである、とされるのであった。それゆえ、等量の賃金財（穀物）は安定的な労働単位数を支配することができず、等しい労働単位数が安定的な量の賃金財（穀物）によって支配されない。このような場合には、通時的に不変な不効用を伴うものとしての労働の1単位を支配する賃金財（穀物）の量、この意味での賃金財（穀物）の量で示された賃金単位の大きさは、通時的には不安定なものとなる。したがってまたこのような場合には、賃金財（穀物）の量で示された所得のこの期間をつうじての増減は、そのまま、支配しうる労働単位数で示されるものとしての所得の実質水準のこの期間をつうじての向上、低下と安定的な比例関係を保たない、ということとなる。

〔B：短期：貨幣〕：それにたいし、スミスによれば、短期では、貨幣の価値は安定的、つまり、等量の貨幣は安定的な労働単位数を支配しうるものであり、等しい労働単位数が安定的な量の貨幣によって支配されるのであった。このような場合に

は、1労働単位を支配する貨幣の量、この意味での貨幣タームで表された賃金単位は、通時的に安定的な大きさのものとなる。したがってまたこのような場合には、貨幣の量で示された所得のこの期間をつうじての増減は、安定的な比例関係を保ちつつ、労働単位数で示されるものとしての所得の実質水準のこの期間をつうじての向上、低下を反映することとなる。〔ただし、短期では賃金の諸財貨に対する購買力という意味での実質賃金が増減しがちであるとすれば、短期においては貨幣タームでの所得の通時的な増減は労働単位タームでの所得の通時的な増減と安定的な比例関係をとるとしても、後者の意味での所得の通時的な増減と所得で購買しうる諸財貨の量の通時的な増減とは、安定的な比例関係をとらないことになる。〕

〔B：長期：賃金財（穀物）〕：他方、スミスによれば、長期では賃金は生存費水準に向かう傾向がある、とされるのであった。それゆえ、等量の賃金財（穀物）は安定的な労働単位数を支配することができ、等しい労働単位数が安定的な量の賃金財（穀物）によって支配される。このような場合には、1労働単位を支配する賃金財（穀物）の量、この意味での賃金財（穀物）タームで表された賃金単位は、通時的に安定的な大きさのものとなる。したがってまたこのような場合には、賃金財（穀物）の量で示された所得のこの期間をつうじての増減は、安定的な比例関係を保ちつつ、労働単位数で示されるものとしての所得の実質水準のこの期間をつうじての向上、低下を反映することとなる。

〔B：長期：貨幣〕：それにたいし、スミスによれば、長期では貨幣はその本位貨の品質低下（悪鑄）によってであれアメリカの鉱山の発見のような諸発見の結果によってであれその価値が増減しやすい、つまり、等量の貨幣は安定的な労働単位数を支配することができず、等しい労働単位数が安定的な量の貨幣によって支配されないのであった。このような場合には、通時的に不変な不効用を伴うものとしての労働の1単位を支配する貨幣の量、この意味での貨幣タームで表された賃金単位の大きさは、通時的に不安定なものとなる。したがってまたこのような場合には、貨幣の量で示された所得のこの期間をつうじての増減は、そのまま、支配しうる労働単位数で示されるものとしての所得の実質水準のこの期間をつうじての向上、低下と安定的な比例関係を保ちもしない、ということとなる。〔なお、長期においてはうえてみた意味での実質賃金が安定的であるとすれば、長期では、貨幣タームでの所得の通時的な増減はそのまま労働単位タームでの所得の通時的な増減と安定的な比例関係をとらないとしても、労働単位タームでの所得の通時的な増減と所得で購買しうる諸財貨の量の通時的な増減とは、安定的な比例関係をとることとなる。〕

以上のような意味で、スミスの議論では、貨幣タームで表された賃金単位は短期では適当と考えられ、長期では賃金財（穀物）タームで表された賃金単位が適当と考えられており、そして、貨幣単位、穀物単位の有用性は否定されていないのである。スミスは、そのようなものを用いることによってその量が算出されることに

#### 47. A. S. スキナー (1970年)

なる労働単位こそが比較の基礎となりうる唯一の普遍的で不変な標準であると考えているのであり、そしてその理由は、労働はこうむる不効用ということからみてつねに安定的なものである、ということであったのである。

C：このようにスミスの議論では、労働の不効用は通時的に不変であると考えられており、そしてそのことが労働単位を唯一の普遍的で不変な標準とすることの根拠となっているのであるが、スミスはまた、様々な労働には様々な程度の不効用が伴うということに気付いていた。すなわち、スミスは、様々な労働の各々それ自体は通時的に不変な不効用を伴うのではあるが、それら様々な労働相互間にあっては、それらの伴う不効用の程度は互いに異なったものでありうる、と考えていたのである。そして、このような労働に伴われる不効用の相違ということを認めたうえでなお労働単位を標準とするためには異なった程度の不効用を伴う労働の単位数のある標準的な労働の単位数に換算することが必要になるのであるが、この問題にたいしてスミスは、伴われる労働の不効用の相違は市場の「かけひきや交渉」によって確立される貨幣賃金格差に反映されるのであり、この貨幣賃金格差の割合にしたがって様々な程度の不効用を伴う労働の単位数を、普通労働の単位数で表現することができる、と考えたのである。

なお、スキナーが参考にするよう指示し、また我々が本書の「38」でみたブラウグの研究では、スミスは、労働の不効用は異場所間、異時点間において不変であるとするのであるがスミスはまた事実上、「市場のかけひきや交渉」、市場での競争をつうじて、異質労働の問題を克服しつつ成立する1時間の普通労働に伴う(不変の)不効用を反映する1時間の普通労働に対して支払われる貨幣賃金率としての代表的な賃金単位を設定できたはずである、とされるとともに、そのスミスの議論での実質所得の測定、その異時点間の比較は、その時々々の貨幣タームでの所得がその時々々に市場において成立しているうえのような賃金単位のどれだけに相当するか、その時々々の所得がどれだけの量の普通労働を支配しうるかということを確定することによってなされる、ということになる、とみられ、さらに、スミスはまた事実上「賃金単位を表現するための安定的な物差しを選ぶという問題」に注意を向け、その問題との関連で銀(貨幣)、穀物に論及した、とみられたのであるが(なお、スミスのその論及についての Blaug [1962] に示されるブラウグの議論も理解の困難なものであったのであるが、ブラウグのその議論についての本書で試みられた把握については、本書前出「38」の、(Ⅱ)の④、注9、「覚書」第4パラグラフを見よ)、そのブラウグの研究ではまた、スミスの議論における実質所得の測定、その異時点間の比較そのものは、うえでみられたように、その時々々の貨幣タームでの所得をその時々々に市場において成立している(貨幣タームでの)代表的な賃金単位で割ることによってなされる、ということになっていたのであり、そしてまたそのブラウグの研究では、スミスは事実上、異時点間および異場所間において労働の不効用は

不変であると仮定することにくわえて、(諸財貨に対する購買力という意味での) 実質賃金率は通時的に不変でしかもその実質賃金率は不変の労働不効用を表すということを暗黙裡に仮定していた、とみられていたのであった。したがってそこではまた、うえでみた意味での賃金単位を用いて確定される所得の通時的な増減は、所得の支配しうる普通労働の労働不効用の量の通時的な増減とだけでなく所得の購買しうる諸財貨の量の通時的な増減とも、安定的な比例関係を保つ、ということになるのである。

## A. S. スキナー (1970年) についての覚書

スキナーは、『国富論』におけるスミスの価値・価格分析に言及するさいその議論を、第1篇第5、第6章にその主要な部分が示されているものとしての価値論に関する議論と、第6、第7章にその主要な部分が示されているものとしての価格とその決定因に関する議論からなるものとして把握し、さらに、前者の議論は、諸財貨間の交換比率を決定する諸力に関する問題と、個人によって生産された諸財貨の総ストックの価値を測定し他人との諸財貨の交換において使用される手段ということに関係する問題とを、取り扱い、しかも、これらの異なるものではあるが関連のある二つの問題が取り扱われるさいに「交換価値 (exchangeable value)」というただ一個の用語が用いられており、そしてこのことがスミスの議論を幾分あいまいにしている大きな理由である、とするのであった。

そして、スキナーによれば、個人によって生産された諸財貨の総ストックの価値を測定し他人との諸財貨の交換において使用される手段ということに関係する問題を取り扱うさいスミスは、そのような諸財貨の総ストックの実質価値はそれが支配することができたそれと交換に受け取られる、労働単位のタームで示された諸財貨の量によって測定されなければならないとして、つぎのような議論を展開した、とされるのであった。すなわち、スミスは、個人はただ一種類の生産物を生産するとともに労働が唯一の生産要素であって労働の生産物がすべてその労働の行使者に属しそして諸財貨の交換比率がそれらの諸財貨に体化された労働の割合に等しくなる原始的な物々交換経済といった分析上の装置を用いて、そのような経済では体化された労働はそれと等しい量の労働を支配するということを示し、そしてそのような議論の助けを受けつつ、個人が自分の生産物を他人の生産物と交換することによ

って自分の必要を満たすことのできるその程度はその個人が交換において受け取る、労働単位で測った他人の産出物の量〔結局、支配しうる労働量〕によって確定されるべきであるといった事実上諸個人の経済的厚生を測定するための一方法を、提案し、しかもスミスは、体化された労働量が支配しうる労働量と等しくなるのはうえのような物々交換経済においてのみであるがこのような測定方法は近代の経済にもあてはまる普遍的な妥当性（ヨリ広範な妥当性）をもつものと考えた、そしてスミスはさらにこのような論拠に基づいて、支配しうる労働量によって確定されるものとしての所得の実質価値（実質所得）を、貨幣タームで評価されるものとしての所得の名目価値（貨幣所得）から区別するのであった、というのである。

なお、スキナーによれば、スミスはすべての時点における所得の実質価値の確定を可能にするとともに異時点間の実質所得水準の比較を可能にする唯一の普遍的で不変な標準として事実上、労働単位を主張したのであるが、スミスがそうにしたことの理由は、労働の不効用は通時的に不変であるということであったのであり、そこでの労働単位は不効用の観点から述べられているものであって、直接的に人時（man hours, 延べ労働時間）の観点から述べられているものではない、とされるのであった。

他方スキナーは事実上、スミスの議論からすれば、短期については、貨幣の労働購買力の短期における安定性のゆえに、1労働単位を支配する貨幣の量、この意味での、1労働単位を支配するのに必要な報酬としての貨幣タームで表された賃金単位は通時的に安定的な大きさのものとなり、貨幣の量で示された所得の増減は、その貨幣タームでの所得を貨幣タームでの賃金単位で割ることによって算出される「支配しうる労働単位数」で示された所得の増減（所得の実質水準の向上、低下）を安定的な比例関係を保ちつつ反映するということとなり、また、長期については、賃金財（穀物）の労働購買力の長期における安定性のゆえに、1労働単位を支配する賃金財（穀物）の量、この意味での、1労働単位を支配するのに必要な報酬としての賃金財（穀物）タームで表された賃金単位は通時的に安定的な大きさのものとなり、賃金財（穀物）の量で示された所得の増減は、その賃金財（穀物）タームでの所得を賃金財（穀物）タームでの賃金単位で割ることによって算出される支配しうる労働単位数で示された所得の増減を安定的な比例関係を保ちつつ反映するということになるのであり、この意味でスミスの議論では事実上、短期で



は貨幣タームで表された賃金単位、長期では賃金財（穀物）タームで表された賃金単位が適当と考えられているとともに、貨幣単位、穀物単位の有用性は否定されているわけではないのである、とみているように思えるのであった。〔なお、スキナーは、スミスの議論では短期においては実質賃金は変化しがちであるのにたいし長期においては賃金は生存費水準に向かう傾向がある（長期的には実質賃金は安定的である）とされている、とするのであった。したがって、ここでの実質賃金の大きさは賃金の諸財貨に対する購買力の大きさと解することができる。ところで、もしこの実質賃金の異時点間における変化によって1労働単位に支払われる賃金の諸財貨に対する購買力が異時点間において変化するならば、逆にいえば、異時点間において諸財貨の等量が等しい労働単位数を支配しえないならば、所得によって購買しうる諸財貨の量そのものの増減と、その所得によって購買しうる・労働単位のタームで示された諸財貨の量——その所得の支配しうる労働単位数——の増減とは、安定的な比例関係をとらないことになり、うえて理解されたようなものとしてのスミスの議論からすれば短期についてはこういうことが生じがちということになるのであるが、スキナーはこの問題にはとくに言及してはいないのであった。〕

また、スキナーは、スミスが市場の「かけひきや交渉」ということに言及したのは、様々な労働に伴う不効用の相違ということを克服して異なった程度の不効用を伴う労働の単位数を普通労働の単位数に還元するという問題に関してであったのであり、そしてスミスはその還元は市場の「かけひきや交渉」によって確立される貨幣賃金格差によって示される割合にしたがってなされうると考えた、とみるのであった。

## 48. H. W. スピーゲル (1971年)

1971年に刊行された H. W. スピーゲル (H. W. Spiegel) の一著書 (Henry William Spiegel, *The Growth of Economic Thought*, Durham, N. C.: Duke University Press, 1971 [2nd edition (revised and expanded) 1983; 3rd edition 1991]). 以下, 1971年の上掲書を Spiegel [1971] と略記し, また, それと同じ刊行機関から出された第2版と第3版をそれぞれ Spiegel [2nd ed.], Spiegel [3rd ed.] と略記することとする) のなかでスピーゲルは, スミスは分業→交換→商業的社会→交換手段としての貨幣へと議論をすすめたのち交換価値についての議論へとすすみ, 使用価値と交換価値との価値のパラドックスに言及したのち直ちに交換価値の研究へ向かった, とし,<sup>(1)</sup>そして, スミスの交換価値についての議論に関連してつぎのような見解を示している。

① スミスは, 一方で, 財貨の交換価値はその財貨が市場において支配することのできる労働量によって決定される (determined) という意味での労働価値説を展開している。<sup>(2)</sup>なお, スミスの議論には, 支配される労働 (labor commanded) という観点からのこの価値学説と並んで, 労働苦痛という観点からの一価値学説である一つの「真実の費用」価値説 (a “real-cost” theory of value) が出現しているのであるが, この価値学説から, 前者の価値学説が導き出されているように思える。すなわち, 財貨の所有者はそれらの財貨を交換することによって, 彼が交換において獲得するものを生産するためにみずから働くという苦痛を回避することができるがゆえに, それらの財貨は, 交換においてそれらの財貨が支配する労働という価値をもつ,<sup>(3)</sup>というのである。<sup>(4)</sup>

② したがって, すべての交換可能な商品の「真実 (real)」価値あるいは「自然」価値は, 支配される労働という観点から測定される (measured) のである。しかしながら, 異なるタイプの労働には異なる程度の辛さや巧妙さが伴うため, 労働は一つの等質的な量たりえない。それゆえ労働とは正確に測定することはできないものであり, したがって労働は, 財貨の価値を一般的に評価する公分母とし役立ちえないということになるのであるが, その代

わり、「労働のそのような相違という問題については、」「正確ではなくても日常生活の業務を処理してゆくには十分なおおよその同等性を目安にして、市場のかけひきや交渉によって」(WN, p. 31. 大河内訳〈I〉, 55ページ)調整が行われるのである。このように、市場価格は支配される労働によって説明され、そして、支配される労働が市場価格によって説明されるのであり、これは、スミスの思想の解釈者たちが循環論法として批判してきたある種の論法の一例を示すものである。<sup>(5)</sup>

③ 貨幣の介在が、財貨の価値の評価ということを、労働という基準からさらに遠ざけてしまう。費やされる労働 (labor expended) という観点からは等量の労働はつねに同一の価値あるいは同一の「真実価格 (real price)」をもつ、しかし、貨幣の価値は変動にさらされるのであって、貨幣のタームでの労働の「名目価格」および諸商品の「名目価格」も、変動にさらされるのである。このように、諸商品と同様に労働も、真実価格と名目価格をもつのである。<sup>(6)</sup>

④ なお、スミスによる労働価値説の展開においては、労働は、ときとして支配される労働として解され、またあるときには、費やされる労働あるいは労働費用 (labor cost) として解されている。これにくわえて、社会が進歩するにつれていっそうの複雑化が存在することになる。というのは、スミスは、そのばあいには労働が価値の唯一の決定因 (determinant) ではなくなるということ、そして、労働、土地および資本の助けをもって生産される財貨の価格は、労働に対する収入だけでなく資本や土地に対する収入をも含むということを、認めるからである。すなわち、スミスは、「資本 (stock) の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態のもとにおいては、種々の物の獲得に必要な労働量のあいだの比率が、これらの物を相互に交換するにあたっての原則 (rule) を提供しうる唯一の事情であると思われる。たとえば狩猟民族のあいだで、1匹のビーバーを仕留めるのに、1頭の鹿を仕留める労働の2倍がふつう費やされている (cost, かかっている) とすると、ビーバー1匹はとうぜん、鹿2頭と交換される、すなわち、鹿2頭に値することになるであろう。……／……／……／こうした事態にあっては、労働の全生産物は労働者に属する」(WN, p. 47. 大河内訳〈I〉, 80-82ページ。／は原典において行変えが行われていることを示す)、しかし、資本 (capital) が生産プロセスにおいて使用されるようになりまた土地が私有財産になると財貨の価

格は賃金、利潤および地代に分解する、とするのである。かくしてスミスの労働価値説は、一つの生産費説へと変ずることとなるのである。<sup>(7)</sup>

(注)

- (1) Spiegel [1971], p. 248. (Spiegel [2nd ed.], p. 248. Spiegel [3rd ed.], p. 248.)
- (2) このことを示すものとしてスピーゲルはスミスのつぎのような文章を引用している。「人が富んでいたり貧しかったりするのには、人間生活の必需品、便益品および娯楽品をどの程度享受できるかによる。だが、分業がひとたび徹底的に行きわたるようになったあとは、一人の人間が自分の労働で充足できるのは、このうちのごく小さな部分にすぎない。彼は、その圧倒的大部分を他の人々の労働に仰がなければならないのであって、彼は、自分が支配できるその労働の量、または自分が購買することのできるその労働の量に応じて、富んでいたり貧しかったりするにちがいない。したがって、およそ商品の価値は、それを所有していても自分では使用または消費しようとはせず他の商品と交換しようと思っている人にとっては、その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しい。それゆえ、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である。」(WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ。) Spiegel [1971], p. 248. (Spiegel [2nd ed.], p. 248. Spiegel [3rd ed.], p. 248.)
- (3) スミスがこのような考えを表しているものとして、スピーゲルは、本章前出注2でみた『国富論』の文章の直後に続くつぎのような文章を引用している。「あらゆる物の真実価格 (real price), すなわち、あらゆる物がそれを獲得しようとする人にとって真に費やさせる (cost) ものは、それを獲得するための労苦と骨折りである。あらゆる物が、それを獲得してしまった人にとって、またそれを売りさばいたり他のなにかと交換したりしようと思う人にとって、真にどれほどの値打ちがあるかといえ、それによって彼自身がはぶくことができ、またそれによって他の人々に課することのできる労苦と骨折りである。貨幣または財貨でもって買われるものは、我々が自分の肉体の労苦によって獲得するものと全く同じように、労働によって購買されるのである。その貨幣、またはそれらの財貨は、事実、この労苦を我々からはぶいてくれる。それらはある一定量の労働の、価値を含んでおり、その一定量の労働の、価値を我々は、そのときそれと等しい量の労働の、価値を含んでいるとみなされるものと、交換するのである。労働こそは、すべての物に対して支払われた最初の代価、本来の購買貨幣であった。」(WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52-53ページ。) Spiegel [1971], pp. 248-249. (Spiegel [2nd ed.], pp. 248-249. Spiegel [3rd ed.], pp. 248-249.)
- (4) Spiegel [1971], pp. 248-249. (Spiegel [2nd ed.], pp. 248-249. Spiegel [3rd ed.], pp. 248-249.)

- (5) Spiegel [1971], p. 249. (Spiegel [2nd ed.], p. 249. Spiegel [3rd ed.], p. 249.)  
(6) Spiegel [1971], p. 249. (Spiegel [2nd ed.], p. 249. Spiegel [3rd ed.], p. 249.)  
(7) Spiegel [1971], pp. 249-250. (Spiegel [2nd ed.], pp. 249-250. Spiegel [3rd ed.],

pp. 249-250.) なお、スピーゲルによれば、このスミスの議論のなかには、ときとして土地と資本は労働と調和的に機能させられる生産要素としてあらわされるとともにまたあるときには土地や資本への収入が労働の生産物からの控除分としてあらわされるという相反する二つの考え方の併存といったことが含まれていた、とされる。Spiegel [1971], p. 250. (Spiegel [2nd ed.], p. 250. Spiegel [3rd ed.], p. 250.)

なお、スピーゲルは、以上でみてきた彼の見解を、彼の著書の第11章のなかの「労働価値説 (The Labor Theory of Value)」という表題の付された節のなかで示している。スピーゲルは、どちらかといえばスミスの議論における「価値の決定の問題」と「価値の測定の問題」といったことは問題にすることなく、以上でみてきたようなものとしての労働の観点からの交換価値についてのスミスの議論を、スミスの「労働価値説」としている、といえる。

なお、スピーゲルは以上の議論につづけて、「自然価格 (The Natural Price)」という表題のもとに、さらに、「自然価格」、「市場価格」に関するスミスの議論を取り扱おうとしている。それについては、Spiegel [1971], p. 250 (Spiegel [2nd ed.], p. 250, Spiegel [3rd ed.], p. 250) を見よ。

## H. W. スピーゲル (1971年) についての覚書

スピーゲルは、スミスの議論における「価値の決定の問題」と「価値の測定の問題」といったことはことさら問題にすることなしに、交換価値についてのスミスの議論を取り扱うのであった。

そして、スピーゲルによればまず、スミスは彼の議論の一方において、同じく彼の議論に存在する一つの「真実の費用」価値説（労働苦痛という観点からの一価値学説）といえるものから導き出されているように思えるところの、「支配される労働」という観点からの価値学説としての労働価値説を展開し、すべての交換可能な商品の「真実」価値は「支配される労働」という観点から決定・測定されるとしている、とされるのであった。ただし、スピーゲルによれば、様々な労働のあいだには質的な相違があるために労働の量を正確に測定することは不可能であるという点で労働は価値の評価のための一般的公分母たりえないという問題があるのであるが、この問題にたいしてスミスは「市場のかけひきや交渉」による調整ということを持ち出している、だがそれは、市場価格を「支配される労働」によって説明しそしてその「支

配される労働」を市場価格によって説明するといった循環論法である、とされるのであった。さらにまたスピーゲルは、スミスの議論では労働による財貨の価値の評価といったことは貨幣の介在ということによってさらに後退させられることとなっている、とみるのであった。

なお、スピーゲルによれば、「労働」の観点からのスミスによる交換価値についての議論では、その「労働」はときとして、うえのように「支配される労働 (labor commanded)」という意味合いを持たされているとともにまたあるときには、「費やされる労働 (labor expended)」あるいは「労働費用 (labor cost)」という意味合いを持たされている、とされるのであった。スピーゲルは、「費やされる労働」という用語と「労働費用」という用語を同義のものとして使用し、「費やされる労働」あるいは「労働費用」の観点からの交換価値についてのスミスの議論も、「支配される労働」の観点からのスミスの議論とともに、「スミスの労働価値説」として捉えるのであった。

そしてまたスピーゲルによれば、スミスの議論では、資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態においては「労働」は価値の唯一の決定因ではあるが資本の蓄積と土地の占有の行われる社会状態では「労働」は価値の唯一の決定因ではなくなる、ということになっているのであり、そしてそのような社会状態についてはスミスは事実上、賃金と利潤と地代という観点から交換価値についての議論を展開しようとしたのであって、そこでは、スミスの「労働価値説」は一つの「生産費説」へと変ずることとなっている、とみられるのであった。ただし、スピーゲルによれば、スミスはそのさい、一方で土地および資本を、労働と結合して生産を編成する労働とならぶ生産要素として、取り扱うとともに他方で土地や資本にたいする収入を、労働の生産物からの控除分として取り扱うといった相反する二つの考え方を併存させてはいる、とみられるのであった。

## 49. M. ドップ (1973年)

1973年にその上製版が刊行された M. ドップ (M. Dobb) の一著書 (Maurice Dobb, *Theories of Value and Distribution since Adam Smith: Ideology and Economic Theory*, Cambridge, etc.: Cambridge University Press, 1st paperback edition, 1975; © 1973 [first published 1973]). なお、ここでは上掲のペーパー・バック版を使用するのであるが、ここで取り扱うドップの研究の発表年の区分については、上掲書の著作権が成立し最初の上製版が同じ刊行機関から出された年、1973年をとり、そして、以下では、上掲ペーパー・バック版を、Dobb [1973]と略記することとする。岸本重陳訳『価値と分配の理論』[1973年上製版の邦訳]、新評論、1976年)のなかでドップは、つぎのような見方を示している。

① 『国富論』第1篇の第5章と、第6章の冒頭のところとの両方に、一つの労働自然価値説 (a labour theory of natural value) を示唆するものが存在することはたしかである。しかし、第5章でスミスが関心を払っているのは、価値の原因 (cause), ないし「原則 (rule)」(すなわち、原理 principle) ではなくて、それでもって諸商品の価値およびその変化が的確に評価されうところの測定の標準なのである。価値の原因ないし「原則」(すなわち、原理) と価値測定の標準というこれら二つのものは、当時の考え方では密接に結びついていたけれども、またとくに後者は、前者に対する鍵とみなされていたけれども、それらは、別個の、したがって分離することのできる問題なのである。ここでスミスの直接の関心事となっているのは、後者であって前者ではなかった<sup>(1)</sup>のである。<sup>(2)</sup>

② スミスは、商品の交換価値は「それと交換に入手できる、労働の量かまたは他のある商品の量によって評価されるよりも、貨幣の量によって評価される場合が圧倒的に多い」(WN, p. 32. 大河内訳〈I〉, 56ページ)ということを読めたとはいえず、さらに、貨幣は金や銀を採鉱するのにかかる労働の量の変化に応じて、それ自体変化するものである(チューダー王朝期の大インフレーションを見よ)ことを指摘し、貨幣は正確な尺度ではありえな

<sup>(3)</sup> い、とする。<sup>(4)</sup>

③ スミスは、このように貨幣を退け、唯一可能な標準として労働に依拠する。そうすることにたいして彼が与えている理由は、あるいは、マーシャル的な用語に翻訳して次のように言うことができよう。すなわち、それは、労働が経済活動に伴われる究極的な真実の費用 (real cost) <sup>(5)</sup> であり、したがって、貨幣商品としての貴金属をふくめてすべての商品の変動する価値がそれをタームとして測定されうる唯一の満足すべき標準であると主張しているに等しい、と。<sup>(6)</sup>

④ ところでスミスは、第5章のある箇所では、商品の生産にかかる (cost) 労働の量と、その価格でそういった労働が市場で交換されるであろうそのような価格 (すなわち、マルクス <K. Marx> が労働力の価値ないしは価格と名づけることになったもの) とを、きわめて明確に区別しているようにみえる〔そして、商品の高価や安価は前者のものに沿うとしている〕<sup>(7)</sup> のではあるが、他方でまたスミスは同じ第5章の、冒頭のパラグラフのなかで、「それ〔商品〕で彼が購買または支配できる労働の量」のことを、「あらゆる商品の交換価値の真の尺度」として述べている (WN, p. 30. 大河内訳 I), 52ページ。〔 〕内はドップ) のであり、そしてこのことが、スミスは労働の価格 (支払われる賃金という意味での) とある所与の生産物を生産するために必要とされる (required) 労働の量とを混同しており、したがってスミスは支配労働 (labour-commanded) 標準と投下労働 (labour-embodied) 標準との間で揺れ動いている、というリカードウの批判の根拠をなすこととなったのであった。<sup>(8)</sup>

⑤ なお、たしかに、この支配労働という概念は、標準 (standard) あるいは尺度 (measure) という脈絡のなかでは、「価格の一構成部分」という意味での価値の一原因としての賃金という概念に対応するものとみなすこともできよう。<sup>(9)</sup> そして、のちにリカードウとマルサス (T. R. Malthus) とのあいだで鋭く論議されることとなった支配労働と投下労働というこの二つの対照的な尺度は、もしも賃金 (wages) が生産された総価値のなかの割合として不変のままである (このことは、賃金の経時的な変化 <wage-changes over time> が労働生産性の変化と比例しているということを意味する) ならば (しかし、このときにのみ)、明らかに同じ結果を生み出すであろう。<sup>(10)</sup><sup>(11)</sup>

⑥ ところで、スミスが、労働のタームでの価値尺度というこの考え方を、



彼によってほめかされている意味のうちのどちらの意味においても、大いに活用したと言うことはできない。すなわち、それは生産物の比率的分割という問題に直接的に関連しているのであるから、たぶんそれは、分配という論題についてのもっと広範な探究という形で、生産物の比率的分割というその問題についてのなんらかの議論へと導くことになる、と期待できるであろう。だが、<sup>(12)</sup> 本当のところを言って、そのようなものを、我々は見いださないのである。

(注)

- (1) このことを示すものとして、ドップは、リカードウ (D. Ricardo) の『経済学および課税の原理』第3版の第1章第6節「不変の価値尺度について」の冒頭に示されているこの二つの問題のあいだの結びつきということに関係するリカードウのつぎのような文章をあげている。「諸商品が相対価値において変動したばあいには、実質価値 (real value) においてどちらの商品が下落しどちらの商品が騰貴したかを確かめる手段をもつことが、望ましいであろう、そしてこのことは、これらの商品を、順次に価値のある不変の標準尺度、すなわち、それ自体は他の商品がこうむる変動をまったく受けてはならない尺度と比較することによってのみ、果たされうであろう。」(Ricardo, *Principles* [ed. Sraffa], p. 43. 堀訳『原理』, 49ページ。) Dobb [1973], p. 82. 邦訳, 101ページ。

なお、実質価値、絶対価値 (absolute value) を測定するものとしての不変の尺度についてのリカードウの議論にたいするドップの検討については、Dobb [1973], pp. 82-84, 邦訳, 101-103ページを見よ。またそこには、そのような純理的な尺度あるいは不変の標準の探求といったことは、現代人にとっては、奇怪なこと、さらに、無意味なこととさえ思われがちであり、そのため、それはときとして、妄想的な問題としてあるいはさもなくばおなじみの「指数問題」が古くさい衣裳をまとったものにすぎないとして退けられる、というドップの指摘が含まれている。

- (2) Dobb [1973], pp. 45, 47. 邦訳, 61ページ, 63-64ページ。
- (3) ドップはつぎのようなスミスの文章を引用している。「人間の足の大きさとか、一尋<sup>ひょう</sup>の長さとか、一握りの量とか、というようなそれ自身の量がたえず変動する量の尺度は、けっして他の物の量の正確な尺度とはなりえない。それと同じように、それ自身の価値がたえず変動するような商品も、他の諸商品の価値の正確な尺度とは、けっしてなりえない。」(WN, pp. 32-33. 大河内訳〈I〉, 57ページ。) Dobb [1973], pp. 47-48. 邦訳, 64ページ。
- (4) Dobb [1973], pp. 47-48. 邦訳, 64ページ。
- (5) スミスが与えている理由として、ドップはつぎのようなスミスの文章を引用している。「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値

49. M. ドップ (1973年)

をもつものと言うことができよう。彼の健康、体力、精神が普通の状態で、また彼の熟練と技能が通常程度であれば、彼はつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一部分を犠牲にしなければならない。……それゆえ、それ自身の価値がけっして変動することのない労働だけが、すべての商品の価値を、時と場所のいかんを問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準である。労働はすべての商品の真実価格 (real price) であり、貨幣はその名目価格であるにすぎない。」(WN, p. 33. 大河内訳 <I>, 57-58ページ。) Dobb [1973], p. 48. 邦訳, 64ページ。

(6) Dobb [1973], p. 48. 邦訳, 64-65ページ。

(7) このことを示すものとして、ドップは、つぎのような、本章前出注5でみた一節と同一パラグラフに含まれるスミスの文章、および、その直後のパラグラフでのスミスの文章を、引用している。「彼〔労働者〕が支払う代価は、それと引き換えに彼が受け取る財貨の量がどうであろうと、つねに同一であるにちがいない。なるほど、その労働は、より大きい分量のこれらの財貨を購入することもあれば、より小さい分量のこれらの財貨を購入することもある。だが、変動するのは、それらの財貨の価値であって、それらを購入する労働の価値ではないのである。時と場所のいかんを問わず、得がたいもの、すなわち獲得するのに多くの労働が費やされる (cost) ものは、高価であり、また容易に入手できるもの、すなわちわずかな労働で入手できるものは、安価である。」(WN, p. 33. 大河内訳 <I>, 57-58ページ。〔 〕内はドップ。)[「しかしながら、等量の労働は、労働者にとってはつねに等しい価値をもつものではあるが、労働者を雇用する者にとっては、比較的大きい価値をもつようにみえることもあれば、比較的小さい価値をもつようにみえることもある。雇い主は等量の労働を、あるときには比較的多量の、またあるときには比較的小量の財貨で買うのであって、雇い主にとっては、労働の価格は、他のすべての物の価格と同じように変動するように思われる。……けれども実は、財貨が、前者の場合に安価であり、後者の場合に高価であるのである。」(WN, p. 33. 大河内訳 <I>, 58ページ。) Dobb [1973], pp. 48-49. 邦訳, 65ページ。

(8) Dobb [1973], p. 49. 邦訳, 65-66ページ。ドップはリカードのつぎのような文言を引用している。スミスは「交換価値の根源をこのように正確に定義した」のだけれども、彼は「みずから別の価値の標準尺度をたてた、……対象物の生産に投下された (bestowed) 労働の量ではなくて、それが市場において支配しうる労働の量という標準尺度である、あたかもこれら二つの表現が同意義のものであるかのよう」(Ricardo, *Principles* [ed. Sraffa], pp. 13-14. 堀訳『原理』, 16ページ。) Dobb [1973], p. 49. 邦訳, 66ページ。

(9) なお、ドップによれば、このような賃金の概念は、穀物が(賃金財として)他のすべての商品の価格の形成のうえで支配的な役割を果たすということに関する彼の系的議論 (corollary) の根拠として、スミスが採用したものであった、とされる。Do-

bb [1973], p. 49. 邦訳, 66ページ。

- (a) このことについてのドップの説明については, Dobb [1973], pp. 49-50n. §, 邦訳, 330ページ注32を見よ。なお, そこでのドップの説明は, いま本文でみたことの説明としてはつぎのような形で示すこともできるであろう。

ここでは, 二つの期における, ある一定量の穀物の, 支配労働と投下労働という二つの尺度によって測られる価値, といったことを例にとって考えてみることにしよう。いま, 第1期および第2期の各々においてある一定の等しい量の穀物が生産される, とする。そして, その一定量の穀物を  $\bar{X}$ , 第1期においてその一定量の穀物のうちその生産に労働を投下した労働者の分け前となる穀物量部分を  $W_1$ , 第2期におけるそれを  $W_2$  で示し, 第1期における穀物タームでの労働1単位当たり賃金としての賃金率を  $w_1$ , 第2期におけるそれを  $w_2$  で示し, また, 第1期における労働1単位当たり穀物生産量 (つまり一定量の穀物  $\bar{X}$  の生産における労働生産性) を  $x_1$ , 第2期におけるそれを  $x_2$  で示す, としよう。

そしていま, 第1期においては,  $\bar{X}$  の生産に労働を投下した労働者は  $\bar{X}$  という生産物からその分け前を受け取るのであるがその分け前は  $\bar{X}$  のすべてではなかった, つまり, 穀物タームでの賃金率 ( $w_1$ ) と  $\bar{X}$  の生産に投下された労働量との積である  $W_1$  が, 労働1単位当たり穀物生産量 ( $x_1$ ) と  $\bar{X}$  の生産に投下された労働量との積である  $\bar{X}$  よりも小さかった, したがって, 穀物タームでの賃金率 ( $w_1$ ) が労働1単位当たり穀物生産量 ( $x_1$ ) よりも小さかった, とする。 ( $0 < W_1 < \bar{X}$ ,  $0 < W_1/\bar{X} < 1$ ,  $0 < w_1 < x_1$ ,  $0 < w_1/x_1 < 1$ ,  $W_1/\bar{X} = w_1/x_1$ )

この場合, 第1期では,  $\bar{X}$  の生産に投下された労働量は  $\bar{X}/x_1$  となり, その量は  $\bar{X}$  の生産に労働を投下した労働者の分け前分となる穀物量部分を穀物タームでの賃金率で割ったもの, つまり,  $W_1/w_1$ , に対応し, 他方,  $\bar{X}$  の支配労働量は  $\bar{X}/w_1$  となり, そして,  $W_1/w_1$  に等しい  $\bar{X}/x_1$  は,  $\bar{X}/w_1$  よりも小, ということになる。つまり,  $\bar{X}$  の投下労働量は,  $\bar{X}$  の支配労働量よりも小さいのである。

さて, つぎに, 第2期においては, 等量の穀物  $\bar{X}$  の生産において労働生産性が変化して労働1単位当たり穀物生産量が変化していた (その変化率を  $\beta$  で示す), だが同時に, その一定量の穀物  $\bar{X}$  にたいする,  $\bar{X}$  のうちの労働者の分け前となる部分  $W_2$  の割合が, もとのままの一定割合 (それを  $r^*$  で示す) に留まっていた (この場合には, 生産される穀物量が  $\bar{X}$  で一定で, そのもとのままの一定割合が  $W_2$  となるのであるから,  $W_2$  の大きさそのものはもとのままの  $W_1$  に等しい), つまり, 労働生産性と同時に賃金率も変化しており (その変化率を  $\alpha$  で示す), しかもそれらは同一率で同一方向に変化しており ( $\beta = \alpha$ , なお,  $\beta, \alpha$ , が  $-1$  あるいは  $-1$  より小, すなわち, 第2期における労働生産性ゼロあるいは負, 第2期における賃金率ゼロあるいは負というのは無意味であるから,  $-1 < \beta$ ,  $-1 < \alpha$ ), 変化後の賃金率の, 変化後の労働1単位当たり穀物生産量にたいする割合も, もとのままの  $r^*$  であった,

49. M. ドップ (1973年)

とする。 $(0 < W_1 = W_2 < \bar{X}, 0 < W_1/\bar{X} = W_2/\bar{X} = r^* < 1, 0 < w_1 < x_1, -1 < \alpha = \beta, 0 < w_1(1+\alpha) = w_2 < x_1(1+\beta) = x_2, 0 < w_1/x_1 = w_1(1+\alpha)/x_1(1+\beta) = w_2/x_2 = r^* < 1)$

この場合、第1期では  $\bar{X}$  に対応する投下労働量は  $\bar{X}/x_1 = W_1/w_1$ 、支配労働量は  $\bar{X}/w_1$  であったのにたいし、第2期では前者は  $\frac{\bar{X}}{x_1(1+\beta)} = \frac{W_2}{w_1(1+\alpha)}$  (ただし  $W_1 = W_2$ )、後者は  $\frac{\bar{X}}{w_1(1+\alpha)}$  へと変化することになるのであり、 $0 < \bar{X}, 0 < w_1 < x_1, -1 < \alpha = \beta, 0 < w_1(1+\alpha) < x_1(1+\beta)$  であるから、第2期においても、 $\bar{X}$  に対応する投下労働量は支配労働量よりも小さい、ということになる。しかしながら、第1期と第2期との間でのそれらの変化率ということについてはつぎのようなことが生じていることになるのである。

すなわち、まず、投下労働量の変化率は、

$$\frac{\frac{\bar{X}}{x_1(1+\beta)} - \frac{\bar{X}}{x_1}}{\frac{\bar{X}}{x_1}} = \frac{-\beta\bar{X}}{x_1(1+\beta)} = -\beta/(1+\beta)$$

つまり、投下労働量は第1期と第2期との間で、変化率 $\beta$ での労働1単位当たり穀物生産物量の変化と逆方向に、 $\beta/(1+\beta)$  の率で変化していることとなり、他方、支配労働量の変化率は、

$$\frac{\frac{\bar{X}}{w_1(1+\alpha)} - \frac{\bar{X}}{w_1}}{\frac{\bar{X}}{w_1}} = \frac{-\alpha\bar{X}}{w_1(1+\alpha)} = -\alpha/(1+\alpha)$$

つまり、支配労働量は第1期と第2期との間で、変化率 $\alpha$ での賃金率の変化と逆方向に、 $\alpha/(1+\alpha)$  の率で変化していることになるのであるが、そのさい、 $-1 < \alpha = \beta$  であるため、変化の方向ということをも含めて、投下労働量と支配労働量の変化率は等しい、ということになるのである。たとえば、労働生産性と賃金率とがともに100%の率で上昇し、第2期においては労働生産性と賃金率とがともに第1期でのものの2倍になっているとすれば  $(x_1(1+\beta), w_1(1+\alpha))$ 、において  $\alpha = \beta = 1$ 、第2期では、 $\bar{X}$  に対応する投下労働量も支配労働量もともに50%の率で減少しており、第1期でのそれらの1/2だけ減少している、ということになるのである(投下労働量の変化については、 $\beta$ が1であるゆえ、 $\frac{-\beta\bar{X}}{x_1(1+\beta)} = \frac{-\beta}{(1+\beta)} \cdot \frac{\bar{X}}{x_1} = -\frac{1}{2} \cdot \frac{\bar{X}}{x_1}$ 、支配労働量の変化については、 $\alpha$ が1であるゆえ、 $\frac{-\alpha\bar{X}}{w_1(1+\alpha)} = \frac{-\alpha}{(1+\alpha)} \cdot \frac{\bar{X}}{w_1} = -\frac{1}{2} \cdot \frac{\bar{X}}{w_1}$ )。つまり、 $\bar{X}$  の価値は、投下労働で測っても、支配労働で測っても、同じ率で変化した、ということになるのである。

これにたいし、いまもし、第2期において、等量の穀物  $\bar{X}$  の生産において労働生

産性が変化して労働1単位当たり穀物生産量が変化し、さらに同時に、 $\bar{X}$ にたいする、 $\bar{X}$ のうちの労働者の受け取った分け前部分  $W_2$  の割合も第1期における割合と異なっていたならば（この場合には、生産される穀物量が  $\bar{X}$  で一定で、その穀物量にたいする労働者の分け前分となる穀物量部分の割合が変化するのであるから、労働者の分け前分にあたる穀物量そのものが変化したこととなり、 $W_1 \neq W_2$  ということとなるのであるが、そのさい、その  $W_2$  の上限は  $\bar{X}$  であるから、 $0 < W_2 \leq \bar{X}$ ，ということとなる），つまり、賃金率と労働生産性とが同一の率で変化せず（ $-1 < \alpha$ ， $-1 < \beta$ ， $\alpha \neq \beta$ ），第2期での賃金率と労働1単位当たり穀物生産量との割合が第1期でのそれと異なっていたならば、（ $0 < W_1 < \bar{X}$ ， $0 < W_1/\bar{X} = r^* < 1$ ， $0 < W_2 \leq \bar{X}$ ， $0 < W_2/\bar{X} \leq 1$ ， $W_1/\bar{X} \neq W_2/\bar{X}$ ， $-1 < \alpha$ ， $-1 < \beta$ ， $\alpha \neq \beta$ ， $0 < w_1(1+\alpha) = w_2 \leq x_1(1+\beta) = x_2$ ， $0 < w_1/x_1 = r^* < 1$ ， $0 < \frac{w_1(1+\alpha)}{x_1(1+\beta)} \leq 1$ ， $\frac{w_1}{x_1} \neq \frac{w_2(1+\alpha)}{x_1(1+\beta)}$ ，ならば、）そのときには、どのようなことになるのか。

この場合にも、第2期では  $\bar{X}$  に対応する投下労働量は  $\frac{\bar{X}}{x_1(1+\beta)} = \frac{W_2}{w_1(1+\alpha)}$ （ただし、 $W_1 \neq W_2$ ），支配労働量は  $\frac{\bar{X}}{w_1(1+\alpha)}$ ，ということになる。しかしここでは、もし変化後の労働1単位当たり穀物生産量と変化後の賃金率とが等しくなるならば（ $0 < x_1(1+\beta) = w_1(1+\alpha)$ ，ならば）——したがって、 $0 < W_2 = \bar{X}$ ，となるならば——、そのときには、第2期では  $\bar{X}$  に対応する投下労働量と支配労働量とが等しいということになり、他方、 $x_1(1+\beta) > w_1(1+\alpha) > 0$ ，のときには——したがって、 $\bar{X} > W_2 > 0$  のときには——、第2期でも  $\bar{X}$  に対応する投下労働量は支配労働量より小、ということになるのである。

では、第1期と第2期との間での  $\bar{X}$  に対応する投下労働量および支配労働量の変化率についてはどうか。ここでも、投下労働量の変化率は  $-\beta/(1+\beta)$ ，支配労働量の変化率は  $-\alpha/(1+\alpha)$ ，となる。しかしここでは、 $-1 < \alpha$ ， $-1 < \beta$ ， $\alpha \neq \beta$  であるため、それらの率は等しくはならないのである。

（変化の方向ということを含めたいうでの、）ある量の生産物の支配労働量の経時的な変化率と投下労働量の経時的な変化率とは、（変化の方向ということを含めたいうでの、）その生産物を生産するさいの労働1単位当たり生産物量としての労働生産性の経時的な変化率（ $\beta$ ）とその生産物の生産に労働を投下する労働者の労働1単位当たり賃金としての賃金率の経時的な変化率（ $\alpha$ ）とが等しい——それゆえ、労働生産性にたいする賃金率の割合（ $w/x$ ）は経時的に不変——とき、したがって、その生産物全量のうちのその生産に労働を投下した労働者の分け前分となる部分としての賃金総額（ $N$  をその投下労働量とすれば、 $w \cdot N = W$ ）が、その生産物全量（ $x \cdot N = X$ ）にたいして、経時的に不変な割合を占める（経時的に  $W/X$  不変）とき、またそのときにのみ、一致するのである。（なお、このように、うえのよう

な条件が満たされるときには——またそのときにのみ——，ある所与の量の生産物の投下労働量の経時的な変化の方向および率と，支配労働量の経時的な変化の方向および率が，一致し，たとえば，そのある所与の量の生産物の投下労働タームでの価値が経時的に50%低下するときには支配労働タームでの価値も50%低下している，ということとなり，したがってまたここでは，ある所与の量の生産物の投下労働タームでの価値および支配労働タームでの価値は経時的に変化しても，それら両価値の間の割合そのものは経時的に一定に留まる，ということになるのであるが，うえのような条件が満たされるときには，もちろん，その生産物の量にかかわらず各時点における各々の生産物量の投下労働タームでの価値と支配労働タームでの価値との間の割合そのものは，経時的に不変なある一定の大きさの値をもつ，ということにはなる。たとえば，先の例を用い，第1期における穀物量を  $X_1$ ，第2期における穀物量を  $X_2$ ，それらを生産するのに投下された労働量をそれぞれ  $N_1, N_2$  とすれば，第1期における投下労働タームでの  $X_1$  の価値は  $X_1/x_1 = (x_1 \cdot N_1)/x_1 = N_1$ ，支配労働タームでの  $X_1$  の価値は  $X_1/w_1 = (x_1 \cdot N_1)/w_1 = (x_1/w_1) \cdot N_1$ ，ただし  $x_1 > 0, w_1 > 0, N_1 > 0$ ，となり，第2期における投下労働タームでの  $X_2$  の価値は  $X_2/x_2 = (x_2 \cdot N_2)/x_2 = N_2$ ，支配労働タームでの  $X_2$  の価値は  $X_2/w_2 = (x_2 \cdot N_2)/w_2 = (x_2/w_2) \cdot N_2$ ，ただし  $x_2 > 0, w_2 > 0, N_2 > 0$ ，となる。そして， $(W_1/X_1) = (W_2/X_2) = r^* \leq 1$ ，言い換えると， $(w_1 \cdot N_1)/(x_1 \cdot N_1) = (w_2 \cdot N_2)/(x_2 \cdot N_2) = r^* \leq 1$ ，したがって， $(w_1/x_1) = (w_2/x_2) = r^* \leq 1$ ，それゆえまた， $(x_1/w_1) = (x_2/w_2) = 1/r^* \geq 1$ ，であるから，第1期における投下労働タームでの  $X_1$  の価値は  $N_1$ ，支配労働タームでの価値は  $(1/r^*) \cdot N_1$ ，第2期における投下労働タームでの  $X_2$  の価値は  $N_2$ ，支配労働タームでの価値は  $(1/r^*) \cdot N_2$ ，ということになる。つまり，第1期第2期をつうじてそれぞれ投下労働タームでの価値と支配労働タームでの価値との割合は  $1 : (1/r^*)$  で一定ということになるのであって，そこでは，どのような時点でのどのような量の生産物についても，その投下労働量と支配労働量との割合自体は一定不変ということになるのである。ただしまたそこでは， $r^* = 1$ ，つまり， $(W_1/X_1) = (W_2/X_2) = 1$ ，したがって， $(w_1/x_1) = (w_2/x_2) = 1$ ，でないかぎり，第1期第2期をつうじてそれぞれ投下労働タームでの価値と支配労働タームでの価値とは等しくはないのであって， $1/r^* > 1$  のとき，つまり， $0 < r^* < 1$  のとき—— $0 < (W_1/X_1) = (W_2/X_2) < 1, 0 < (w_1/x_1) = (w_2/x_2) < 1$ ，のとき——には，第1期第2期をつうじて，それぞれ，支配労働タームでの価値は  $1/r^*$  の率だけ投下労働タームでの価値よりも大きい，ということになるのであり，そしてこの意味では，たとえ前で見られたような条件が満たされていても支配労働と投下労働という二つの尺度は必ずしも，同じ結果を生み出しはしない，ということになる。他方これにたいし，各々の量の生産物の，支配労働タームでの価値の大きさそのものと投下労働タームでの価値の大きさそのものというよりも，支配労働タームでの価値の大きさの経時的な変化の方向および率と投下労働タームでの価値

の大きさの経時的な変化の方向および率という観点からすれば、それらの変化の方向および率は、前で見られたような条件が満たされるとき——しかしそのときにもつねに一致するわけであって、その意味では、支配労働と投下労働という二つの尺度は同じ結果を生み出す、とも言えるわけである。）支配労働と投下労働という二つの尺度は、もしも賃金〔賃金部分〕が生産された総価値のなかの割合として不変のままである（このことは、賃金〔賃金率〕の経時的な変化が労働生産性の変化と比例しているということ意味する）ならば（しかし、このときのみ）、同じ結果を生み出すのである。

（なお、うえてみたことからわかるように、もし、ある量の生産物の生産に労働を投下する労働者がそれだけの量の生産物の全量にあたるものを受け取ってしまうならば、つまり、賃金率が労働生産性に等しいならば、そのときには、その量のその生産物に対応する支配労働量と投下労働量とは等しく、そしてそのような条件がつねに満たされるときには、支配労働量と投下労働量とがつねに一致する、ということになり、そのときには、支配労働量自体の大きさ、投下労働量自体の大きさに経時的な変化があったとしても、変化後の支配労働量の大きさと変化後の投下労働量の大きさととはつねに一致しているのであり、したがってまたそこでは当然、支配労働量の変化率と投下労働量の変化率、さらに、支配労働量の変化量と投下労働量の変化量とは、つねに一致しているのである。たとえばうへの、等量の穀物  $\bar{X}$  の例でいえば、第1期の  $\bar{X}$  の支配労働量は  $\bar{X}/w_1$ 、第1期の  $\bar{X}$  の投下労働量は  $\bar{X}/x_1 = W_1/w_1$ 、第2期の  $\bar{X}$  の支配労働量は  $\frac{\bar{X}}{w_2} = \frac{\bar{X}}{w_1(1+\alpha)}$ 、第2期の  $\bar{X}$  の投下労働量は  $\frac{\bar{X}}{x_2} = \frac{\bar{X}}{x_1(1+\beta)} = \frac{W_2}{w_2} = \frac{W_2}{w_1(1+\alpha)}$ 、第1期と第2期との間での  $\bar{X}$  の支配労働量の変化率は  $-\alpha/(1+\alpha)$ 、第1期と第2期との間での  $\bar{X}$  の投下労働量の変化率は  $-\beta/(1+\beta)$ 、第1期と第2期との間での  $\bar{X}$  の支配労働量の変化量は  $\frac{-\alpha}{1+\alpha} \cdot \frac{\bar{X}}{w_1}$ 、第1期と第2期との間での投下労働量の変化量は  $\frac{-\beta}{1+\beta} \cdot \frac{\bar{X}}{x_1}$ 、において、 $0 < W_1 = W_2 = \bar{X}$ 、 $W_1/\bar{X} = W_2/\bar{X} = 1$ 、 $0 < w_1 = x_1$ 、 $-1 < \alpha = \beta$ 、 $0 < w_1(1+\alpha) = w_2 = x_1(1+\beta) = x_2$ 、 $w_1/x_1 = w_2/x_2 = 1$ 、というわけである。）

- (ii) Dobb [1973], p. 49. 邦訳, 66ページ。なお、ドップはまた、つぎのような指摘をくわえている。すなわち、他方、価格あるいは交換価値の形成のための因果関係的な (causal) 原則あるいは原理という脈絡においては、賃金説 (wages-theory) と投下労働説 (embodied-labour theory) とは、もし資本に対する労働の比率がしたがってまた利潤に対する賃金の比率があらゆる生産部面で均等であるならば（しかし、このときのみ）、（地代を無視すれば）同意義のものということになるであろう。Dobb [1973], pp. 49-50. 邦訳, 66ページ。

(12) Dobb [1973], p. 50. 邦訳, 66-67ページ。

## M. ドップ (1973年) についての覚書

ドップによれば、スミスやリカードの時代の考え方においては価値の原因ないし「原則」(すなわち原理)と価値測定の標準とは密接な結びつきをもつものであったのであり、またとくに後者は前者に対する鍵とみなされていたのではあるけれども、それら自体は本来、別個の、したがって分離することのできる問題であるのであり、そして、『国富論』第1篇第5章においてスミスの直接の関心事となっていたものは事実上、後者であって前者ではなかったのである、とされるのであった。

そしてドップによれば、スミスは、貨幣は正確な価値尺度ではありえないとし、労働が唯一可能な尺度であるとした、そして、そうすることに対してスミスが与えた理由は事実上、マーシャル的な語法で言えば、労働が経済活動に伴われる究極的な「真実の費用」であるということであった、とされるのであった。

なお、ドップによれば、スミスの議論には商品の生産にかかる労働の量と、その労働が市場で交換されるさいの価格(そういった価格とを、明確に区別しているように思える箇所があるのであり、そこでは労働と引き換えに受け取られる商品の量いかにかわらず〔したがって、逆に、商品が支配しうる労働の量いかにかわらず〕獲得するのに多くの労働が費やされるものは高価であるとされているのであるが、他方でまたスミスはあらゆる商品の交換価値の真の尺度はそれらの商品で購買しうる労働の量であるとしているのであり、このことが、スミスは労働の価格(支払われる賃金という意味での)とある所与の生産物を生産するために必要とされる労働の量とを混同しており、したがってスミスは支配労働標準と投下労働標準との間で揺れ動いているというリカードの批判の根拠をなすこととなった、とみられるのであった。ただし、ドップによれば、標準あるいは尺度の脈絡のなかでは支配労働という概念は、「価格の一構成部分」という意味での価値の一原因としての賃金という概念に対応するものとみなすことはできるのであり、そして、尺度としてみたばあい支配労働と投下労働は、賃金〔賃金部分〕が生産された総価値のなかの割合として不変のままであるとき、またそのときにのみ、〔支配労働で測られた価値の経時的な変化の方向および率と、投下労働で測



られた価値の経時的な変化の方向および率との、一致、という意味で] 同じ結果をもたらすであろう、とされるのであった。[なお、もし生産された総価値にたいする、そのうちの賃金部分の割合が、1 で不変のままであるときには、支配労働で測られた価値の経時的な変化の方向および率と、投下労働で測られた価値の経時的な変化の方向および率が、一致するだけでなく、支配労働で測られた価値の大きさそのものと投下労働で測られた価値の大きさそのものとがつねに一致し、もちろん、支配労働で測られた価値の経時的な変化の量と投下労働で測られた価値の経時的な変化の量もつねに一致する、ということとなる。]

他方またドップによれば、労働を価値尺度とするスミスのこういった議論そのものは生産物の比率的分割という問題と関連をもつものであるはずであるにもかかわらず、スミスは、彼がほのめかしている支配労働の意味での労働であれ投下労働の意味での労働であれ労働を価値尺度としようというこの考え方そのものを、十分にそのような問題と関連づけて議論を展開したわけではなかった、とされるのであった。

## 50. M. ボウリー (1973年)

1973年に刊行された M. ボウリー (M. Bowley) の一著書 (Marian Bowley, *Studies in the History of Economic Theory before 1870*, London & Basingstoke: Macmillan, 1973. 以下, Bowley [1973] と略記する) のなかでボウリーは, E. キャナン (E. Cannan) の編集した『グラスゴウ大学講義』では, 貨幣が価値の尺度としてまた交換の媒介物として発達してきた道すじについての長い議論〔第2部第2篇第8節〕——なぜ貨幣自体の価値が変化してきたのかということについての考察も含んだ議論——のあとでただついでにのみ価値尺度としての労働が言及されているが, 労働価値説の痕跡を示すようなものはなにもなく, キャナンが「国民の富裕は貨幣に存するのではないということ」という表題をつけた節〔第9節〕の冒頭の「我々は貨幣を価値の尺度たらしめたのは何であるかを示した。しかし注意すべきは, 貨幣ではなく労働が, 価値の本当の尺度であるということである。したがって国民の富裕 (national opulence) は財貨の量と交換 (barter) の容易さに存する<sup>(1)</sup>」という文章における, 価値の本当の尺度としての労働へのこの謎めいた言及が, 価値との関連における労働への『グラスゴウ大学講義』での唯一の言及である, ということを指摘したうえで, 『国富論』での価値・価格に関するスミスの議論をとりあげるのであるが, そのなかで, スミスの価値尺度についての議論に関連してつぎのような見解を示している。

(I) スミスは『国富論』第1篇第4章の終わりのところにおいて, 諸財貨の交換価値は, それらの財貨の効用 (utility) あるいは有用性 (usefulness) すなわち「使用価値」——ただし, 必需品に対する欲求, 便宜品に対する欲求, および贅沢品に対する欲求の間に区別をなしそして諸財貨が満足させることのできる欲求の種類ということに従って諸財貨の有用性あるいは効用に等級をつける道徳家 (moralists) や素人の, 普通のあるいは通常の意味でのそれ——には, 一致しない, ということを指摘したうえで, 交換価値 (exchange value) についての三つの問題<sup>(3)</sup>を列挙している。ところで, 従来, 『国富論』における真実価格と名目価格についての章および価格の構成部分

についての章（第1篇第5章および第6章）と自然価格と市場価格についての章（第1篇第7章）との間の関係は不当に無視されてきたが、これら三つの章は、第4章の終わりのところで列挙された価値の諸問題についての一つの統合的な検討たることを意図されており、また、そのようなものとして考えられるべきなのであり、そして、第5章「商品の真実価格と名目価格について、すなわち、商品の労働での価格と商品の貨幣での価格について」は、まさにそうであると称するもの、すなわち、真実価格と貨幣価格との間の違いおよび価値測定の問題についての議論なのである。<sup>(4)</sup>

（Ⅱ）そのような問題を取り扱う第5章では、投入実体（physical inputs）は価値尺度としては退けられており、第5章はまた、付随的に、スミスが供給にとつての諸障害ということに大きな関心を払ったということにたいする説明を投じているのであるが、<sup>(5)</sup>第5章でのスミスの議論はつぎのようなものとして把握することができる。

① まず、第5章の「商品の真実価格と名目価格について、すなわち、商品の労働での価格と商品の貨幣での価格について」という表題は、交換価値の本当の尺度は労働であるという『グラスゴウ大学講義』の謎めいた言説からの一つの発展を示唆している。<sup>(6)</sup>

② そして、第5章の冒頭のパラグラフは、なぜ貨幣ではなく労働がすべての商品の交換価値の真の尺度であるのかということについてのスミスの説明を、提供しているのであるが、そこでのスミスの考え方はつぎのように要約できる。すなわち、人は、彼が享受することのできる生活の必需品、便益品および娯楽品の量に依拠して、富んでいる。ところで、分業が「ひとたび徹底的に行きわたるようになった」あとでは、人が、彼の直接の労働によって彼自身に供給しうるのは非常に限られた程度のものであるということになるであろう。かくして、彼の富は、彼がどれほど多く他人の労働を支配あるいは購買しうるかということに、依存することとなるであろう。このことからスミスは、所有者みずから使用しようとは思っていない商品は、その商品の所有者にとっては、その商品と交換に彼が獲得することのできる労働の量、「その商品で彼が購買または支配できる労働の量」（WN, p. 30. 大河内訳〈I〉、52ページ）だけの値打ちがある、という結論を下す。このように、最初からスミスの関心は、投下労働（labour input）にではなく支配労働（labour commanded）にあるのである。<sup>(8)</sup>

③ スミスは、第5章の冒頭のパラグラフの最後で、「それゆえ、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である」(WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ), と述べ、さらに、つづく第2パラグラフで彼の議論を展開するのであるが、<sup>(9)</sup>そこで示されているものは、価値尺度の支配労働説についての慎重な言説である。そしてそこにふくまれている「それらはある一定量の労働の、価値を含んでおり」ではじまるセンテンスのみが投下労働が支配労働に影響を及ぼすかもしれないということを示唆してはいるけれども、財貨は、それを生産するのに労働が必要であるがゆえに、価値をもつのだ、といった言説は、どこにも存在しないのである。また、スミスが価値の尺度となるものとみなしているものは、一つの自然的資源としての労働ではなく、「労苦と骨折り」と同義のものとしての労働であるということに注目することも、<sup>(10)</sup>重要である。

④ スミスは、苦痛を伴うものとしてのすなわち一つの不効用としての労働という考えを説明しつつ、そうして、労働の苦痛が、富を獲得することの基本的なコストあるいは代価ということになり、かくしてスミスは、不効用——一商品を労働支配力と交換できることによってはぶかれる労働の不効用——という不変の単位といったタームでの価値の絶対的尺度を、手に入れるのである。<sup>(11)</sup>

⑤ なお、スミスは異なったタイプの労働は異なった苦痛コストを伴うということ、また、関係するその労働の辛さや巧妙さについてのなにか正確な尺度を見いだすことは容易ではないということ、を、指摘している。他方スミスはつづけて、正当化のための見せかけの試み以上のことをなすことなしに、つぎのような主張をする。すなわち、実際には、市場と慣習が、熟練等々を獲得するのに伴う労働を考慮に入れて、異種類労働の諸量の間の換算物差しを確立するであろう、ということである。<sup>(12)</sup>

⑥ なお、スミスはさらに、労働をして<sup>•••</sup>不変の価値尺度にしているところの労働の不効用についての叙述あるいは説明をなしてその不効用の不変性を指摘し、<sup>(13)</sup>そして、労働のみがあらゆる時と場所においてすべての商品の価値を評価し比較するための究極で真の標準であることを結論づけるのであるが、<sup>(14)</sup>スミスはさらにすすんで、労働は貨幣のタームでの名目価格とその貨幣がどんな財貨を購入するかといったタームでの実質価格 (real price) とを持つであろうということ、しかし、労働のこのような名目価格も実質価格も必

ずしも、労苦と骨折りのタームでの労働者にとってのコストとはなんらかの密接な関係をもつわけではないということを、指摘する。スミスの議論においては、労働者にとっての労働のこの不変な苦痛コストは、通常の意味での、貨幣賃金とか実質賃金とは無関係な尺度なのであり、またそれは、労働者たちの生存費とはまったく関係のないものである。<sup>15)</sup>

⑦ スミスは第5章において以上でみたような議論を展開したのであるが、彼は、その章の残りの部分を主に、なんらかの特定の時点においてあるいは特定の期間（period）にわたって貨幣での労働の価格あるいは穀物での労働の価格が一定でありうるかぎりにおいて一方で貨幣が、あるいは、他方で穀物が近似的な価値尺度として使用されうる事情についての説明に、あてた。スミスは、たとえばつぎのことを指摘した。すなわち、異なる時代（different periods）のあいだでは、等量の穀物は、等量の金や銀よりも、よりいっそう、等量の労働を購入しそうであり、また、穀物価格は年から年にかけては著しく変動する傾向があるために、短期間（short periods）についてはそれとは逆のことがいえる、ということである。<sup>16)</sup>

（Ⅲ）以上の第5章でのスミスの議論に関連して以下のような点が指摘されるべきである。

① 以上の第5章でのスミスの議論のなかには、投下労働がもしかすると支配労働に影響を及ぼすかもしれないという示唆は存在するが、それとは別個なものとしての、投下労働が価値の一尺度を提供するといった示唆は存在しはしない。<sup>17)</sup>

② 労働をして不変の価値尺度たらしめる不変な労働不効用というスミスの考えは、古典派の経済学一般に受け入れられたわけではなかった。<sup>18)</sup> また、様々な理由から古典派の経済学者たちにとって非常に重要なことのように思われた不変の価値尺度あるいは不変の価値標準の追求は、理想的ではあるが実現不可能な妙案（philosopher's stone）あるいはなにか他の実現不可能な夢（chimera）の追求といったことといかにも似たり寄ったりのものであったため、経済思想史家たちは、それをめぐる諸論争には近寄らないようにしてきたのであり、そして、スミスが価値尺度として労働の不効用という心理的な概念を提案したことの斬新さが経済思想史家たちからの注目をほとんど受けてこなかったのは、たぶん、このためである。<sup>19)</sup><sup>20)</sup>

③ スミスは、もともと、価値の基礎としても価値測定の基礎としても投

入実体に関心をいだいていたわけではなかった。<sup>(21)</sup>

④ スミスはまた、個人の労働供給曲線が逆傾斜になるという意見に対する彼の批判——スミス自身の賃金理論にとってもっとも重要なものであるところの彼の批判——で、労働の不効用というその考えを「価値尺度といったこととは」別の目的のために使用したのであり、そしてまた、ジェヴォンズ (W. S. Jevons) は、個人の労働供給ということとの関連で、労働の苦痛コストというスミスの考えの意義を認めていたのであった。<sup>(22)</sup>

⑤ だが、スミスの労働の苦痛コストというものは、賃金および労働供給の理論といったものをこえて影響力をもつものであった。すなわちそれは、貯蓄に伴う「真実の」犠牲もしくは不効用——これは、労働者にとっての労働の不効用といったことに対応するものであろう——を指すものとしての「制欲 (abstinence)」というものをシーニョア (N. W. Senior) が導入しているといったことから例証されるように、イギリス経済学の「真実の」費用 ('real' cost) という伝統的な考え方の基礎を、提供したのであった。<sup>(23)</sup>

(注)

(1) Smith, *Lectures* [ed. Cannan], p. 190. 高島・水田訳『グラスゴウ大学講義』, 364 ページ。

(2) Bowley [1973], p. 110.

(3) ボウリーはつぎのスミスの文章を引用している。「第一に、この交換価値 (exchangeable value) の真の尺度はなんであるか、すなわち、すべての商品の真実価格 (real price) はいったいなにに存するか。／第二に、この真実価格を構成し、あるいはつくりあげている様々な部分とはどんなものであるのか。／そして最後に、価格のこうした様々な部分のいくつか、またはすべてを、ときにはその自然率ないし通常率以上に引き上げ、またときにはそれ以下に引き下げる様々な事情とはどんなものであるのか。あるいは、諸商品の市場価格すなわち現実の価格がそれらの自然価格と呼べるものと正確に一致するのをときとして妨げる諸原因は、いったいどんなものであるのか。」(WN, pp. 28-29. 大河内訳〈I〉, 50ページ。／は原典において行変えが行われていることを示す。以下同様。) Bowley [1973], p. 111.

(4) Bowley [1973], pp. 110-111.

(5) Bowley [1973], p. 111.

(6) Bowley [1973], p. 112.

(7) なお、ボウリーによれば、そのスミスの考えは、たとえばペティ (W. Petty), ロック (J. Locke), カンティロン (R. Cantillon), ジョウゼフ・ハリス (J. Harris) さら

にサー・ジェイムズ・スチュアート (Sir J. Steuart) といったような多くの17世紀および18世紀の著作家たちによって土地の自然的な諸資源から富 (wealth) を創造する手段として労働の重要性が強調されてきたのであるが、そのような伝統に起源をもっており、そのような伝統のなかにある考えをスミスなりにとらえなおしたものである、とされる。Bowley [1973], p. 112.

(8) Bowley [1973], pp. 112-113.

(9) ボウリーは事実上、本文で引用された第5章の冒頭のパラグラフの最後の文章につづく第2パラグラフの全体を、いくつかの点で不正確にはあるが引用している。そのパラグラフそのものはつぎのようなものである。「あらゆる物の真実価格、すなわち、あらゆる物がそれを獲得しようとする人にたいして真に費やさせるものは、それを獲得するための労苦と骨折りである。あらゆる物が、それを獲得してしまった人にとって、またそれを売りさばいたり他のなにかと交換したりしようと思う人にとって、真にどれほどの値打ちがあるかといえば、それによって彼自身ははぶくことができ、またそれによって他の人々に課することのできる労苦と骨折りである。貨幣または財貨でもって買われるものは、我々が自分の肉体の労苦によって獲得するものと全く同じように、労働によって購買されるのである。その貨幣、またはそれらの財貨は、事実、この労苦を我々からはぶいてくれる。それらはある一定量の労働の、価値を含んでおり、その一定量の労働の、価値を我々は、そのときそれと等しい量の労働の、価値を含んでいるとみなされるものと、交換するのである。労働こそは、すべての物に対して支払われた最初の代価、本来の購買貨幣であった。世界のすべての富が最初に購買されたのは、金や銀によってではなく、労働によってである。そしてその富の価値は、この富を所有し、それをある新しい生産物と交換しようと思う人たちにとっては、そうした人たちがそれで購買または支配できる労働の量に正確に等しいのである。」(WN, pp. 30-31. 大河内訳<1>, 52-53ページ。) Bowley [1973], p. 113.

(10) Bowley [1973], p. 113.

(11) Bowley [1973], p. 113.

(12) Bowley [1973], pp. 113-114. なお、ボウリーによれば、この場合、換算物差しのために慣習や市場諸力を当てにすることは疑わしい妥当性しかもたないように思えるのであって、それを正当化するためには少なくとも、不効用理論への迂回が必要である、とされる。Bowley [1973], p. 114n. 17. また、ボウリーは、換算物差しについてのこの説明においてスミスは不思議にも『国富論』第1篇〕第10章での異種類労働の評価についてはるかにヨリ詳細な検討になんの言及もしていない、としている。Bowley [1973], p. 114.

(13) ボウリーはつぎのようなスミスの文章を引用している。「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよ

50. M. ボウリー (1973年)

う。彼の健康、体力、精神が普通の状態で、また彼の熟練と技能が通常程度であれば、彼はつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一部分を犠牲にしなければならない。彼が支払う代価は、それと引き換えに「ボウリーは in exchange for it として引用しているが、スミスの原典では in return for it」彼が受け取る財貨の量がどうであろうと、つねに同一であるにちがいない。」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 57ページ。〔 〕内は中川。) Bowley [1973], p. 114.

(14) ボウリーはつぎのようなスミスの文章を引用している。「それゆえ、それ自身の価値がけっして変動することのない労働だけが、すべての商品の価値を、時と場所のいかに問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準である。労働はすべての商品の真実価格 (real price) であり、貨幣はその名目価格であるにすぎない。／しかしながら、等量の労働は、労働者にとってはつねに等しい価値をもつものではあるが、労働者を雇用する者にとっては、比較的大きい価値をもつようにみえることもあれば比較的小さい価値をもつようにみえることもある。」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 58ページ。) Bowley [1973], p. 114.

(15) Bowley [1973], pp. 114-115. さらにつづけてボウリーはつぎのような指摘をなしている。すなわち、スミスは、労働者にとって労働はある不変の不効用をもつがゆえに価値の本当の尺度は労働であるのだということを認識する人はほとんどいないであろうということを、認めている。ほとんどの人々にとっては、財貨の価値は、その財貨の貨幣価格によってかあるいはその財貨と交換に与えられる他の財貨の量によって示されるのであり、そしてまた、これらのものは、その財貨によって支配される労働量にたいしては、貨幣賃金率の変動に応じてまた実質賃金率の変動に応じて、異なった関係をもつこととなるであろう。Bowley [1973], p. 115.

(16) Bowley [1973] p. 115.

(17) Bowley [1973] p. 115. なお、ボウリーによれば、投下労働 (labour input) が支配労働に影響を及ぼすかもしれないというスミスの示唆は、その時々貴金属によって支配される労働の変動についての説明のなかでさらに展開されており (WN, p. 32. 大河内訳〈I〉, 57ページ)、そしてそこで与えられている説明とは、異なる時点において利用可能な諸鉱山はその豊度において異なる、またそれゆえ貴金属を生産するのに必要とされる労働投入 (labour input) もまた異なる、というものである、とされる。また、ボウリーは、投下労働と支配労働が等しくなるような実際の状況は、それにつづく価格の構成部分についての章〔第6章〕で述べられている、ということを指摘している。Bowley [1973], p. 115.

(18) このことに関してボウリーはつぎのような説明をくわえている。すなわち、たとえばマルサス (T. R. Malthus) は、不変の労働不効用ということを主張した点でスミスは厳密に正しかった、とは考えなかったのであり、マルサスはなにかんづく、スミスが 'real' という言葉を故意に二つの意味で使用したことが混乱をひきおこした



ということ、指摘したのであった。しかしながら、マルサスの場合には、スミスの「支配労働」は、それが「あらゆる他の原因を包含する価値の最高原因、すなわち需要と比較した供給の状態」を測定する (Thomas Robert Malthus, *Definitions in Political Economy* (London: John Murray, 1827; reprint ed., New York: Augustus M. Kelley, 1971), pp. 220-221. 玉野井芳郎訳『経済学における諸定義』(岩波文庫, 岩波書店, 1977年), 161ページ) という理由から、最善の価値尺度として、受け入れられるのであった。他方、リカードウ (D. Ricardo) は、自分とスミスは異なった目的のために不変の価値尺度を欲したのだということを認識することなしに、スミスの考えを退けた。それゆえリカードウは、労働不効用は不変であるのかあるいはまた労働不効用はスミス自身の問題にとって適切なものであるのかといったことは考えはしなかった。リカードウは、その時々支払われる実際の賃金のタームでもまた生存費という見地からの労働の生産費のタームでも、労働自体は価値において変化するということから、スミスの「支配労働」価値尺度を退けたのであった。しかしながら実際には、スミスは、労働の賃金という見地からみた労働は価値において変化するということを認めていたのであり、また事実、そのことを述べていたのであった。スミスが主張したこと、そして当然リカードウが受け入れえなかったことは、つぎのことであった。すなわち、労働そのものにたいして支払われる価格の可変性も労働そのものを生産する費用の可変性も、労働が価値尺度に適しているということには影響を及ぼしはしない、ということである。スミスの見解においては、あらゆる特定の時点において労働に対してたまたま支払われるものとは関係なく労働をして価値の標準たらしめるものは、人間にとっての労働の現実に変な不効用なのであった。Bowley [1973], pp. 115-116, p. 115n. 18.

- (19) なお、ボウリーは、そのことに注意を向けさせている比較的数少ない研究の例として、我々が本書の「28」でとりあげた H. M. ロバートスン (H. M. Robertson) と W. L. テイラー (W. L. Taylor) の共同研究と、同じく本書の「20」でとりあげた V. W. ブレイドゥン (V. W. Bladen) の研究をあげている。Bowley [1973], p. 116n. 19.

(20) Bowley [1973], pp. 115-116.

(21) Bowley [1973], p. 116.

- (22) Bowley [1973], pp. 116-117. ボウリーはつづけてつぎのような指摘をなしている。すなわち、ジェヴォンズは、彼の『経済学の理論』における第5章「労働の理論」を、「あらゆる物の真実価格、すなわち、あらゆる物がそれを獲得しようとする人にたいして真に費やさせるものは、それを獲得するための労苦と骨折りである。……労働こそは、最初の代価であった」等々のスミスの言説を賛意をもって引用することから始めた [William] Stanley Jevons, *The Theory of Political Economy*, 5th ed., ... ([New York: Kelley & Millman], 1957; reprint ed., New York: Augustus M.

Kelley, 1965), p. 167, 小泉信三, 寺尾琢磨, 永田 清訳, 寺尾琢磨改訳『経済学の理論』[1911年の第4版の邦訳] (近代経済学古典選集——4, 日本経済評論社, 1981年), 125ページを見よ。もちろんジェヴォンズでは, 労働の不変な不効用といった考えは消え去っており, そして, 労働の不効用は, ジェヴォンズの労働不効用曲線として彼の分析の一般組織のなかに組み入れられている。Bowley [1973], p. 117. (23) Bowley [1973], p. 117. なお, 以上でみてきたような形でボウリーの所論を整理するにあたっては, 岡田純一「近代経済学とスミス——最近の理論史的研究——」(経済学史学会編『国富論』の成立』(岩波書店, 1976年) 所収) 中の「3. ボウリーの所論」の部分を, いくつかの点で, 参考させていただいた。

## M. ボウリー (1973年) についての覚書

ボウリーによれば, 『国富論』第1篇第4章の終わりのところでスミスは, 財貨の交換価値と使用価値ということに言及したうえで, 「この交換価値の真の尺度はなんであるか, すなわち, すべての商品の真実価格はいったいなにに存するか」といったことをはじめとする交換価値についての三つの問題を列挙するのであるが, この第4章につづく三つの章, つまり, 真実価格と名目価格についての第5章, 価格の構成部分についての第6章, および, 自然価格と市場価格についての第7章は, スミスが列挙した価値の諸問題についての一つの統合的検討たることを意図されており, また, そのようなものとして考えられるべきなのであり, そして, 第5章「商品の真実価格と名目価格について, すなわち, 商品の労働での価格と商品の貨幣での価格について」はまさにその表題が示すとおり, 真実価格と貨幣価格との違い, 価値測定の問題についての議論である, とされるのであった。

そしてボウリーによれば, いまみた第5章の表題自体が交換価値の本当の尺度は労働であるという『グラスゴウ大学講義』での謎めいた言説からの一つの発展を示唆しているのであるが, うえのような問題を取り扱う第5章ではスミスは真の価値尺度は「支配労働」であるということを主張するのであり, そして, そのような考えが展開される議論のなかには投下労働が支配労働に影響を及ぼすかもしれないといったことを示唆するものも含まれてはいるがスミスはもともと価値の基礎としてもまた価値測定の基礎としても投入実体に関心を怠っていたわけではなかった, とされるのであった。

また, ボウリーによれば, スミスは第5章の冒頭のパラグラフにおいて,

個人の貧富の程度はその個人が享受しうる生活の必需品、便益品、娯楽品の量に依存するが分業の行きわたっている社会では結局、その個人がどれほど多く他人の労働を支配しうるかということに依存するということから、所有者自身が使用しようとは思っていない商品は、その商品の所有者にとっては、その商品と交換に彼が獲得することのできる労働の量だけ値打ちがあるということとなり、それゆえ、労働こそがすべての商品の交換価値の真の尺度であるとするのであるが、スミスのいう真の尺度としての労働とは、自然的資源としての労働ではなく、「労苦と骨折り」と同義のものとしての労働、不効用としての労働であった、とされるのであった。すなわち、ボウリーによれば、スミスの議論では、労働の不効用は不変でありしかもその労働の苦痛、不効用が富を獲得することの基本的なコストあるいは代価であるのであって、この意味での支配される「労働」が真の不変の価値尺度ということになっているのであり、それゆえまたそこでは、「支配される労働」というその尺度は、通常の意味での貨幣賃金や実質賃金、また、生存費といったものによってその適格性が左右されるようなものではなかったのである、とされるのであった。

なお、ボウリーによれば、スミスはこのように不効用、苦痛としての労働を真の不変の価値尺度とするのであるがスミスは他方で労働のタイプの相違による労働の不効用、苦痛の程度の相違ということの存在および労働の辛さや熟練の程度についての正確な尺度を見つけたことの容易でないことを指摘しており、そしてこの問題に対してスミスは第5章では、不思議にも第10章での異種類労働の評価についてのより詳細な検討になんの言及もすることなしにそして正当化のための見せかけの試み以上のことをなすことなしに、実際には市場と慣習が熟練等々を獲得するのに伴う労働といったものを考慮に入れて、異種類労働の諸量の間の換算物差しを確立するであろうとしている、とされるのであった。

またボウリーによれば、スミスは第5章において以上のような内容の議論に加えて、なんらかの特定の時点においてあるいはある特定の期間にわたって貨幣での労働の価格あるいは穀物での労働の価格が一定でありうるかぎりにおいて一方で貨幣が、また他方で穀物が近似的な価値尺度として使用される事情についての説明をしており、貨幣と穀物を比べて短期では貨幣が長期では穀物がそのような要件を相対的により良く満たしうるとした、とされ

るのであった。

そしてまたボウリーは、労働をして不変の価値尺度たらしめている不変な労働不効用というスミスの考えは古典派の経済学一般に受け入れられたわけではなく、また、古典派の経済学者たちが追求しようとした不変の価値尺度といったようなものはもともと入手不可能なものである、とみつつも、スミスが価値尺度として労働の不効用という心理的な概念を提案したこと自体は斬新なことであった、と捉え、そして、そのような労働の不効用という考えはスミスの議論の他の部分でも使用されていることを指摘するとともに、さらに、「労働の不効用」、「労働の苦痛コスト」といったスミスの考えは、後代のジェヴォンズの経済学のなかにも組み入れられているだけでなく、それはまた、「<sup>リアル</sup>真実の」<sup>コスト</sup>費用というイギリス経済学の伝統的な考え方の基礎を提供したものであった、とするのであった。

## 51. S. ホランダール (1973年)

1973年に刊行された S. ホランダール (S. Hollander) の一著書 (Samuel Hollander, *The Economics of Adam Smith*, Toronto & Buffalo: University of Toronto Press, 1973. 以下, Hollander [1973] と略記する。小林 昇監修, 大野忠男, 岡田純一, 加藤一夫, 斎藤謹造, 杉山忠平訳『アダム・スミスの経済学』, 東洋経済新報社, 1976年) のなかでホランダールは, つぎのような形で示すこともできるであろうような彼の見方を示している。

① 「競争」ということはスミスにとって多くのことを意味していたのであり, そして競争的賃金率構造についての彼の所論は, 彼が『国富論』のなかで「真実価値 (real value)」として言及しているものの尺度として「支配される労働 (labour commanded)」を使用することを正当化するのにも, 役立っていたのであるが, スミスは, 一商品のあるいは全体としての諸商品の「真実価値」をその名目価値すなわち「貨幣での価格」とは別のものとしてのその「労働での価格」として定義している。そしてそこでの論点は, 現在では広く認められているように, 空間および時間にわたっての「実質所得 (real income)」の変化を秤量するという近代的「指数」問題と符合するものである。<sup>(1)</sup>

② なお, たとえばシュムペーター (J. A. Schumpeter) の考えていたように, もしもスミスが指数技術を知っていたならば彼は, 一般物価水準に照らしつつ特定諸財貨の名目価格を表現していたかもしれない, ということが示唆されてきた。たしかにそうである。だが, ニュメレールの特定的な選択はまた, ある規範的な意味を持っているのである。それゆえそのような所見は, 社会会計単位としての労働の特殊な規範的含意を考慮していない, といえるのである。<sup>(2)</sup>

③ また, 以上のような見地から, そこで扱われるのは経験的な関連性をもったモデルにおける価値の論理的導出といったことではなく, したがって「交換価値」の理論 (theory of 'exchange value') といったことにかかわるものではないということが, 強調されてきた。これは正当なことである。<sup>(3)</sup>

④ ところで、スミスの議論においては労働という尺度はどのようにしてその機能を果たすかといえ、それはつぎのような脈絡においてである。まず、スミスは、個人の福祉 (well-being) は究極的には消費財に対する彼の支配力の関数であるということを示している。<sup>(4)</sup>ところが分業化の導入は、個人によって消費される財貨の大部分は他人の労働によって生産されるということ、を、意味する。そこで、一商品によって支配される労働が、その商品の一般的購買力の一つの指標を提供するのである。<sup>(5)</sup>スミスの議論においては、「真実価値」という用語は、まず、消費財に対する購買力ということにあてはまり、そして、労働に対する支配力は、消費財に対する購買力への間接的な手段としての役割をもつ〔したがってまた、労働に対する支配力は、消費財に対する購買力のすなわち「真実価値」の指標、間接的尺度ということになる〕のである。<sup>(6)</sup>他方、さらに、「真実価値」という用語には、生産の努力費用 (effort cost of production) という点からの支配労働〔つまり、労働不効用に対する支配力という意味での支配労働〕という第二の含意が存在するのであり、<sup>(7)</sup>そしてそのことをより明確に示しているスミスの叙述 (WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 57-58ページ) にしたがえば、「高価なもの」とは、たんなる時間の単位数というよりもむしろ努力によって引き起こされる不効用という点からみて、「入手するのが困難なもの」〔つまり、多くの労働不効用を支配しうるもの〕に当たるといことになる。<sup>(8)</sup>のである。<sup>(9)</sup>

⑤ しかしながら、1時間の作業は、不効用の——まつわる「時間と骨折り」の——はっきりとした尺度とはみなされえなかった。というのは、「耐え忍ばれる辛さや、行使される巧妙さのさまざまな度合い」が考慮に入れられなければならないからである (WN, p. 31. 大河内訳〈I〉, 55ページ)<sup>(10)</sup>。そして、この難点の大まかな解決は、現実には、辛さや巧妙さの相対的な度合いを賃金構造のなかに大まかに反映させることとなる「市場のかけひきや交渉によって」、提供される、とされるのであった (WN, p. 31. 大河内訳〈I〉, 55ページ)。したがって、賃金単位——たぶん、不熟練労働に当てはまる率、そのような率を使用しての——に換算しての産出物の価値が、いま求められている意味でのすなわち「勞苦と骨折り」という意味での「支配される労働」の、完全ではないとしてもまづまづの尺度を提供するであろうというのが、スミスの見解であるように思えるのである。<sup>(11)</sup>

⑥ なお、スミスは、この意味での1単位の労働に対応する究極的な心的

費用は時および場所をつうじて不変なものであると考えるという基本的な考えを明確にしてつぎのように述べている。「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう。彼の健康、体力、精神が普通の状態で、また彼の熟練と技能が通常の程度であれば、彼はつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一部分を犠牲にしなければならない」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 57ページ)。ところで、この命題は、形式のうえでは、単一の労働者の場合に主張されている。しかし実際上は、それは全体としての労働にひろげられているのであって、そのため、不効用の基数的測定ということだけでなく、個人間の比較の可能性ということ、またより強く、個人間の労働不効用関数の同一性の想定ということも、含意されているのであり、そして、「それゆえ、それ自身の価値がけっして変動することのない労働だけが、すべての商品の価値を、時と場所のいかんを問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準である」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 58ページ。傍点の付されている箇所はホルンダーがイタリック体にしてある箇所)<sup>(12)</sup>のである。

⑦ うえの議論からして、1時間の熟練作業は、訓練に伴う蓄積された労苦と骨折りの一部分を組み入れるものと想定されていることは、明らかである。<sup>(13)</sup>このことのゆえに、スミスは、「巧妙さ」の程度の格差をそれに対応する不効用の程度の格差に還元することができるのである。なお、賃金構造の決定についてのより完全な説明はあとのほうで、つまり、『国富論』第1篇第10章で、与えられており、そこでは、金銭上の格差を埋め合わせる五つの主要な特徴が、周知の議論のなかで、区別されているのである。<sup>(14)</sup>

## (注)

- (1) Hollander [1973], p. 127. 邦訳, 179ページ。なお、R. D. C. ブラック (R. D. C. Black) は、1971年の『マウンティフォート・ロングフィールド経済学著作集』への彼の「序文」のなかで、スミスの議論に関連して現在広く受け容れられていることとして幾つかの点をあげているのであるが、そこには、価値尺度としての労働という考えのスミスによる混乱した練り上げ作業というものは、時間および場所に関しての富 (wealth) の変化を表現するための不変のニューメーラルを持ちたいという彼の願望ということによっていた、といったものも含まれている。R. D. Collison Black, Introduction to *The Economic Writings of Mountifort Longfield* (New York: Augustus M. Kelley, 1971), p. 10 を見よ。

- (2) Hollander [1973], p. 127, p. 127n.40. 邦訳, 179ページ, 203ページ注40。
- (3) Hollander [1973], p. 127. 邦訳, 179ページ。
- (4) ホランダールはつぎのようなスミスの文章を引用している。「人が富んでいたり貧しかったりするの、人間生活の必需品、便益品および娯楽品をどの程度享受できるかによる。」(WN, p. 30. 大河内訳 < I >, 52ページ。) Hollander [1973], p. 127. 邦訳, 180ページ。
- (5) ホランダールはつぎのようなスミスの文章を引用している。「およそ商品の価値は、……それを所有していても自分では使用または消費しようとはせず他の商品と交換しようと思っている人にとっては、その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しい。それゆえ、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である。」(WN, p. 30. 大河内訳 < I >, 52ページ。) Hollander [1973], pp. 127-128. 邦訳, 180ページ。
- (6) なお、ホランダールは、このことに関連して、つぎの三点を指摘している。①「支配される労働」という指標をスミスは『国富論』をつうじて広く適用していることからみて「ホランダールは、その指標はたとえば様々な事情のもとでの地主の福祉を見積もるために適用されており、またそこでは「真実価値」によってスミスは商品に対する購買力を指しているということは明らかである、として、つぎのようなスミスの文章を引用している。「その国で労働者がふつうに扶養されている率がどうであろうとも、このより大きな剰余はつねにより多量の労働を維持しうるだろう。したがってまたその地主はより多量の労働を購買、支配しうるであろう。彼の地代の真実価値、つまり彼の實力と權威、他の人々の労働が彼に提供しうべき生活必需品と便益品に対する彼の支配力は、必然的にはるかに大きなものとなるだろう。」(WN, p. 159. 大河内訳 < I >, 265-266ページ。) Hollander [1973], p. 128n.42. 邦訳, 203ページ注42, この指標は、たんに単純な状態のために企図されていただけでなく、「労働に対する支配力」が(他の諸要素が産出に対して寄与するために)「諸商品に対する購買力」を不完全にしか保証しない複雑な経済においても、申し分なしにではないが、明らかに役立つ、と考えられている。②〔事実上〕商品に<sup>・</sup>体<sup>・</sup>化<sup>・</sup>されて<sup>・</sup>いる<sup>・</sup>労働 (labour embodied) がその商品の労働に対する<sup>・</sup>支<sup>・</sup>配<sup>・</sup>力と<sup>・</sup>た<sup>・</sup>ま<sup>・</sup>た<sup>・</sup>ま<sup>・</sup>一致<sup>・</sup>する<sup>・</sup>よう<sup>・</sup>な<sup>・</sup>初<sup>・</sup>期<sup>・</sup>の<sup>・</sup>社<sup>・</sup>会<sup>・</sup>に<sup>・</sup>つ<sup>・</sup>い<sup>・</sup>て<sup>・</sup>の<sup>・</sup>議<sup>・</sup>論<sup>・</sup>内<sup>・</sup>で<sup>・</sup>の<sup>・</sup>こ<sup>・</sup>の<sup>・</sup>指<sup>・</sup>標<sup>・</sup>の<sup>・</sup>最<sup>・</sup>初<sup>・</sup>の<sup>・</sup>導<sup>・</sup>入<sup>・</sup>, という<sup>・</sup>こ<sup>・</sup>と<sup>・</sup>が<sup>・</sup>, 一<sup>・</sup>つ<sup>・</sup>の<sup>・</sup>労<sup>・</sup>働<sup>・</sup>価<sup>・</sup>格<sup>・</sup>説 (a labour theory of price) が間違っ<sup>・</sup>て<sup>・</sup>ス<sup>・</sup>ミ<sup>・</sup>ス<sup>・</sup>に<sup>・</sup>特<sup>・</sup>徴<sup>・</sup>的<sup>・</sup>な<sup>・</sup>も<sup>・</sup>の<sup>・</sup>と<sup>・</sup>み<sup>・</sup>な<sup>・</sup>さ<sup>・</sup>れ<sup>・</sup>る<sup>・</sup>こ<sup>・</sup>と<sup>・</sup>に<sup>・</sup>な<sup>・</sup>っ<sup>・</sup>た<sup>・</sup>という<sup>・</sup>こ<sup>・</sup>と<sup>・</sup>に<sup>・</sup>あ<sup>・</sup>ず<sup>・</sup>か<sup>・</sup>る<sup>・</sup>こ<sup>・</sup>ろ<sup>・</sup>が<sup>・</sup>大<sup>・</sup>き<sup>・</sup>か<sup>・</sup>っ<sup>・</sup>た<sup>・</sup>。③また、労働生産性の継続的な上昇が実質購買力についてのこの選定された指標を全面的に不適切なものにしてしまうことはなかろうとスミスはみていた、ということも含意されている。Hollander [1973], p. 128. 邦訳, 180ページ。
- (7) このことを示す一例としてホランダールはつぎのようなスミスの文章を引用している。「あらゆる物の真実価格 (real price), すなわち、あらゆる物がそれを獲得しようとする人にたいして真に費やさせるものは、それを獲得するための労苦と骨折り



- である。あらゆる物が、それを獲得してしまった人にとって、またそれを売りさばいたり他のなにかと交換したりしようと思う人にとって、真にどれほどの値打ちがあるかといえば、それによって彼自身がはぶくことができ、またそれによって他の人々に課する〔ホランダーが示している引用文では *dispose* となっているが、スミスの原典では *impose*〕ことのできる労苦と骨折りである。」(WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52-53ページ。〔 〕内は中川。) Hollander [1973], p. 128. 邦訳, 180ページ。
- (8) なお、ホランダーによれば、ここでの問題が配分についての一般的分析のなかで特別の関連性を帯びるのは、この見地からである、とされる。Hollander [1973], p. 128. 邦訳, 181ページ。
- (9) Hollander [1973], pp. 127-128. 邦訳, 179-181ページ。また、以上のことに対応して、ホランダーは他のところでつぎのような指摘をなしている。すなわち、スミスが「**真実価値**」の**支配労働指標** (labour-command index of 'real value') を選択したことには二重の目的があった。一方では、その指標は、国民所得に対応する努力という**相対物**に**相応**するところの**不効用**といったものの尺度を提供することが、意図されていたのであり、他方では、その指標は、「人が富んでいたり貧しかったりするの**は**、人間生活の必需品、便益品および娯楽品をどの程度享受できるかによる」ということから、諸商品に対する購買力の間接的尺度たる**こと**が、意図されていたのである。Hollander [1973], pp. 135-136. 邦訳, 188ページ。
- (10) ホランダーは、さらに、つぎのようなスミスの文章を引用している。「1時間の辛い作業におけるほうが、2時間のやさしい仕事におけるよりも、いっそう多くの労働があるかもしれない。また、習得するのに10年の労働がかかる職業に1時間はげむばあいのほうが、平凡なわかりきった業務で1ヶ月働くばあいよりもいっそう多くの労働があるかもしれない。」(WN, p. 31. 大河内訳〈I〉, 55ページ。) Hollander [1973], pp. 128-129. 邦訳, 181ページ。
- (11) Hollander [1973], pp. 128-129. 邦訳, 181ページ。
- (12) Hollander [1973], p. 129. 邦訳, 181ページ。なお、ホランダーは、スミスは(たぶん、不熟練労働に当てはまる率、そのような率を使用しての)賃金単位を用いることによって「**労苦と骨折り**」という意味での「**支配される労働**」の大きさを、たとえ完全にはないと**して**も**まずまず**知ることができる**と**考えた、とするのであるが、このことに関連してホランダーはさらに、我々が本章で取り扱っている彼の著書の注の一つ (Hollander [1973], pp. 129-130n.46. 邦訳, 203-204ページ注46) において、つぎのような見方を示している。

(i) スミスは、そのようなやり方には「**労働の時価——賃金単位の大きさ——**を知らなければならないという」統計上の困難性が存在**する**と考えたのであるが、そのことについてはスミスはつぎのような見解を示している。すなわち、「ところ**が**、離れた時と場所では労働の時価が多少とも正確にわかる**という**ことはほとんどあり

えない。一方、穀物の時価は、規則正しく記録されている場合はわずかしかないが、一般には労働の時価よりもよく知られていて、また、よりしばしば〔ホランダールが示している引用文では frequently となっているが、スミスの原典では more frequently〕歴史家その他の著述家たちによって注目されてきた。それゆえ我々は、一般的には穀物の時価で満足しなければならないのであって、そうするのは、穀物の時価が労働の時価とつねに正確に同一割合にあるからというのではなく、ふつう入手できるもののなかでは、その割合にいちばん近づきうるものであるからである」(WN, p. 38. 大河内訳〈I〉, 65-66ページ。〔 〕内は中川。さらにホランダールは、WN, p. 482〔大河内訳〈II〉, 219-220ページ〕を参照するよう指示している)。

(ii) また、スミスが穀物を「労苦と骨折り」という意味での「支配される労働」の大きさの程度を知るために〕選んだのは、穀物賃金 (corn wage, 穀物タームでの賃金) の長年にわたる動きからみでの次善の選択でもあった。スミスはこのことをつぎの行文のなかではっきりと示している。すなわち、「遠くへだたった時点では、等量の、金銀またはたぶん他のどのような商品をもってするよりも、労働者の生活資料である穀物の等量をもってするほうが、よりいっそう等量に近い労働が購買されるであろう。それゆえ、遠くへだたった時点では、等量の穀物のほうが、同一の真実価値により近いものをもっている〔ホランダールが示している引用文では be more nearly the same real value となっているが、スミスの原典では be more nearly of the same real value〕。すなわち、等量の穀物によってその所有者は、他の人々の労働の同一量により近いものを購買または支配することができるだろう。ここでことわっておくが、私は、穀物の等量は、ほとんどの他のどのような商品の等量よりもより近似的に、このことをなすであろう〔ホランダールが示している引用文では will do so となっているが、スミスの原典では will do this〕、と言っているのである。というのは、穀物の等量ですらも、そのことを正確にはなしはしないであろうからである。労働者の生活資料、すなわち労働の真実価格は……場合によって非常に異なることがある。……しかしながら、他のどんな商品も、ある特定の時点では、それがそのときに購買しうる生活資料の量に比例して、より大きい量の労働、またはより小さい量の労働を購買するであろう。それゆえ、穀物で納めることになっている地代は、一定量の穀物が購買しうる労働の量の変動から影響をこうむるだけである。ところが、他のなんらかの商品で納めることになっている地代は、ある特定量の穀物が購買しうる労働の量の変動からだけでなく、ある特定量のその商品で購買しうる穀物の量の変動からも、影響をこうむるのである。」(WN, pp. 35-36. 大河内訳〈I〉, 61-62ページ。〔 〕内は中川。)

(iii) なお、スミスは穀物の選択をさらに、穀物はほぼ費用不変、のもとで生産されるという理由から、正当化しているが(WN, p. 187. 大河内訳〈I〉, 309ページ)、この議論は、穀物賃金は労働市場での需要と供給の状態にもっぱら依存することか

らいて、称賛しがたいものである。

なお、以上でみてきたスミスの議論における「穀物」についてのホルンダーの見方のうち(ii)のところでは、ホルンダーはおそらくつぎのようなことを言っているのであろう。すなわち、スミスの議論では、穀物は労働者の生活資料であるため、等量の穀物は、長期的には、他のどんな商品の等量をもってするよりも、等量に近い労働を支配する、と考えられている。したがってまた、1単位の労働を支配する穀物の量〔穀物賃金(単位)の大きさ〕は長期的には相対的に安定的ということになる。しかし、1単位の労働を支配する穀物の量〔穀物賃金(単位)の大きさ〕自体を規定するものはもっぱら労働市場における需要と供給であって、穀物生産に必要とされる穀物の単位数量当たりの費用そのものではない。したがって穀物生産におけるほぼ費用不変ということ自体は、必ずしも、穀物賃金(単位)の大きさが安定的、またそれゆえ等量の穀物は等量に近い労働を支配するという理由にはなりはしない。この意味で、穀物を選ぶことの理由として穀物生産におけるほぼ費用不変ということをあげるこのスミスの議論は、称賛しがたいものである。

また、スミスが穀物を取りあげたことに関する以上(i), (ii), (iii)でみたホルンダーの取り扱いからして、ホルンダーは、そこでのスミスの議論を、概ねつぎのようなものとして考えているということができよう。すなわち、(たぶん、不熟練労働に当てはまる率、そのような率を使用しての)賃金単位というものに換算しての、産出物の価値〔労働の時価で測った産出物の価値、(産出物の貨幣価値) / (たぶん不熟練労働の貨幣賃金率に対応しているであろうところの)賃金単位〕→「支配労働量」が「労苦と骨折り」という意味での「支配される労働」の完全ではないとしてもまずまずの尺度を提供するであろうというのがスミスの見解であったように思えるのであるが、離れた時と場所では労働の時価を多少とも正確に知ることとはほとんど不可能であるということから(統計上の困難性)、それに代わるものが求められることとなった。スミスは、穀物の時価は労働の時価よりもよく知られており、しかも、穀物の時価は、ふつう入手できるもののなかでは、労働の時価とまったく同一割合に近い関係をもつもの、と考えた。さらにスミスは、穀物は労働者の生活資料であるため、長期的には、等量の穀物は、他のどんな商品の等量をもってするよりも、等量に近い労働を支配する、とした。かくして、長期では、産出物の貨幣価値を穀物価格で測ってその産出物に対応する穀物の量〔(産出物の貨幣価値) / (穀物価格)〕を知ることによって、その産出物が支配しうる労働量の程度を知ることができ、異時点間にわたってのその比較が可能ということになる。このような意味でスミスは穀物を次善のものとして選択したのであった。ただし、その選択をさらに正当化するためにスミスは穀物生産におけるほぼ費用不変ということをあげているが、それは、その真価を認めることの困難なものである。

なお、ホルンダーは、「真実価値」の指標という問題はすでにフランシス・ハチ

## 51. S. ホランダール (1973年)

スン (F. Hutcheson) によって提起されており、穀物諸価格が必要な系列として示唆されていたのであり、また、そのことに関するハチスンの主張はプーフェンドルフ (S. von Pufendorf) の主張と共通するところが多い、ということを指摘している。それについては、Hollander [1973], pp. 129-130n.46 (邦訳, 203-204ページ注46) の終わりのほうを見よ。

- (13) なお、ホランダールは、『国富論』での、資本の蓄積と土地の占有に先立つ社会状態という単純な状態での労働費用による価格 (price) の説明における一つの重要な留保条件という脈絡のなかにおいても、スミスはこの問題を論じている、とし、そして、事実上そこでのスミスの議論では、様々な職業に付随する様々な「辛さ」や様々な「技能と創意」に対する考慮が賃金率構造のなかになされるということとなっており、そして次にそのような「技能と創意」の相違つまり熟練度の相違による賃金格差——スミスは形式のうえでは特別な技能と創意をもった労働が用いられる職業で達成される高報酬を「そのような才能に対して人々がいだく高い評価」ということに帰してはいるが (WN, p. 47. 大河内訳くI), 80-81ページ) ——は当該の熟練を習得するのに費やされる「時間と労働に対する報償」として解されている、とみている。Hollander [1973], p. 130n.47, pp. 116-117, p. 117n.13. 邦訳, 204ページ注47, 169ページ, 198ページ注13。

なお、本章前出の注6のなかでみたように、ホランダールは、『国富論』でのスミスの議論を取り扱うさいに一つの労働価格説 (a labour theory of price) をスミスに特徴的なものとみなすのは間違いである、とみているのであるが (Hollander [1973], p. 128. 邦訳, 180ページ)、価値理論のスミスの正式の議論は長期的な一般均衡という考え方を築き上げようという一つの試みと考えられるならばもっともよく理解されるかもしれないとした労働量 (labour quantity) と、貨幣賃金構造といったことを考慮に入れつつ考えられるものとしての労働費用 (labour cost) とを、区別するホランダールによれば、キャンナン (E. Cannan) によって編集された『グラスゴウ大学講義』では長期的な価格 (long-run prices) の決定については労働費用による説明が示され、そこでは、それぞれの商品に対する需要をその費用価格 (cost price) で確実に充足させるような労働の配分ということが念頭に置かれつつ、その費用価格と「市場価格 (market price)」との関係、価格メカニズムによる配分、それに対する攪乱物とその帰結、等々といったことが問題にされているのではあるが、『国富論』ではうえのようなものとしての労働費用による価格の説明は資本の蓄積と土地の占有に先立つ社会状態という単純な状態にはっきりと限定されており、しかもそこでは攪乱物によって開始させられることになる均衡化過程といったものを分析することによって「労働費用」交換価値説 ('labour cost' theory of exchange value) についてのきちんとした正当化を提供しようといった試みはなされてはいず、そこでのスミスの議論は、それぞれの商品の価格において資本と土地に対する

報酬も考慮に入れられるといった複雑なケースにかかわるところの基本的な議論——そしてスミスがあらゆる実際的な関連性をもつものとみなした唯一の議論——への、一つの序説として示されているにすぎないのであって、スミスの所論を評釈するにあたって労働量価値説や労働費用価値説 (the labour quantity and labour cost theories of value) といったようなことに多大の注意を払うのは正しくない、とみられるのであった。(Hollander [1973], pp. 114-117, 邦訳, 166-169ページを見よ。)

- (14) Hollander [1973], p. 130. 邦訳, 181-182ページ。ホランダーは、スミスがそのような五つの特徴を区別しているものとして『国富論』第1篇第10章におけるスミスのつぎのような文章、つまり、「私が観察したところでは、つぎの五つの事情が、ある職業における金銭的利得の少ないのをおぎない、また他の職業におけるその利得の大きいのを相殺する主な事情である。すなわち第一に、職業自体が快適であるか不快であるか。第二に、それらの職業を習得するのが簡単で安上がりかそれとも困難で費用がかかるか。第三に、それらの職業における雇用が恒常的であるか不定的であるか。第四に、その職業に従事する人たちによせられる信頼度が大きい小さいか。第五に、そうした職業において成功する見込みがあるかないか、である。」という文章 (WN, p. 100. 大河内訳〈I〉, 166ページ) を引用し、そのようなものとしてのスミスの議論についてつぎのような見解を示している。(Hollander [1973], pp. 130-132, incl. footnotes. 邦訳, 182-184ページ, 204-205ページ注48-55。)

(i) この議論は、つぎのような諸仮定にもとづいている。④職業間の労働の移動は制度的諸束縛によって妨げられていない (WN, pp. 99, 118ff. 大河内訳〈I〉, 165ページ, 197ページ以下), ⑤様々な職業は、利用できる機会が確実にわかるほど「よく知られており、また長年にわたって営まれてきた」、⑥それらの仕事は「それらに従事する人々の唯一、または主要な職業」である——というのは、パートタイムで働く労働者は、とくに低い貨幣報酬を受け入れやすいから—— (WN, p. 114. 大河内訳〈I〉, 190ページ)。

(ii) この分析全体をつうじて、訓練の諸費用は、他のどんな投資も報酬を要求するのと同じように報酬を要求する人的資本形成への一投資形態として、取り扱われている〔ホランダーは、つぎのようなスミスの文章を引用している。「彼が習得する仕事は、普通の労働 (common labour) の平常の賃金に加えて、彼の全教育費を、少なくともそれと同等の価値ある資本の通常の利潤とともに回収するだろう、ということが期待されるにちがいない。」(WN, p. 101. 大河内訳〈I〉168-169ページ。)]。すなわちスミスは、考慮に入れられるべき費用として、割愛された所得機会〔ホランダーは、スミスがそのことを示している例として、スミスのつぎのような文章を引用している。「徒弟修業のあいだは、徒弟の労働はことごとく親方のものになってしまう。」(WN, p. 102. 大河内訳〈I〉, 169ページ。)]、訓練を受ける者のために彼の両親が行う扶養、雇い主に支払われる直接的訓練費、を含めるのであるが、こ

れに加えて、当の熟練の、必要を満たすに足りるだけの供給を引き続いて確保するためには生業にとどまる期間にわたって熟練者に対してさらに純格差が支払われなければならない、とするのであり、そしてこの純報酬が利子支払いの一形態として解釈されているのである。この純報酬ということは、訓練の「労苦と骨折り」に関する心的費用ということだけを説明したにすぎない「すぐれた熟練」あるいは「巧妙さ」に対する格差補償についての当初の議論の一つの重要な補足を、表すものである。ところで、その利子報酬は訓練期間中消費を延期することに伴う心的費用に対する一補償として解釈しても差し支えないかもしれないということが示唆されたことがある〔ホランダールは、その例として、我々が本書の「14」で使用した P. H. ダグラスによる論文、つまり、Douglas [1927] の、p. 83 (前掲邦訳、10ページ) をあげている〕のであるが、利子へのスミスの一般的アプローチには、現在の消費の延期を確保するための特別な誘因の必要性を彼が認めているということを示唆するようなものは、なにもないのであり、それゆえまた、その解釈が正当なものであるということは明らかなことではないのである。スミスの分析が不完全なものであるということは事実であるように思える。すなわち、スミスは、利子率の存在を当然のことと考えつつ、ある一定の方向への（たとえば訓練への）どんな投資も他の諸方向において手に入れることのできる「少なくとも通常の率」をきつと取得すると論じたのである。だがこのような近道をするにさいして彼は、外見上の貨幣賃金格差は訓練への投資に対する報酬というものを反映し、そしてその限りにおいて、その貨幣賃金格差は市場によって不効用 1 単位当たり等額の貨幣報酬ということに帰着させられていることになる、ということを証明することを怠っていたのである。

(iii) 残りの補足的事項については、基本的に「職業自体が快適であるか不快であるか」、という事項は別として、つぎのようなことがいえる。④〔「雇用の恒常性」について：〕スミスによって直視されている「雇用の恒常性」における諸相違が季節的なものである場合においても、それでもなお、均衡においては、「かくも不安定な境遇を考えるとときとして生ぜざるをえない不安なまた失望的な時」(WN, p. 103. 大河内訳 < I >, 171ページ) を償うために、不安定な雇用のもとにある労働者への年間の報酬のなかにさえ純補償的支払いが現れるであろう、ということが、認められている。⑤〔「よせられる信頼度」について：〕「信頼」の程度をもって説明される格差という議論は、その真価を認めることのより困難なものである。責任をになうことが心的負担をもたらすという限りにおいてのみ、その議論は、補償的支払いとしての賃金格差という考え方と両立するものである。たしかにこういった要素は彼の議論のなかに存在しているようにみえる。だがそれに加えて、スミスは、専門職従事者——医師、法律家等——の高所得は「それほどに重大な信任にふさわしい社会的地位」を彼らに保証するのに必要なものであるということを示唆しているのであり (WN, p. 105. 大河内訳 < I >, 174-175ページ)、これは、一つの不効用

補償と解釈することはまずできないものである。(なお、ホランダーによれば、J. S. ミル〈J. S. Mill〉はこの報酬を一種の独占支払いとして理解した、とされる。)①  
「成功の見込み」について：〕均衡においては金銭上の報酬は成功の機会の程度差を考慮に入れたものであるにちがいないという五番目の項目では、スミスは（明らかに）、〔当該の人々の〕必要とされる「退屈で費用のかさむ教育」——訓練という直接的不効用——に対する補償であるばかりでなく競争に失敗した人々のそれに対する補償でもあるものとしての高報酬、といったことを、念頭に置いていた。ところで、前述の場合におけるのと同様、この議論が全体の枠組みのなかに容易に収まりうるのは危険を冒すことが一つの不効用であるときだけであるということが指摘されてもよいであろう。ところが実際のところ、人々はきわだつた成功を収める自分たちの機会を過大評価し、そして、巨額の利得を得るわずかな可能性しか約束しない専門職に押し寄せるといったスミスのいう傾向——均衡賃金構造の完全な実現を妨げると実際上いわれているところの傾向——は、危険を冒すことが心的負担ではないということを、示唆するものであろう。

またホランダーは、競争的賃金構造という考えについては本格的な研究はすでに、とくにリチャード・カンティロン (R. Cantillon) とサー・ジェイムズ・スチュアート (Sir J. Steuart) によって、なされていたということはもちろん真実であるということを描したうえで、この注でみてきたようなスミスの分析に対する、J. S. ミルのいくつかの批判を、良好になされた批判として、紹介している。それについては Hollander [1973], pp. 132-133n. 56, 邦訳, 205-206ページ注56を見よ。

なお、ホランダーによれば、賃金構造についてのスミスの議論そのものは本来、資源配分の基礎モデルの一つの機軸的部分としてその値打ちが判断されるべきであって、たんに労働不効用のタームで示される国民所得の「真実価値」の尺度のための基礎〔たしかにこの脈絡においてもスミスのこの議論は役立っているのではあるが〕としてのみその値打ちが判断されるべきではないのであり、そしてこのより幅広い見地からすればスミスのその議論は、めざましい業績だと認められるにちがいない、とされる。Hollander [1973], p. 132. 邦訳, 184ページ。

## S. ホランダー (1973年) についての覚書

ホランダーによれば、スミスは一商品あるいは全体としての諸商品の「真実価値」をその名目価値すなわち「貨幣での価格」とは別のものとしてのその「労働での価格」として定義し、「支配される労働」を「真実価値」の尺度とするのであるが、そこでの論点は、空間および時間にわたっての「実質所得」の変化の秤量という近代的「指数」問題に符合するものであった、とされるのであった。なお、そのさいホランダーは、たしかにもしもスミスが

指数技術を知っていたならば一般物価水準に照らしつつ特定諸財貨の名目価格を表現していたかもしれないということは可能ではあるが、そのような見解は社会会計単位としての労働の特殊な規範的含意を考慮していないのであって、ニュメレールの特定の選択はまたある規範的な意味をもっている、とし、また、そこで扱われているのは経験的な関連性をもったモデルにおける価値の論理的導出といったことではなく、したがって「交換価値」の理論といったことにかかわるものではない、とみるのであった。

そしてホランダールによれば、スミスの議論ではこの「支配される労働」という尺度は、消費財に対する購買力としての「真実価値」〔ホランダールによれば、これが、スミスのいう「真実価値」の第一の含意である、とされるのであった〕の指標、間接的尺度とされている〔なお、ホランダールによれば、スミスは、消費財、諸商品に対する実質購買力についてのこの「支配される労働」という指標、間接的尺度は、労働以外の他の諸要素も産出に対して寄与するために「(商品生産力としての)労働に対する支配力」が「諸商品に対する購買力(支配力)」を不完全にしか保証しないような経済においても申し分なしにはないがその機能を果たす、と考えていたのであり、さらにまた、労働生産性の継続的上昇ということも実質購買力についてのこの指標、間接的尺度を全面的に不適切なものにしてしまうことはなからうとみていた、とされるのであった〕とともに、生産の努力費用という点からの支配労働〔つまり、労働不効用に対する支配力という意味での支配労働〕としての「真実価値」、具体的にはたとえば国民所得に対応する努力という相対物に相応するところの不効用といったようなもの〔つまり、国民所得の、労働不効用に対する支配力、といったようなもの〕としての「真実価値」〔ホランダールによれば、これが、スミスのいう「真実価値」のもう一つの含意である、とされるのであった〕の尺度とされている、とみられるのであった。

また、後者の意味での「真実価値」の尺度としての「支配される労働」に関連して、ホランダールはつぎのような見方を示すのであった。すなわち、(1) スミスの議論では、1単位の労働に対応する究極的な心的費用は時および場所をつうじて不変であるとされ、また實際上、不効用の基数的測定、個人間の比較の可能性、個人間の労働不効用関数の同一性ということが暗に示されており、そしてまた、労働の熟練度の格差は、熟練の習得に伴う労苦と骨折りということから、不効用の程度の格差に還元されるということになってい



るのであるが、このような諸労働間の熟練、辛さの格差の相対的な度合いは、市場メカニズムをつうじての賃金構造〔競争的賃金構造——なお、ホルンダーは、賃金構造の決定についてのスミスのより詳細な説明は『国富論』第1篇第10章のなかにみられるとして、そこでのスミスの議論を検討するとともに、賃金構造についてのスミスの議論そのものは資源分配についての彼の議論と深い関連をもつものであって、「真実価値」の尺度という脈絡のなかでのみとらえられるべきものではない、とするのであった——〕のなかにおおまかに反映されることになる、とされている。したがって、（たぶん、不熟練労働に当てはまる率、そのような率を使用しての）賃金単位というものに換算しての、産出物の価値〔つまり、（産出物の貨幣価値）／（たぶん不熟練労働の貨幣賃金率に対応しているであろうところの）賃金単位〕＝その産出物によって支配される賃金単位数、労働量〕が、不効用としての「支配される労働」の量を、〔その産出物の労働不効用支配力の大きさ、その意味でその産出物に対応する労働不効用を、〕完全にではないとしても、まずまず測定することになる、というのがスミスの見解であったように思える。〔なお、事実上、この方法によって、その産出物のもつ諸商品に対する実質購買力を間接的に測定するものとしての「支配される労働」量も得られることになる、といえる。〕（2）しかしながらスミスはまた、賃金単位を用いて「支配される労働」量を算出するというこのようなやり方には労働の時価〔賃金単位の大きさ〕を知らなければならないという統計上の困難性が存在すると考えたのであるが、その問題に対してスミスは、穀物の時価は労働の時価よりもよく知られており、しかも、穀物の時価はふつう入手できるもののなかでは労働の時価ともっとも同一割合に近い関係をもつのであり、さらに、穀物は労働者の生活資料であるため、長期的には、等量の穀物は、他のどんな商品の等量をもってするよりも、等量に近い労働を支配する、と考えた〔→したがって長期では、産出物の貨幣価値を穀物価格で測ってその産出物に対応する穀物の量を知ることによって（産出物の貨幣価値／穀物価格＝その産出物に対応する穀物の量）、その産出物が支配しうる労働量の程度を知ることができ、異時点間にわたってのその比較が可能ということになる〕。このような意味でスミスは穀物を次善のものとして選択したのである。ただし、その選択をさらに正当化するためにスミスは穀物生産におけるほぼ費用不変ということをあげているが、それは当をえたものではない。

## 52. S. カウシル (1973年)

1973年に公表された S. カウシル (S. Kaushil) の一論文 (S. Kaushil, “The Case of Adam Smith’s Value Analysis,” *Oxford Economic Papers*, vol. 25 (no. 1, March 1973), pp. 60–71. 以下, Kaushil [1973] と略記する) においてカウシルはスミスの価値分析の再評価を試みるのであるが, そこでのカウシルの議論のなかには, つぎのような形で示すこともできるであろうようなカウシルの見解が含まれている。

① スミスは彼の価値分析を、『国富論』第1篇第4章の終わりのほうの箇所<sup>11</sup>で, 水とダイヤモンドの例を用いながら, 使用価値と交換価値との区別をなすことから——また, ただ区別をするという目的のためにのみ, すなわち, 彼の価値分析の主題つまり交換価値 (exchange value) を選り分けるためにのみ——始め, そして, 三つの章において, 各々, (i) 交換価値の「真の」(不変の) 尺度 (第5章), (ii) 交換価値の, 因果関係的な諸構成要素 (第6章), (iii) 正常 (自然) 価格からの現実 (市場) 価格の乖離 (第7章), といった観点からの交換価値についての分析を提示することを, 約束している。

② 概念のうえでは, 上述の(i)は, 交換価値という事象が出現してからのことであり, それは, 交換価値の「理論 (theory)」, 交換価値の因果的説明 (causal explanation) といったことにかかわるものではなく, むしろそれは, 現存する交換価値の確認 (identification) および定量化 (quantification) といったことにかかわるものである。しかしながら, 分析的な目的にとっては, 尺度, というよりはむしろ尺度という概念は, 交換価値の説明のための必要条件である。というのは, もし交換価値の共通の尺度をもたないならば, 諸商品のあいだの交換比率 (exchange ratios) を定量化しそして通約可能なものにすることができないからであり, そしてそれをすることができなければ, これらの比率の決定 (determination) についての分析, 因果的説明を始めることができないからである。いずれにせよ, スミスは, 彼の諸隠喩的表現をごちゃまぜにしているのではなく, 尺度 (measure) の問題と原因 (cause) の問題という二つの問題を, 分析のうえでは統合されるべきもので

あるが概念のうえでは別個のもの、としているのである。<sup>(2)</sup>

③ (i)の交換価値の「真の」(不変の)尺度に関して、スミスは、穀物や銀という通俗的に理解されまた採択されている尺度はそれら自体の価値が不変ではなく、したがってまた、交換価値の異時点間および異場所間の比較のためには不適切で不満足なものである、ということを主張する。<sup>(3)</sup>

④ スミス自身はつぎのように考えている。すなわち、熟練および辛さの相違に関して平均化された平均的なタイプのある一定の労働時間のあいだにある平均的な労働者がこうむる「労苦と骨折り」および、犠牲にする安楽、快適さ、自由は、所および時にかかわりなく、その労働者にとっては同一の価値をもつものでありつづけるため、労苦や骨折り等々といった主観的な不効用を表現するところの「商品がふつう購買し、支配し、またそれと交換されるべき労働の量」が、真の、不変の尺度である。<sup>(4)</sup>

⑤ それゆえ、もし一商品あるいは諸商品の全体が、以前あるいは他の場所においてそうであったよりもより多くの平均タイプの労働時間を支配するならば、スミスにしたがえば、この商品あるいはその全体は、リアル・タームでの価値において増加した、ということになるのである。<sup>(5)</sup>

⑥ しかしながらスミスはまた他方で、この支配労働尺度のもっと容易に理解できる客観的な写し(counterpart)を持つことの必要性ということに気付いていたのであって、この問題に対して彼は、遠くへだたった時点にわたっては生存穀物賃金(subsistence corn wage、穀物タームでの生存賃金)の相対的不変性のゆえに穀物はその真実価値(real value: 支配される労働という観点からの価値)において相対的により安定的でありつづけるのにたいし貨幣や銀はそうでないと考え、貨幣賃金単位尺度(money wage-unit measure)よりも良好なものとして穀物賃金単位尺度(corn wage-unit measure)を示唆するのであった。ただし彼は、それは精々のところ一つの近似的な写しであるにすぎないであろうということを自覚しているのであった。<sup>(6)</sup>

⑦ なお、スミスは、成長ということを中心とする彼の議論にとって非常に肝要なものである GNP の測定、GNP の異時点間および異場所間の比較をなすための一つの十分に確かな方策を苦心して自ら開拓していた、ように思える。実際、スミスの所論は、経済進歩の指標の必要性に答えようという一つの試みとして解釈されることもできるであろう。そしてさらに、GNP の統計もまたより重要なことであるが指数というものも持っていなかったス

ミスは、経済進歩の指標として1人1時間当たりの生産性 (productivity per man-hour: PMH) に頼ろうとしていたように思える、というように言えるかもしれないであろう。『国富論』第1篇第5章の後半におけるさらに第1篇の終わりのほうの銀の価値についての「余論」における) 銀や穀物の価値についての彼の強い関心は、たしかに、このことを示唆していると言えるかもしれないであろう。この解釈によれば、彼の支配労働尺度は、ちょうど、PMH と逆比例的な関係にあるもの (the reciprocal of PMH) ということになるであろう。<sup>(7)</sup>

⑧ だがもっと重要なことは、スミスはけっして、支配される労働を価値の原因として使用してはいない、また暗にそのようなものとして使用しているわけさえない、という事実である。支配される労働は、つねに、尺度として使用されているのである。「労苦と骨折り」という概念は、普遍的な不変の尺度としての支配労働尺度の妥当性を確認するためにのみ使用されていたのであって、交換価値についてのなんらかの因果的な説明を提出するために使用されたわけではない、のである。<sup>(8)</sup>

⑨ また、スミスはけっして、体化された労働 (labour-embodied) という彼の概念を価値の尺度として使用してはいず、スミスの議論では一貫して、支配される労働 (labour-commanded) が唯一の尺度であるのであった。<sup>(9)</sup>

⑩ さらにまたつぎのことが指摘されてもよい。すなわち、スミスが交換価値の真の、不変の尺度として「労苦と骨折り」(すなわち不効用) タームでの支配される労働を使用したことは、もちろん直観的にはあるが、そのような尺度のための基本的な要件、すなわち、そのような尺度とは、一つの与件 (a datum) であるべきであって価値事象を説明する因果関係的体系にとっては体系外のものであるべきである、という基本的な要件を満たしている、ということである。この事実がもつ意義は、とくに、スミスの批評家たちや解釈者たちによってたとえ完全に無視されてはいないとしても不十分にしか認識されていないがゆえに、強調される必要がある。<sup>(10)</sup>

⑪ また、確かに、スミスは、労働の役割を強調しており、そして『国富論』の第1篇をつうじて、「本源的代価 (original price)」あるいは「購買貨幣 (purchase money)」としての労働、また、すべての「生産物」の源泉としての労働ということに言及している諸言説は存在する。そしてそのことは、あまり注意深くない読者にとっては、交換価値についての一つの労働説を示

しているように思えるかもしれない。だが、もっと綿密に熟読すればつぎのことがわかる。すなわち、「本源的代価」あるいは「購買貨幣」としての労働について語っている諸言説は、労働の原因的属性よりもむしろ労働の尺度的属性に言及しているのだ、ということである。<sup>11)</sup>

(注)

- (1) Kaushil [1973], p. 61, p.61n.3. なお、交換価値の分析についてスミスがそのような約束をなしていることを示すものとして、カウシルは、『国富論』第1篇第4章の終わり近くのような文章を引用している。「諸商品の交換価値(exchangeable value)を規制する原理を究明するために、私はつとめてつぎの諸点を明らかにしようと思う。／第一に、この交換価値の真の尺度はなんであるか、すなわち、すべての商品の真実価格(real price)はいったいなにに存するか。／第二に、この真実価格を構成し、あるいはつくりあげている様々な部分とはどんなものであるのか。／そして最後に、価格のこうした様々な部分のいくつか、またはすべてを、ときにはその自然率ないし通常率以上に引き上げ、またときにはそれ以下に引き下げる様々な事情とはどんなものであるか。あるいは、諸商品の市場価格すなわち現実の価格がそれらの自然価格と呼べるものと正確に一致するのをときとして妨げる諸原因は、いったいどんなものであるのか。』(WN, pp. 28-29. 大河内訳Ⅰ), 50ページ。／は原典において行変えが行われていることを示す。) Kaushil [1973], p. 61.
- (2) Kaushil [1973], p. 62.
- (3) Kaushil [1973], p. 62. カウシルはつぎのようなスミスの文章を引用している。「……人間の足の大きさとか、一尋<sup>ひょう</sup>の長さとか、一握りの量とか、というようなそれ自身の量がたえず変動する量の尺度は、けっして他の物の量の正確な尺度とはなりえない。それと同じように、それ自身の価値がたえず変動するような商品も、他の諸商品の価値の正確な尺度とは、けっしてなりえない。」(WN, pp. 32-33. 大河内訳Ⅰ), 57ページ。) Kaushil [1973], p. 62.
- (4) Kaushil [1973], p. 62. カウシルはつぎのようなスミスの文章を引用している。「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとつては等しい価値をもつものと言うことができよう。彼の健康、体力、精神が普通の状態で、また彼の熟練と技能が通常の程度であれば、彼はつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一部分を犠牲にしなければならない。彼が支払う代価は、それと引き換えに彼が受け取る財貨の量がどうであろうと、つねに同一であるにちがいない。なるほど、その労働は、より大きい分量のこれらの財貨を購買することもあれば、より小さい分量のこれらの財貨を購買することもある。だが、変動するのは、それらの財貨の価値であって、それらを購買する労働の価値ではないのである。時と場所のいかんを問わず、得が

## 52. S. カウシル (1973年)

たいもの、すなわち獲得するのに多くの労働が費やされるものは、高価であり、また容易に入手できるもの、すなわちわずかな労働で入手できるものは、安価である。それゆえ、それ自身の価値がけっして変動することのない労働だけが、すべての商品の価値を、時と場所のいかに問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準である。労働はすべての商品の真実価格であり、貨幣はその名目価格であるにすぎない。」(WN, p. 33. 大河内訳 < I >, 57-58ページ。傍点の付されている箇所はカウシルがイタリック体にしてある箇所。)  
 「それゆえ、労働が唯一の正確な価値尺度であることはもちろん、唯一の普遍的な価値尺度でもあること、言い換えると労働が、いついかなるところでも、様々な商品の価値を比較することのできる唯一の標準であることは明白であると思える。」(WN, p. 36. 大河内訳 < I >, 63ページ。)  
 Kaushil [1973], p. 62.

(5) Kaushil [1973], p. 63.

(6) Kaushil [1973], p. 63. カウシルはつぎのようなスミスの文章を引用している。「遠くへだたった時点では、等量の、金銀またはたぶん他のどのような商品をもってするよりも、労働者の生活資料である穀物の等量をもってするほうが、よりいっそう等量に近い労働が購買されるであろう。それゆえ、遠くへだたった時点では、等量の穀物のほうが、同一の真実価値により近いものをもっている。すなわち、等量の穀物によってその所有者は、他の人々の労働の同一量により近いものを購買または支配することができるだろう。ここでことわっておくが、私は、穀物の等量は、ほとんどの他のどのような商品の等量よりもより近似的に、このことをなすであろう、と言っているのである。というのは、穀物の等量ですらも、そのことを正確にはなしはしないであろうからである。」(WN, p. 35. 大河内訳 < I >, 61ページ。)  
 Kaushil [1973], p. 63.

(7) Kaushil [1973], p. 63, p. 63n.2. いうまでもなく、ある一定量の生産物が支配しうる労働時間数そのものは、その生産物のその一定量が1人1時間当たりの賃金を何単位支配しうるかということによって算出されるのであるから、その支配しうる労働時間数が、その生産物を生産するさいの1人1時間当たりの生産性 (PMH) と逆比例的な関係にあるためには、PMH が変化するとき1人1時間当たりの賃金もそれと同一方向に変化しなければならない。たとえば、いま、経時的に、PMH が $\alpha$ の率で上昇し ( $0 < \alpha$ )、同時に、1人1時間当たりの賃金も上昇したが、その上昇率はPMHの上昇率と同じ $\alpha$ であった、としよう。いま、その一定量の生産物を $\bar{Q}$ 、当該生産物タームでの1人1時間当たりの賃金を $w$ 、で表すとすれば、 $\bar{Q}$ が支配し

うる労働時間数は $\frac{\bar{Q}}{w}$ から $\frac{\bar{Q}}{(1+\alpha)w}$ へと変化し、その変化率は、 $\frac{\frac{\bar{Q}}{(1+\alpha)w} - \frac{\bar{Q}}{w}}{\frac{\bar{Q}}{w}}$ 、つま

り、 $-\alpha/(1+\alpha)$ 、となる。つまりこの場合には、その一定量のその生産物が支配しうる労働時間数は、 $\alpha$ の率でのPMHの変化と逆方向に、 $\alpha/(1+\alpha)$ の率で変化する、

ここでは  $\alpha/(1+\alpha)$  の率で減少する、ということになるであろう。なお、いま 1 人 1 時間当たりの生産性 (PMH) を 1 人 1 時間当たりに生産される生産物物量とし、そして 1 人 1 時間当たりの賃金の大きさをそのものがつねに、そのようなものとしての PMH の大きさに相当するという場合には、当該生産物 1 単位が支配しうる労働時間数は、つねに、PMH の逆数ということになる。

(8) Kaushil [1973], p. 63.

(9) Kaushil [1973], pp. 63-64. このことに関してカウシルはつぎのような説明を与えている。すなわち、「……ある商品の獲得または生産にふつう用いられる労働の量が、その商品がふつう購買し、支配し、またはそれと交換されるべき労働の量を規制できる唯一の事情である……」(WN, pp. 47-48. 大河内訳〈I〉, 82ページ)といったような労働だけの 1 要素モデルという例外的なケースにおいては、そこでは体化された労働が価値の原因であるばかりでなく価値を測定しもするといった事情を考慮に入れると、原因(体化された労働)と尺度(支配される労働)とは事実上、同一のものになるかのようにみえる。だが、実は、これは、じまなものの、この問題についての最大の混乱——実際にはスミスにはまったく責任のない混乱ではあるが——の出どころ、なのである。そしてリカードウ (D. Ricardo) がスミスを誤って解釈した誤り伝えたのはこの点においてであった。というのは、原因と尺度というこれら二つの概念は、1 要素モデルにおけるそれらのものの互換性にもかかわらず、本当は、異なる別々のものであるからである。もちろん、その互換性は、体化された労働が 1 要素モデルにおける価値の唯一の原因であるということによっている。したがって、資本の蓄積された 2 要素モデルにおいては、商品に体化された労働はもはや、その商品によって支配される労働を「規制する唯一の事情」ではなくなり、資本(利潤)がもう一つの決定因ということになり、他方、土地の占有された 3 要素モデルでは、土地(地代)が第三の決定因ということになる。しかし、1 要素モデルにおいてさえ、体化された労働が唯一の原因であるといったものは、スミスの本来の考えといったところにまでいたるものではなくて、一つの定義づけといった性格をもつものであり、そこでは、価値の原因についてのスミスの概念的解釈における残る二つの要因すなわち資本と土地のための席が空席のままになっているのである。(労働と資本という) 2 要素モデルにおいてもまた、体化された労働が価値の尺度と原因の両方として使用されることはできる。しかしこれもまた、スミスの本来の考えといったところにまでいたるものではない。なおまたそういったことは、資本という要因を労働という要因に変換することが可能であるかぎりにおいて可能なのであり、その場合には体化された労働と支配される労働とはふたたび一致するということになるのである。支配される労働が見てとれるほど明らかに(また、不可避免的に?) ただ価値の尺度でありそして土地、労働および資本が共同して価値の原因であるのは、諸要素のうちの一要素として土地もくわわった 3 要素モデル

ルにおいてのみである。しかしながら、スミスの行った概念的解釈においては、モデルの次元といったことにはかかわりなく、支配される労働がずっと唯一の価値尺度でありつづけたのであり、そして三つの要素はずっと、共同して価値の原因でありつづけたのである。スミスはつぎのように述べる。「あらゆる社会において、すべての商品の価格は、究極的にはこれら三つの部分のどれか一つに、またはそのすべてに分かれるのであって、あらゆる進歩した社会では、この三つのすべてが、大多数の商品の価格のなかに、多かれ少なかれその構成部分としてはいりこんでいるのである」(WN, p. 50. 大河内訳〈I〉, 85ページ)。「ここで注意しなければならないのは、価格のすべての異なる構成部分の真実価値は、そのおのおのが購買または支配しうる労働の量によって測られる、ということである。労働は、価格のなかの労働に分かれる部分の価値だけでなく、地代に分かれる部分の価値、および利潤に分かれる部分の価値をも測るのである」(WN, p. 50. 大河内訳〈I〉, 85ページ)。

Kaushil [1973], pp. 63-64, p. 64n. 1.

なお、カウシルによれば、「初期未開の状態」すなわち1要素モデルにおける「唯一の原則 (rule)」としての投下労働 (labour-embodied) から、進歩した状態すなわち多要素モデルにおける支配労働尺度 (labour-commanded measure) への、矛盾しまた不必要な移行ということでリカードはスミスを非難したのであるが、実際はこのことが、スミスの議論における「原因」と「尺度」との混同、交換価値の投下労働尺度 (labour-embodied measure) と支配労働尺度とに関する混乱、矛盾、といった解釈を含めその後のすべての誤解の源泉となった、とみられている。このようなことを含めてスミスの価値分析についての後代の解釈に関するカウシルの見解については、Kaushil [1973], pp. 68-71 を見よ。

(10) Kaushil [1973], p. 64.

(11) Kaushil [1973], p. 65. なお、カウシルによれば、スミスの究極的な立場では、労働は、「生産物」の唯一の本源的な源泉でも交換価値の唯一の決定因でもなかったものであり、したがってまた、『国富論』には価値についての哲学的労働説と経験的三要素費用説という二つの理論が共存しているというヴィーザー (F. von Wieser) やその追隨者たちによる主張は支持しえないもののように思える、とされる。

Kaushil [1973], pp. 65-66.

## S. カウシル (1973年) についての覚書

まず、カウシルは、『国富論』第1篇第4章の終わりのほうの箇所においてスミスは水とダイヤモンドの例を用いながらみずからの価値分析の主題である交換価値を使用価値から区別したのち、つづく三つの章において (i) 交換価値の「真の」(不変の) 尺度 (第5章), (ii) 交換価値の、因果関係



的な諸構成要素（第6章）、(iii) 正常（自然）価格からの現実（市場）価格の乖離（第7章）、といった観点からの交換価値についての分析を提示することを約束している、とするのであった。そしてカウシルによれば、概念的には、交換価値の尺度の問題とはもともと、交換価値という事象そのものが出現してからのはじめで問題となるものであって、それは交換価値の「理論」すなわち交換価値の因果的説明といったことにかかわるものではなく、むしろそれは、すでに存在している交換価値の確認および定量化といったことにかかわるものであり、他方、もしも交換価値の共通の尺度をもたなければ諸商品のあいだの交換比率を定量化し通約可能なものにすることができず、またそれを行うことができなければこれらの比率の決定についての分析、因果的説明を始めることができない、この意味で、分析のうえでは、尺度、というよりはむしろ尺度という概念は、交換価値の説明にとっての必要条件なのであり、そして交換価値の尺度の問題と交換価値の因果的説明という問題は統合的に取り扱われなければならないものである、とされるのであるが、カウシルは、スミスのうえのような問題のたて方自体が、スミスが交換価値の尺度の問題と交換価値の因果的説明の問題という二つの問題を混同することなく、分析のうえでは統合されるべきものであるが概念のうえでは別個なものの、としているということを示している、とみるのであった。

そしてカウシルによれば、上記（i）交換価値の「真の」（不変の）尺度という問題に関してスミスは、穀物や銀はそれら自体の価値が不変でなくしたがってまた交換価値の異時点間および異場所間の比較のためには不適切で不満足なものであるとし、それにたいし熟練および辛さの相違に関して平均化された平均的なタイプのある一定の労働時間のあいだにある平均的な労働者がこうむる「労苦と骨折り」および、犠牲にする安楽、快適さおよび自由は、所および時にかかわりなく、その労働者にとっては同一の価値をもつものでありつづけるため、労苦や骨折り等々といった主観的な不効用を表現するところの「商品がふつつ購買し、支配しましたそれと交換されるべき労働の量」が真の、不変の尺度であるとしたのであり、したがってまた、スミスにしたがえば、もし一商品あるいは諸商品の全体が以前におけるよりもあるいは他の場所におけるよりもより多くの平均タイプの労働時間を支配するならば、この商品あるいはその全体はリアル・タームでの価値において増加したということになる、とされるのであった。またカウシルによれば、スミスは

さらにこの支配労働尺度のもっと容易に理解できる客観的な写しを持つことの必要性に気付いていたのであって、スミスはこの問題に対して、遠くへたった時点にわたっては生存穀物賃金の相対的不変性のゆえに穀物はその真実価値（支配される労働という観点からの価値）において相対的により安定的であるのにたいして貨幣や銀はそうでないと考え、貨幣賃金単位尺度よりも良好なものとして穀物賃金単位尺度を示唆した、しかしそのさいスミスはそれは精々のところ一つの近似的な写しであるにすぎないであろうということを実感しているものであった、とされるのであった。そしてまたカウシルによれば、支配労働尺度についてのこのようなスミスの所論は、経済成長、経済進歩ということを中心に展開される彼の議論にとって必要なものとしての成長、進歩の指標を考案しようという一つの試みとして解釈することもできるであろう、とされるのであった。

さらにカウシルによれば、スミスの議論では一貫して、「体化された労働」ではなく「支配される労働」が価値の尺度として使用されているとともに、この「支配される労働」は決して価値の原因としてとらえられているのではなく、他方、「労苦と骨折り」という概念は普遍的な不変の尺度としての支配労働尺度の妥当性を確証するためにのみ使用されていたのであって交換価値についてのなんらかの因果的説明を提出するために使用されていたのではないのであり、また、確かにスミスは労働の役割を強調し、「本源的代価」、「購買貨幣」としての労働、すべての「生産物」の源泉としての労働といった言説を示してはいるが、スミスの究極的な立場では労働は「生産物」の唯一の本源的源泉でも交換価値の唯一の決定因でもなく、そして、「本源的代価」、「購買貨幣」としての労働といったことによってスミスは、労働がもつ価値の原因としての属性というよりもむしろ労働がもつ価値の尺度としての属性を示そうとしているのだ、とされるのであった。

なお、カウシルによれば、従来それのもつ意義が十分に認識されてこなかったけれども、スミスが真の、不変の価値尺度として「労苦と骨折り」（すなわち不効用）タームでの支配される労働を使用したということは、直観的にはあるが、価値尺度とは一つの与件であるべきであって価値事象を説明する因果関係的体系にとっては〔与件としてその体系の外から与えられているものという意味で〕体系外のものであるべきであるという基本的要件を満たしていることになるのである、とされるのであった。

### 53. T. サウエル (1974年)

1974年にその著作権が成立した T. サウエル (T. Sowell) の一著書 (Thomas Sowell, *Classical Economics Reconsidered*, Princeton, N.J.: Princeton University Press, © 1974, 1st Princeton paperback printing, 1977 [5th paperback printing, with a new preface by the author, 1994]). なお、ここでは上掲1977年のペーパー・バック版を使用するのであるが、ここで取り扱うサウエルの研究の発表年の区分については、その著作権が成立した年、1974年をとり、そして、以下では、上掲1977年のペーパー・バック版を、Sowell [1974] と略記することとする) のなかでサウエルは、つぎのような内容をもった見解を示している。

① 古典派価値論は、特定の諸市場における価格決定という狭い問題だけではなく、経時的な所得の機能的分配、総産出物の測定、農産物と製造品との間の相対価格の経時的な変化といったようなより広い諸問題をも、取り扱い、「価値」ということについての古典派の諸考えは、個々の生産物価格の決定 (determination) の諸問題といったことをこえて、様々な目的のために産出量を測定もしくは評価すること (*measuring or valuing*) に関する諸問題といったことに、わたっていたのである。そして、そのような目的の一つは、厚生<sup>(1)</sup>の指標を提供するということであったのである。

② スミスは、一国の繁栄をその国が蓄積した金ストックで測った重商主義者たちとちがって、国民的繁栄を、その国の年々の、1人当たり所得というフローによって、測ろうとしたのであるが (*WN*, p. lviii. 大河内訳 < I >, 1 ページ), スミスの議論では、厚生<sup>(2)</sup>についての一指標として、産出量は、その産出物がどれほど多くの労働を支配しうるかということによって測定されるべきである、とされるのであった。<sup>(3)</sup>

③ ところで、ある所与の時点で、所与の技術のもとでは、「他の人々の労働」の量という指標は、「他の人々の労働の生産物」[の量]という指標と同じようなものとなるのであるが、このことからスミスはいつのまにか、それらのものを、時間の経過があるときにも同義のものとして、したがってま

た技術変化ということを考慮に入れることもなく、使用することとなった。<sup>(4)</sup>

④ とはいえ、ヨリ根本的には、スミスは、財貨の効用は、それらの財貨の消費者たちがそれらの財貨を手に入れるために甘受するであろう労働の不効用というものによって指し示される、と考えていたのであった。スミスはつぎのように述べている。「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう。彼の健康、体力、精神が普通の状態で、また彼の熟練と技能が通常程度であれば、彼はつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一部分を犠牲にしなければならない。彼が支払う代価は、それと引き換えに彼が受け取る財貨の量がどうであろうと、つねに同一であるにちがいない。なるほど、その労働は、より大きい分量のこれらの財貨を購入することもあれば、より小さい分量のこれらの財貨を購入することもある。だが、変動するのは、それらの財貨の価値であって、それらを購入する労働の価値ではないのである。時と場所のいかんを問わず、得がたいもの、すなわち獲得するのに多くの労働が費やされるものは、高価であり、また容易に入手できるもの、すなわちわずかな労働で入手できるものは、安価である。それゆえ、それ自身の価値がけって変動することのない労働だけが、すべての商品の価値を、時と場所のいかんを問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準である。労働はすべての商品の真実価格であり、貨幣はその名目価格であるにすぎない」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 57-58ページ<sup>(5)</sup>)。

⑤ なお、うえのスミスの文言は一つの価値尺度 (a *measure* of value) を定義しているのであって、それは、一つの価値理論 (a *theory* of value) ではないのである。また、たとえスミスが厚生についての別の指標を選んでいても、『国富論』におけるどの本質的な命題も異なったものにはなっていないであろう。事実、スミスは、「通俗的な意味」では別な価値尺度を選んだのであり、そして『国富論』全体をつうじてそれら二つのものの使用の間を行きつもどりつしていたのであり、彼の「真実の (real)」という言葉は、時として支配労働量を、また時として物的生産物の量を、意味していたのであった。<sup>(6)</sup>

(注)

(1) Sowell [1974], p. 99.

- (2) サウエルはつぎのようなスミスの文章を引用している。「あらゆる物が、それを獲得してしまった人にとって、またそれを売りさばいたり他のなにかと交換したりしようと思う人にとって、真にどれほどの値打ちがあるかといえば、それによって彼自身がはぶくことができ、またそれによって他の人々に課することのできる労苦と骨折りである。」(WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52-53ページ。) Sowell [1974], p. 99.
- (3) Sowell [1974], p. 99.
- (4) Sowell [1974], p. 99.
- (5) Sowell [1974], pp. 99-100. なお、サウエルはここでは(また、1994年の新刷でも)、スミスのこの文言の引用にさいしてスミスの原典に現れている単語の一つを抜かしているのであるが、サウエルがここで引用することを意図しているものは、本文でみたようなものである。
- (6) Sowell [1974], p. 100. なお、サウエルは、このように、古典派経済学では一つには厚生を指標を提示するという目的から価値尺度の問題がとりあげられ、そしてスミスは真の価値尺度、厚生を指標を、支配労働量あるいは物的生産物の量とした、とみるのであるが、さらにサウエルによれば、古典派経済学は、価値・価格の決定についての説明を与えるものというそれ自体独自の地位をもつものとしての価値理論に加えて、多くの価値「尺度」を生み出し、それらの尺度を様々な目的に応用したのであった、ただしその場合、ひとたびある考えを受け入れると価値「尺度」また特に不変の価値尺度といった考えそのものの正当性ということを問題にしえたはずであるけれども——サミュエル・ベイリー (S. Bailey) がなしたように——、その選ばれた特定の尺度が問題にされえたのは、もっぱら、正当性ということからではなくて便利性ということから、であるのであった、とされる。Sowell [1974], pp. 110-111.

なおまたサウエルは、古典派経済学の時代にあつてベイリーは、不変の価値尺度という考えを完全に経験的に具現するような物をもつことは経験的にも概念的にも不可能であるということを主張したのであり、さらにベイリーの一著書 ([Samuel Bailey], *A Critical Dissertation on the Nature, Measures, and Causes of Value; Chiefly in Reference to the Writings of Mr. Ricardo and His Followers* (London: R. Hunter, 1825). つまり、本書前出「20」の注2中で示されたように本書においてそのリプリント版が Bailey, *Dissertation* として略記されているもの。〔鈴木鴻一郎訳『リカード価値論の批判——価値の性質、尺度、及び原因に関する論文——』(日本評論社、1941年)。]) の表題にも示されているように、ベイリーは、価値の性質ということまた価値の尺度ということと通例混同されていた価値の原因ということを前二者から明確に区別した最初の人物であつたのであり、そしてうえの書物のうち、表題中の「価値の諸原因」に当たる部分は価値「理論」を扱っていた、とみている。それ

については Sowell [1974], p. 103 を見よ。また、ベイリーによる価値の尺度と価値の原因との相違に関する議論については、たとえば上掲のベイリーの著書の第10章「価値の尺度と価値の原因との相違について」も見よ。

## T. サウエル (1974年) についての覚書

サウエルは、古典派経済学は価値・価格の決定についての説明を与えるものという意味での価値「理論」に加えて多くの価値「尺度」を案出し〔ただし、サウエルによれば、古典派の諸議論のなかで「価値理論の問題」が「価値尺度の問題」とはじめて明確に区別されたのはベイリーによってであった、とみられるのであった〕、そしてそれらの尺度を様々な目的に応用しようとしたのであって、それらの目的のうちの一つには厚生指標の提供ということが考えられる、とみるのであるが、そのサウエルによれば、スミスは事実上、価値「理論」とは別に、支配労働量という価値「尺度」を提出し、そして彼の場合それを厚生についての一指標として使用しようとした、つまり、産出量をその産出物が支配する労働量によって測定することによって厚生の一指標を得ようという考えを提出したのであり、スミスは根本的には、財貨の効用はそれらの財貨の消費者たちがそれらの財貨を手に入れるために甘受するであろう労働の不効用によって指し示されるのであって、そのような意味での労働にたいする支配力が価値の尺度を、そして厚生の一指標を提供すると考えていたのである、とみられるのであった。

なお、サウエルによれば、ある所与の時点で所与の技術のもとでは支配労働量という指標とそれらの労働の生産物の量という指標とは同じようなものとしてとらえられることもできるのであるがスミスの議論では事実上、それらのものは時間の経過があるときにも同義的なものとしてとらえられており経時的な技術変化という要素が考慮に入れられていず、そしてそのスミスの議論では、「真実の」という言葉によって事実上、時として支配労働量のことがまた時として物的生産物の量のことが意味されているのであり、そのこと自体は『国富論』におけるスミスの議論そのものに本質的な影響を及ぼすものではなかったのではあるが、それら二つの指標は『国富論』全体をつうじて入れ代わり立ち代わり繰り返し使用されている、とされるのであった。

## 54. V. W. ブレイドゥン (1974年)

本書の「20」で V. W. ブレイドゥン (V. W. Bladen) の1938年の一論文が取り扱われたのであるが、そのブレイドゥンは、36年後の1974年に刊行された彼の著書 (Vincent W. Bladen, *From Adam Smith to Maynard Keynes: The Heritage of Political Economy*, Toronto & Buffalo: University of Toronto Press, 1974. 以下、Bladen [1974] と略記する) の第1篇「国富論 (The Wealth of Nations)」において、『国富論』におけるスミスの議論を検討する過程で以下のような形で示すこともできるであろうような見方を示している。

① スミスは事物の「真実価格 (real price)」という言葉を用いて、「それを獲得するための労苦と骨折り」ということを意味するものとして用いている (WN, p. 30. 大河内訳くI), 52ページ)。この意味で、スミスのいうこの「真実価格」とは、労働の質が改善されるにつれて、労働者がそれを用いて働くところの設備の量と質が増進するにつれて、また、技術が改良されるにつれて、低下するもの、生産性と表裏の関係にあるもの、である<sup>(1)</sup>。なお、スミスのいうこの「真実価格」という用語に関してつぎの二点に注意しておくことが必要である。その一つは、スミスはときとして「真実価格」を表すために「価値 (value)」という言葉を使用しているということである。第二の点はつぎのことである。すなわち、スミスのいう「真実価格」という概念は明確なものであり、また、それへの関心は当を得たものではあるけれども、それを測定したりその諸変化を測定したりするという問題は非常に困難なものであって、事実、生産性の測定 (measurement) ということは非常に困難なことで、現代の経済学者もそれにはまだ完全には成功していないのであり、スミスは「真実価格」の諸変化についてのおおよその指標しか提供しえなかったのではあるけれども、「真実価格」の諸変化を測定することに対する彼の関心と、交換価値の決定 (determination) を説明することへの彼の関心とを、混同してはならない<sup>(3)</sup>、ということである<sup>(4)</sup>。

② 他方、「価値 (value)」という言葉には多くの意味があるが、経済学者

たちにとっては、それは、一個の精確な意味をもっている。すなわち、財貨（もしくはサービス）の価値とは、それが市場において交換されるであろうなんらかの他の財貨もしくはサービスの量なのである。これは、明確で、観察することができ、測定することのできるものである。<sup>(5)</sup> なお、我々は貨幣経済にかかわっているため、こんにち我々は、価値について語るといったことはめったになく、むしろ、価格 (price) について、すなわち、一つの財貨もしくはサービスが交換されるであろうところの特に選ばれた一つの別の財貨すなわち貨幣の量について、語るのであるが、<sup>(6)</sup> 我々が価値について語ろうとあるいは価格について語ろうと、我々が二つの事物の間のある関係ということにかかわっているということは明らかなことである。我々が定義した用いているものとしての「価値」というもののなかには、内在的なものはなんにも存在しないのであり、どんな一財貨の価値も孤立的には語られえないのである。価値が変化するとき、たとえば、B 2 単位との交換に用いられていた A 1 単位がいまや B 3 単位と交換されるとき、価値において上昇したのは A であって B が価値において低下したのではないといったことは、言うことはできないのである（逆もまた同様）。そして、スミスがそのような誤りをおかしているように思えるときには、彼が「価値」という言葉を我々のいつている意味で用いているのか否かを、注意深く考えてみなければならないのである。<sup>(7)</sup>

③ もちろん、A と B との間の交換関係における変化は、たとえば、B ではなく A に影響を与えたなんらかの技術上の改良の結果である、といったことを示すことはできるかもしれない。このときには、スミスの「真実価格」という用語は有用なものとなる。すなわち、この場合には、B の「真実価格」は不変にとどまっていたのに、A の「真実価格」が低下した、ということになるのである。だが、諸商品の価値（あるいは価格）における変化そのものは、それらの諸商品の真実価格における諸変化そのものを知らせはしないのであり、それは、相対的諸真実価格における諸変化を、おおよそのところで、反映するだけなのである。<sup>(8)</sup><sup>(9)</sup>

④ 他方、「価値」とは、相対的な概念であるから、ある商品 (A) の価値がたとえば1800年と1900年の間に低下あるいは上昇したといったことは言うことはできない。正当に言うことのできるのは、B のタームでの A の価値は1900年におけるよりも1800年におけるほうが高かったあるいは低かったと



いうことだけである。つまり、諸価値の階層関係 (hierarchy) におけるAの位置が変化してしまっているというだけのことなのである。たしかにスミスは経時的に変化する小麦の価値について語ろうとしている、しかし彼は、他の諸事物と相対的な関係にあるものとしての小麦価値の諸変化といったことを考えようとしているわけではないのである。この脈絡においては、スミスは、「真実価格」のことを言おうとしているのである。すなわちスミスは、事物一般、また、特定の諸事物がより容易に入手できるようになっているか否かという史的な問題にたずさわろうとしているのである。<sup>10)</sup>

⑤ また、スミスは、「労働支配力 (labour command)」としての所得という考えをもっていたのであり<sup>(11)</sup>、そして、『国富論』では、労働にたいする支配力としての所得というその考えは、「あらゆる物が、それを獲得してしまった〔ブレイドウンが示している引用文では has required となっているが、スミスの原典では has acquired となっている〕人にとって、またそれを売りさばいたり他のなにかと交換したりしようと思う人にとって、真にどれほどの値打ちがあるかといえば、……それによって他の人々に課することのできる労苦と骨折りである」という見解 (WN, p. 30. 大河内訳 < I >, 52-53 ページ。〔 〕内は中川) へと、通じているのである。ところが、いま見た一節が含まれているパラグラフの次にくるパラグラフのなかでは、「彼の財産の大小は、……その財産で彼が購買または支配しうところの、他の人々の労働の量または同じことであるが他の人々の労働の生産物の量、に正確に比例する。あらゆる物の交換価値はその所有者にもたらされるこうした力の大きさにつねに正確に等しいにちがいない」といったことが述べられている (WN, p. 31. 大河内訳 < I >, 54 ページ)。もちろん、ここでは、一つの価値理論 (a theory of value) が提示されているのではなく、スミスはここでは「真実」価値 ('real' value) あるいは「真の値打ち (real worth)」についての定義を提示しようとしているのであるが、実質的には、そこには異なる二つのことが述べられているのである。このことから分かるように、スミスを理解するためには、彼が「価値」という言葉を使用するとき、さらに、「交換価値 (exchangeable value)」という言葉を使用するときにさえ、そこでは彼は、当該財貨が交換されるであろう (交換されると予期されうる) ところの他の事物の量〔つまり、上の②等で見られたような意味での、その財貨の「価値」〕のことを言おうとしているのか、それとも、その財貨が交換されるであろう

(交換されると予期されうる) ところの平均的労働の量 (人時, 延べ労働時間: man-time) [つまり, スミスの言うその財貨の「真実」価値あるいは「真の値打ち」] のことを言おうとしているのか, ということ識別するよう注意を払わなければならないのである。<sup>(12)</sup>

⑥ ところで, こんにち, ジャーナリストたちは, たとえばカナダとソビエト連邦とにおいて一枚のシャツの代金を稼ぐにはどれほどの労働時間が必要であるかということ, 語ろうとするのであるが, スミスも, 国際間の比較のための, 「特定財貨の労働支配力」という考えの使用ということに, 触れている, しかし, 彼がこの考えを用いたのは, 主に史的な考察のためであった。スミスは, 特定財貨の労働支配力 [つまり, その財貨の「真実価値」あるいは「真の値打ち」] における経時的な諸変化が, そのような財貨の「真実価格」 [つまり, その財貨を獲得するための「労苦と骨折り」] における諸変化の有用な指標である, と信じていたのであり, また, 彼がそのように信じていたということは, 理に合わないことでもなかったのである。<sup>(13)</sup>

⑦ なお, スミスは, 『国富論』第1篇第4章の終わりのところで, 「財貨の相対価値または交換価値と呼びうるものを決定する」(WN, p. 28. 大河内訳〈I〉, 49ページ) 原則 (rules) の検討にすむという彼の意図を述べるのであるが, スミスはまず, 「ある特定の対象物の効用をあらわす」ものとしての価値と, 「その対象物の所有がもたらす他の財貨にたいする購買力をあらわす」ものとしての価値とを区別し, そして水とダイヤモンドの価値のパラドックスについて述べ<sup>(14)</sup>, そののち, それにつづく若干の諸章での諸商品の交換価値を規制する原理の究明ということに関連して, それらの諸章で取り扱うべき問題を列挙している。人は, そのような叙述の後に展開される第5章「商品の真実価格と名目価格について, すなわち, 商品の労働での価格と商品の貨幣での価格について」は, 我々が「価値理論」と呼ぶものを, すなわち, 特定の諸商品の, 市場交換価値もしくは均衡交換価値の説明 (explanation), あるいは, 特定の諸商品の価格の説明といったことを, 取り扱うであろうと予期してきたのであった。ところが, 実際には, この第5章は, スミスの言う他財貨にたいする購買力としての交換価値の, したがってまた我々も受け入れている意味での価値の, 決定<sup>・</sup>ということを取り扱っていたのではなく, 生産性が変化——概していえば, 向上——するのにつれて, 特定財貨の「真実価格」, 「人時価格 (man-time price)」における諸変化

の測定<sup>(15)</sup>ということを取り扱っていたのである。

⑧ 結局のところ、スミスの主題は、諸国民の富についての一考察ということであったのであり、そしてそのような富は、生産性の向上につれて、増加するのである。<sup>(16)</sup>かくしてスミスは、変化する生産性についての考察ということに乗り出すこととなり、また、その測定にまつわる手ごわい諸困難に出くわすこととなるのであるが、彼はその問題を、生産性と表裏の関係にあるものとしての「真実価格」のタームで言い表したのであり、そして彼は、生産性よりもむしろ「安価さ (cheapness)」〔つまり、「真実価格」の低さ〕について語ったのであるが、それは、同一問題を攻究するいま一つの方法であるにすぎないのである。<sup>(17)</sup>

⑨ もともとそのようなものの測定ということには手ごわい諸問題が存在するのであるが、スミスもまたそれらの問題に出くわしていたのであり、そして、それらの問題にたいする彼の解決法は満足のいくものということからはほど遠いものではあったけれども、彼は、重要でかつ困難な諸問題を尋ねていたのである。それゆえ、彼の解答は、それらの問題の観点から検討されなければならないのであって、彼の解答は、我々が彼が尋ねると予期した諸問題に対する解答と考えられてはならないのである。スミスが第5章において、そしてさらに第11章<sup>(18)</sup>において探究していたのは、真の「安価さ」ということなのである。<sup>(19)</sup>

⑩ なお、スミスが第5章また第11章で探究していたのはこの真の「安価さ」、真実価格の低さということであったのであるが、他方でスミスの議論には、相対的な真実価格における諸変化は「価格」〔つまり、当該事物と交換される貨幣の量〕における諸変化に反映されるであろう〔異時点間で比べられた一事物の「真実価格」の諸変化、一事物の「真実価格」の経時的な諸変化は、その当該事物の「価格」の経時的な諸変化に反映されるであろう〕という想定が存在していたのであり、そしてこのことは、「労働価値説 (labour theory of value)」への固執を示すものと考えられるかもしれない。だがスミスはそこでは、経時的な諸変化について語っているのであって、ある所与の時点での価格の決定について語っているわけではないのである。また、特定諸財貨のあいだの相対的な価値における長期の諸期間 (long periods) にわたっての諸変化は、それらの財貨の相対的な諸真実価格における諸変化と、同一方向でかつ、おおよそ同一の大きさのものになるであろう

うということを認めるためには、ある所与の時点での均衡価値は相対的な労働費用 (labour cost) によって適切に説明されると考えなければならない、<sup>(20)</sup>  
<sup>(21)</sup>  
 というわけでもないのである。

⑪ ところで、うえてみたような意図のもとで展開されている第5章は、  
 (1)人は、「自分が支配できるその労働の量に応じて富んでいたり貧しかったりするにちがいない」(WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ), (2)「あらゆる物の真実価格は、……それを獲得するための労苦と骨折りである」(WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ), (3)「あらゆる物が、それを獲得してしまった人にとって……, 真にどれほどの値打ちがあるかといえば、……それによって他の人々に課することのできる労苦と骨折りである」(WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52-53ページ), といった考えの提示をもって始まっている。これは、継続する経済プロセスについての人間を中心にした見方である。しかしスミスは、それにまつわる多くの困難の存在に気付いていたのであり、そしてそれらの困難のうちのいくつかのものと取り組んだのであった。<sup>(22)</sup>

⑫ まず、労働の質は均一的でない、ということである。この問題にたいしてスミスは、「市場のかけひきや交渉」から生じる評価を用いるといった解決法を提示している (WN, p. 31. 大河内訳〈I〉, 55ページ)。たしかにこの解決法は非常に満足 of いくものというわけではない。だが、これと同じ問題には現代の研究者たちも悩まされているのであり、そして、たとえその問題に正確な解答を与えることは不可能であるとしても、おおよその、しかしことによるとたいへん有用な解答の可能性を探索することそれ自体を拒否すべきかといえば、それは問題である。<sup>(24)</sup>

⑬ なお、スミスは、商品の「真実価値」〔つまり、その商品によって他の人々に課することのできる労苦と骨折り〕の諸変化の尺度となるべきものは、ふつう考えられているような、その商品と交換されうる貨幣の量、貨幣価格ではなく、その商品が支配しうる労働の量であるということを、示そうとしている。ここで注意しておくべき点は、スミスが貨幣は不十分な尺度であるとするときには、ある所与の時点における諸相対価値の尺度としてではなく、「真実価値」の諸変化の尺度としてなのだ、ということである。また、『国富論』第1篇第5章を全体として注意深く研究し、さらに、第8章における文言、<sup>(26)</sup> および第11章における諸概念の使用法、について注意深く研究してみれば、スミスは主に、「真実価格」〔つまり、当該事物を獲得するための

労苦と骨折り」における諸変化の測定ということに、関心をいただいていたということ、そして、「労働支配力」における諸変化へのスミスの関心は、「労働支配力」における諸変化は「真実価格」における諸変化の最も良好な（ただし正確なということからはほど遠いものではあるけれども）指標となるものであるという彼の確信から、生じているということは、明らかなことであるように思えるのである。ただし、「真実価格」における諸変化と「労働支配力」における諸変化との間のこのおおよその相関ということは、ある所与の時点における均衡価値についての一つの単純な労働説といったものを暗に示しているものではなく、またそれは、なんらかの機械的な関係という意味を含んでいるわけでもないのである。すなわち、スミスは、「真実価格」における変化が供給事情の変化を経て「労働支配力」における変化を引き起こすプロセスに、十分に気付いていたのであり、さらにすすんで第11章では彼は、供給事情の変化と同じように需要事情の変化にも注意しなければならないということ<sup>(27)</sup>を、認めるにいたっていたのである。

⑭ 他方、「真実価格」〔つまり、当該事物を獲得するための労苦と骨折り〕における諸変化について研究し、そして、そのような諸変化を測定するために「労働支配力」における諸変化を使用するということは、人時（man-time、延べ労働時間）が「労苦と骨折り」についての一つの理にかなった尺度であるということ<sup>(28)</sup>を、当然のこととして含んでいる。それゆえスミスにとって、「伴われる辛さ」の一検査手段として労働の継続期間というものを弁護することが必要になるのであった。

⑮ このようにしてスミスは、財貨の「真実価値」〔つまり、その財貨によって他の人々に課することのできる労苦と骨折り〕における諸変化の尺度は、その財貨と交換される貨幣の量ではなくて、その財貨が支配しうる労働の量であるとし、そしてこの支配しうる労働の量における諸変化がその財貨の「真実価格」〔つまり、その財貨を獲得するための労苦と骨折り〕における諸変化の指標となる、と考えるのであるが、他方でスミスは、〔財貨のこのような「労働支配力」を実際に知るためには労働の時価を知ることが必要となるのであるが〕「離れた時と場所では労働の時価が多少とも正確にわかるということはほとんどありえない」（WN, p. 38. 大河内訳〈I〉, 65ページ）とするのであった。そしてこの問題にたいしてスミスは、穀物の時価は一般にヨリ良く知られているとし、そして、「穀物の時価は労働の時価と

つねに正確に同一割合にあるからというのではなく、ふつう入手できるもののなかでは、その割合にいちばん近づきうるものであるがゆえに」(WN, p. 38. 大河内訳〈I〉, 66ページ), 労働支配力における諸変化〔「真実価値」における諸変化〕の, したがってまた「真実価格」における諸変化の, 一つのおおよその尺度としては、穀物支配力における諸変化で満足しなければならない、と考えたのであった。<sup>(31)</sup>

⑯ ところで、「真実価値」における諸変化〔労働支配力における諸変化〕のおおよその尺度として穀物を選ばれるためには、穀物は幾世紀にもわたって、ある安定的な労働支配力を、また、ある安定的な「真実価格」——〔「真実価格」における諸変化と「労働支配力」における諸変化との間にはおおよその相関があり、「真実価格」における変化は「労働支配力」における変化を引き起こすのであった〕——をもつものでなければならないのであるが、スミスはこのような観点から、穀物の選択をまず経験的な根拠から基礎づけようとする<sup>(32)</sup>とともに、さらに、二つの道すじにそってその選択にたいする理論的な支持を与えようとするのであった。<sup>(33)</sup><sup>(34)</sup>

⑰ たしかに、変化する真実価値の尺度として穀物を選ぶことに對してスミスがそこで与えている理論的な支持は非常に薄弱なものである。だが、スミスによる尺度の選択そのものに対してたとえどんなに批判的であるとしても、彼がその尺度をどのように使用していたのかということを見ることは必要なことである。第11章における「過去4世紀間における銀の価値の変動に関する余論」を見る場合には、つぎのことを想起することが必要であらう。すなわち、そこでの問題は、我々が予期するであろうような一般的購買力における諸変化ではなく、労働支配力における諸変化をまた究極的には真実価格の諸変化を指し示すものとしての、銀の穀物価格(corn price of silver, 穀物タームでの銀の価格)における諸変化といったことである、ということである。<sup>(36)</sup>

#### (注)

- (1) ブレイドウンによれば、このようなことを意味する「真実価格」とは、ボールディング(K. E. Boulding)の「人時価格(man-time price)」にあたるものであり、それは、生産性と表裏の関係にあるもの、あるいは、ボールディングの「変換係数(coefficients of transformation)」と表裏の関係にあるもの、である、とされる。また、ブレイドウンによれば、国民の富の増加、「豊富さ(plenty)」の向上は、労働生

産性の増進の結果であり、また、人間は扱いにくい自然から財貨を自分の労働でもって購買しているのだと考えるならば、この労働生産性増進は、「安価さ (cheapness)」をもたらすと言うことができるのであり、そして、この生産性増進、安価さや豊かさのこの発展は、たしかに、配分プロセスと同様多くの研究に値するものである、とされる。Bladen [1974], p. 7.

- (2) このことに関連してブレイドゥンはつぎのような説明をくわえている。すなわち、スミスの議論を読んだり解釈したりするさいには、彼が「価値」という言葉を使用しているとき彼はそれによって、我々がこんにち「価値」という言葉によって意味しているものを意味していると断言したり、あるいはまた、彼が「価値」という言葉によってつねに同じものを意味していると断言したりしないよう注意しなければならない。経済学の揺籃期にあっては、語法は不精確で、はっきりとしないものであって、なんのこともなしに同一の言葉が異なった意味で使用されているのを発見したとしても、それは驚くには足らぬことである。だが、議論の脈絡一般が、特定の事実を明らかにする、ということに認めることを拒否してもよいという理由はない。このことは、古典派の諸経済学者一般についての解釈に共通する一つの問題であり、また、たぶん、ヨリ一般的に、すべての経済学者についてもあてはまることなのである。Bladen [1974], pp. 7-8.
- (3) このことにに関してブレイドゥンはさらにつぎのような説明を加えている。すなわち、ジード (C. Gide) とリスト (C. Rist) はそれらを混同して、「前においては、『真実』価格は労働に基礎を置く価格を意味していたのであった。今は、『自然』価格が、その生産費で評価される財貨の価格として定義されている。名前の変更は大きな意味を持たない。スミスがその双方において追求していたものは、市場価格の変動の背後につねに隠れているあの真の価値であった。それは同一の問題である、しかし新しい解答が与えられているのである」と述べているが〔我々が本書の「9」で取り扱った Gide & Rist [1909] の pp. 94-95 (前掲邦訳 (上), 111ページ) を参照せよ。なお、ブレイドゥン自身はここでは、フランス語版第2版 (1913年) の英訳である英語版第1版 (1915年) を使用している〕、けっしてそれは同一の問題ではなかったのである。スミスは一方のところでは生産性の諸変化に関心をいだいていたのであり、他方のところでは、市場での資源配分および均衡価格に関心をいだいていたのである。Bladen [1974], p. 8.
- (4) Bladen [1974], pp. 7-8.
- (5) このことに関連してブレイドゥンはつぎのような内容の説明を加えている。すなわち、経済学者たちにとって「価値」という言葉は本文で見たような意味をもつのであるが、他方でまた、経済学者たちは一般に、彼らが一商品の正常価値 (normal value)、長期価値あるいは均衡価値と呼ぶところのあるものに、すなわち、本文で見たような交換関係の、すべての決定因がなんの妨害もなしにその究極的な結末に

まで作用しつくすための時間があったならそのときに一商品が交換されると予期されるであろうなんらかの他の商品の量に、関心をいだいている。これは明らかに、観察可能なものでも測定可能なものでもなく、事実、そのようなことは決して達成されるものではないのである。すなわち、ある所与の一群の諸決定因の長期的均衡に到達する前に、きつと、それらの決定因のうちのいくつかのものは変化してしまっているのである。ところで、本来、「価値」という言葉は、経済学の分野では、本文で見たようなことを意味するものとして用いられるべきであり、そして、そのようなことを表すものとしての「価値」は、いま見たようなことを表すものとしての正常価値、長期価値あるいは均衡価値と呼ばれているものとは区別されるべきもののなのであるが、現実には、そういった区別がなされないままに「価値」という言葉が使用されていることがあるのである。このことからしても、我々は、ミスが「価値」という用語を我々よりもはるかに多くの意味で用いているということにたいしてはもっと寛大であるべきなのである。Bladen [1974], p. 9.

- (6) ブレイドウンによれば、このことは、ミスにおいても同様であったのであって、彼は交換価値を「他の財貨にたいする購買力」として定義し、そして、「諸商品の交換価値を規制する原理を究明する」ことを約束してはいるが (WN, p. 28. 大河内訳〈I〉, 50ページ), 彼は、『国富論』第1篇〕第7章において、諸商品の自然価格と市場価格を議論することへとすすんだのであった、とされる。Bladen [1974], p. 9.

- (7) Bladen [1974], p. 9.

- (8) この間の事情をブレイドウンは概ねつぎのように説明しているといえる。すなわち、二つの事物の間の交換関係における変化がなんらかの技術上の変化、したがって「真実価格」の変化の結果であったとし、そしていま、現に、技術上の変化〔→「真実価格」の変化〕の結果、AとBとの間の交換関係にある一定の変化が生じたとする。たとえば、従来、A 1単位はB 2単位と交換されていたのに、いまや、A 1単位がB 3単位と交換されるようになった、とする。ところで、相対的な交換価値におけるこの同一の変化は、④Bの「真実価格」が不変にとどまったままでのAの「真実価格」の上昇ということ〔AとBとの間で、Aの「真実価格」が相対的により高くなる→A 1単位がB 2単位とではなくB 3単位と交換される〕とも、あるいは、⑤Aの「真実価格」もBの「真実価格」もともに低下するがAの「真実価格」の低下よりもBの「真実価格」の低下のほうが大きかったということ〔AとBとの間で、Aの「真実価格」が相対的により高くなる→A 1単位がB 2単位とではなくB 3単位と交換される〕とも、あるいはまた、⑥Aの「真実価格」もBの「真実価格」もともに上昇するがAの「真実価格」の上昇よりもBの「真実価格」の上昇のほうが小さかったということ〔AとBとの間で、Aの「真実価格」が相対的により高くなる→A 1単位がB 2単位とではなくB 3単位と交換される〕とも、結びつけられう



るのである。Bladen [1974], pp. 9-10.

(9) Bladen [1974], pp. 9-10.

(10) Bladen [1974], p. 10. さらにブレイドゥンは、諸国民の富は所与の資源の合理的配分のプロセスにおける改善といったことに依存するのと少なくとも同じほかに、またおそらくそれよりもはるかに多く、技術改良の史的プロセスに依存していると述べるのは、理にかなったことではないであろうか、としている。Bladen [1974], p. 10.

(11) ブレイドゥンはつぎのような説明をなしている。すなわち、スミスは、人は「自分が支配できるその労働〔すなわち、他の人々の労働〕の量に応じて、富んでいたり貧しかったりするにちがいない」と述べている（WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52 ページ。〔 〕内はブレイドゥン）。たしかにこの考えはこんにち、聞き慣れないものである。しかしそのような考えはA. マーシャル (A. Marshall) や J. M. ケインズ (J. M. Keynes) のなかに見いだされるのであり、また、カーライル (T. Carlyle) は、「6 ペンス持っている人は、すべての人々に対して（6 ペンスだけ）君主である。すなわち彼は——6 ペンスの範囲だけ——料理人をして彼のために料理することを、哲学者をして彼に教えることを、国王をして彼を守ることを、命じるのである」と述べたのであった。実質的な経済プロセスを人々が仕事をしているとともに他人の仕事 (work) を支配しているというプロセスとみなすこのような見方は、古典派の理論の展開、また後の、社会主義的理論の展開において大きな重要性をもったものであり、そしてそれはいまでも意味をもつものである。（詳しくは、Bladen [1974], pp. 10-12 を見よ。）

(12) Bladen [1974], p. 12.

(13) Bladen [1974], p. 12.

(14) このパラドックスについてのスミスの叙述に対するブレイドゥンの論評については、Bladen [1974], p. 19 を見よ。

(15) Bladen [1974], pp. 19-20.

(16) ブレイドゥンによれば、『国富論』の主題は、均衡ではなくて富 (wealth) であり、生産性の向上についての議論が、市場での交換の営みについての議論に優先している、とされる。Bladen [1974], p. 13.

(17) Bladen [1974], p. 20.

(18) ブレイドゥンによれば、もし、第5章をこえてさらに、スミスの価値理論について述べる人々によって注意を払われることのないのがしばしばであった第11章での特定諸商品の「真実価格」における諸変化についての研究というものへと、進むならば、スミスが真になそうと試みていたことは、もっと明らかになる、とされる。

Bladen [1974], p. 20.

(19) Bladen [1974], pp. 20-21. なお、ブレイドゥンによれば、スミスは第8章「労働

#### 54. V. W. ブレイドゥン (1974年)

の賃金について」のある箇所で、労働の生産力の改善とともに「すべての物はだんだんと安価になったであろう。それらはより少ない量の労働で生産されたであろう」(WN, p. 64. 大河内訳〈I〉, 110ページ)ということの説明しており、そしてこの箇所もまたスミスの価値理論について論じる諸議論において一般に無視されているのではあるが、この箇所は、「真実価格」、真の「安価さ」に対するスミスの関心とすることを示すものである、とされる。Bladen [1974], p. 20.

そしてまたブレイドゥンによれば、第8章でのいま見た一節を含むパラグラフの次にくるパラグラフのなかで示されている文章では、「安価な」という言葉の用法の曖昧さとともに「真実価格」と「価値」との間のちがいが鮮明に表れている、とされる。すなわち、「たとえすべての物が真により安価になったとしても〔すなわち、たとえすべての物の「真実価格」が低下したとしても〕、外見上、まえよりも高価になったものも少なくないかもしれない。つまり、より多量の他の財貨と交換されるものも少なくないかもしれない。たとえば、大多数の職業において労働の生産力が10倍に増進したと……仮定しよう。だが他方、ある特定の職業では労働の生産力が2倍にしか増進しなかったと……仮定しよう。大多数の職業における1日分の労働の生産物を、この特定の職業における1日分の労働の生産物と交換するにあたっては、前者における所産(work)のもとの量の10倍量は、後者における所産のもとの量の2倍量しか購買しないことになるであろう。後者のある特定量は……、まえより5倍も高価になっているようにみえるであろう。けれども実は、それは安価さ2倍のものになっているはずなのである。なるほど、それを購買するのに5倍の量の他の財貨が必要になったとはいえ〔その「価値」が5倍になったとはいえ〕、それを購買するのにも生産するのにも、わずかに半分の量の労働しか必要としないであろう〔その「真実価格」は半分に低下しているであろう〕」(WN, pp. 64-65. 大河内訳〈I〉, 110-111ページ。〔 〕内は中川)。Bladen [1974], pp. 20-21.

- (20) いま、一事物の「真実価格」の経時的な諸変化はその当該事物の「価格」の経時的な諸変化に反映されると想定し、特定諸財貨のあいだの相対的な価値における長期の諸期間にわたっての諸変化はそれらの財貨の相対的な諸真実価格における諸変化と、同一方向でかつ、おおよそ同一の大きさのものになるとすると、そのような事情は、具体的にはたとえばつぎのような情況として示すことができよう。たとえば、当初においては、財貨A 1単位は財貨B 2単位と交換されていた(したがって財貨Aの「価格」は財貨Bの「価格」の2倍)、つまり、財貨A 1単位は財貨B 2単位に相当していた、そして同時に、財貨A 1単位の「真実価格」は財貨B 1単位の「真実価格」のおおよそ2倍であった、だが、長期において、財貨A 1単位は財貨B 2/5単位と交換されるようになり(したがって、財貨Aの「価格」は財貨Bの「価格」の2/5)、つまり、財貨A 1単位は財貨B 2/5単位に相当するようになり、かつ、財貨A 1単位の「真実価格」がおおよそ1/10に低下(この低下は財貨Aの「価格」

の低下に反映される), 財貨B 1 単位の「真実価格」がおおよそ $1/2$ に低下(この低下は財貨Bの「価格」の低下に反映される)している, といったような状況である。この場合には, 財貨Aと財貨Bとのあいだの相対的な価値における変化は, 財貨A 1 単位=財貨B 2 単位(財貨Aの「価格」は財貨Bの「価格」の2 倍)から財貨A 1 単位=財貨B  $2/5$  単位(財貨Aの「価格」は財貨Bの「価格」の $2/5$ )への変化となり, 当初財貨A 1 単位は財貨B 2 単位に相当していたのにいまや財貨A 1 単位は財貨B  $2/5$  単位に相当するということになっている。他方, 当初財貨A 1 単位の「真実価格」は財貨B 1 単位の「真実価格」のおおよそ2 倍であったのに, いまや, 財貨A 1 単位の「真実価格」は財貨B 1 単位の「真実価格」のおおよそ $2/5$ ということになっている。それらの財貨各々の「真実価格」の変化はそれらの財貨各々の「価格」の変化に反映され, それらの財貨のあいだの相対的な価値における変化は, それらの財貨の相対的な諸真実価格における変化と同一方向でかつ, おおよそ同一の大きさ, となっているのである。本章の前出③および注8 も見よ。

- (21) Bladen [1974], p. 21. ブレイドウンによれば, 本章の注19でみた「けれども実は, それは安価さ2 倍のものになっているはずなのである」というスミスの例を用いるとすれば, その文章に「おおよそ」という言葉を加えて, 「けれども実は, それは(おおよそ) 安価さ2 倍のものになっているはずなのである〔(その相対的な価値, 交換価値は5 倍になっている——うへの注20での例では, 財貨B 1 単位=財貨A  $1/2$  単位から財貨B 1 単位=財貨A  $5/2$  単位——が,) けれども実は, その「真実価格」においては, それは, おおよそ安価さ2 倍のものに, つまりその「真実価格」はおおよそ半分になっているはずなのである〕」(〔 〕内は中川)とすれば, それだけでよいのである, とされる。Bladen [1974], p. 21.

- (22) Bladen [1974], p. 21.

- (23) ブレイドウンはつぎのようなスミスの文章を引用している。「1 時間の辛い作業におけるほうが, 2 時間のやさしい仕事におけるよりも, いっそう多くの労働があるかもしれない。また, 習得するのに10年の労働がかかる職業に1 時間はげむばあいのほうが, 平凡なわかりきった業務で1 ヶ月働けばあいよりもいっそう多くの労働があるかもしれない。」(WN, p. 31. 大河内訳〈I〉, 55ページ。)Bladen [1974], p. 21.

- (24) Bladen [1974], pp. 21-22. このことについてブレイドウンは概ねつぎのような説明をくわえているといえよう。すなわち, 改良の過程において要素混合率が変化するときの生産性を研究する場合には, 我々はこれと同じ問題に直面する。たとえば, 検討される期の当初においては, 一つの種類の労働(すなわち, 一つの種類の投入物)  $x$  単位ともう一つの種類の労働  $y$  単位とが, 特定生産物をA 単位だけ生産した, と仮定しよう。もしも, いまや  $0.5x$  単位と  $0.5y$  単位とが同一量すなわちA 単位だけ生産するようになっているならば, その商品の真実価格は半分になった, また,

この生産業における生産性は2倍になった、と言われることができる。だが、技術変化が混合率の変化を伴うと仮定しよう。こういったことはほとんど確実におこることなのであるが、たとえば、 $0.3x$  単位と  $0.8y$  単位とがA単位を生産するかもしれない。この場合には、人は、真実価格は低下したと言うことであろうけれども、その低下の程度についてのある満足のいく測定値を与えることはできないであろう。また、もしも新しい混合率が  $0.5x$  単位と  $1.2y$  単位とであったならば、真実価格が低下したのか、上昇したのか、あるいは同一のままにとどまったのかということも満足のいくように確定することはできないであろう。もちろん、もしもその  $x$  という単位数と  $y$  という単位数との間に相当関係を確立することができるならば、一つの答えを与えることができるであろう。だが、その相当関係を市場から得ようというのは、一つの非常に疑わしいやり方である。しかしながら、この問題はいまもなお、生産性の変化について研究する人々を悩ましているもののなのである。ただし、その問題によって悩まされるその度合いは、多くは、どの程度の正確さを求めるかということに依存しているのである。たとえ正確な解答を得ることは不可能であるとしても、おおよその、しかしことによるとたいへん有用な解答の可能性を探求することそれ自体は、はたして拒否されるべきことなのであろうか。Bladen [1974], pp. 21-22.

- (25) ブレイドウンはつぎのような説明をなしている。すなわち、スミスは、「しかし、たとえ労働はすべての商品の交換価値の真の尺度ではあっても、それらの商品の価値がふつう評価されるのは、労働によってではない」(WN, p. 31. 大河内訳< I >, 55ページ)、それは「労働の量か、または他のある商品の量によって評価されるよりも、貨幣の量によって評価される場合がいつそう多い」(WN, p. 32. 大河内訳< I >, 56ページ)、と述べている。ところで、もしスミスがここで真に語っていたのが厳密な意味での交換価値〔すなわち、市場において当該財貨（もしくはサービス）と交換される他の財貨もしくはサービスの量〕についてであったとすれば、こういった文言は陳腐な文言というように思えることであろう。だが、スミスはここでは、ある所与の時点における諸相対価値といったものに関心を怠っていたのではなくて、彼が特定諸商品の「真実」価値と考えるもの〔それらの特定諸商品によって他の人々に課することのできる労苦と骨折り〕の長期の諸期間にわたっての諸変化といったことに関心を怠っていたのであり、そしてスミスは、そういったことのためには貨幣は不十分なものである、すなわち、貨幣価格における変化はこの「真実価値」における諸変化を良好に指し示すことができない、とするのである。つまり、「けれども金銀は、すべての他の商品と同じようにその価値が変動し、安価なこともあれば高価なこともある……。ある特定量の金銀で購買または支配できる労働の量は、……たまたま知られている諸鉱山の豊度の程度につねに依存する……。アメリカの豊富な鉱山が発見された結果、16世紀に、ヨーロッパにおける金銀の価値は

以前の約3分の1に下がった。それらの金属類を鉱山から市場へもたらすのに費やす労働がいっそう少なくなったので、それらの金属類が市場へもたらされたときに、購買または支配できた労働もいっそう少なくなった。……それ自身の価値がたえず変動するような商品は、他の諸商品の価値の正確な尺度とは、けっしてなりえない」(WN, pp. 32-33. 大河内訳〈I〉, 57ページ), ということになるのである。もちろん、貨幣は、我々の現代的な意味での価値の、最善の尺度である。というのは、そのばあい我々はある所与の時点での諸相対価値について語っているのであり、そしてそれらの所与の時点では、観察されることのできるものは、相対的な諸貨幣価格であるからである。だか、スミスが貨幣は不十分な尺度であるとするばあい、それは、真実価値の諸変化の尺度としてなのである。Bladen [1974], p. 22.

(26) 本章の前出注19を見よ。

(27) ブレイドウンによれば、スミスが貨幣金属の価値における変化に言及したときには、彼は、我々ならそうしたであろうように一般的購買力 (general purchasing power) における諸変化ということに関心をいだいていたのではなく、労働支配力における諸変化ということに関心をいだいていたのであり、そして、銀は「それが費やさせる労働がいっそう少なくなったので……いっそう少ない労働しか支配できなかった」(WN, p. 32. 大河内訳〈I〉, 57ページ) というスミスの言明は、貨幣金属を良き尺度としては排するものであるけれども、それはまた同時に、「真実価格」あるいは人時価格——このようなものは、記録の欠如のために長期の諸期間にわたって確定することの不可能なものである——における諸変化の尺度として、「労働支配力」——これは、記録の不十分さのゆえに長期の諸期間にわたって確定することの困難なものである——における諸変化といったものを受け入れるための、一つの根拠を提供してもいる、とされる。Bladen [1974], p. 23.

(28) Bladen [1974], pp. 22-23.

(29) Bladen [1974], p. 23. ブレイドウンは、スミスがそのような弁護をなしているものとしてスミスのつぎのような文章を引用している。「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう。彼の健康、体力、精神が普通の状態で、また彼の熟練と技能が通常程度であれば、彼はつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一部分を犠牲にしなければならない。彼が支払う代価は、それと引き換えに彼が受け取る財貨の量がどうであろうと、つねに同一であるにちがいない。なるほど、その労働は、より大きい分量のこれらの財貨を購入することもあれば、より小さい分量のこれらの財貨を購入することもあろう。だが、変動するのは、それらの財貨の価値であって、それらを購入する労働の価値ではないのである。」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 57-58ページ。) Bladen [1974], p. 23.

なお、ブレイドウンによれば、うえの引用文では価値という言葉がきわめてルー

ズに用いられているが、その意味しているところは、疑いなく明確なものである、すなわち、「変動するのは、それらの財貨の価値〔正確に言えば、真実価格〕であって、労働の価値〔正確に言えば、不効用〕ではないのである」ということを意味しているのである、とされる。(Bladen [1974], p. 23. [ ]内はブレイドウン。) また、このことに関連してブレイドウンはつぎのような内容の指摘をなしている。それによれば、スミスはたしかに価値という言葉を経路に使用しているものであり、そしてそのことを批判するのは正当なことである、しかし、著者がある言葉を三つあるいは四つの異なる意味で使用していることがまったく明らかであるのに、その著者がその言葉を一つの意味でのみ用いていたと想定することによってその著者の労作を無意味なものと考えてしまうことは、正当なことでも有用なことでもないように思える、とされる。詳しくは Bladen [1974], pp. 23-24 を見よ。

さらにまた、ブレイドウンによれば、不効用といったものが、スミスの考えているほど明確に、労働の継続期間 (duration of labour) というものに結びつけられるのか、また、1時間の労働の不効用はずっと不変のままにとどまってきたのか、といえ、それについては否定的であらざるをえないし、また、そういったものは折々測定するといったことのできないものなのである、だが、おおよそのであれ、「真実価格」にどのような諸変化が生じてきたかを知ることが、意義のありつづけることであり、たとえ、その諸変化をA. マーシャルが「真実の費用 (real cost)」と呼ぼうとしたものにおける諸変化と同一視することはできないとしても、そうなのである、とされる。Bladen [1974], p. 24.

- (30) ブレイドウンによれば、スミスは、「それゆえ、同一の時と場所では、貨幣は、すべての商品の真の交換価値の正確な尺度である」(WN, p. 37. 大河内訳 <I>, 64 ページ) ということを確認しつつも、「ある特定の商品の、様々な時と場所における様々な真実価値、すなわち、ある特定の商品が、様々な場合にそれを所有する人たちに与える、他の人々の労働を支配する力の様々な程度」(WN, p. 38. 大河内訳 <I>, 65 ページ) を比較するためには、「ふつうその商品を買ってそれと引き換えに得た銀の量の違いよりも、むしろ、それらの様々な量の銀が購買しえた労働の量の違い」(WN, p. 38. 大河内訳 <I>, 65 ページ) を比較することが必要であるとした、とされる。Bladen [1974], p. 24.

- (31) Bladen [1974], p. 24.

- (32) ブレイドウンは、スミスのあげる経験的根拠を示すものとして、「穀物で納めることになっている地代は、貨幣で納めることになっている地代にくらべて、その価値をはるかによく保持してきた」(WN, p. 34. 大河内訳 <I>, 60 ページ) というスミスの文言を引用している。Bladen [1974], p. 24.

- (33) ブレイドウンは、スミスは一つには、「労働者の生活資料」である穀物を所有する人は労働を支配するということから、穀物を選ぶことにたいする理論的な支持を

与えている、とみて、つぎのようなスミスの文言を引用している。「それゆえ、遠くへだたった時点では、等量の穀物のほうが、同一の真実価値により近いものをもっている。すなわち、等量の穀物によってその所有者は、他の人々の労働の同一量により近いものを購買または支配することができるだろう。ここでことわっておくが、私は、穀物の等量は、ほとんどの他のどのような商品の等量よりもより近似的に、このことをなすであろう、と言っているのである。というのは、穀物の等量ですらも、そのことを正確にはなしはないであろうからである。労働者の生活資料は……場合によって非常に異なることがあるのである。」(WN, p. 35. 大河内訳〈I〉, 61ページ。) Bladen [1974], p. 25.

また、ブレイドウンによれば、スミスはあとのほうでさらに、穀物を選ぶことにたいする理論的な支持を与えるものとして、18世紀の農業革命にもかかわらず、穀物の「真実価格」は長期の諸期間にわたって安定的であったということをあげている、とされる。そしてブレイドウンは、そのことをあらわすものとして、『国富論』第1篇第11章における「過去4世紀間における銀の価値の変動に関する余論」でスミスが示しているつぎのような文章を引用している。「そのうえ改良のあらゆる段階において土壌と気候が同じであれば、等量の穀物の生産には平均的にほぼ同量の労働を必要とするであろう……。というのは、耕作が進歩しつつある状態での労働生産力の不断の増大は、農業の主要な用具である家畜の価格の不断の増大によって多かれ少なかれ相殺されるからである。それゆえ、我々は、以上すべての理由から、いかなる社会状態、いかなる改良の段階にあっても、等量の穀物は他のいかなる等量の土地の原生産物よりも、いっそうよく等量の労働を代表するであろう……ということを安んじて確信してよいだろう。」(WN, p. 187. 大河内訳〈I〉, 309ページ。) Bladen [1974], p. 25.

(34) Bladen [1974], pp. 24-25.

(35) ブレイドウンによれば、収穫逡減というリカードウ的脅威の認識といったことはまだ幾十年も先のことであったけれども、本章の前出注33で見られたような、費用逡増を促進する要因と費用逡減を促進する要因という対立的な要因が互いに相殺しあうであろうといった予想は、たしかに、無理なものであった、とされる。

Bladen [1974], p. 25.

(36) Bladen [1974], p. 25.

## V. W. ブレイドウン (1974年) についての覚書

『国富論』の主題を生産性の向上につれて増加する諸国民の富についての考察として捉えるブレイドウンは、『国富論』第1篇第5章は交換価値の決定、説明といったことを取り扱うのではなく、その第5章さらに第11章にお

いてスミスが取り扱っていたことは、生産性の変化の測定（これはまた交換価値の尺度の問題とも異なる）といったことにかかわるものであった、という見方を示すのであった。

そして、ブレイドウンによれば、スミスはその問題を「真実価格」の変化の測定という形で取り扱った、すなわち、スミスは、用語の使用の仕方において不精確ではあったが、事物の「真実価格」を、生産性と表裏の関係にある「その事物を獲得するための労苦と骨折り」とし、そしてその意味での「真実価格」における変化の測定という問題を取り扱った、とされるのであった。

また、ブレイドウンによれば、他方でスミスは、「労働支配力」としての所得という彼のもっていた考えをつうじて事物の「真実価値」とは「その事物によって他の人々に課することのできる労苦と骨折り」であるという考え方を示し、その「真実価値」は「その事物で購買または支配しうる他の人々の労働の量に正確に比例する」とし——なお、ブレイドウンによれば、この場合にもスミスは必ずしも一貫した語法をとっているわけではないが、こういったものとしての「真実価値」は、市場において当該事物と交換される他の財貨もしくはサービスの量としての「価値」、「交換価値」とは別のものと考えられるべきものである、とされるのであった——、そしてその「労働支配力」における変化が、当該事物の「真実価値」における変化の尺度を提供するとともに、さらに、当該事物の「真実価格」における変化のおおよその、しかし最も良好な指標を提供する、と考えた、とされるのであった。

このように、ブレイドウンのみるところによれば、スミスは「支配される労働の量」における変化を「真実価値」における変化の尺度、「真実価格」における変化のおおよそのしかし最も良好な指標と考えた、とされるのであるが、さらにブレイドウンによれば、スミスは労働をそのようなものとして使用するためには、一つには質的に異なった種類の労働の量の間の相当関係を確立しなければならないという問題があるということを認識していたのであり、そしてこの問題に対してはスミスは「市場のかけひきや交渉」から生じる評価の使用といった非常に疑わしい解決法を与えた、とされるのであった。

また、ブレイドウンはスミスの議論そのものの妥当性については否定的な見方をとりつつも、そのブレイドウンのみるところによれば、当該事物によって他の人々に課することのできる労苦と骨折りとしての「真実価値」にお



ける変化の尺度、当該事物を獲得するための労苦と骨折りとしての「真実価格」における変化の指標として当該事物によって「支配される労働の量」における変化を用いるためには労働の量（延べ労働時間、労働の継続期間）が「労苦と骨折り」つまり不効用についての尺度でなければならないということから、スミスは、等量の労働は時と場所のいかんを問わず等しい不効用を伴うということを主張しようとした、とされるのであった。

他方、また、事物の「真実価値」における変化の尺度さらに事物の「真実価格」における変化の指標として当該事物が「支配しうる労働の量」における変化を用いるためには当該事物が実際に「支配しうる労働の量」を確定しなければならず、そしてそのためには労働の時価を知る必要があるのであるが、ブレイドダウンによれば、このことに関してスミスは、「離れた時と場所では労働の時価が多少とも正確にわかるということはほとんどありえない」のにたいし穀物の時価は一般にヨリ良く知られており、しかもそれはふつう入手できるもののなかでは労働の時価に対して、最も同一に近い割合にあるものであるということから、「労働支配力」における変化のおおよその尺度としては当該事物の「穀物支配力」における変化で満足しなければならないとし、そしてそのようなものとして穀物を選ぶことを正当化するためにスミスが与えている議論そのものの妥当性ということについては問題はあがるが、スミスは経験的な根拠および理論的な根拠を示すことによってその選択に対する支持を与えようとしたのだ、とされるのであった。

そして、ブレイドダウンによれば、スミスは彼の言う「真実価格」の変化についてのおおよその指標しか与えることができず、また、その問題についての彼の議論の展開には不備、欠陥が存在しはするのであるが、彼の関心そのものは当を得たものであり、彼はそこでは、現代においてもまだ解決されていない生産性の測定、生産性の変化の測定といったことにかかわる問題を取り扱い、また、それにまつわる諸困難の存在を認識するとともにそれらの困難のうちのいくつかのものに取り組んでいたのである、とされるのであった。

## 55. D. P. オブライエン (1975年)

D. P. オブライエン (D. P. O'Brien) は、1975年の彼の一著書 (D[enis] P. O'Brien, *The Classical Economists*, Oxford: Clarendon Press, 1975. 以下, O'Brien [1975] と略記する) の第4章「古典派価値論 (Classical Value Theory)」第1節「アダム・スミス (Adam Smith)」でスミスの価値論を取り扱うさい、事実上、『国富論』第1篇第6、第7章においてスミスの価値論の主なものが展開されていると捉えるとともにその第6、第7章で述べられているものとしてのスミスの主な価値論を、長期的な価値決定 (long run determination of value) および短期的な価値決定 (short run determination of value) についての議論として捉えつつそのようなものとしてのスミスの議論について検討をくわえ<sup>(1)</sup>たうで、さらに、同じくスミスの価値論についての検討という脈絡のなかで、『国富論』第1篇第5章「商品の真実価格と名目価格について、すなわち、商品の労働での価格と商品の貨幣での価格について」をスミスが述べたもののうちで恐らく間違いなく最も入り組んだ章とし<sup>(3)</sup>つつ<sup>(2)</sup>そこのスミスの議論に関して、つぎのような内容の見解を示している。

① 『国富論』第1篇第5章において「支配される労働 (labour commanded)」が富裕 (riches) の一尺度として使用されている、ということが見いだされる。スミスは、分業が行われるようになったのちには労働者はほとんどの商品を交換によって獲得するということから、富裕は他人の労働にたいする支配力にある、としたのである。<sup>(4)</sup>

② そしてそこからスミスは、「支配される労働」があらゆるものの「真実価格 (real price)」であり、その「真実価値 (real value)」は、その購買者が彼自身からはぶき<sup>(5)</sup>そして他人に課する<sup>(6)</sup>労苦 (toil) である、としたのであった。なお、この命題の基礎となっているものは、労働はある不変の不効用を伴うという考えであった。

③ しかしながら、たとえば「真実価格 (real price)」という用語が、商品に体化された (embodied) 不効用を意味するものとして使用されたり、こ

んにち我々が「実質価格 (real price)」と呼ぶものつまり貨幣価値の変化についての調整がなされたのちの価格といったものを意味するものとして使用されたり、労働者の生存費 (subsistence of the labourer)<sup>(7)</sup>を意味するものとして使用されたり<sup>(8)</sup>、といったように、スミスの叙述はきわめて混乱したものであるのであった。<sup>(9)</sup>

④ このことのゆえに、この第5章は、評釈者たちに、あるまさしくリアルな問題を提出してきたのであった。ある人々は、スミスは一つの厚生指標 (a welfare index) を提供することを試みていたのだ、と考えてきた。すなわち、商品の「真実価値」とは、その商品の労働価格 (labour price) つまりその商品が支配する不効用の単位数であり、そしてスミスは、ある所与の額の実質所得 (real income) を獲得するのに伴う労働不効用の削減ということと関連づけられる厚生における諸改善といったものを探り出したいと思っていたのだ、とみるのである。<sup>(11)</sup> また、初期の著作家たちは、とくにリカードウ (D. Ricardo) は、スミスが、価値の決定因としての、体化された労働 (labour embodied) と支配される労働との間で、どうしようもないほど混乱するにいたっていた、と考えてきたのであった。<sup>(12)</sup><sup>(13)</sup>

⑤ しかしながら実際には、スミスはこの第5章では二つの異なる問題と取り組んでいるのである。一面では、厚生という観念は存在している。労働者の(不変の)不効用が支配する生存費の高 (quantity of subsistence) は、経時的に、変動する、それゆえ、労働者はたとえどんな水準のものであれとにかく彼の生存費 (subsistence) を獲得するためにはある不変な量の不効用を払わなければならないのではあるけれども諸商品の真実価値 (不効用支配力) は、それらの諸商品の、(変動する) 生存費にたいする支配力が変化するにつれて、経時的に、変動するということになる。「労働者の生存費 (subsistence) は……、場合によって非常に異なることがある。たとえば、それは、富裕 (opulence) にむかって前進している社会におけるほうが、停滞している社会におけるよりも、いっそう豊かであり、停滞している社会におけるほうが、衰退している社会におけるよりもいっそう豊かである。しかしながら、他のどんな商品も、ある特定の時点では、それがそのときに購申しうる生存費の数量 (quantity of subsistence) に比例して、より大きい量の労働、またはより小さい量の労働を購買するであろう」(WN, p. 35. 大河内訳〈I〉, 61ページ)、というわけである。<sup>(14)</sup> これは、貨幣価値低下のゆえにあ

る所与の貨幣支払額の他の諸商品にたいする支配力が経時的に変動するといった同じ第5章のそれより前のところで扱われている問題とは別の一つの問題である。<sup>(15)</sup> 第一のケースでは、その差異は、労働者の生存費 (subsistence) の水準を決定するとスミスが考えるところの社会の変動する前進性ということのゆえのものであり、それに対し第二のケースでは、その差異は、貨幣価値の変動ということのゆえのものである。<sup>(16)</sup> しかしこの後者がこの第5章の主要最大関心事であるのである。そして、[WN [1904] でいえば、]17ページからなるこの章において終わりの9ページが貴金属の価値の諸変化についての議論にさかれている、またそれゆえ変動の第二の源泉を扱っている、ということが、意味をもっているのである。<sup>(17)</sup>

⑥ とはいえ、それら二つのものは互いに結びつきをもつこととなる。それら両者はともに究極的には労働不効用にたいする支配力の変動ということを生み出すという意味で、それらは結びつけられるのである。しかしそれらは、異なった理由から、そのようなことを生み出すのである。長期的には労働者の生存費 (subsistence) は穀物の価格 (price of corn) とともに変動するゆえ、<sup>(18)</sup> 変動1は、穀物デフレーターによって最も良好に対処されることができ、また、穀物は貨幣よりも安定的なものであるゆえ、穀物デフレーターは、変動2に対処するのにいっそう良好なものである。<sup>(19)</sup> たえば、例証として我々はつぎのようなスミスの文章を引用してもよいであろう。「それゆえ、穀物で納めることになっている地代は、一定量の穀物が購買しうる労働の量の変動から影響をこうむるだけである。ところが、他のなんらかの商品で納めることになっている地代は、ある特定量の穀物が購買しうる労働の量の変動(変動1)からだけでなく、ある特定量のその商品で購買しうる穀物の量の変動(変動2)からも、影響をこうむるのである」(WN, pp. 35-36. 大河内訳 <I>, 61-62ページ。( ) 内は、オブライエンが WN [1904], vol. 1, pp.37-38——WN および大河内訳 <I> におけるそれに対応する箇所は前記の箇所——からスミスの文章を引用するにさいして挿入している部分)。<sup>(21)</sup>

⑦ たしかにこのようなものとしてのスミスの議論には、一面で厚生という観念が存在しているのであり、そしてそのスミスの議論は一つの厚生標準 (a welfare standard) というものに関連をもつものとみなすこともできるであろう。しかしながらまた同時に、そのスミスの議論をそのようなものとみ

なす場合に注意すべきことは、スミスがそこにかかわることとなっている厚生標準とは、部分にかかわる一つの厚生標準 (a sectional welfare standard) であって、全体にかかわる一つの厚生標準 (a general welfare standard) あるいは国民全体にかかわる一つの厚生標準 (a national welfare standard) ではない、ということである。スミスは、短期では〔労働者の〕生存費の大きさ (value of subsistence)<sup>(22)</sup> は直接的に穀物の価格とともに変動しないゆえ地代を穀物で定めるのが〔地代受領者にとって〕〔労働にたいする支配力——他の人々の労苦〈sweat〉にたいする支配力——という観点からみて〕有利になる〔ことがある〕<sup>(23)</sup> ということをし、はつきりと述べている、また、うえで確認された変動の二つの源泉<sup>(24)</sup> はともに、労働不効用にたいする支配力における諸変動という共通の問題とかかわりをもつものであり、そしてその労働不効用にたいする支配力というものが、スミスの議論における富 (wealth) の本質なのである。だが、スミスは、彼の議論に見受けられることができるその標準を、社会 (community) にとっての一つの厚生標準として使用しているのではなく、部分的な利害関係者にとっての、とくに、ここでのスミスの関心の的である地代受領者たちにとっての、一つの厚生標準として、使用しているのである。スミスは、全体にかかわる一つの厚生標準を提供することになるであろうような総不効用にたいする国民所得の比率<sup>(25)</sup> といったことを論じるというところへまでは、いってはいないのである。<sup>(26)</sup>

(注)

- (1) それについては、O'Brien [1975], pp. 78-82 を見よ。また、O'Brien [1975], chap. 2, sec. iii, pp. 35-36 も見よ。
- (2) O'Brien [1975], pp. 82, 84 におけるオブライエンの叙述の展開の仕方を見よ。
- (3) O'Brien [1975], p. 82.
- (4) O'Brien [1975], p. 82.
- (5) このことを示すものとしてオブライエンは、「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう」というスミスの文言 (WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 57ページ) を引用し、そして、この真実価値〔うへの引用文のなかに現れる「労働」の「価値」〕は、スミスが労働の名目価値と呼ぶもののすなわち貨幣のタームで表された労働の価格から区別されるのであった、とする。O'Brien [1975], p. 82.

なお、本章で取り扱われているオブライエンの著書においてオブライエンが使用

している『国富論』の原典そのものは、O'Brien [1975], p. 18 の Bibliography にみられるように、Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, ed. ... E[dw]in Cannan [2 vols.] (London[: Methuen], 1904) である。以下、それを WN [1904] と略記する。

(6) O'Brien [1975], p. 82.

(7) 本章で取り扱っているオブライエンの著書の、たとえば索引をみると、'subsistence' の項には、38, 40, 46, 57, 60, 61, 62, 63, 64, 65—6, 69, 83, 87, 111, 114, 116—17, 131, 137, 180, 218, 246, 247, 254, 257, 285 といったページが示されている。そして、それらの箇所におけるオブライエンの叙述をみると、オブライエンは概して、'subsistence' という用語を、たとえば「生存賃金説 (subsistence theory of wages, 賃金生存費説)」でいわれるような「生存費」, 「生存維持費」といった意味で使用し、またたとえば『国富論』の原文中に現れる 'subsistence' といったものと同じくそのようなものとして理解しているように思える。このような事情から、本章では、『国富論』からの引用文を含めてオブライエンが 'subsistence' という用語を用いている場合、それを、「生存費」とすることとした——ただし、『国富論』に現れる 'subsistence' をそのようなものとして一括して理解することそれ自体には問題があると思えるのではあるが——。

なお、オブライエンによれば、スミスの議論での「生存費」とは物理的 (physical) なものではなくて心理的 (psychological) なものであり、また、その水準は固定的なものではなくて可動的 (movable) なものであった、と捉えられる。

O'Brien [1975], pp. 46, 57, 63, 83, 116—117, 131—132 を参照せよ。

(8) なお、オブライエンは、スミスが「真実価格 (real price)」という用語を「労働者の生存費 (subsistence of the labourer)」を意味するものとして使用している箇所の例として、WN [1904], vol. 1, p. 37 (WN, p. 35——大河内訳でいえば、く I ), 61 ページ——がその箇所に対応) を、あげている。O'Brien [1975], p. 107n. 8.

なお、『国富論』のその箇所には、“The subsistence of the labourer, or the real price of labour, ...” というスミスの文言を見いだすことができる。

(9) O'Brien [1975], pp. 82—83.

(10) オブライエンは、とくに、我々が本書の「28」でとりあげた H. M. ロバートソン (H. M. Robertson) と W. L. テイラー (W. L. Taylor) とによる共同研究および「33」でとりあげた 1959 年の M. ブラウグ (M. Blaug) の研究を参照するよう、指示している。O'Brien [1975], p. 107n. 9.

(11) なお、このような見方にたいしてオブライエンはつぎのような論評をくわえている。すなわち、もしもこのような見方が意味をなすとすれば、我々は当然、たとえば経済成長とともに向上していく 1 人当たり実質賃金 (real wages) といったようなことを指し示す働きをなす経時的な厚生についてのなんらかの尺度をスミスが提供

しているのを見いだすことを、予期するであろう。だが実際には、スミスはそのようなことをしているわけではなくて、穀物賃金 (corn wage) は、長期的には、実際上は不変的なものである、と主張しているのである。O'Brien [1975], p. 83.

- (12) なお、オブライエンによれば、『国富論』においてスミスは、事実上長期的な価値決定ということに関しては、一つには分配の問題についての配慮ということから、一つの「生産費」価値説 (a 'cost of production' theory of value, a 'cost of production' value theory) を提示した、とされるのであるが——なお、スミスをして『国富論』において「生産費」価値説を提出させることとなった諸要因ということに関するオブライエンの指摘については、O'Brien [1975], pp. 35-37, 78 を見よ——、そのさいオブライエンは事実上、スミスの議論ではその「生産費」価値説は、商品の生産において費用を要する投入物が労働だけ、つまり、商品の生産に投下されて商品に体化される労働だけが報酬を要求するといった「資本の蓄積と土地の占有に先立つ」経済のケースでのそれと、報酬を要求する投入物として労働だけでなく資本および土地をも考慮に入れなければならない資本の蓄積と土地の占有の行われる経済のケースでのそれ、という二つの形で、提出されている、とみている。詳しくは O'Brien [1975], pp. 78-79 を見よ。

また、オブライエンによれば、労働のほかに報酬を要求するものが存在して地代と利潤が価格のうちのいくらかを占めるとき、当該商品が多少なりとも労働集約的な一商品と交換される場所では、体化された不効用〔当該商品に体化された労働不効用〕は支配される不効用〔当該商品と交換される一商品に体化され、したがってその交換によって当該商品に支配されることとなる労働不効用〕よりも少ないということになるであろう、ということ、明らかなことである、とされる。O'Brien [1975], p. 83.

- (13) O'Brien [1975], p. 83.

- (14) 'subsistence' を「生存費」としたことにについては、また、スミスの議論における「生存費」概念ということについてのオブライエンの理解については、本章の前出注7を見よ、また、後出注18も参照せよ。ただし、実際には、いま本文で引用された『国富論』におけるスミスのその文言のなかに現れる 'subsistence' は、「生活資料」として理解するほうが、スミスのその文言がその一部を構成しているところのそこでのスミスの議論に、即していることになるように思える。

- (15) なお、オブライエンは、スミスが事実上そのような問題に論及している「前のところ」として、WN [1904], vol. 1, pp. 35-36 (WN, pp. 33-34——大河内訳でいえば、〈I〉、59-60ページ——がその箇所に対応) を、あげている。O'Brien [1975], p. 107n. 11.

なお、『国富論』のその箇所には、同一名称の銻貨に含まれる金銀の量の減少および金銀それ自体の価値の減少による、貨幣地代の価値の経時的減少といったこと

に関するスミスの議論が見いだされる。

- (16) したがって、ここでオブライエンがいう「貨幣価値」とは、事実上、他の諸商品にたいする貨幣の支配力ということを指している、といえる。
- (17) O'Brien [1975], p. 83. なお、本文で言及されている *WN* [1904] でのページの数そのものは、*WN* でのページの数と符合しているといえる。
- (18) したがって、長期的には穀物の量で示された「労働者の生存費」は不変的である、ということになる。そしてこのことは、本章の④のなか、および注11でみたオブライエンの見解——つまり、ある人々は、スミスは一つの厚生指標 (a welfare index) を提供することを試みていたのだと考えてきた、すなわち、商品の「真実価値」とはその商品の労働価格 (labour price) つまりその商品が支配する不効用の単位数でありそしてスミスはある所与の額の実質所得 (real income) を獲得するのに伴う労働不効用の削減ということと関連づけられる厚生における諸改善といったものを探り出したいと思っていたのだ、とみてきたのであるが、もしそのような見方が意味をなすとすれば、我々は当然、たとえば経済成長とともに向上していく1人当たり実質賃金 (real wages) といったようなことを指し示す働きをなす経時的な厚生についてなんらかの尺度をスミスが提供しているのを見いだすことを予期するであろう、だが実際にはスミスはそのようなことをしているわけではなくて、彼は穀物賃金 (corn wage) は長期的には実際上は不変的なものであると主張しているのである、というオブライエンの見解——に、対応しているように思える。

なお、オブライエンは、本章で取り扱っている彼の著書の他の箇所では、スミスの議論における賃金の長期的趨勢ということに関して、つぎのような指摘をなしてもいる。すなわち、概してスミスは、賃金 (wages) は「資本蓄積、経済成長につれて」最初は上昇し、そしてその後、人口が資本蓄積に追いつくにつれて生存費へと後退する、とみている、しかしながら、スミスの議論での生存費は心理的なものまた可動的なものであるため、賃金の趨勢線は、たとえば次ページの図5 a, b, c で示されるような異なった経路のうちのいずれをもたどりうるということとなり、その意味で、『国富論』での、実質賃金 (real wages) の長期的趨勢は、不定的なものということとなる。O'Brien [1975], pp. 131-133 を見よ。

なお、スミスの議論における人口と生存費、賃金といったことについてのオブライエンの所論については、O'Brien [1975], p. 57 も見よ。

また、オブライエンは他の箇所においてつぎのような指摘をなしている。すなわち、事実上、すべての古典派賃金諸理論は、『国富論』でのスミスの議論のなかに見いだされる賃金決定への様々なアプローチから出てきているのであり、そのスミスの議論は、一つの賃金基金説 (a wage-fund theory) の要素、一つの生産力説 (a productivity theory) の要素、一つの残余説 (a residual theory) の要素、一つの契約説 (a bargaining theory, 交渉力説) の要素、また、食糧価格 (price of provisions)



「アダム・スミスの価値尺度論」に関する海外における諸研究

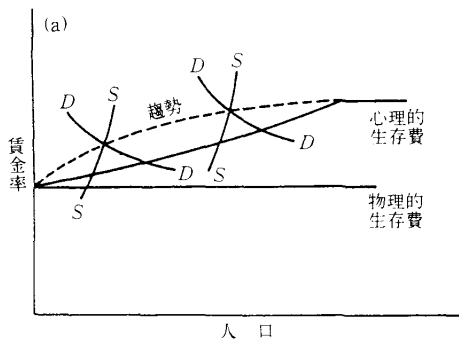


図-5 a

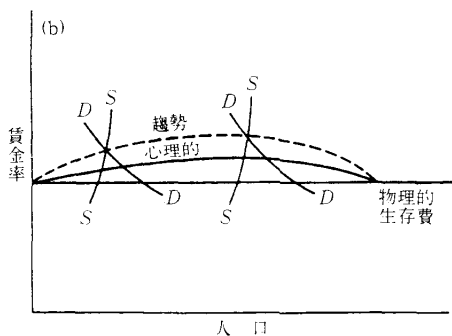


図-5 b

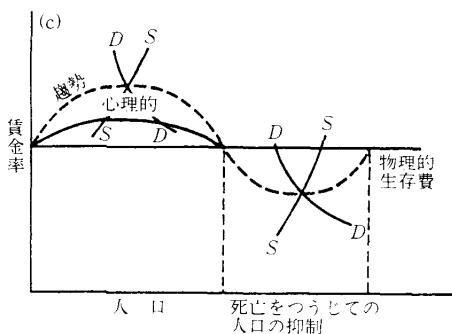


図-5 c

(出典：図5 a, b, c ともに O'Brien [1975], pp. 132-133.)

と貨幣賃金水準 (level of money wages) との間の関係についてのスミスの見解にはかなりの曖昧さが存在したけれども一つの生存費説 (a subsistence theory) の要素、を含んでいたものであり、またそれらの諸アプローチは互いに相容れないものではなかったのであるが、それらの諸アプローチのうちの生存費説〔生存賃金説〕は、賃金の市場決定についての一理論というよりもむしろ、一つの長期理論 (あるいは時として、非常な長期についての一理論 (a secular theory)) であったのである。詳しくは、O'Brien [1975], p. 111, p. 137 nn. 1-6 を見よ。

(19) なお、このことに関してオブライエンは、『国富論』第1篇第11章のなかの「過去4世紀間における銀の価値の変動に関する余論」中のスミスの議論を参照するよう指示している。O'Brien [1975], p. 107n. 12 を見よ。

(20) なお、本章の⑤のなかおよび⑥でみてきたオブライエンの議論の脈絡からして、

オブライエンがここで「穀物は貨幣よりも安定的なもの」といったことに言及するとき、そこでは事実上、「他の諸商品にたいする穀物の支配力は、他の諸商品にたいする貨幣の支配力よりも、経時的に安定的である」といったことが意味されている、と理解することができよう。

- (21) O'Brien [1975], pp. 83-84. なお、本章の⑤と⑥においてみてきたオブライエンの議論——本章のこの⑤および⑥では、オブライエンの叙述をできるだけそのまま示すこととした——そのものは、つぎのようなことを言おうとしているものとして理解することもできるかもしれないであろう。

I [スミスが『国富論』第1篇第5章において実際に取り組んでいた問題] :

スミスは実際には、『国富論』第1篇第5章では以下のような二つの異なる問題と取り組んでいたのである。その一つはつぎのものである。すなわち、スミスの議論では、労働の不効用は経時的に不変で、労働者はたとえどんな水準のものであれとにかく彼の生存費を獲得するためにはある不変量の不効用を払わなければならないということになっており、そして、諸商品の真実価値（不効用支配力）は、それらの商品がそのような不変の不効用を伴うものとしての労働をどれほど支配しうるかということによって確定され、また、諸商品の支配しうる労働の量そのものは、それらの商品が「労働者の生存費」——オブライエンのいうスミスの議論における「生存費 (subsistence)」——ということに関しては本章の前出注7および注18を参照せよ——をどれほど多く支配しうるか、ということによって確定されることとなっている。ところが、同じくスミスの議論によれば、その「労働者の生存費」の水準そのものは社会の前進性ということに依存するのであって、社会の前進性の変動はその「労働者の生存費」水準の変動をもたらすということになっていたものであり、それゆえまた、諸商品の労働支配力は、したがってまた諸商品の真実価値（不効用支配力）は、それらの商品が、その水準そのものが経時的に変動しうるころの「労働者の生存費」を、どれほど支配しうるか、ということによって確定されることになるのであり、また、そのようなその水準が経時的に変動しうる「労働者の生存費」にたいしてそれらの商品がもつ支配力が変化するにつれて、同一のそれらの商品の労働支配力、真実価値（不効用支配力）そのものが、経時的に、変動してしまうということになるのであった。このようなことにかかわる事柄が、スミスがこの第5章で問題にしようとしたことの一つであったのである。

他方、スミスがこの第5章で取り組もうとしたもう一つの問題、しかもスミスがこの第5章でとくに大きな関心を払っていたものは、悪鑄や貴金属自体の価値の変化等といったことによるものとしての他の諸商品にたいする貨幣の支配力の変動〔「貨幣価値の変動」〕ということによって、「ある所与の貨幣支払額の他の諸商品にたいする支配力」が経時的に変動してしまう、逆に言えば、ある所与の量の他の諸商品が支配しうる貨幣量が経時的に変動してしまう、ということ、こういったこと

にかかわるものであったのである。

Ⅱ〔スミスが『国富論』第1篇第5章において取り組んでいたそれら二つの問題の結びつき〕：

このように実際にはスミスは『国富論』第1篇第5章では、うえのような二つの異なる問題と取り組んでいたのであった。ところで、うえの第一の問題でみたように、スミスの議論では「労働者の生存費」の水準は社会の前進性ということに依存し、社会の前進性における変動は「労働者の生存費」水準の変動をもたらすのであるが、「労働者の生存費」水準のこのような変動は、「労働者の生存費」をどれほど支配しうるかということに依存するものとしての諸商品の労働支配力、労働不効用支配力、真実価値に、影響を及ぼすこととなる。

他方、第二の問題は、悪铸や貴金属自体の価値の変化等といったことによる他の諸商品にたいする貨幣の支配力の変動〔「貨幣価値の変動」〕ということによって、「ある所与の貨幣支払額の他の諸商品にたいする支配力」が変動する、逆に言えば、ある所与の量の他の諸商品が支配しうる貨幣量が変動する、といったことにかかわるものであった。したがって、ある所与の量の他の諸商品が支配しうる労働（労働不効用）の量＝（ある所与の量のそれら他の諸商品が支配しうる貨幣量）／（「労働者の生存費」）、において、分子の変動は、その比率に影響を及ぼし、ある所与の量のそれら他の諸商品が支配しうる労働（労働不効用）の量に影響を及ぼすこととなる。

つまり、「それら二つのもの——『労働者の生存費の水準を決定するとスミスが考えるところの社会の変動する前進性』と『貨幣価値の変動』——は互いに結びつきをもつこととなる。それら両者はともに究極的には労働不効用にたいする支配力の変動ということを生み出すという意味で、それらは結びつけられるのである。しかしそれらは異なった理由から——『社会の変動する前進性』は『労働者の生存費』水準の変動をもたらすことによって、他方、『貨幣価値の変動』は、『ある所与の貨幣支払額の他の諸商品にたいする支配力』の変動を、逆に言えば、ある所与の量のそれらの商品が支配しうる貨幣量の変動を、もたらすことによって——、そのようなことを——諸商品の労働不効用にたいする支配力の変動を——生み出すのである」、というわけである。そしてまたこのような意味で、うえの二つの問題と取り組んでいるスミスの議論は、不効用支配力、それとの関連での厚生、といったこととかかわりをもつものでもあったのである。

Ⅲ〔社会の前進性における変動による「労働者の生存費」水準の変動、「貨幣価値の変動」による「ある所与の貨幣支払額の他の諸商品にたいする支配力」の変動、それらをつうじての諸商品の労働（労働不効用）支配力の変動（真実価値の変動）、ということにたいするスミスの対処〕：

ところでスミスは、「長期的には労働者の生存費（subsistence）は穀物の価格

(price of corn) とともに変動するゆえ、変動1——つまり、社会の前進性における変動による「労働者の生存費」水準の変動をつうじての諸商品の労働（労働不効用）支配力の変動——は、穀物デフレーターによって最も良好に対処されることができると考えた。長期的には、労働者の生存費は、穀物の価格とともに変動する。したがって、長期的には、「労働者の生存費」を「穀物の価格」で割ることによって得られる穀物の量で示された「労働者の生存費」は、不変的である。それゆえ、穀物デフレーターを使用すれば、長期的には、「労働者の生存費」をある不変的な穀物量として確定、表示することができ、「労働者の生存費」の変動をつうじての諸商品の労働（労働不効用）支配力の変動といったことを回避しつつ、それらの商品の労働（労働不効用）支配力、真実価値を、それらの商品が支配しうる穀物総量とある不変的な穀物量で示される「労働者の生存費」との関係で、確定、表示することができる、というわけである。

他方でスミスはまた、「穀物は貨幣よりも安定的なものであるゆえ——つまり、他の諸商品にたいする穀物の支配力は、他の諸商品にたいする貨幣の支配力よりも、経時的に安定的なものであるゆえ——、穀物デフレーターは、変動2——つまり、悪铸や貴金属自体の価値の変化等による貨幣の他の諸商品にたいする支配力〔『貨幣価値』〕の変動ということからの、『ある所与の貨幣支払額の他の諸商品にたいする支配力』の変動、逆に言えば、ある所与の量の他の諸商品が支配しうる貨幣量の変動——に対処するのにいっそう良好なものである」と考えた。つまり、悪铸や貴金属自体の価値の変化等といったことのゆえに貨幣が他の諸商品にたいしてもつ支配力〔『貨幣価値』〕は経時的にヨリ不安定的なものであり、またそれゆえ、貨幣の量で表示された他の諸商品の価格、ある所与の量のそれらの商品が支配しうる貨幣量——逆に言えば、「ある所与の貨幣支払額の他の諸商品にたいする支配力」——は、経時的にヨリ不安定的なものとなるのにたいし、穀物が他の諸商品にたいしてもつ支配力は経時的にヨリ安定的なものであるということから、穀物の量で表示された他の諸商品の価格、ある所与の量のそれらの商品が支配しうる穀物量——逆に言えば、ある所与の量の穀物のそれらの商品にたいする支配力——は、経時的にヨリ安定的なもの、ということになり、それゆえ、穀物デフレーターを使用すれば、悪铸や貴金属自体の価値の変化等といったことによるものとしての貨幣の他の諸商品にたいする支配力の変動〔『貨幣価値の変動』〕によって生起する「ある所与の貨幣支払額の他の諸商品にたいする支配力」の変動——逆に言えば、ある所与の量のそれらの商品の貨幣にたいする支配力の変動——といった事態を、ある程度回避することができる、したがってまた、そのような変動による労働（労働不効用）支配力、真実価値の変動を、ある程度回避することができる、というわけである。

いま、このような二つの道すじで穀物デフレーターを用いるとすれば、たとえばある一定量の商品Aの、労働支配力、真実価値（不効用支配力）は、（ある一定量

の商品Aが支配しうる穀物量) / (穀物量で表示された「労働者の生存費」), によって確定されることとなる。そして、その比率を構成する分子は経時的にヨリ安定的なものであるとともに、その分母も、長期的には、不変的なものである。したがってそこでは、その一定量の商品A (たとえば、1単位の、あるいは2単位の、…あるいはさらにn単位の商品A) の労働支配力、真実価値 (不効用支配力) は、長期において、商品Aのその一定量に対応したヨリ安定的な大きさとして確定、表示されうる、ということになる。様々な商品の一定量がもつ労働支配力、真実価値 (不効用支配力) の大きさが、長期において、ヨリ安定的に確定、表示されうるのである。

Ⅳ「スミスが事実上こういった二つの道すじで穀物デフレーターを使用しようとしていた、ということを示す例」:

なお、スミスが事実上、こういった二つの道すじで穀物デフレーターを用いようとしたということは、つぎのようなスミスの文章にもうかがえる。「それゆえ、穀物で納めることになっている地代〔の真実価値 (不効用支配力)〕は、一定量の穀物が購買しうる労働の量の変動から影響をこうむるだけである。ところが、他のなんらかの商品で納めることになっている地代〔の真実価値 (不効用支配力)〕は、ある特定量の穀物が購買しうる労働の量の変動 (変動1) からだけでなく、ある特定量のその商品で購買しうる穀物の量の変動 (変動2) からも、影響をこうむるのである」(〔 〕内は中川、( )内はオブライエン)。すなわち、『国富論』からのこの引用文において「(変動1)」を付した部分は、スミスが変動1に対処するために穀物デフレーターを用いようとしたということを、また「(変動2)」を付した部分は、スミスが変動2に対処するために穀物デフレーターを用いようとしたということを、例示しているのである。

この場合、ある一定量の穀物で納めることになっている地代の労働支配力、真実価値 (不効用支配力) は、その一定量の穀物が支配しうる労働量そのものによって、つまり、(その一定量の穀物) / (穀物量で表示された「労働者の生存費」), によって、確定され、他方、ある特定量の他のなんらかの商品で納めることになっている地代の労働支配力、真実価値 (不効用支配力) は、つぎのような形で確定されることとなる。すなわち、一方の道すじで穀物デフレーターを使用することによって特定量のその商品が支配しうる穀物量を確定し、また、もう一方の道すじで穀物デフレーターを使用することによって穀物量で表示された「労働者の生存費」の大きさを確定する、そして、その一方での穀物量とそのもう一方での「労働者の生存費」の大きさととの関係によって、つまり、(特定量のその商品が支配しうる穀物量) / (穀物量で表示された「労働者の生存費」), によって、その地代の労働支配力、真実価値 (不効用支配力) が確定されることとなるのである。そして、穀物量で表示された「労働者の生存費」は長期的には不変的なものであり——したがって、社会の前

進性における変動による「労働者の生存費」水準の変動をつうじての労働（労働不効用）支配力の変動（変動1）を、長期的には、回避することができる——、また、特定量の任意の一商品が支配しうる穀物量は、特定量のその一商品が支配しうる貨幣量よりも経時的にヨリ安定的なものなのである——したがって、悪銭や貴金属自体の価値の変化等による貨幣の他の諸商品にたいする支配力〔「貨幣価値」〕の変動ということからの、「ある所与の貨幣支払額の他の諸商品にたいする支配力」の経時的変動（変動2）、逆に言えば、それらの商品の貨幣にたいする支配力の経時的変動、またそういったことをつうじての労働（労働不効用）支配力の変動、といった事態を、ある程度回避することができる——。したがって、ある一定量の穀物で納めることになっている地代の労働支配力、真実価値（不効用支配力）も、ある特定量の他のなんらかの商品で納めることになっている地代の労働支配力、真実価値（不効用支配力）も、長期において、ヨリ安定的な大きさとして、確定、表示されることができるのである。

しかしながら同時にまたこの場合には、もし一定量の穀物が支配しうる労働量に変動があるときには、つまり、（一定量の穀物）/（穀物量で表示された「労働者の生存費」）において、分母に変動があるときには、ある一定量の穀物で納めることになっている地代の労働支配力、真実価値（不効用支配力）の大きさも、ある特定量の他のなんらかの商品で納めることになっている地代の労働支配力、真実価値（不効用支配力）の大きさも、その変動から影響を受けることとなる。このようなことは、たとえば、社会の前進性に変動が生じて「労働者の生存費」が変動し、しかも、ある方向でのその「労働者の生存費」の変動の率と、「穀物の価格」の変動の率およびその方向とが一致しないときに、おこることとなる——ただし、長期的には「労働者の生存費」は「穀物の価格」とともに変動するのであるから、長期的には穀物量で表示された「労働者の生存費」は不変的なものとなり、したがって長期的にはこのようなことは回避されることとなる——。

また、ある特定量の他のなんらかの商品が支配しうる穀物量は、ある特定量のその商品が支配しうる貨幣量よりも経時的に安定的ではあるが、もしそれに変動が生じるときには、その変動は、ある一定量の穀物で納めることになっている地代の労働支配力、真実価値（不効用支配力）の大きさには関係はないが、ある特定量のその商品で納めることになっている地代の労働支配力、真実価値（不効用支配力）の大きさには影響を及ぼす、ということになるのである。

(22) 'subsistence' を「生存費」としたことについては、また、スミスの議論における「生存費」概念ということについてのオブライエンの理解については、本章の前出注7を見よ、また、同じく前出の注18も参照せよ。

(23) 言うまでもなく、「短期では〔労働者の〕生存費の大きさは直接的に穀物の価格とともに変動しない」とすれば、社会の前進性における変動、またそれによる「労

働者の生存費」の変動の存否にかかわらず、短期では、穀物量で表示された「労働者の生存費」は経時的に変動しうる。たとえば、社会の前進性になんの変動もなく、したがってまた「労働者の生存費」になんの変動もない場合にも、もし穀物の価格が変動すれば、穀物量で表示された「労働者の生存費」は変動することとなる。ただし、すでにみたように、オブライエンは、スミスが『国富論』第1篇第5章で取り組もうとした二つの問題のうちの一つそれ自体は、労働者の生存費の水準を決定するとスミスが考えるところの社会の変動する前進性ということ〔「変動1の源泉」〕による諸商品の労働支配力、真実価値（不効用支配力）の変動〔「変動1」〕ということに関するものである、と捉えたのであった。なお、「長期的には労働者の生存費は穀物の価格とともに変動する」とすれば、その場合には、穀物価格の変動による穀物量で表示された「労働者の生存費」の変動といったことも、長期では、存在しない、ということになる。

なお、本文でみたようなことをスミスが述べている箇所として、オブライエンは、WN [1904], vol. 1, p. 38 (WN, p. 36——大河内訳でいえば、〈I〉, 62—63ページ——がその箇所に対応) をあげている。O'Brien [1975], p. 107n. 14.

そして、『国富論』のその箇所には、つぎのような内容をもったスミスの議論を見いだすことができる。

労働の貨幣価格 (money price of labour) [本文でみられた「生存費の大きさ (value of subsistence)」に対応] は、穀物の貨幣価格 [本文でみられた「穀物の価格」に対応] とともに年々動揺するというようなものではない。労働の貨幣価格は、穀物という生活必需品の平均価格または通常価格に——穀物という生活必需品の一时的または偶然的な価格 [本文でみられた「穀物の価格」に対応] に、ではなしに——対応しているように思えるのであり、そしてその穀物の平均価格または通常価格は、銀の価値によって——銀を市場に供給する諸鉱山の豊度の程度によって、言い換えると、ある特定量の銀を鉱山から市場にもたらすために使用されなければならない労働の量、したがってまた消費されなければならない穀物の量によって——規制されるのであるが、その銀の価値は、世紀から世紀にかけては大きく変動することがあるが、年々大きく変動することは減多になく、半世紀またはまる1世紀のあいだずっと同一あるいは同一に近いということがしばしばあるのである。それゆえ、穀物の通常の貨幣価格または平均的な貨幣価格もまたこういった期間中ずっと同一または同一に近いことがありうるのであり、そしてまた、少なくともその社会が他の点においてひきつづき同一またはほぼ同一の状態にあるかぎりには、労働の貨幣価格 [本文でみられた「生存費の大きさ」に対応] も、穀物の通常のまたは平均的な貨幣価格とならんでこういった期間中ずっと同一またはほぼ同一に近いことがありうるのである。これにたいし、そういった期間中に穀物の一时的で偶然的な価格 [本文でみられた「穀物の価格」に対応] はある年には前年の2倍になる

ことも、たとえば1クォーター当たり25シリングから50シリングに動揺することも、しばしばありうるのである。この場合、穀物が後者の価格であるときの穀物地代の名目価値は、穀物が前者の価格であるときの穀物地代の名目価値の2倍になるであろうが、それだけでなく、穀物が後者の価格であるときの穀物地代の真実価値 (real value) も、穀物が前者の価格であるときの穀物地代の真実価値の2倍になるであろう。言い換えると、その穀物地代は、2倍の労働量——または他の多くの諸商品の2倍量——を支配するであろう。というのは、労働の貨幣価格〔本文でみられた「生存費の大きさ」に対応〕は——またそれとならんで他のたいていの物の貨幣価格は——、このような変動のあいだひきつづき同一であるからである。

(24) つまり、「労働者の生存費の水準を決定するとスミスが考えるところの社会の変動する前進性」と、悪鉄や貴金属自体の価値の変化等といったことによる他の諸商品にたいする貨幣の支配力の変動としての「貨幣価値の変動」。

(25) 本章の⑥および注21を見よ。

(26) O'Brien [1975], pp. 83, 84. なお、オブライエンは、本章で取り扱っている彼の著書の他の箇所で、スミスは労働が生産する富 (wealth) を年々の生産物と同一視し、また、全体としての富に代えて1人当たりの富に注目しようとしたのであって、スミスの考えの厚生との掛かり合いはこのような視点からのものであった、とみつつ、『国富論』第1篇第5章のなかには穀物価格あるいは貨幣における諸変化の厚生に及ぼす影響の評価ということに向けられた経済的厚生についての一つの労働標準が提示されている、とするとともに、スミスは所得における諸変化を厚生における諸変化に関係づけようとし、そしてその諸変化を、システム内の諸関係が変化するにつれてのある所与の額の実質所得 (real income) を獲得するのに必要な「労苦と骨折り (toil and trouble)」(不効用) の量における諸変動とみなそうとしたのであり、また、こういったことはスミスが全体としての国民所得から1人当たりの国民所得へと彼の注意を振り向けたということから出てきたことなのである、といった内容の指摘をなしている (O'Brien [1975], pp. 34, 36)。ところで、このような指摘のなかには、一見して以上でみてきたオブライエンの議論と抵触するようにも受け取られかねないものも含まれているのではあるが、オブライエンはうえのような内容の指摘につづけて、「我々は、様々な解釈を受けてきたこの標準という問題には後ほど立ち返る」、としているのであり (O'Brien [1975], p. 36)、そしてその予告をうけて展開されているのが以上でみてきたオブライエンの議論なのであるから、そのような内容の指摘をなしたさいのオブライエンの真意は、そして、『国富論』第1篇第5章でのスミスの議論またそこで示されているとされる労働標準といったことについてのオブライエンの最終的な解釈は、以上でみてきたオブライエンの議論のなかに表現されていると考えても差し支えないであろう。



## D. P. オブライエン（1975年）についての覚書

オブライエンは、1975年の彼の一著書のなかで『国富論』における価値についてのスミスの議論を取り扱うさい、事実上、『国富論』第1篇第6、第7章においてスミスの価値論の主なものが展開されていると捉えたとともにその第6、第7章で示されているものとしてのスミスの主な価値論を、長期および短期における価値決定についての議論として捉え、そのようなものとしてのスミスの議論について検討をくわえたうえで、さらに、同じくスミスの価値論についての検討という脈絡のなかで、『国富論』第1篇第5章におけるスミスの議論を検討するのであった。

そして、オブライエンによれば、その第5章では、労働はある不変の不効用を伴うものでありそしてその労働不効用にたいする支配力こそが富の本質であって、人々の富裕の程度は労働にたいする支配力によって測られ、労働支配力によって確定される不効用支配力、労働不効用支配力の大きさがあらゆるものの「真実価値」の大きさなのである、といった考えが示されているのであるが、同時にそこでのスミスの叙述は、たとえば「真実価格（real price）」という一つの用語がいくつかの異なった意味で使用されているといったように、きわめて混乱したものであった、とされるのであった。

そしてまたオブライエンによれば、そういった混乱のゆえにこの第5章でのスミスの議論はその議論に関する様々な解釈を生み出してきたのであり、たとえば、ある人々は、スミスはそこでは一つの厚生指標を提供しようとしていたのだと解釈し、またある人々は、スミスはそこでは価値の決定因としての「体化された労働」と「支配される労働」との間で、混乱状態に陥っていたのだとみてきた、とされるのであった。そして、そのような解釈に対して、スミスがその第5章で実際に取り組もうとした問題そのものということに関しては、オブライエンは、スミスはそこでは実際には一方で、諸商品の労働支配力、諸商品の労働不効用支配力したがって諸商品の真実価値はそれらの商品が支配しうる「労働者の生存費」の単位数ということによって確定されるのであるが「労働者の生存費」水準そのものは、「社会の変動する前進性」ということによって変動するのであり、それゆえ「労働者の生存費」水準のそのような変動が諸商品の支配しうる「労働者の生存費」の単位数、それらの商品の労働支配力・労働不効用支配力（真実価値）に影響を及ぼす

ことによって同一の諸商品の真実価値、したがってまた同一のそれらの商品の同一量がもつ真実価値が、異時点間において異なったものになりうる、といったことにかかわる問題、つまり、労働者の生存費水準を決定するとスミスが考えるところの社会の変動する前進性ということに起因する諸商品の労働支配力・労働不効用支配力（真実価値）の経時的変動といったことにかかわる問題、他方で、悪鋳や貴金属自体の価値の変化等といったことによるものとしての他の諸商品にたいする貨幣の支配力の変動〔「貨幣価値の変動」〕ということに起因するある所与の貨幣支払額の他の諸商品にたいする支配力の経時的変動といったことにかかわる問題という、二つの別個な問題と取り組んでいたのであり、そしてこの後者の問題がスミスがこの第5章においてとくに大きな関心を払ったものであった、とみるのであった。また同時に、オブライエンは、それらの問題と取り組むそこでのスミスの議論のなかには厚生という観念は存在しているのであり、労働者の生存費水準を決定するとスミスが考えるところの社会の変動する前進性も、悪鋳や貴金属自体の価値の変化等によるものとしての貨幣価値の変動も、異なる道すじをつうじてではあるが、究極的には、ともに、労働不効用にたいする支配力の変動ということを生み出すのであってその意味でそれらは互いに結びつきをもつものであった、とみるのであった。

そしてオブライエンは、長期的には労働者の生存費は穀物価格とともに変動する、つまり、長期的には穀物量で表示された労働者の生存費は不変的であるということからスミスは一方で、労働者の生存費を穀物量で表示すれば、長期的には、労働者の生存費水準の変動による諸商品の労働支配力・労働不効用支配力の変動（真実価値の変動）といった事態をまねがれることができると考えるとともに、穀物が他の諸商品にたいしてもつ支配力は貨幣が他の諸商品にたいしてもつ支配力よりも経時的に安定的であるということからスミスは他方で、ある所与の貨幣支払額の他の諸商品にたいする支配力——逆に言えば、ある所与の量のそれらの商品が支配しうる貨幣量——に代えてある所与の量の穀物の他の諸商品にたいする支配力——逆に言えば、ある所与の量のそれらの商品が支配しうる穀物量——をみることにすれば、それは経時的にヨリ安定的なものでありうると考えたのだ、と解している、というように思えるのであった。

ところで、いまうえのような根拠にもとづいてうえのような二つの道すじ

で穀物を使用するとすれば、一定量のなんらかの商品の労働支配力、労働不効用支配力、真実価値は、(一定量のその商品が支配しうる穀物量) / (穀物量で表示された「労働者の生存費」)、によって確定されることとなる。つまり、まず、一定量のその商品が支配しうる穀物量を確定し、そしてその穀物量がどれだけの単位数の「穀物量で表示された労働者の生存費」を支配しうるかを確定することによって、確定されることとなる。そして、うえの比率において、分子は経時的にヨリ安定的なものであるとともに、その分母も、長期的には、不変的なものということとなる。かくして、一定量のその商品の労働支配力、労働不効用支配力、真実価値は、 $\dot{\text{長期}}$ において、ヨリ安定的な大きさとして確定、表示されうる、ということとなるのである。だが同時にまたそれは、論理的には、もし一定量のその商品が支配しうる穀物量に変動があればその変動から影響をこうむるし、また、穀物量で表示された「労働者の生存費」に変動があれば——その変動は、一定量のその商品が支配しうるある量の穀物が支配しうるところの「穀物量で表示された労働者の生存費」の単位数に、したがってまた一定量のその商品が支配しうるある量の穀物が支配しうるところの労働の単位数に影響を及ぼすことになるゆえ——その変動からも影響をこうむる、つまり、他になんの変化もなくともそれらの変動の結果として、同じ商品の同一量をもつ真実価値の大きさが、異なった大きさのものとして確定、表示される、ということはある、ということになるのであった。

なお、オブライエンは、スミスが『国富論』第1篇第5章で取り組もうとしたうえでみた二つの問題についてのスミスの議論のなかで取り扱われている「労働者の生存費の水準を決定するとスミスが考えるところの社会の変動する前進性」そして「(悪鉄や貴金属自体の価値の変化等といったことによるものとしての他の諸商品にたいする貨幣の支配力の変動という意味での)貨幣価値の変動」という変動の二つの源泉はともに、労働不効用にたいする支配力の変動ということとかかわりを持ち、そしてこの労働不効用にたいする支配力というものがスミスが富の本質と考えるものであったのであり、したがってまた、うえの二つの異なる問題との関連で展開されるスミスの議論のなかに事実上現れているところの、二つの道すじで穀物を用いることによって確定されるものとしての労働支配力、労働不効用支配力といったものは、厚生水準、一つの厚生標準ということとかかわりをもつものとみ

なすことができるし、また事実、スミス自身の議論のなかには、短期では〔労働者の〕生存費の大きさは直接的に穀物価格とともに変動しないゆえに地代を穀物で定めるのが労働にたいする支配力——他の人々の労苦にたいする支配力——という観点からみて〔地代受領者にとって〕有利になる〔ことがある〕といったような、スミスが「有利さ」ということの基準を「労働にたいする支配力——他の人々の労苦にたいする支配力——」に求めているということを示す議論を見いだすことができる、とみるのであるが、同時にまたオブライエンによれば、スミスの議論においてはそのような標準は社会 (community) にとっての一つの厚生標準として使用されているのではなくて、部分的な利害関係者とくに地代受領者にとっての一つの厚生標準として使用されているのであり——なお、オブライエンによれば他方でまた、スミスは事実上、穀物賃金は〔したがって、賃金受領者 (労働者) がある量のみずからの労働 (労働不効用, 労苦) と引き換えに受け取る穀物タームで表された所得の大きさそのものは〕長期的には実際には不変的なものであると主張している、とみられていたのであった——、スミスは全体にかかわる一つの厚生標準を提供することになるであろうような総不効用にたいする国民所得の比率といったことを論じるというところへまではいってはいないのである、とされるのであった。

## 56. R. B. エーケルンド Jr. と

### R. F. エベール (1975年)

1975年にその初版が刊行された R. B. エーケルンド Jr. (R. B. Ekelund, Jr.) と R. F. エベール (R. F. Hébert) とによる一著書 (Robert B. Ekelund, Jr. and Robert F. Hébert, *A History of Economic Theory and Method*, New York, etc.: McGraw-Hill, 1975. 以下, Ekelund & Herbert [1975] と略記する。なお, 1983年にその第2版, 1990年にその第3版がうえと同じ出版社から出されているのであるが, その第3版——そこではうえの著者のうちの一方の姓について, Hébert ではなくて Hébert という表記法がとられている——を, 以下, Ekelund & Hébert [3rd ed.] と略記することとする) のなかでエーケルンド Jr. とエベールが『国富論』を取り扱うさい, スミスの議論では「国富 (national wealth)」はこんにちの用語でいう「国民所得 (national income)」と本質的に同じことを意味していたのでありそして経済成長ということを中心テーマとする『国富論』においてスミスはそのようなものとしての「国富」の増加ということを強調したのであるがそのような経済成長というスミスのマクロ経済学的な議論は彼のミクロ経済学的な議論, とりわけ価値論という基礎のうえで展開された, とみ<sup>11)</sup>, そして『国富論』についての彼らの取り扱いの一部としてスミスのその価値論を検討しようとするのであるが, そこでは彼らはつぎのような所論を展開している。

① 彼らは, 「価値論 (The Theory of Value)」という見出しを設け, その見出しのもとにまず, スミスは『国富論』において分業および貨幣の使用について論じたのち価値についての議論へと進んだ, ということを示し, そして, 「ある特定の対象物の効用」としての「使用価値 (value in use)」また「その対象物の所有がもたらす他の財貨にたいする購買力」としての「交換価値 (value in exchange)」さらにそれらの間のいわゆる価値のパラドックスといったことに言及する『国富論』の第1篇第4章の終わりのほうでのスミスの文言 (WN, p. 28. 大河内訳 <I>, 49-50ページ) を引用したうえで, スミスはその価値のパラドックスを解決することなくまた解決できずに, それらの価値のうちの「交換価値すなわち相対価格 (exchange value, or relative

price)<sup>(2)</sup>」, およびその経時的な変化についての説明をなそうとした, とする<sup>(3)</sup>, そしてさらに彼らは, 「労働価値説 (The Labor Theory of Value)」, 「諸価格 (Prices)」, および「市場価格対自然価格 (Market Price versus Natural Price)」という三つの小見出しのもとでの議論を展開することによってうへの「価値論」という見出しのもとに論じられるべき問題を取り扱おうとするのであるが<sup>(4)</sup>, , うへの最初の二つの小見出しの付されている部分で彼らはつぎのような形で議論を展開している<sup>(5)</sup>.

② 最初の「労働価値説」という小見出しのもとでは, 彼らはまず, 『国富論』第1篇第5章から第7章が交換価値についてのスミスの議論の核心を含んでいるしかしまたスミスがそこにおいて「価値 (価格) value (price)<sup>(7)</sup>」の<sup>●</sup>尺度 (measure) と<sup>●</sup>価値の原因 (cause) との両方を同時に論じているようにみえたという事実によってそこでのスミスの議論に関するその後の諸解釈はしばしば混乱させられてきた, としつつ, たとえば第5章でスミスは「およそ商品の価値は, ……それを所有していても自分では使用または消費しようとはせず他の商品と交換しようと思っている人にとっては, その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しい。それゆえ, 労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である」(WN, p. 30. 大河内訳 <I>, 52ページ) と述べている, とする。ついで彼らは, この引用文にみられるような考えは, 貨幣でもってあるいは財貨でもって買われるものは労働によって購買されるのだといった考えを表すもの, とみ, そしてそれを, 一つの労働価値説を示唆するものとして捉える。そしてさらに彼らは, 労働価値説には実際のおよび理論的難点があるのであるがスミスもそれに気付いていたとして『国富論』第1篇第5章中の異質労働の問題に言及しているスミスの文言 (WN, p. 31. 大河内訳 <I>, 55ページ) を引用する<sup>(9)</sup>。

③ 以上のような形で議論をすすめたのち彼らはただちに第二の小見出し「諸価格」<sup>(10)</sup>が付されている部分へと入る。そこでは彼らはまず, 貨幣は最も普通の価値尺度ではある, しかし貨幣それ自体の価値は経時的に変動するゆえ尺度としてはそれは欠点をもつということに気付いていたスミスは第5章の残りの部分において「実質価格 (real price)」と「名目価格 (nominal price)」とを区別することに骨を折ったのであった, とし, そのことを示す例として, 「労働と交換に与えられる生活の必需品と便益品の量にあるといわれてもよい」「労働の実質価格」と「労働と交換に与えられる貨幣の量に

あるといわれてもよい」「労働の名目価格」といったことに言及するスミスの文言（*WN*, p. 33. 大河内訳〈I〉, 58ページ）を引用するとともに、<sup>(11)</sup>他方でまた彼らは、スミスは第6章において資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態をすぎると労働だけでは「市場価格（market price）」を十分に説明することはできずそしてより進歩した社会、資本の蓄積と土地その他の資源にたいする個人的所有権ということによって特徴づけられる社会では「市場価値（market value）」<sup>(13)</sup>は三つの構成部分に分解されるのであって「賃金と利潤と地代は、すべての交換価値の三つの本源的な源泉であり、同時にすべての収入の三つの本源的な源泉でもある。他のすべての収入〔利子所得、租税等々〕は、究極的には、これらのうちのどれかから派生するものである」（*WN*, p. 52. 大河内訳〈I〉, 88-89ページ。〔 〕内はエーケルンド Jr. とエベール）<sup>(14)</sup>としている、とする。そしてこのことから彼らは、『国富論』第1篇の第5章から第6章におけるスミスによる議論の展開のされ方からみて、スミス以前の多くの著作家たちはある種の労働費用価値説（a labor-cost theory of value）をもっていたのでありまたスミス以後の多くの著作家たちは同様な理論がスミスによって作られたと考えたのではあるがスミス自身の説明は実際にはそういったものとはちがったものであったのである、すなわち、リアル・タームでの価値の真の尺度は労働時間であるといったことを言うことと価値の源泉（source）は各々の商品の生産に必要な諸費用であるといったことを言うこととは別のことなのであって、スミスは諸労働価値説（labor theories of value）が妥当するのは労働が主たる生産要素（たとえ唯一の生産要素ではないとしても）となる原始社会についてのみであると思っていたのである、とする。<sup>(15)</sup>

（注）

- (1) Ekelund & Hebert [1975], p. 61. (Ekelund & Hébert [3rd ed.], p. 106.) また、Ekelund & Hebert [1975], p. 73 (Ekelund & Hébert [3rd ed.], p. 120) も見よ。
- (2) Ekelund & Hebert [1975], p. 61. (Ekelund & Hébert [3rd ed.], p. 107.)
- (3) Ekelund & Hebert [1975], p. 61. (Ekelund & Hébert [3rd ed.], pp. 106-107.)
- (4) Ekelund & Hebert [1975], pp. 62-67. (Ekelund & Hébert [3rd ed.], pp. 107-113.) ただし、初版において「労働価値説（The Labor Theory of Value）」という小見出しが付されている部分に対応する箇所には第3版では、「価値の一尺度としての労働（Labor as a Measure of Value）」という形で、先の「価値論（The

Theory of Value)」という見出しと同格の見出しが付されており、また、「諸価格」、「市場価格対自然価格」も、この第3版では、「価値論」と同格の見出しの形で、示されている。Ekelund & Hébert [3rd ed.], pp. 106, 107, 108 を見よ。

- (5) 初版において「市場価格対自然価格」という第三の小見出しが付されている箇所では『国富論』第1篇第7章でのスミスの議論が取り扱われているのであるが (Ekelund & Hebert [1975], pp. 63-67 を見よ), そこで示されているエーケルンド Jr. とエベールの所論そのものは本書での我々の当面のテーマから離れたもの、ということもできるであろう。なお、第3版での「市場価格対自然価格」という見出しの付されている箇所では、初版においてうえの小見出しのもとに展開された議論にかなりの変更、追加をなしたものが示されているのであるが (Ekelund & Hébert [3rd ed.], pp. 108-113 を見よ), そこには、価値の供給サイドの諸要素の基礎となっている公分母 (common denominator) として労働を選択することをスミスは望んでいたように思える、といった指摘、また、スミスはさらに、価値の、ある絶対的でまた普遍的な尺度 (*measure*) を手探りしていたように思えるのではあるが彼はこの点では成功してはいなかった、といった指摘も、見いだされる。(Ekelund & Hébert [3rd ed.], p. 111.)

- (6) 第3版では、「価値の一尺度としての労働」という見出し。

- (7) Ekelund & Hebert [1975], p. 62. (Ekelund & Hébert [3rd ed.], p. 107.)

- (8) エーケルンド Jr. とエベールによれば、これと同様な考えは W. ペティ (W. Petty) によっても表明されているがスミスはこの考えを D. ヒューム (D. Hume) から得たように思える、とされる。Ekelund & Hebert [1975], p. 62. (Ekelund & Hébert [3rd ed.], p. 107.)

- (9) Ekelund & Hebert [1975], p. 62. (Ekelund & Hébert [3rd ed.], p. 107.)

- (10) 本章の前出注4を参照せよ。

- (11) なお、エーケルンド Jr. とエーベールは、ここでは、この「実質価格」と「名目価格」についての議論と真の価値尺度としての労働といったことには、なんの言及もなしてはいない。

- (12), (13) Ekelund & Hebert [1975], p. 63. (Ekelund & Hébert [3rd ed.], p. 108.)

- (14) なお、エーケルンド Jr. とエベールは、スミスは価格の必要諸構成部分の一つに利潤を含めていたのであってそのことは事実上スミスが機会費用という概念に関する一理解に到達していたということを示しているとし、『国富論』第1篇第7章中のつぎのようなスミスの文章を引用している。「日常の用語でいわれる商品の原価 (prime cost) には、それを再販売するはずの人の利潤は含まれていないけれども、かりにその人が、自分の地域の通常利潤率が期待できないような価格でそれを売るとすれば、彼がこの取引で損をすることは明白である。というのは、彼がその資本 (stock) をなにか他の方法で使用すれば、それだけの利潤をあげたかもしれないか



- らである。」(WN, p. 55. 大河内訳く1), 95ページ。) Ekelund & Hebert (1975), p. 63. (Ekelund & Hébert [3rd ed.], p. 108.)
- (15) Ekelund & Hebert (1975), pp. 62-63. (Ekelund & Hébert [3rd ed.], pp. 107-108.)

## R. B. エーケルンド Jr. と R. F. エベール (1975年) についての覚書

エーケルンド Jr. とエベールは、スミスは『国富論』での価値についての議論においてまず「使用価値」と「交換価値」およびそれらの間の価値のパラドックスに言及したのち、財貨と財貨との交換比率である相対価格と同義のものとしての「交換価値」およびその経時的変化についての説明をなそうとした、とみるのであった。

なお、本章では我々は、そのような問題についてのスミスの議論の核心は『国富論』第1篇第5章から第7章に含まれているとしてそこでのスミスの議論を取り扱おうとする彼らの議論のうちの、もっぱら『国富論』第1篇第5章および第6章でのスミスの議論に関係する彼らの所論をみてきたのであるが、そこでは彼らは、「交換価値」、「市場価値」、「市場価格」、あるいはたんに「価値」、「価格」といった用語を同義のものとして使用しつつ彼らの議論を展開するのであった。

そして、価値の「尺度」と価値の「原因」とは別個のものであるという認識に立ってそこでの議論を展開する彼らは、スミスは価値(価格)の「尺度」と価値の「原因」との両方を同時に論じたようにみえたということによってスミスの議論に関するその後の解釈はしばしば混乱させられてきた、としながらも、スミスは事実上、労働がたとえ唯一の生産要素ではなくとも主たる生産要素となる原始社会についてのみ価値の「原因」を労働に求めて労働のみによって価値を説明することができるとしても資本の蓄積と土地の私的所有ということによって特徴づけられる社会では事物の価値の「源泉」となるのは労働にたいする賃金、資本にたいする利潤、土地にたいする地代といった当該事物の生産に要する諸費用であると考えるとともに、他方でリアル・タームでの価値の真の尺度を労働時間に求め、また、当該事物と交換に与えられる財貨の量としての当該事物の「実質価格」と当該事物と交換に与えられる貨幣の量としての当該事物の「名目価格」とを区別しようとした、とみるのであった。

## 57. G. ラウス (1975年)

1975年にその上製版初版が刊行された G. ラウス (G. Routh) の一著書 (Guy Routh, *The Origin of Economic Ideas*, London & Basingstoke: Macmillan, 1st paperback edition, 1977 [1st edition 1975; 2nd edition 1989]). なお、ここでは上掲のペーパー・バック版を使用するのであるが、ここで取り扱うラウスの研究の発表年の区分については、上掲書の上製版初版が刊行された年、1975年をとり、そして、以下では、上掲ペーパー・バック版を Routh [1975]と略記することとする。なお、同じ出版社から1989年に出された上掲書の第2版は、Routh [2nd ed.]と略記することとする)の第2章第8節「アダム・スミス (Adam Smith)」のなかの「かけひきや交渉 (Higgling and Bargaining)」という見出しが付されている箇所のはじめのところで、ラウスはつぎのような見解を示している。

スミスはそれのありきたりの形での労働価値説 (labour theory of value) にしたがって、「あらゆる物の真実価格 (real price), すなわち、あらゆる物がそれを獲得しようとする人にたいして真に費やさせるものは、それを獲得するための労苦と骨折りである。……貨幣または財貨でもって買われるものは、我々が自分の肉体の労苦によって獲得するものと全く同じように、労働によって購買されるのである」(WN, p. 30. 大河内訳 < I >, 52-53ページ)と述べている。ところでその尺度 (measure) は、測定することの容易でない異なった種類の労働の質の差異といったことのゆえに、やや空論的なものであるが、そのことにたいしてはスミスは「しかしながらそれは、ある正確な尺度によってではなく、正確ではなくても日常生活の業務を処理してゆくには十分なおおよその同等待性を目安にして、市場のかけひきや交渉によって調整される」(WN, p. 31. 大河内訳 < I >, 55ページ)としている、のである。<sup>(1)</sup>

(注)

(1) Routh [1975], pp. 87-88. (Routh [2nd ed.], pp. 87-88.) なお、この「かけひき

や交渉」という見出しが付されている箇所ではラウスは、以上のような指摘につづけてさらに、スミスはまたそれから「ふつう 2 日分または 2 時間分の労働の生産物であるものが、ふつう 1 日分または 1 時間分の労働の生産物であるものの 2 倍の値打ちがあるというのは、当然である」(WN, p. 47. 大河内訳〈I〉, 80ページ)といったその本質において公正価格 (just price) についての学説「ラウスは彼のこの著書の第 2 章第 1 節「公正価格」においてその学説を取り扱おうとしている」にあたるものを述べるとともにさらに経済の自己・均衡化的な性質を説明しようとし、そのなかで、労働価値説が 1870 年代に放逐されてしまうまでそれと並行して述べられてきた「生産費」価値説 ('cost of production' theory of value) で説明される「自然価格」、また、「市場価格」の「自然価格」への収斂傾向、それを妨げる諸要因、「独占価格」等々といったことを論じている、とみつつ、そのようなものとしてのスミスの議論を取り扱おうとするのであるが (Routh [1975], pp. 88-91. Routh [2nd ed.], pp. 88-91), 事実上価値・価格に関するスミスの議論が取り扱われているこの「かけひきや交渉」という見出しが付されている箇所でのラウスの議論においては、「価値の原因、決定」と「価値の尺度」といったようなことは問題にされてはいない。

## G. ラウス (1975 年) についての覚書

「かけひきや交渉」という見出しのもとで、「価値の原因、決定」と「価値の尺度」といったようなことは問題にすることなしに価値・価格に関するスミスの議論を取り扱うラウスはその取り扱いのなかで、スミスの議論には事実上、労働価値説にしたがっている部分、公正価格についての学説にあたるものを述べている部分、「生産費」価値説で説明される「自然価格」、また、「市場価格」の「自然価格」への収斂傾向、それを妨げる諸要因、「独占価格」等々といったことを論じている部分がある、とみるとともに、「労働価値説」にしたがっている部分でスミスは労働という尺度を主張し、またその尺度にまつわる異質労働の問題にたいしては「市場のかけひきや交渉」といった解決法を提示している、とみるのであった。

## 58. V. W. ブレイドゥン (1975年)

本書の「20」で1938年に公表された V. W. ブレイドゥン (V. W. Bladen) の一論文における、また「54」で1974年に刊行されたブレイドゥンの一著書における、ブレイドゥンの所説を取り扱ったのであるが、ブレイドゥンはさらに、もともとは、うへの彼の著書が刊行された年の翌年1975年に公表された彼の論文 (V[incent] W. Bladen, “Command over Labour: A Study in Misinterpretation,” in *Adam Smith: Critical Assessments*, edited by John Cunningham Wood, 4 vols. London & Canberra: Croom Helm, 1983-1984, vol. 3, pp. 363-376. [Source: *Canadian Journal of Economics*, vol. 8 (no. 4, November-December 1975), pp. 504-519.]) なお、ここでは上掲書所収の上掲論文を使用するのであるが、ここで取り扱うブレイドゥンの研究の発表年の区分については、その論文がもともと公表された年、1975年をとり、そして、以下では、上掲書中のブレイドゥンの上掲論文を Bladen [1975] と略記することとする) のなかで、つぎのような形で捉えることもできるであろうような彼の議論を示している、といえる。

〔I〕ブレイドゥンは、スミスの議論における「労働にたいする支配力 (command over labour)」という概念に関連するみずからの基本的な理解をつぎのような形で示そうとする。

① スミスさらに経済学の古典期の終わりのマルクス (K. Marx) を含めて一般に古典派の経済学者は、経済プロセスを人々が仕事をしているとともに他人の仕事 (work) を支配しているプロセスとしてみていたのであり<sup>(1)</sup>、そして、人は「自分が支配できるその労働〔すなわち、他の人々の労働〕の量に応じて、富んでいたり貧しかったりするにちがいない」というスミスの文言 (*WN*, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ。〔 〕内はブレイドゥン) は、こういった脈絡のなかで考えられなければならないのである。

② また、うへのスミスの文言は、それに「およびその労働の生産性に応じて」という言葉を加えて、人は「自分が支配できるその労働〔すなわち、他の人々の労働〕の量に応じて、およびその労働の生産性に応じて、富んで

いたり貧しかったりするにちがいない」といったものに修正されるべきである。つまり、スミスがそういった文言を示している議論の脈絡は、諸国民の富 (wealth) ということに、「安価さと豊富さ (cheapness and plenty)」というところに、かかわっており、「安価」とは、明らかに、低い「真実価格」(low 'real price')——K. E. ボールディング (K. E. Boulding) が用いた術語でいえば「低い人時価格 (low man-time price)」<sup>(3)</sup>————ということの意味しているものであり、そしてスミスのばあい、生産性——我々はこのにち生産性について語り合うのであるが、その生産性とは、人時価格と表裏の関係にあるものにすぎないのであり、ボールディングの表現でいえばそれは、人時の商品への変換係数 (the coefficient of transformation of man-time into commodities) にあたるものである——における諸変化が、真実価格つまりある特定の商品を生産するのに必要とされる「労苦と骨折り」に、反映されるということになっているのである。<sup>(4)</sup>

③ また、スミスの議論の脈絡では、富の増進、すなわち、我々の欲求が満たされるその程度の向上は、配分プロセスの効率の向上によりもむしろ生産性の向上に、安価さの増進に依存する、とみられているのである。<sup>(5)</sup>

④ そして、生産の増進に関心をいだきまた集成的な生産物合計を測定することの諸困難に直面したスミスは、彼の注意を、真実価格における諸変化、安価さの程度の諸変化、すなわち、特定諸商品に影響を及ぼすものとしての生産性における諸変化の測定ということに、向けたのであり、そしてその場合注意しておくべきことは、スミスは、たとえある特定時点でのある商品の真実価格といったものは測定されえないとしても、その真実価格の経時的な諸変化は、少なくともおおよそのところでは、測定されうるであろうと考えていた、ということである。スミスは、生産性における重要な諸改良を確かめることができるような、諸変化のなんらかのおおよその指標 (index) を、欲したのである。スミスは、諸真実価格における差異を伴った諸変化が市場での諸価格——諸自然価格すなわち諸均衡価格といったものをも含めて——に及ぼす影響といったことに関心をいだいていたのではなく、向上する生産性そしてその結果として生じる富の増進ということに、関心をいだいていたのである。<sup>(6)</sup>

⑤ さらにまたつぎの点にも留意しておくべきである。すなわち、真実価格つまり人時価格の観点からのスミスのこういった議論は、労働がなんらか

の特別な意味で「生産的」なものであるものでありそれゆえ土地や機械類の果たす貢献といったものは無視されることができ、また、労働の、「その労働の全生産物」にたいする請求権といったことが確証されうる、というような示唆をなら伴うものではない、ということである。そしてまた明らかに、労働の生産性は、環境の質や労働が自由に使用できる資本設備の量と質といったものに依存するものとみられていた<sup>(7)</sup>のである。

〔Ⅱ〕つづいてブレイドゥンは、スミスの「労働にたいする支配力」という概念について従来なされてきたと彼が考えるいくつかの解釈を取り上げ、それらの解釈に関して、〔Ⅰ〕でみた彼の基本的な認識にもとづきつつ、以下のような議論を展開する。

(1. まずブレイドゥンは、スミスの議論における「労働にたいする支配力」という概念に関してスミスはそれによって諸商品にたいする購買力を間接的な形で測定しようとしたのだとする解釈が存在してきたとみ、そしてそのような解釈に対して、「労働支配力あるいは購買力 (Labour Command or Purchasing Power)」という表題のもとに以下のような内容の所説を展開する。) :

① すでに見たように、スミスは、人は「自分が支配できるその労働〔すなわち、他の人々の労働〕の量に応じて、富んでいたり貧しかったりするにちがいない」と述べたのであるが、この文言は、たとえば、J. A. シュムペーター (J. A. Schumpeter) や S. ホランダール (S. Hollander) の解釈にみられるように当今の多くの論者によって、諸商品に対する購買力を測定する一つの間接的な方法を示すものとして解釈されてきた<sup>(8)</sup>。しかしながらこういった解釈は誤ったものである。すなわち、その解釈は、そのような文言が述べられているスミスの議論の脈絡を、人々が市場において財貨を交換しているプロセスというよりもむしろ人々が仕事をしているとともに他人の仕事を支配しているプロセスとしての経済プロセスについての叙述という議論の脈絡を、理解していないのであり、スミスがその議論で問題としているのは「労働支配力」であって諸商品にたいする「購買力」ではないのである<sup>(9)</sup>。

② なお、こういったスミスの議論は、我々の言う「実質所得 (real income)」という概念に関係するのであるが、諸価格の不安定性、物価指数についての情報等々といったことから我々は、当該貨幣所得でもって購買されうる財およびサービスの総計としての実質所得という考えに慣れ親しんで

きている。なお、たとえばミルクのクォート数と牛肉のポンド数さらに医療サービスの時間数とを足し加えて一つの値に合計するといったことはできないのであるから、当該貨幣所得でもって購買される財およびサービスの総計といったものは、厳密には、測定できないのではあるが、それでも、「恒常ドル (constant dollars)」のタームでの所得の諸変化を確認するために物価指数を使用するという工夫は、そのような測定不可能な量における諸変化についてのある有用な指標 (indication) を提供する。だが、人は、貨幣のペールから下にさらに深く、財およびサービスというこの実質所得から下にさらに深く進むことができる、そして、そういったことをなすさいに人がとるかもしれない別個な二つの方向がある。一つは「労働にたいする支配力」というものに導くスミスによってとられた方向であり、もう一つのもは、効用論者たちによって示唆されるものであって、それは、「心理所得 (psychic income)」という考えに——すなわち、財およびサービスの厳密には測定不可能なあの量をもつ測定不可能な効用というものに——導くのである。<sup>(10)</sup>

(2. つぎにブレイドゥンは、スミスの議論における「労働にたいする支配力」という概念に関してスミスはそれによって社会的産出高を測定しようとしたのだとする解釈が存在してきたとみ、そしてそのような解釈に対して、「労働支配力と社会的産出高の測定 (Labour Command and the Measurement of Social Output)」という表題のもとに以下のような内容の所説を展開する。) :

① スミスについての一つのより重大な誤解は、うえて取り上げられたような諸商品にたいする購買力の一間接的尺度としての労働支配力といった見解を、個人のあるいは個人集団の所得にではなく総社会的所得、国民分配分、GNP といったものに適用する人々のなかに見いだされる。<sup>(11)</sup>

② たとえば W. J. バーバー (W. J. Barber) は、スミスは「長期にわたる集計的経済変動を測定するための一つの基礎をあたえることはできると考えていた。市場価格はあまりにも気まぐれなものであって産出高の異時点間の変化を測定するためには満足のいくものではなかったのではあるが……」と述べ、さらに、<sup>(13)</sup>「一見したところでは、『労働にたいする支配力』というスミスの考案は、こうした指数問題に一つの解答を提供するかのようにみえた。それは、総産出高をそれが購買しうる労働単位数のタームで表すことによって二時点間の総産出高の変化についての比較陳述が可能になるということ

を、暗に意味していた。一次接近としては、そのような労働単位数のタームでの表現は、貨幣タームで表されている総産出高を基準賃金で割ることによって得られるであろう<sup>(14)</sup>」としている。だが、(i)スミスは、特定諸産業における生産性の向上をすなわち特定諸商品の進展する安価さ（したがってまた豊富さ）を測定することに、関心をいだいていたのであって、一つの全体としての生産性といったものを測定することを試みていたわけでも、総産出高の大きさを測定することを試みていたわけでもなかったのである。(ii)また、うえてみたように、特定の人々あるいは諸特定集団の実質所得の一尺度としては、「労働にたいする支配力」というものは意味をなすのではあるが、総産出高の一尺度としては、それはなんの意味をもなさないものであり、また、スミスはそれを用いたわけではなかったのである。すなわち、一つの全体としての社会がもつ労働支配力とは、その社会が利用することのできる全労働のことである。いま、もしその社会の労働者数が増加するならば、その社会はより多くの労働を支配し、そして、その社会の人口1人当たり産出高は増加しないかもしれないが、その社会はより多くの産出高を享受する。また、もしその社会の労働者たちがより長い時間数働くならば、その社会はより多くの労働（労働時間数）を支配し、そして1人当たり産出高が増加するにつれて総産出高は増加することとなる。だが、生産性が向上しているときには（そして、スミスが関心をいだいていた状況はこういった状況である）、その社会が同一量の労働を支配ししかも総産出高が増加するということも可能なのである。<sup>(15)</sup>(iii)いま、当該社会に100万の人間〔100万人の労働者〕が存在し、そして、彼らの生産性が2倍になり、そのため総産出高が2倍になるとしよう。だが、どのようにして、産出高が2倍になったというような言葉に意味を与えることができるように様々な諸財貨を計算するのか〔つまり、異なった種類の諸財貨の諸量はそのままでは一つの値に合計することのできないものであるからそれらの諸財貨の諸量そのものの合計としての総産出高といったものは厳密には確定できず、またそれゆえそのようなものとしての総産出高が2倍になったといったことは厳密には確定することはできない。このような問題を克服して、総産出高の確定およびその異時点間の比較をなすことができるようにするにはどうすればよいのか〕。バーバーによれば、スミスは、それが支配することのできる労働単位数のタームで総産出高を示すことによって、平均貨幣賃金で割った産出の貨幣での総価格〔(産出の貨幣での総価



格) / (平均貨幣賃金)] を示すことによって、それをなした、とされる。いま、生産性における改善がすべての産業の間で均一的であったと仮定しよう。その場合には、スミスは、それらの産業において生産される生産物1単位の真実価格また労働支配力は半減させられることになる、と言うことになるであろう。<sup>(16)</sup> だがそれでもなおその社会には、みずからの労働が支配されうる人々は100万人しか存在していないのである、したがって、総産出高の労働支配力は変化してはいないのである。もっとも、その場合、総産出高の貨幣での価格が2倍になっているかもしれず、しかも労働者たちの貨幣賃金は変化していないかもしれない。そしてそういった事情は、平均賃金で割った総産出高によって測られるものとしての産出高が2倍になったのだから労働支配力は2倍になったということを意味しているかのようにみえるかもしれないであろう。だが、そういった事情が本当に意味していることは、資本家、不労所得生活者たちの労働支配力が増加しており、労働者たちの労働支配力が減少している、ということなのであり、したがってまたそれは、マルクスの用語で言えば、搾取の程度、剰余価値の総額にかんしてなんらかのことを語っていることとなる、ただし、その剰余価値に相当する諸財貨の量についてはなにごとをも語ってはいないのである。<sup>(17)</sup><sup>(18)</sup>

③ また、(a)R. L. ミーク (R. L. Meek)<sup>(19)</sup> も、同じように、「一国の生産物 (the national product) が購買あるいは支配するであろう労働の量 (すなわちその生産物の価値)」ということに言及し、さらにまた、その量は一般に「その生産物の生産に要する労働の量 (the quantity of labour required to produce it)」よりも大きいということを主張し、そして彼は、スミスが「支配しうる労働という概念」を使用したのは、「資本主義のもとでの蓄積という特殊な問題についての分析への彼の関心の産物であるという点がかかなり多かったようである」、という考えを提示している。<sup>(20)</sup> ミークのこういった議論も満足のいくものではない。すなわち、「体化される労働 (labour embodied)」と「支配される労働 (labour commanded)」という二つの量は同一であるにちがいがなく、それらは「利用可能な労働」を指し示す二つの様式にすぎないのである。<sup>(21)</sup> そして、蓄積の問題とは、資本家階級によって支配される労働の量がどれほどであり、また、その労働が贅沢よりもむしろ蓄積に向けられるか、といったことなのである。(b)さらにまたミークは、「狩猟民族」のケースに言及するさい、10時間の労働は、10時間の労働を支配する

であろう産出物を生産するであろう、ということ認めるのであるが、彼はまた、蓄積以後は「その商品が購買または支配するであろう労働の量はいまや10時間よりも多いであろう」と述べ、そして、その場合には、生産の技術的諸条件は同一のままであったとしても、スミスの意味でのその商品の「価値」は増加したと言われなければならない、としている。<sup>(22)</sup>だが、蓄積は「技術的諸条件」を変化させているにちがいがなく、労働の生産性は向上しているにちがいない、そして10時間の労働はより多くの生産物を生産するということになるであろう、そしてスミスの意味での価値——真実価格（体化されている労働〔の量によってその大きさが示される〕）であろうと「真の値打ち (real worth)」（支配される労働〔の量によってその大きさが示される〕）であろうと——は、低下しているにちがいないのである。しかしそのさいにはまた、資本家たちの労働支配力が増加していることになり、増加した生産物のうちの彼らの分け前が増加していることになっているであろうし、また、諸生産物の相対的な交換価値は、種々の諸商品の諸生産方法における相対的な改良——費用における相対的な削減——におおよそのところで合致するよう変化していることになっているであろう。<sup>(23)</sup>

④ また、うえのものと非常によく似ているのが、H. ミントによるこの問題の取り扱い<sup>(24)</sup>である。すなわちミントはその議論を展開する過程で、「発達した経済においては国民分配分によって『支配される』労働の量は、地代〔および利潤〕の形で支払われる分配分の部分の程度だけ、その国民分配分の生産に『体化された』労働の量を超過するというスミスの命題<sup>(25)</sup>」ということに言及するのである。だが、スミスはそのようなことを述べたわけではなく、また、そういった命題は無意味なものなのである。すなわち、体化されるべき労働すなわち支配されるべき労働それだけの量の労働が存在するだけなのである。そこにおいて真に問題となることは、「存在するその労働を」だれがどれだけ支配するかということなのであり、また、スミスが取り扱っていた問題は、存在するその労働の〔個々の商品生産部門での〕生産性における諸変化をどのようにして測定するか、ということであったのである。<sup>(26)</sup>

⑤ なお、いくつかの混乱は、労働支配力を、たとえばあなたがその雇用 (employing, hiring) という点ではなんの役割をも演じはしないとしてもあなたがその生産物を享受することのできる場所の労働の量（それだけの量の労働がどのように雇用されようと）としてよりもむしろ、資本家が雇

うことのできる労働の量として、取り扱うことから、生起してきているのであり、また付加的な混乱は、生産的労働と不生産的労働との間の区別から、生起してきている。<sup>(27)</sup>

(3. つぎにブレイドゥンは、スミスの議論における「労働にたいする支配力」という概念に関してスミスはそれを価値の決定因という脈絡のなかで論じていたとする解釈が存在してきたとみ、そしてそのような解釈に対して、「労働支配力、価値の決定因それとも価値の尺度 (Labour Command, Determinant or Measure of Value)」という表題のもとに以下のような内容の所説を展開する。) :

① P. H. ダグラス (P. H. Douglas<sup>(28)</sup>) は、スミスの労働価値説には投下労働量による価値の決定と支配労働量による価値の決定という二つの異なった学説が含まれているとするのであるが、これは、「原因 (cause)」の意味で「決定するということ」と「測定 (measure)」の意味で「決定するということ」とを混同しているものである。<sup>(29)</sup> さらにまたダグラスは「ヴィーザー (F. von Wieser) によっても言われたように、労働費用説は原始社会における価値を説明するためのものにすぎなかったのでありそしてスミスが労働支配力説を考えだしたのはより進歩した社会で価値がどのようにして定められるかということの説明するためであった、ということが時折言われる」と述べるのであるが、ここでは、ダグラス (そしてまたヴィーザー) は『国富論』第1篇第7章での価値の生産費説 (cost-of-production theory of value) の提示を無視しておりさらにまた真実価格の一尺度としての労働支配力の使用ということを正しく理解していない、ように思えるのである。シュムペーターも、こういった解釈は誤ったものであるということをはっきり知覚しており、「商品の価値の説明としてその商品と交換されるもの……を用いるということは、〔価値〕理論の歴史における最悪のあやまちの一つであろう」としている。<sup>(31)</sup> 事実スミスはこういったあやまちをおかしてはいなかったのである。<sup>(32)</sup>

② リカードウは、この誤りすなわち価値の尺度と原因との混同という誤りをあやうくおかすところであった、だが、ゴナーが彼を免罪しているのは正しいと思える。とはいえ、リカードウが、スミスは「ある対象物の生産に投下された労働量 (the quantity of labour bestowed on the production of any object)」と「それが市場において支配しうる労働量」とを「同じことを表すもの」として取り扱った、と述べたとき、リカードウは事実、論点を混乱さ

せていたのである。スミスはそれらのものがどんなに異なるものであるかということを知っていたのである、しかしまた彼は、後者における諸変化は前者における諸変化の一指標を提供することができようと考えたのである。また、リカードウがそれにつづけて、〔スミスは〕「ある人の労働が2倍の能率をもつようになったまたそれゆえ彼が一商品の2倍量を生産することができる」といったことのゆえに、彼は必然的に労働と交換に以前の2倍量を受け取るであろう、かのように」〔論じた〕、と述べたとき、リカードウはスミスをさらにいっそう誤り伝えていたのである。スミスはそんなことを主張しはしなかったのである。スミスが言ったことは、真実価格が半減させられているであろうということ、そして、その商品の労働支配力はおおよそ半減させられるであろうということ、であったのであり、スミスは、生産性のそのような向上が実質賃金にあるいはまた平均的労働者の労働支配力に及ぼす効果といったことそのものについては何も述べはしなかったのである。

〔Ⅲ〕ブレイドウンはさらにつづけて、スミスの議論において「労働にたいする支配力」という概念と密接な関連をもちつつ展開されていると彼がみるところの「真実価格の変化の測定」(生産性の変化の測定)ということに関して、「諸真実価格における諸変化の測定 (Measurement of Changes in Real Prices)」という表題のもとに、つぎのような内容の所説を展開する。

(1. まず、ブレイドウンは、スミスの「真実価格」概念の意味、および、その概念とスミスの議論における主要問題との関連、についてのブレイドウンの認識を再確認する。) :

スミスは、「あらゆる物の真実価格は……それを獲得するための労苦と骨折である」とする<sup>(39)</sup>。これは真実価格 (real price) の定義であって真実価格の因果的説明ではない。そして、スミスは、富の増進——安価さと豊富さの増進——の主要原因は技術改良につれてのそれら諸真実価格の削減である、と考えるのであり、資源配分の改善ということよりもむしろこのことこそがスミスの主要関心事であったのである。だが、スミスの場合、この真実価格はどのようにして測定されるべきものであったのか。<sup>(40)</sup>

(2. ついで、その諸真実価格の削減ということこそがスミスの主要関心事であったとみるとともにスミスの議論では「労働支配力における諸変化」が「諸真実価格における諸変化」についての一指標を提供すると考えられていたとみるブレイドウンは、諸真実価格自体を測定することにまつわる困難

性ということに関連づけつつ、スミスの議論における「労働支配力における諸変化」による「諸実価格における諸変化」の測定といったことに関して以下のような議論を展開する。）：

① 実価格の測定にまつわる困難性として以下の三つのものをみてみよう。第一に、労働の質は均一的ではないということである〔異質労働の問題〕。スミス自身もこのことは認めているのではあるが<sup>(41)</sup>、この問題自体にたいしては、スミスのいう「市場のかけひきや交渉」といったようなものは真に満足はいく解決を提供するものではない。だが、もし我々が正確な測定といったものを追求することをあきらめて実質的諸変化のおおよそ測定ということでは我慢するならば、そのときには、労働者たちが平均的労働者たちであると仮定されても、さらに、「実価格」あるいは労働量は、様々な熟練をもった労働者たちの平均的かせぎ高に従ってウェイトづけられるそれらの労働者たちによって費やされる時間数とみなされても、よいであろう。また、「労働支配力」というものは等質の労働にたいする支配力ではなくて平均的労働にたいする支配力を指す、と考えることもできるのである。<sup>(43)</sup>

② 第二の困難性は、「労苦と骨折り」——我々ならそれを不効用と呼ぶであろう——を直接的に測定することの不可能性および一間接的尺度としての「人時」(‘man-time’, 延べ労働時間)の妥当性に関する疑わしさ、ということである〔不効用の不可測性および間接的尺度としての「人時」の当否〕。スミスはこの問題に真正面から出くわしたのでありまたこの問題に対するスミスの解答はしばしば誤って解釈されてきたのであるが、たとえばスミスはこの問題に対する解答として「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう。彼の健康、体力、精神が普通の状態で、また彼の熟練と技能が通常程度であれば、彼はつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一部分を犠牲にしなければならない」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 57ページ)といったことを述べている。さて、もし人が不効用のある正確な尺度を求めているのではなくて、労苦と骨折りにおける諸変化のあるおおよその指標として人時における諸変化を使用することを正当化するための理由を求めているならば、こういったスミスの文言は、大いに意味をなしていることになるのである。<sup>(44)</sup>

③ 第三の困難性は、特定諸財貨の生産に現在実際に費やされる労働量また過去において実際に費やされた労働量についての記録の欠如ということの

なかに存在する。この問題は、直接労働だけを扱うときでさえ確かに困難なものであろう。だがそれにくわえて、当該諸財貨のための原材料を産出した人々の、および当該諸財貨の生産において直接的に働く人々の労働を「促進しました短縮する」ために使用される設備を製造した人々の、労働もまた、見積もらなければならないのであり、さらに同様に、その原材料を産出した人々および当該財貨の直接的生産に使用されるその設備を製造した人々の、設備、そういった設備を生産するのに使用された労働もまた、見積もらなければならないのである。〔投下労働量の確定の困難性：直接労働の量の確定だけでも困難であるのに、それにくわえて間接労働の量をも確定しなければならない。〕<sup>(45)</sup> スミスもこのことを認識していたと思われる。(a)そしてスミスの場合、労働投入量 (labour input) のタームでの計算書の欠如ということから、彼は、ある間接的な尺度を、というよりはむしろ変化についてのあるおおよその指標を、捜し求めたのであり、彼が「労働支配力」というものを利用したのは、そのような指標としてなのである。<sup>(46)</sup> (b)なお、変化する労働支配力というものが「労働投入量・真実価格の」諸変化の一つの有用なおおよその指標を提供するということは可能なことである。しかし、諸賃金率についての十分な史的統計の欠如のために労働支配力「およびその諸変化」を確定することが困難であるということに直面してスミスは、財貨の穀物価格 (corn - price of goods, 財貨の穀物ターム価格) における諸変化があるかなり近い近似値を提供するであろう、と主張した。たしかにスミスのこの主張は妥当なものではない。<sup>(47)</sup> だが、たとえ諸真実価格についての一指標として穀物を使用するということは受け容れられないとしても、彼の目的は何であったかを理解すべく『国富論』第1篇第11章を読むにさいしてはそれは重要なものでありつづけるのである。すなわち、スミスは我々の言う意味での貨幣の購買力の変化といったものを研究していたわけでも、諸指数のウエイトづけということに関するこんにちの我々の諸問題を取り扱っていたわけでもなく、彼は、労働支配力における、あるいは、あいにくのことであるが穀物支配力における、諸変化に反映されるものとしての諸真実価格における諸変化といったものを、研究していたのである。<sup>(48)</sup>

〔Ⅳ〕スミスの議論における「諸真実価格における諸変化の測定」ということに関して以上のような議論を展開したブレイドゥンはさらに、そのような真実価格の変化の測定という問題はある所与の時点での市場における均衡

的な価値の決定についての説明という問題とは別個のものであり、またスミスもそれらの問題に対して別個な取り扱いをしているにもかかわらず、こういった問題についてのスミスの議論をそのように捉えない解釈も存在してきたし、また、「労働説 (labour theory)」という言葉の意味の理解についても混乱が存在してきた、とみて、「真実価格と自然価値 (Real Price and Natural Value)」という表題のもとに、つぎのような議論を展開する。

① ジイド (C. Gide) とリスト (C. Rist) の共著では、スミスの議論における「真実価格」の問題と「自然価格」、自然価値の問題とは同一の問題として捉えられている<sup>(50)</sup>。しかしそれらは同一の問題ではなかったのである。真実価格についてのスミスの議論は、史的な問題すなわち諸事物がより安価になってきたかどうか、つまり、「手に入れるのが」より容易になってきたかどうかといった史的な問題を、取り扱っていたのであり、そして自然価値 (natural value) についての議論では彼は、供給がみずからを有効需要に適合させているといったある所与の時点での市場における諸均衡価格を、均衡および配分を、取り扱っていたのである<sup>(51)</sup>。

② また、ミックは、多くの経済思想史家がスミスは実際には労働説を拒否したのだと断定した（「人はいくらか気楽に、そうではないかと思う」）ということ<sup>(52)</sup>を、指摘した。スミスは狩猟民族という単純なモデル以外については、〔それらの経済思想史家が言う意味での〕労働説を、拒否したのである<sup>(53)</sup>。ところで、ミックはまた、「そのように主張するのは、労働説を誤解するものである……、とわたくしは信じる」と言う。だがミックがそのように言うとき、そのときには、彼は、それらの経済思想史家が労働説という言葉によって意味していることを誤解しているのである。彼らは労働説という言葉によって、ある所与の時点での市場における長期的あるいは均衡的諸価値の決定についての一説明ということを行っているのである。なお、ミックは他方でさらにつづけて、「労働説とは本質において、生産の領域で人々が相互にむすぶ基本的諸関係が交換の領域において彼らが入る諸関係を究極的に決定するという考えの表現である。マルクスが……『原理的には、生産物の交換があるのではなく、生産において協働した労働の交換があるのだ……』と述べたように」、と言っている<sup>(54)</sup>。もしこれが「労働説」ということによつて意味されることであるならば、そのときにはもちろん、すべての古典派経済学者は労働説論者であったということになる。そしてまた事実、この脈絡

においてのみ、彼らは理解されることができるのである。<sup>(56)</sup>

(注)

(1) ブレイドウンは、経済プロセスを人々が仕事をしているとともに他人の仕事を支配しているプロセスとみなすこういった見方は、経済学の古典期の冒頭でのスミスの労作のなかにまた古典期の終わりでのマルクスの労作のなかにとくにはっきりとあらわれている、とし、その例として、スミスの「国富論草稿」からつぎのような文章を引用している。「いつでも自分自身の目的のために、多くの人の労働 (labour) を指図しうるのが、自分自身の勤労 (industry) だけにたよっている者よりも、自分の必要とするあらゆるものを、よりよく調達できるということは、きわめて容易に想像しうるところである。……文明社会 (Civilized Society) においては、貧乏人は自ら調達するとともに支配階級 (Superiors) の莫大な奢侈にたいしても供給するのである。……10万家族〔ブレイドウンの論文では100家族として引用されているが、「国富論草稿」の原文では10万家族〕の社会には、全然労働しない100家族が、たぶん存在していて、彼らは、暴力、あるいはそれより物静かな、法律の圧力、によって、その社会にいる他のいかなる1万家族が使用するよりも多くの、その社会の労働を使用 (employ) しているのである」(Scott, *Adam Smith*, pt.3. ED——つまり、本書前出「20」の注4中であげられたもの——, pp. 326-327. 水田訳『国富論草稿』, 46—51ページ。〔 〕内は中川)。Bladen [1975], p. 364.

そしてブレイドウンによれば、うへの引用文においては「使用している」(employ) という言葉は、企業者 (entrepreneur, 企業家) として賃金を支払っているとといったことを言おうとしているのではなく、そういった労働の使用 (employment) がどんなふうに組織されていようととにかくその労働の生産物を享受しているということと言おうとしている、ということは明らかなことであるように思えるのであり、そしてこういった考えは、マルクスにおける搾取の理論に、すなわち、労働者たちは彼らの時間の一部を生活資料の生産に費やし (「必要労働時間」)、そして彼らの時間の残りの部分を、資本家階級のための——たんに、その階級のうちの実際に賃金稼得者たちを雇いそして彼らの生産的諸活動を組織する構成員たちのための、というわけではない——剰余価値の生産に費やすといった理論に、関連づけられるものである、とされる。Bladen [1975], p. 364.

(2) Bladen [1975], p. 364.

(3) ブレイドウンは、ボールディングがこのような術語を用いている箇所として、Kenneth E. Boulding, "Equilibrium and Wealth: A Word of Encouragement to Economists," *Canadian Journal of Economics and Political Science*, vol. 5 (no. 1, February 1939), pp. 1-18——以下、Boulding [1939]と略記する——中の pp. 9-12



をあげている。Bladen [1975], p. 364.

(4) Bladen [1975], p. 364.

(5) Bladen [1975], pp. 364-365. このことに関してブレイドゥンはつぎのような説明を加えている。すなわち、スミスは『国富論』第1篇第7章において、供給がみずからを有効需要に適合させる配分プロセスについてのある非常に満足のいく説明を与え、そしてそれによって、企業活動の自由にたいする彼の弁護の諸支えの一つを提供したのであるが、彼をしてそのような自由を弁護するよう主に動機づけていたものは、自由というものが生産性に及ぼす好ましい効果ということであったのである。またこのことは、ミント (H. Myint, なお、ブレイドゥンは、我々が本書の「22」で取り扱ったミントの著書をあげている。ただし、ブレイドゥン自身が使用しているのはリプリント版ではなく元の版) も述べているように [Myint [1948], pp. 3-4 を参照せよ], 自由な交易にたいするスミスの弁護といったことにもあてはまるのであり、その場合スミスは、配分構造の「強化」ということよりも、「拡張」プロセスにすなわち「ヨリ良好な分業をもたらすところの市場の範囲の拡大」ということに、ヨリ多くの関心をいだいていたのである。Bladen [1975], p. 365.

(6) Bladen [1975], p. 365.

(7) Bladen [1975], p. 365. このことに関連してブレイドゥンはさらにつぎのような説明を加えている。すなわち、ボールディングは、人時 (man-time) を一つの本源の等質的資源とみなすことは、協働する土地あるいは協働する諸要素の稀少度の影響といったものは諸変換係数のなかに完全に反映されうと考えることを、妨げるものではない、「人が多量の良好な土地および設備と協働しているとき、あるいは彼の熟練、精力および才能が高度なものであるときには、人時の生産物への変換係数は大きい、つまり、1人時 (one man-hour) はある大きな量の財およびサービスを生産するであろう」と述べているが [Boulding [1939], p. 10 を参照せよ], この立場がスミスの立場なのである。彼は、「あらゆる特定の国民にたいする年々の供給の豊かさあるいは乏しさに影響を与えるものとして「その国民の領土の地味、気候あるいは広さ」ということに言及したし、特定諸商品を生産するのに必要とされる労働を「促進し、短縮する」諸機械に言及したし、また、蓄積の重要性を強調したのであった。Bladen [1975], p. 365.

(8) ブレイドゥンは、シュムペーターおよびホルンダーがこのような解釈を示している例として、我々が本書の「24」で取り扱ったシュムペーターの著書および「51」で取り扱ったホルンダーの著書からのつぎのような引用文を提示している。「スミスは、異場所間比較ならびに異時点間比較という目的のために、この貨幣価格または名目価格に代えて、我々が貨幣賃金とは区別されるものとしての実質賃金 (real wages) について語るのと同じ意味での実質価格 (real price) を、すなわち、あらゆる他の諸商品のタームでの価格を、もちだしてくる。……彼は、彼の時代にすでに

発明されていた指数方法を知らなかったために、諸実質価格をさらに転じて、労働のタームでの諸価格に置きかえる……。……彼はニューメレールとして、銀や金の代わりに、労働を選び出すのである。〔Schumpeter [1954], p. 188 (前掲邦訳, 第1分冊, 392ページ)を参照せよ。なお、以上の引用文ではシュムペーターの原文中の数箇所がことわりなしに省略されたり変更されたりしているのであるが、ここではブレイドウンの提示しているそのままの引用文を示しておくこととした。〕「一商品によって支配される労働がその商品の一般的購買力の指標を提供する。……『真実価値 (real value)』は、こうして、消費財にたいする購買力にあてはまり、他方、労働にたいする支配力はそのための間接的手段として役立つ。〔Hollander [1973], pp. 127-128 (前掲邦訳, 180ページ)を参照せよ。〕『真実価値』の支配労働指標の選択は、……諸商品にたいする購買力の間接的尺度たることが、意図されていた。〔Hollander [1973], p. 135 (邦訳, 188ページ)を参照せよ。〕 Bladen [1975], p. 366.

- (9) Bladen [1975], pp. 366-367. ブレイドウンによれば、そのようなものとして解釈されるベキスミスの立場は後代のA. マーシャル (A. Marshall) や J. M. ケインズ (J. M. Keynes) の議論のなかにも見いだされるのであり、彼らは延べ払い (deferred payments) の適当な標準ということに関連して、諸商品にたいする購買力ではなく労働にたいする購買力 (支配力) を用いて議論を展開しようとしている、とされる。詳しくは Bladen [1975], pp. 366-367 を見よ。

なお、上記ページのある箇所においてブレイドウンは、貨幣の安定的な「労働支配力」ということは生産性の向上につれての諸価格の低下を意味するであろうということをマーシャルは認知していたのであり、また、技術進歩が生じている期間での諸個人所得の変動する労働支配力というものは「諸商品にたいする購買力の間接的な尺度」ではないということをマーシャルは十分に理解していた、とし、そして、そのような期間においては安定的な購買力とは低下する労働支配力ということを、また、安定的な労働支配力とは低下する諸価格を、意味するだろう、といった指摘をなしている。スミスの議論における生産性の向上ということの重要性を強調するブレイドウンはおそらくそこではつぎのような状況のことを言っているのであろう。すなわち、技術進歩等によって生産性の向上がある場合に、その生産性向上の結果、諸商品価格が安定的にとどまったままで貨幣賃金が増加するようなことがあれば (⇔商品タームでの賃金の増上)、「貨幣の商品購買力」が安定的なままで「貨幣の労働支配力」は低下することになり、個人がもつある一定額の貨幣 (個人の「貨幣」所得) の商品購買力が安定的なままでその一定額の貨幣の労働支配力は低下することとなり、したがってこの場合には、個人の所得の労働支配力は、その個人の所得の商品購買力を反映することはできないということになる。同様に、その生産性向上の結果、諸商品価格が低下するが貨幣賃金は安定的にとどまるようなことが

あれば(⇔商品タームでの賃金の上昇)、貨幣の労働支配力は安定的なままで貨幣の商品購買力は上昇することになり、個人がもつある一定額の貨幣の労働支配力が安定的なままでその一定額の貨幣の商品購買力は上昇することとなり、この場合にも、個人の所得の労働支配力は、その個人の所得の商品購買力を反映することはできない、ということになる。

なお、ホルンダーによれば、スミスのいう「真実価値 (real value)」という用語には、消費財にたいする購買力としての「真実価値」とともに、生産の努力費用 (effort cost of production) という点からの支配労働〔つまり、労働不効用にたいする支配力という意味での支配労働〕としての「真実価値」、具体的にはたとえば国民所得に対応する努力という相対物に相応するところの不効用といったようなもの〔つまり、国民所得の、労働不効用にたいする支配力、といったようなもの〕としての「真実価値」という二つの含意がある、とされ、そしてスミスの議論では「支配される労働」 (labour commanded) は、前者の意味での「真実価値」の指標、間接的尺度とされているとともに後者の意味での「真実価値」の尺度ともされている、とされるのであるが、そのさいホルンダーは事実上、「商品生産力としての労働にたいする支配力」は「諸商品にたいする購買力 (支配力)」の間接的手段を意味するということからスミスは一方で「支配される労働」を前者の意味での「真実価値」の指標、間接的尺度とすることとなった、と解するとともに、さらにまた例えば、労働生産性の継続的上昇が実質購買力についてのこの指標、間接的尺度を全面的に不適切なものにしてしまうことはなかろうとスミスはみていた、ともするのであった。(Hollander [1973], pp. 127-128, 132, 135-136. 邦訳, 179-181ページ, 184ページ, 188ページ。本書前出「51」の、④, 注4-9, 注14の最後部, 「覚書」第2パラグラフも見よ。)

- (10) Bladen [1975], p. 367. さらにブレイドゥンはつぎのような説明を加えている。すなわち、たしかにそういったものは測定不可能なものではあるがそれに関連していくつかの常識的な主張を形成することはできるのであって、ヴェブレン的な考え方にそって、つぎのように主張することもできるであろう。つまり、どんな個人のあるいはどんな個人集団の心理所得も、他の諸個人あるいは諸個人集団の実質所得が上昇しているのにその個人のあるいはその個人集団の実質所得が一定にとどまるときには、低下する、ということである。そしてこれが、実質賃金は上昇してきたけれども「相対的窮乏化」〔なお、ブレイドゥンは 'relative immiserization' という用語を使用している〕が進行してきたというマルキストたちの主張にとっての根拠となるものであり、またこれは、ケインズの「労働標準」の「公正さ」を主張するための一根拠となりうるかもしれないのであり、さらにそれは、所得の労働支配力というもののスミスの関心を正しく理解するための助けとなりうるかもしれないのである。Bladen [1975], pp. 367-368.

- (11) Bladen [1975], p. 368.
- (12) ブレイドウンは、我々が本書の「42」で取り扱ったバーバーの著書をあげている。  
Bladen [1975], p. 368.
- (13) Barber [1967], p. 31 (前掲邦訳, 35-36ページ) を参照せよ。
- (14) Barber [1967], p. 34 (邦訳, 39ページ) を参照せよ。
- (15) ブレイドウンによれば、生産性が向上する場合におけるこういった事情についての考慮は、『経済学および課税の原理』第20章「価値と富 (Value and Riches), それらの特性」におけるリカードウ (D. Ricardo) の主張——「製造業における100万の人の労働は、つねに同一の価値 (value) を生産するであろう、しかし必ずしもつねに同一の富 (riches) を生産しないであろう。機械の発明, 熟練の向上, よりよい分業, あるいはより有利な交換がなされうる新市場の発見によって、一つの社会状態において、100万の人は、彼らがある他の状態において生産しうであろう富 (riches) の、すなわち、『必需品, 便益品, および娯楽品』の、2倍または3倍の量を生産するかもしれない、しかしそれだからといって、彼らは価値 (value) にすこしも付加しないであろう」(David Ricardo, *Principles of Political Economy and Taxation*, edited, with Introductory Essay, Notes and Appendices, by E. C. K. Gonner (London: G. Bell & Sons, [1891], 1927)[以下, Ricardo, *Principles* [ed. Gonner] と略記する, ただし, ブレイドウン自身はゴナー (E. C. K. Gonner) 編のものと1891年のものを使用している], p. 258. Ricardo, *Principles* [ed. Sraffa], p. 273. 堀訳『原理』, 315ページ) ——の背後にある常識である、とされる。なおまたブレイドウンによれば、リカードウの場合そこでいわれている「価値 (value)」とは「体化されている労働の量」(the 'quantity of labour embodied') である、だが、もし人がある所与の量の体化されている労働の、生産物を享受するならば、その人は同じように、それだけの量の労働を支配していたまたその結果として生ずべき「富 (riches)」を享受していたのだと言われてもよい、とされる。Bladen [1975], pp. 368-369.
- (16) この後者の点については、本章の、この〔Ⅱ〕の、後出(3)の②、また、注46を、参照せよ。
- (17) ブレイドウンがここで言っていることはつぎのようなものとして理解できよう。  
すなわち、ブレイドウンによれば、一社会の労働支配力、一社会の総産出高の労働支配力とは、その社会が利用することのできる全労働量、その社会に存在する全労働量のことであって、社会に存在するこの全労働量が一定であれば、財貨そのものの産出高が変化したとしても、その社会の労働支配力、その社会の変化した総産出高の労働支配力は一定のままなのであり、また逆に、社会に存在するその全労働量が増加(減少)すれば、その社会の財貨そのものの総産出高とは関係なしに、その社会の労働支配力、その社会の総産出高の労働支配力は増加(減少)することとな

る。したがってまた、産出の貨幣での総価格を平均貨幣賃金で割って当該社会の総産出高が支配しうる労働量をみるといったことは、もともとなんの意味をもなさない、ということになる。さて、いま、当該社会に存在する労働量および貨幣賃金が一定のままで、社会の総産出物の貨幣での価格が2倍になった、としよう。このような事態においては、パーバーの示す公式によれば平均貨幣賃金で割った産出の貨幣での総価格によって示されるものとしての総産出高は2倍になり、労働支配力は2倍になったということになる。だが、本当のところは、存在する労働量が一定なのだから、社会の労働支配力、社会の総産出高の労働支配力も一定のままなのである。このような事態が真に意味していることはつぎのようなことなのである。いま社会の構成員を労働者と資本家・不労所得生活者とかなるものとする。とすると、この二つのグループのうち、労働者グループについていえば、貨幣賃金および存在する労働量が一定のままであるのであるからそのグループが受け取る貨幣での分け前は一定のままであり、貨幣での総産出高が2倍になることによって貨幣での分け前が増加するグループがあるとすれば、それは資本家・不労所得生活者グループということになる。そしていま、そのグループの受け取る貨幣での分け前が、事実、増加したとする。とすると、存在する労働量が一定のもので、労働者グループの受け取る貨幣での分け前が一定のままで資本家・不労所得生活者グループの受け取る貨幣での分け前が増加するのであるから、それに対応して、資本家・不労所得生活者グループの労働支配力が増加し、労働者グループの労働支配力は減少する、ということになる。そしてこういったことは、マルクスの用語で言えば、搾取の程度〔搾取度…剰余価値率＝（剰余価値）／（可変資本）；ここでの例では、（資本家・不労所得生活者グループの受け取る貨幣での分け前）／（労働者グループの受け取る貨幣での分け前）、に対応〕、剰余価値の総額〔ここでの例では、資本家・不労所得生活者グループの受け取る貨幣での分け前に対応〕にかんしてはなんらかのことを語ってはいるが、その剰余価値に相当する諸財貨の量そのものについてはなにごとをも語ってはいないのである。

(18) Bladen [1975], pp. 368-369.

(19) ブレイドゥンは、我々が本書の「27」で取り扱ったミークの著書をあげている。ただしブレイドゥン自身が使用しているのは第2版ではなく初版。

(20) Meek [1956], p. 66（前掲邦訳、75ページ）を参照せよ。

(21) ブレイドゥンによれば、本章の注15でみたように、人がある所与の量の体化されている労働の、生産物を享受するときその人はそれだけの量の労働を支配していたまたその結果として生ずべき「富」を享受していたのだと言われてもよい、とされ、そしてまたブレイドゥンによれば、一国全体としてみる場合、一国の生産物そのものの量にはかわりなく、その国に実際に存在する労働の量・その国が全体として利用できる労働の量が、その国が全体として「支配しうる労働」の量、その国の一

国の生産物の生産に投入される労働の量なのであり、一国が全体として「支配しうる労働」の量であるその国に実際に存在する利用可能な労働量が生産に投入されることによって、その国はそれだけの量の労働が「体化されている」生産物を享受することになる、とみられるのである。

なお、ミークの場合には、当該商品の売り上げで買いうる他の商品のなかに体化されている過去の労働の量〔この脈絡では、当該商品の売り上げで他の商品を買いうるということは、他のその商品のなかに体化されているだけの量の過去の労働を支配しうる、ということとなる〕と当該商品の売り上げで雇いうる現在の労働の量とが問題にされ、そしてミークは、スミスのいう「支配しうる労働の量」とは後者の労働量のことであって、そしてまたスミスは一国の生産物が支配しうる〔現在の〕労働量がその一国の生産物を生産するのに要した労働量を超えるその大きさ、その差が、その国がつぎの生産期に行いうる蓄積額の尺度となると考えた、とみるのであった。(Meek [1956], pp. 63-64, 64n. 1, 65-66, 66n. 2 (邦訳, 71-72ページ, 71-72ページ注1, 73-75ページ, 74ページ注2) を見よ。本書前出「27」の, ②, ③, ④, 注4, 注5も見よ。)

[22] Meek [1956], p. 79 (邦訳, 90-91ページ) を参照せよ。

[23] Bladen [1975], p. 369.

[24] ブレイドゥンがここであげているミントの著書は、本章の注5中で触れられたものの。

[25] Myint [1948], pp. 20-21 を参照せよ。〔 〕内は、前掲書前掲ページ中のミントの文言中にあってブレイドゥンの示す引用文中にない部分。

[26] Bladen [1975], pp. 369-370. なお、ブレイドゥンはこのことに関して、ミントの算術例を用いつつ、つぎのような説明をなしている。すなわち、ミントは、国民分配分が1,000単位の労働を「支配」し、そして、その国民分配分は、一般的賃金財のタームで1,000単位の産出物からなっている、と仮定し、そして、それら1,000単位の財貨のうち600単位は賃金として支払われ、200単位は地代として200単位は利潤として支払われる、とする。そして、ミントは、スミスにしたがえば、1,000賃金単位のその時の社会産出物はいま1,000単位の労働を支配するのではあるけれどもこの1,000賃金単位の社会産出物は、ただ600単位だけの「体化された(embodied, 具現された)」労働の生産物である、と言う。[Myint [1948], p. 21 を参照せよ。] だが、そのような学説をスミスのものと判断することを正当とするための根拠を見いだすことはできない。ここでは、ただ1,000単位だけの支配されるべきすなわち体化されるべき労働が存在するのであり、それだけの単位数の労働のうち、この例では労働者たちは600単位を支配し、地主たちと資本家たちとで400単位を支配するのであり、そして、そのなかに労働が体化される諸財貨のうちの3/5を労働者たちが、2/5を「有産者たち」が、享受するのである。そしてまた、スミ

スを取り扱っていた問題は、それら1,000単位の労働の〔個々の商品生産部門での〕生産性における諸変化をどのようにして測定するか、ということであったのである。Bladen [1975], p. 370.

(27) Bladen [1975], p. 370.

(28) ブレイドゥンは、我々が本書の「14」で取り扱ったダグラスの論文をあげている。ただしブレイドゥン自身が使用しているのは、事実上、本書のその「14」の冒頭で最初に示された書物の元の版中に収録されているもの。

(29) ここではブレイドゥンはダグラスのつぎのような文章を引用している。「我々は、これまでのところスミスの労働価値説 (Smith's labor theory of value) について、あたかもそれが一元的なものであるかのように述べてきた。しかし事実上、そのなかには、労働凝固説あるいは労働費用説 (the labor-jelly or labor-cost theory) と労働支配力説 (the labor-command theory) という非常に異なった輪郭をもつ二つの学説がふくまれているのである。……労働凝固説は、一対象物の価値は、その生産に必要とされる労働単位の量によって決定される、とし、これに反して労働支配力説は、一対象物の価値は、それでもって購買されうる労働の分量によって決定される、とするのである。」(Douglas [1927], p. 88. 前掲邦訳, 16—17ページ。) Bladen [1975], p. 370.

(30) この脈絡のなかでブレイドゥンは J. S. ミル (J. S. Mill) のつぎのような文言を引用している。『『価値の尺度 (a Measure of Value)』という観念は、価値の規制者もしくは決定原理という観念と混同されてはならない。……これら二つの観念を混同することは、温度計と火とのあいだの違いを見落とすのと同じようなことであろう。』(John Stuart Mill, *Principles of Political Economy: With Some of Their Applications to Social Philosophy*, new impression, edited with an Introduction by W. J. Ashley (London: Longmans, Green & Co., 1926—ただし、ブレイドゥン自身が使用しているのはこの新刷ではなくてアシュリー (W. J. Ashley) 編のものとの1909年のもの——), p. 568. 末永茂喜訳『経済学原理』(全5冊)(岩波文庫, 岩波書店, 1959—1963年), 第3分冊, 251—252ページ。) Bladen [1975], p. 370.

(31) Douglas [1927], p. 89 (邦訳, 19ページ) を参照せよ。

(32) なお、ダグラス自身は、いま本文でみた彼の文言につづけて、「これは部分的にのみ真理である。労働費用説はこの原始的な社会段階に適用されたが、それはまた同じように、時として、さらに現代的な社会にも適用されたのである」としている。Douglas [1927], p. 90. 邦訳, 19ページ。

(33) Schumpeter [1954], p. 310 (邦訳, 第2分冊, 651ページ) を参照せよ。本文中の「」内の文言のうち傍点の付されている部分はシュムペーターの上掲原著上掲ページ中の該当部分においてイタリック体で示されている箇所、〔〕内は上掲邦訳書上掲ページ中の該当部分においてその邦訳者によって挿入されているものであり、

ここでもそれを挿入しておいた。

(34) Bladen [1975], pp. 370-371.

(35) ブレイドゥンは、このことを示すものとして、ゴナーが編集したリカードの『経済学および課税の原理』に付されているゴナーによる一脚注をあげている。(Bladen [1975], p. 371.) そこではゴナーは、「人間の勤労によって増加させられない物を除外するかぎり、これ〔労働〕が実際にすべての物の交換価値 (exchangeable value) の根底 (foundation) である、ということは、経済学におけるもっとも重要な学説である」というリカードの文言 (Ricardo, *Principles* [ed. Gonner], pp. 7-8. Ricardo, *Principles* [ed. Sraffa], p. 13. 堀訳『原理』15ページ。引用文中の〔 〕内は上掲邦訳書においてその邦訳者によって挿入されているものであり、ここでもそれに従った) に脚注を付してつぎのように述べている。「価値の尺度と原因との混同という失敗が時としてリカードに帰されてきたし (たとえば, Sidgwick, *Principles of Political Economy*, first edition, p. 10), またたしかに彼の言葉づかいは時々そのような混同を連想させるものであったかもしれない。だが、私に思うに、彼はそのような失敗には陥りはしなかった。いずれにせよ、せいぜいのところ、そのような混同は、交換価値 (exchangeable value) に関連するものであったのであろう。しかしこの関連においてさえ彼ははっきりと、効用は交換価値の尺度ではないけれども交換価値にとって絶対に欠くことのできないものであると言っているのである。しかしこの点についての詳細な議論については、本書序文 (Introduction) を見よ。」(Ricardo, *Principles* [ed. Gonner], p. 8n. 1.)

(36) Ricardo, *Principles* [ed. Gonner], p. 8 (Ricardo, *Principles* [ed. Sraffa], p. 14. 堀訳『原理』, 16ページ) を参照せよ。

(37) Ricardo, *Principles* [ed. Gonner], p. 8 (Ricardo, *Principles* [ed. Sraffa], p. 14. 堀訳『原理』, 16ページ) を参照せよ。

(38) Bladen [1975], p. 371. なお、ブレイドゥンはつぎのような説明を加えている。すなわち、商品の労働支配力における変化は真実価格 (生産性、費用) における変化におおよそ比例するであろうとしても、社会における諸個人の労働支配力は不均等に变化することであろう。たとえば、もしその改善が賃金財に影響を及ぼしたとすれば、さらにもし賃金が生存費水準のままにとどまったとすれば、実質賃金は不変のままにとどまり、平均的労働者の労働支配力は低下する、ということになるであろう。これはマルクスの「相対的剰余価値」のケースである。スミスは、労働者たちが前進的社会においては生産性向上の恩恵のうちのいくらかを享受するものと考えていたように思える。ただしスミスは疑いなく、その恩恵がすべてあるいは主に労働者たちのうえに生じるといったようなことはほのめかしはしなかったのである。Bladen [1975], p. 371.

(39) WN, p. 30 (大河内訳 < I >, 52ページ) 参照せよ。



(40) Bladen [1975], p. 371.

(41) ブレイドゥンはつぎのようなスミスの文章を引用している。「1時間の辛い作業におけるほうが、2時間のやさしい仕事におけるよりも、いっそう多くの労働があるかもしれない。また、習得するのに10年〔の労働が〕かかる職業に1時間はげむばあいのほうが、平凡なわかりきった業務で1ヶ月働くばあいよりもいっそう多くの労働があるかもしれない。」(WN, p. 31. 大河内訳〈I〉, 55ページ。〔 〕内はブレイドゥンがスミスの原文を引用するにさいして抜かしている箇所。) Bladen [1975], p. 371.

(42) ブレイドゥンによれば、スミスのいう「市場のかけひきや交渉」も、リカードウのいう「すべての実目的のためには十分な正確さ」を伴う「市場における調整」も、さらに、熟練労働はただ、強められた (intensified) もしくは倍化された単純労働とみなされそしてその強化もしくは倍化の程度は、「生産者たちのずっと背後にある一つの社会的過程によって確定され、したがってまた慣習によって定められるもののように思われる」というマルクスの説明も、この問題にたいする真に満足のいく解決を提供するものではない、とされる。Bladen [1975], pp. 371-372. WN, p. 31 (大河内訳〈I〉, 55ページ), Ricardo, *Principles* [ed. Gonner], p. 15 (Ricardo, *Principles* [ed. Sraffa], p. 20, 堀訳『原理』, 23ページ), Karl Marx, *Das Kapital: Kritik der politischen Ökonomie*, hrsg. von Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, 3Bde. (Berlin: Dietz Verlag, 1974-1975), Bd. 1, S. 59 (マルクス=エンゲルス全集刊行委員会訳 (大内兵衛, 細川嘉六監訳)『資本論』 (全5分冊) (大月書店, 1978年〔第26刷〕〔第1刷 1968年〕), 第1巻第1分冊, 60ページ, *Capital: A Critique of Political Economy*, trans. Samuel Moore and Edward Aveling and ed. Frederick Engels, 3 vols. (Moscow: Progress Publishers, 1954-1959), vol. 1, pp. 51-52) を参照せよ。

(43) Bladen [1975], pp. 371-372. なお、このような観点からブレイドゥンは、本章の注42でみた<sup>・</sup>実<sup>・</sup>目的<sup>・</sup>のため<sup>・</sup>には<sup>・</sup>十分<sup>・</sup>な<sup>・</sup>正確<sup>・</sup>さ<sup>・</sup>と<sup>・</sup>い<sup>・</sup>った<sup>・</sup>こと<sup>・</sup>への<sup>・</sup>リ<sup>・</sup>カ<sup>・</sup>ード<sup>・</sup>ウ<sup>・</sup>の<sup>・</sup>言<sup>・</sup>及<sup>・</sup>自<sup>・</sup>体<sup>・</sup>は<sup>・</sup>意<sup>・</sup>味<sup>・</sup>を<sup>・</sup>な<sup>・</sup>し<sup>・</sup>て<sup>・</sup>い<sup>・</sup>る<sup>・</sup>と<sup>・</sup>し<sup>・</sup>て<sup>・</sup>い<sup>・</sup>る<sup>・</sup>。Bladen [1975], p. 372.

(44) Bladen [1975], p. 372. なおブレイドゥンは、いま本文で引用されたスミスの文言を追いかけるような形で『国富論』に示されているスミスの文章すなわち「彼が支払う代価 (price) は、それと引き換えに彼が受け取る財貨の量がどうであろうと、つねに同一であるにちがいない。なるほど、その労働は、より大きい分量のこれらの財貨を購買することもあれば、より小さい分量のこれらの財貨を購買することもあろう。だが、変動するのは、それらの財貨の価値であって、それらを購買する労働の価値ではないのである。」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 57-58ページ) という文章が誤った解釈へと導いてきた、として、つぎのような説明をくわえている。すなわち、ここではスミスは価値 (value) という言葉を「真実価格」と「不効用」と

いう二つの異なった意味で用いているのであり、うへの引用文中の「変動するのは、それらの財貨の価値であって、それらを購買する労働の価値ではないのである」という箇所は「変動するのは、それらの財貨の価値（正確に言えば、実実価格）であって、それらを購買する労働の価値（正確に言えば、不効用）ではないのである」と読み取られるべきもののなのである。このように、スミスは用語をルーズに使用しているものであり、またその点でスミスをとがめてもよいのであるが、他面で、スミスがたとえば価値という用語を一貫した意味内容を指すものとして使用したものの指すものは我々がその用語によって指す意味内容と同じものであると考えることによって、スミスが言おうとしていることを理解しそこなってはならない。このことは、たとえばサミュエル・ベイリー (Samuel Bailey) のマルサス (T. R. Malthus) に対するまた間接的にはスミスに対する非難にもあてはまるのであり〔本書前出「20」の注2等で触れられた Bailey, *Dissertation* の, p. 25 (前掲邦訳, 21-22ページ)を参照せよ〕, その非難は、マルサスが価値という言葉を正確に使用したと想定されるときにのみ、正当化されうるのであるが、さらにまたたとえばリカードは「労働の価値も等しく可变的ではないのか? というのは、それは、……供給と需要との割合によって影響されるばかりでなく、食物……の価格の変動によっても影響されるからである……」と述べている (Ricardo, *Principles* [ed. Gonner], p. 10. Ricardo, *Principles* [ed. Sraffa], p. 15. 堀訳『原理』, 17ページ)。ここでは価値は、明らかに、賃金を意味しており、また、スミスもきつと、リカードウがそこで言っていることに対して異存はないことであろう。リカードウはあとのほうでさらに、もし「諸改良が労働者のいっさいの消費対象におよべ」ば、「おそらくは、数年もたたないうちに、彼は、たとえ追加があるとしても、わずかの享楽品の追加しかもたない、ことが見いだされるであろう」と述べる (Ricardo, *Principles* [ed. Gonner], p. 11. Ricardo, *Principles* [ed. Sraffa], p. 16. 堀訳『原理』, 18ページ)。ここでもまた異存はないであろう。ところがリカードウはその次に、「そうしてみると、アダム・スミスとともに『労働はより大きい分量の財貨を購買することあればより小さい分量の財貨を購買することもあるがその場合、変動するのは、それらの財貨の価値であって、それらを購買する労働の価値ではない』と言うのは、けっして正しくない」と述べるのであった (Ricardo, *Principles* [ed. Gonner], p. 11. Ricardo, *Principles* [ed. Sraffa], p. 16. 堀訳『原理』, 19ページ。傍点の付されている箇所はリカードウの原文においてイタリック体にされている箇所)。ここではリカードウは、「購買する」という言葉を、労働者が彼の賃金でもって買う財貨ということについて述べるために使用している。だがスミスはそこではその言葉を、扱いにくい自然から財貨を購買する——ただし、労働者自身が享受するのはそれらの財貨の一部分にすぎない——のに必要な労苦と骨折り、あるいは人時 (man-time, 延べ労働時間) ということについて述べるために使用していたのであり、リカード

ウは誤った解釈をしているのである。Bladen [1975], pp. 372-373.

(45) なおブレイドウンによれば、リカードウはある所与の量の労働がくりひろげられるところの時間というそういった時間における諸相違の影響というものを探究することを欲したため、リカードウはこのことをはっきりと述べた、とされる。Bladen [1975], p. 373.

(46) ブレイドウンはつぎのような説明を加えている。すなわち、スミスは銀に関連して、アメリカの豊富な諸鉱山の発見後「それらの金属類を鉱山から市場へもたらすのに費やす労働がいっそう少なくなったので、それらの金属類が市場へもたらされたときに、購買しまたは支配できた労働もいっそう少なくなった」ということを、主張したのであるが（WN, p. 32. 大河内訳〈I〉, 57ページ）、ここでもつぎのことに注意しておくが必要である。すなわち、異時点間での真実価格における諸変化と労働支配力における諸変化との間のあるおおよその相関関係という推定は、ある所与の時点での均衡価値についてのある単純な労働説の受容ということに暗に意味しているわけではなく、またその推定は、なんらかの機械的な関係ということに暗に意味しているわけでもない、ということである。スミスは、その関係は変化する供給ということに依存するということをよく知っていたのであり、さらに彼は『国富論』第1篇第11章において、需要における諸変化を検討し、そして、相対的金供給の理論——グスタフ・カッセル（Gustav Cassel）によってある統計的および図表的説明が与えられることとなる一理論〔Gustav Cassel, *The Theory of Social Economy*, trans. Joseph McCabe, 2 vols. (London: T. Fisher Unwin, 1923)——邦訳としては、大野信三訳『社会経済学原論』〔1923年ドイツ語版第3版の邦訳〕（岩波書店、1926年）がある——vol. 2, bk. 3, chap. 11 を参照せよ——を展開したのであったのである。Bladen [1975], p. 373.

(47) このことについてブレイドウンはつぎのような説明をなしている。すなわち、スミスのこういった主張は弁護できるものではない。スミスはこの主張の根拠を、穀物での地代を貨幣での地代に切り替えたオックスフォードの諸カレッジの購買力はひどく低下したという証拠に置いた。さらにまたスミスは、農業における諸改良は「農業の主要な用具」である家畜の価格の増大によってほぼ相殺されるということを主張して、長期の諸期間（long periods of time）にわたっての穀物生産費の恒常性ということに一つの理論的根拠を添加した。だが、こういったものは非常に説得力のあるものというわけではない。さらにまたスミスは、穀物は主要賃金財であるからまた実質賃金はおおむね一定であるから、穀物はつねに同一量の労働を支配するであろう、と主張した。だがここでは、「支配する（command）」ということは「雇う（hire）」こと、「雇用する（employ）」ことを意味しているのであって、それは本来スミスが「支配する」という言葉によって意味していたものと非常に異なったものなのである。Bladen [1975], p. 373. Bladen [1975], p. 370, 本章の前出注 1 およ

び〔Ⅱ〕(2)の⑤も見よ。

(48) Bladen [1975], p. 373.

(49) ブレイドウンは、我々が本書の「9」で取り扱ったジイドとリストの共著をあげている。ただしブレイドウン自身がここで使用しているのは、フランス語版第2版(1913年)の英訳である英語版第1版(1915年)。

(50) ブレイドウンは、ジイドとリストの共著中の、本書前出「20」の注2および「54」の注3のなかでもみられたつぎのような文章を引用している。「前においては、『真実』価格は労働に基礎を置く価格を意味しているのであった。今は、『自然』価格が、その生産費で評価される財貨の価格として定義されている。名前の変更は大きな意味を持たない。スミスがその双方において追求していたものは、市場価格の変動の背後につねに隠れているあの真の価値であった。それは同一の問題である、しかし新しい解答が与えられているのである。」[Gide & Rist [1909], pp. 94-95 (前掲邦訳(上), 111ページ)を参照せよ。] Bladen [1975], p. 374.

(51) Bladen [1975], p. 374. なお、ブレイドウンは、真実価格と交換価値との間の違い、言い換えれば、安価さということ(cheapness)の二つの意味の間の違いは、賃金について論じられる『国富論』第1篇第8章のはじめのほうで明らかにされているとして、そこでのスミスのつぎのような文章を引用している。「たとえば、大多数の職業において労働の生産力が10倍に増進したと……仮定しよう。だが他方、ある特定の職業では労働の生産力が2倍にしか増進しなかったと……仮定しよう。大多数の職業における1日分の労働の生産物を、この特定の職業における1日分の労働の生産物と交換するにあたっては、前者における所産(work)のもとの量の10倍量は、後者における所産のもとの量の2倍量しか購買しないことになるであろう。後者のある特定量は……、まえより5倍も高価になっているようにみえるであろう。けれども実は、それは安価さ2倍のものになっているはずなのである。なるほど、それを購買するのに5倍の量の他の財貨が必要になったとはいえ、それを購買するのに生産するのに、わずか半分の量の労働しか必要としないであろう。」(WN, pp. 64-65. 大河内訳〈I〉, 110-111ページ。) Bladen [1975], p. 374.

そしてまたブレイドウンは、うえの『国富論』からの引用文に関連づけて、つぎのような内容の指摘をなしている。すなわち、それが正確に5倍も多くの他のものと交換されるであろうと考えることには、たしかに疑念はある、しかしだからといって、安価さということの二つの意味の間の違いを認めてはならないというわけでも、また、交換価値はたとえ正確にではなくてもおおよそのところではそこで考えられているようなパターンにそって変化するであろうということを認めてはならないというわけでもない。Bladen [1975], p. 374.

さらにまたブレイドウンは、彼のみるところでは「真実価格」の問題と区別されるべき問題である「自然価格」、自然価値の問題、ある所与の時点での市場におけ

る均衡価格の決定ということについてのスミスの議論に関連して、つぎのような内容の指摘をなす。すなわち、ジイドとリストの共著では、「〔価値の問題にたいする〕二つの異なるしかし同じように誤った解答が、彼によってつぎつぎに採用された、しかし彼は、それらのうちのいずれのものをとるかということを経験して実際に決定しはしなかった」とされているが[Gide & Rist (1909), p. 93 (邦訳(上), 108-109 ページ)を参照せよ。引用文中の〔 〕内はブレイドウン], そこでは「労働」説 ('labour' theory) と「生産費」説 ('cost-of-production' theory) のことが言われているのであろう。ところで、スミスはその「労働」説を狩猟民族という状況に限定したのであるが、そのような1投入物モデルでは、これは誤ったものではない。たしかにそのようなモデル自体は、経済学教育を行うさいにおける有用性ということを別とすれば、非常に有用なモデルというわけではないが、その理論自体は正しいのである。また、その生産費説も、費用不変という状況のもとでは、誤ったものではない。それは、需要を無視しているのではなく、産出にたいする費用といったものの変動ということを無視している。だが、こういったものがいかに非現実的なものであるとしても、費用不変のケースというものは完全競争および特殊均衡分析に適した唯一のものであるというピエロ・スラッファ (Piero Sraffa) の見解を想起してみるべきである。Bladen [1975], p. 374.

[52] Meek [1956], p. 79 (邦訳, 91ページ) を参照せよ。

[53] ブレイドウンによれば、リカードウも、労働が費やされる時間の長さがすべての産業において同一であるといった単純なモデル以外についてはそうしたのであり、またマルクスも、「資本の有機的構成がすべての産業において同一である」といった単純なモデル以外についてはそうしたのである、とされる。Bladen [1975], p. 375.

[54] Meek [1956], p. 79 (邦訳, 91ページ) を参照せよ。

[55] Meek [1956], pp. 79-80 (邦訳, 91ページ) を参照せよ。

[56] Bladen [1975], pp. 374-375. なお、ブレイドウンによれば、労働価値説 (labour theory of value) [ある所与の時点での市場における長期的あるいは均衡的諸価値の決定についての一説明という意味での労働説] に激しく反対したジェヴォンズ (W. S. Jevons) やメンガー (C. Menger) も、彼らの各々の資本理論のなかに労働説 (ミークの言う意味での労働説) を存続させたのである、とされる。Bladen [1975], p. 375.

## V. W. ブレイドウン (1975年) についての覚書

ブレイドウンによれば、スミス (さらに経済学の古典期の終わりのマルクスを含めて一般に古典派の経済学者) は、経済プロセスを、人々が仕事をし

ているとともに他人の仕事を支配しているプロセスとしてみていたのであり、そして、スミスのいう「労働にたいする支配力」とは、資本家が雇うことのできる労働の量というよりも、その雇用という点ではなんの役割をも演じはしないとしても人が、その生産物を享受することのできる労働の量（それだけの量の労働がどのように雇用されよう）のことをいっていたのであり、それは、「労働にたいする支配力」であって「諸商品にたいする購買力」ではないのであり、したがってまた、スミスのいう「労働にたいする支配力」という考えを、諸商品にたいする購買力を測定する一つの間接的な方法を示すものと解釈するのは誤りである、とされるのであった。

他方、スミスは彼のいう事物の「真の値打ち」というものはその事物の「労働にたいする支配力」によって示されるとしたとみるブレイドウンによれば、スミスのいう「労働にたいする支配力」を、個人もしくは個人集団の貨幣タームでの所得、さらに、財・サービスのタームでの所得といったものをこえての、個人もしくは個人集団の「実質所得」といったものに到達するための一つの方向と考えることはできる、とされつつも、同時にまたブレイドウンによれば、一社会あるいは一国全体としてみた場合、その社会あるいは国が全体として支配しうる労働量とは、その社会あるいは国の全体としての生産物の量にかかわりなく、その社会あるいは国に実際に存在している労働量そのものであり、したがって、「労働にたいする支配力」を総社会的所得、国民分配分、国民総生産等々およびそれらのものの経時的变化を測定するための尺度とすることは無意味なことであり、またスミス自身もそのようなことを考えていたわけではなかったのであってスミスのいう「労働にたいする支配力」をそのようなものとして解釈することはスミスの議論を誤解するものである、とされるのであった。

また、一国に実際に存在している労働量そのものがその国が全体として支配しうる労働量であるとともにそれだけの労働量が全体としてのその国の生産活動に投入されるべき利用可能な労働量なのであって、その生産活動によって生産される生産物の量にはかかわりなくその国が全体として支配しうる労働量したがってまた生産活動に投入されうる労働量そのものはその国に実際に存在している労働量である、とみるブレイドウンによれば、一国の生産物が支配しうる労働量が一国の生産物の生産に投入される労働量なのであり、そしてその労働量はその国に実際に存在している労働量なのであって、

そこにおける蓄積の問題とは、資本家階級によって支配される労働の量がどれほどであるか、また、その労働が贅沢よりもむしろ蓄積に向けられるかということなのである、と捉えられ、スミスは一国の生産物が支配しうる労働量が一国のその生産物の生産に要する労働量を超えるその大きさ、その差がその国のなしうる蓄積の額の尺度となると考えたとみる見解は、スミスの議論についての適切な解釈を提供するものではないとともに蓄積についてのそのような考え自体も意味をなすものではない、とみられるのであった。

さらにまた、いまみられたことと関連するのであるがブレイドダウンの示す論理によれば、その住民が労働者階級と資本家階級および地主階級とからなるようなある国の一国全体としての生産物とは、労働者階級の支配しうる労働量と資本家階級および地主階級の支配しうる労働量との合計であるその国に実際に存在しその国の全体としての生産活動に投入される量の労働の生産物であるのであり、その生産物の量そのものにはかわりなくその生産物に「体化された」労働の量はその国に実際に存在する労働の量であるとともにその国に実際に存在するそれだけの労働量がその生産物によって「支配される」労働量ということになるとともに、それだけの量の労働が体化されているその一国の生産物が労働者階級と資本家階級および地主階級とによって享受されるその割合は、その国に実際に存在するそれだけの量の労働にたいしてそれらの階級がもつ支配力の割合に応じて決まる、ということになるのであって、うえのような住民の構成をもつ経済では国民分配分によって「支配される」労働の量は、利潤および地代の形で支払われる分配分の程度だけ、その国民分配分の生産に投入された労働の量を超過するといった考えそのものは意味をなさないもの、ということになるのであった。そしてまたブレイドダウンによれば、スミス自身もそのような考えを提示していたわけではないのであって、そのような考えをスミスのものとするのは誤りである、とされるとき、スミスにとってはむしろ、そうした実際に存在し・支配することができ・生産に投入することができる労働の生産性の向上、その結果として生じる富の増進ということこそが重要であったのであり、またそれゆえ、それらの労働の生産性における諸変化をどのようにして測定するかということが、スミスにとっての一つの重要な問題となったのである、とみられるのであった。

なお、ブレイドダウンによれば、このようにスミスはそういった生産性の向

上、その結果として生じる富の増進ということに関心をいただき、生産性の変化の測定という問題に立ち向かったのであるが、そのさいスミスは事実上、一社会あるいは一国全体における生産性というよりも個々の商品生産部門における生産性の諸変化ということを問題にしようとしたのであり、しかもそれらの諸変化は彼のいう商品の「真実価格」というものにおける諸変化に反映されるとみることによって、事実上その生産性における諸変化の測定という問題を「真実価格」における諸変化の測定の問題という形で表した、すなわち、スミスの議論においては、個々の事物の「真実価格」はその各々の事物を獲得するための労苦と骨折りとして定義され、事実上、生産性の向上は「真実価格」の低下として捉えられることとなっている、とみられるとともに、さらに、技術改良につれての諸事物のこの諸真実価格の削減ということこそがスミスの議論における富の増進（我々の欲求充足度の向上）の主要原因であったのであり、資源配分の改善ということよりもむしろこのことこそがスミスの主要関心事であったのである、とされるのであった。

そして、たとえある特定時点でのそのようなものとして定義されるある商品の真実価格といったもののものを正確に測定することはできないとしてもその真実価格の経時的な諸変化といったものは少なくともおおよそのところでは測定されうるのであらうとスミスは考えていたとみるブレイドゥンはさらに、スミスの議論における「諸真実価格における諸変化の測定」ということに関して彼の所説を展開するのであった。

そしてそこでのブレイドゥンの議論の示すところによれば、スミスはうえでみたように事物の「真実価格」を、それを獲得するための労苦と骨折り、こんにちで言う「不効用」、として定義するのであり、そして実際にそのような「労苦と骨折り」（不効用）といったものを直接的に測定しうるのかといえはそこには確かに問題はあるのであるが、スミスの議論を正しく理解するためには、スミスはそこでは不効用（「労苦と骨折り」）そのものについての正確な尺度を追求していたのではなくて、不効用における諸変化のおおよその指標を求めていたのであり、そしてスミスはまずその指標を人時（man-time、延べ労働時間、労働量）における諸変化に求めようとした、すなわちスミスはまず、事物の真実価格（その事物を獲得するための労苦と骨折り）の諸変化のおおよその指標として、その事物を獲得するための労働量つまりその事物の生産に要する労働量（労働投入量）における諸変化を使用



しようとしたのだ、と解されるべきである、ということになるのであった。

また、そこでのブレイドダウンの議論の示すところによれば、このようにスミスは事物の真実価格の諸変化のおおよその指標としてまず、当該事物の生産に要する労働量における諸変化といったものを使用しようとしたのであるが、その場合には、直接労働および間接労働の量そのものが労働投入量として計算されなければならない、しかしながら他方で、そのような計算を可能にする労働投入量タームでの計算書の欠如、したがって、労働投入量そのものの確定の不可能性、したがってまた、労働投入量の諸変化の確定の不可能性、それゆえまた、真実価格の諸変化のおおよその指標を提供することの不可能性、といった事情からスミスは、異時点間での、真実価格の諸変化・労働投入量における諸変化と、労働支配力における諸変化とは、おおよそ比例するというおおよその相関関係を推定し、異時点間での真実価格の諸変化のおおよその指標として、労働支配力における諸変化を使用しようとする事となった、と解されるべきである、ということになるのであった。

さらにまたそこでのブレイドダウンの議論の示すところによれば、もしも労働投入量さらに労働支配力といったものそれ自体を正確に確定しようとするならばそのときには異質労働の問題という問題も解決しなければならないということになるのであり、そしてたしかにそのような問題自体にたいしてはスミスの言うような「市場のかけひきや交渉」といったものは真に満足のいく解決を提供しうるものではない、しかしながらスミスはそこでは「真実価格」における諸変化の測定ということを取り扱い、その諸変化のおおよその指標をまず労働投入量における諸変化に、さらに、労働支配力における諸変化に、求めようとしていたのであったということに留意すべきであり、そして事実、もし我々もスミスと同様に労働投入量における諸変化さらに支配労働量における諸変化といったものをそのようなおおよその指標として用いようとするならば、そのときには、我々は、平均的労働者といったものを想定しても、様々な熟練をもった労働者たちの平均的かせぎ高に従ってウェイトづけられるそれらの労働者たちによって費やされる時間数といったものをもって労働投入量としても、平均的労働にたいする支配力といったものをもって「労働支配力」としても、さしつかえはないであろう、ということになるのであった。

なお、ブレイドダウンはこのように、スミスの議論では「真実価格」におけ

る諸変化のおおよその指標として労働投入量における諸変化、さらに、先でみた脈絡で労働支配力における諸変化といったものが考えられていたとみ、さらに事実そのような労働支配力における諸変化といったものはスミスのような「真実価格」といったものの諸変化についての一つの有用なおおよその指標を提供しうるものではあるとみるのであるが同時にまたそこでのブレイドウンの議論の示すところによれば、たとえおおよその指標としてであれそのような指標として労働支配力における諸変化といったものを使用するためには労働支配力およびその諸変化そのものを確定しなければならず、そしてそのためには、たとえ異質労働の問題はうえてみられたような形で克服しようとしてもそれにくわえて、諸賃金率についての史的統計というものが必要となるのであるが、そのような諸賃金率についての十分な史的統計の欠如、したがって労働支配力およびその諸変化を確定することの困難性といった事情をうけてスミスは、事物の労働支配力における諸変化とかなり安定的な割合を保ちつつ推移する事物の穀物価格〔事物の穀物ターム価格〕における諸変化つまり、事物の穀物支配力における諸変化が、事物の労働支配力における諸変化にたいするかなり近い近似値を提供する、と主張したのであり、そしてたしかにそのスミスの主張、それを根拠づけるためのスミスの議論は十分な妥当性をそなえたものではなかったのであるがスミスがそこで論じていたのは真実価格における諸変化のおおよその指標としての、労働支配力における諸変化さらに穀物支配力における諸変化ということであったということ自体は忘れられてはならないのであって、スミスはそこでは我々の言う意味での貨幣の購買力の変化といったものを研究していたわけでも諸指数のウェイトづけということに関するこんにちの我々の諸問題を取り扱っていたわけでもなく、うえてみた意味での「真実価格」における諸変化、事実上、その向上が富の増進の主要原因であるとスミスが考えるところの生産性における諸変化、といったことに関する問題を取り扱っていたのである、ということになるのであった。

また、ブレイドウンによれば、そのような真実価格の観点からの議論においてはスミスは諸真実価格における差異を伴った諸変化が市場での諸価格——スミスのいう諸自然価格すなわち諸均衡価格といったものをも含めて——に及ぼす影響といったことに殊更関心をいいていたわけでも、また、真実価格の低下つまり生産性の向上が、実質賃金にあるいはまた平均的労働

者のもつ労働支配力に及ぼす効果といったようなことそのものについて明示的に何事かを述べたわけでもない、とされるとともに、さらにまた、スミスのその議論には、労働がなんらかの特別な意味で「生産的」なものでありまたそれゆえ土地や機械類等々の果たす貢献というものは無視できるとか、さらに、労働が論理上その労働の全生産物にたいする請求権をもつことになるのだとかいったようなことを示唆するものは何も含まれてはいないのであって、それどころかスミスは労働の生産性そのものは環境の質や自由に使用できる資本設備の量と質等々といったものに依存するとみていたのである、とされるのであった。

他方、この覚書の初めのほうでも触れられたように、ブレイドゥンは、スミスの議論のなかには「労働支配力」としての個人もしくは個人集団の真の所得といった考え、さらに、「労働支配力」によって示されるものとしての事物の「真の値打ち」といった考えがある、とみているのであり、その意味でブレイドゥンは事実上、スミスの議論では、「労働支配力」における経時的な諸変化はスミスのいう「真実価格」における経時的な諸変化についてのおおよその指標を提供するものと考えられているとともに、「労働支配力」およびその経時的な諸変化はスミスのいう「真の値打ち」およびその経時的な諸変化を指し示す一つの尺度といった意味合いも担わされている、とみている、ともいえるのであるが——なお、ここで取り扱われているブレイドゥンの論文においては、ブレイドゥンは、スミスのいう「真実価格」もスミスのいう「真の値打ち」もともにスミスのいう意味での「価値」、とするのであった——、同時にまたブレイドゥンの議論によれば、「真実価格」〔また、「真の値打ち」〕に関するそのような測定の問題と、市場における商品価値の決定因、市場での商品価値の決定についての因果的説明の問題とは、もともと別個の問題であるはずのものであって、スミスもそれらを混同していたわけではないのであり、また、スミスの議論では「労働支配力」はうえのような測定の問題にかかわるものではあっても価値の決定因、価値決定の因果的説明の問題といったことにかかわるものではない、ということになるのであった。そして、このような見方をとるブレイドゥンは、スミスが市場での商品価値の決定についての投下労働量による因果的説明と支配労働量による因果的説明との両方を提示したと解するのは誤りである、とするとともに、スミスが商品の生産に投下された労働量とその商品が市場において支配しう

る労働量とを同じことを表すものとして取り扱ったとするのも誤りである、とするのであった。他方、さらにまたブレイドウンは、スミスが彼のいう「自然価格」の問題を議論するときにはそこではある所与の時点での市場における諸商品の均衡的な諸価値の決定、資源配分ということと結びついた均衡的な諸価格の決定、といったことについての因果的説明ということが取り扱われているのであり、そこで取り扱われている問題は、「真実価格」についてのスミスの議論で取り扱われている問題すなわち諸事物がより安価になってきたかどうか、つまり、「手に入れるのが」より容易になってきたかどうかという史的な問題とは別の問題であるのであって、スミスが「真実価格」について論じるときも「自然価格」について論じるときにもそこで取り扱われている問題自体は同一の問題であったという解釈は誤りであるのであり、事実スミス自身もある所与の時点での市場における均衡的な諸価値、諸均衡価格の決定ということそのものに関しては、「真実価格」についての議論とは別に、狩猟民族の状況という1投入物モデルについては〔投下〕労働〔価値〕説 (labour theory)、投入物として労働にくわえて他の要素が考慮に入れられるモデルについては生産費説でもって因果的説明を与えようとしていたのである、とみるのであった。

ただし、スミスさらに経済学の古典期の終わりのマルクスを含めて一般に古典派の経済学者は経済プロセスを、人々が仕事をしているとともに他人の仕事を支配しているプロセスとしてみていたと考えるブレイドウンによれば、もし「労働説 (labour theory)」というものが、ある所与の時点での市場における均衡的諸価値の決定についての因果的な一説明を提供するものというよりもむしろ、生産の領域で人々が相互にむすぶ基本的諸関係が交換の領域において彼らが入る諸関係を究極的に決定するのでありそしてそこでは原理的には生産物の交換があるのではなく生産に協働した労働の交換があるのだといった内容のことを意味するものと解されるならば、そのときにはすべての古典派経済学者は労働説論者であったということになるのであり、そしてまたこういった脈絡においてのみ、彼らは理解されることができるのである、とされるのであった。

## 59. D. A. リースマン (1976年)

1976年に刊行された D. A. リースマン (D. A. Reisman) の一著書 (David A. Reisman, *Adam Smith's Sociological Economics*, London: Croom Helm; New York: Barnes & Noble Books (a division of Harper & Row Publishers), 1976. 以下, Reisman [1976] と略記する) においてリースマンは, スミスは一つの支配労働 (「価値尺度」) 説 a labour-commanded ('measure of value') theory も一つの投下労働 (「価値源泉」) 説 a labour-embodied ('source of value') theory も提示しているとみるのであるが<sup>(1)</sup>, そのうちのスミスの支配労働 (「価値尺度」) 説に関連してつぎのような見解を示している。

① スミスは, 労働自体の価値は (16世紀の諸発見が明らかに示したように, 貴金属の価値とはちがって——WN, p. 32. 大河内訳〈I〉, 57ページ——,) 安定的, 不変的であるがゆえに労働は普遍的で正確な価値尺度である, と主張した。<sup>(2)</sup>

② そしてスミスによれば, この労働という指標は, すべての商品の価値を測定するとともに, 諸要素分け前を測定するためにも用いられうる<sup>(3)</sup>のであった。すなわち, 一商品の所有者にとってのその商品の価値は, 「その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しい」(WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ) のであり, また, 「すべての商品の交換価値の真の尺度」〈WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ〉であるところの) その労働・指標は, 労働者, 資本家, あるいは地主がひとたび自分の所得を受け取ったならば彼はどれほど多くの労働・価値を支配することができるかということを示すのである——そしてすべての階級は, この支配力を行使する機会を持つのである<sup>(4)</sup><sup>(5)</sup>。

③ 「なお, スミスが「支配労働価値尺度説」へと向かった論理はつぎのようなものである。」ひとたび分業が行われるようになると, 「あらゆる物の真实価格 (real price), すなわち, あらゆる物がそれを獲得しようとする人にとって真に費やさせるものは, それを獲得するための労苦と骨折りである」(WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ) のであるが市場経済ではこの「労

苦と骨折り」は一つの非人格的な現金価格 (cash value) によって測られる。しかし、ミーク (R. L. Meek) が示唆したように、スミスは、財貨の交換を基礎づけているところの、しかもこの貨幣的評価によってすなわち貨幣価格というベールによってますますおおい隠されつつあったところの、人間と人間との基本的な諸社会関係というものを強調したかったというまさにこの理由のゆえに、労働説へと向かったのである。ミークが言っているように、「商品の交換は、本質上、社会的活動の交換である。交換の行為のなかにあらわれる〔諸商品間の〕価値関係は、本質上、生産者としての人間と人間との一つの関係の反映なのである<sup>(6)</sup>」。かくして、真の価値尺度は、一片の紙幣でもひとかたまりの金属でもありえないのであり、真の価値尺度は、あなたのある特定量の「労苦と骨折り」と交換できる私の「労苦と骨折り」の量でしかありえないのである。<sup>(7)</sup>

④ しかしながら、労働が価値の指標として使用されるべきであるとするならば、その場合には、まず、労働〔そのもの〕についての指標を構築することが必要である。〔というのは、〕「1時間の辛い作業におけるほうが、2時間のやさしい仕事におけるよりも、いっそう多くの労働があるかもしれない」(WN, p. 31. 大河内訳 < I >, 55ページ) のであるから、労働時間それだけでは、交換価値 (exchange value) の正確な尺度ではありえないのである。労働についての適切な指標とは、それが等しい犠牲を表示する一つの理論的な指標となるためには、異なった諸職業に結びつけられる様々な大きさの信頼性、辛さ、不快さ、威信、雇用の安定性、失敗の危険性、訓練の長さ、と費用といったものを考慮に入れたものでなければならないであろう。さらに、〔このようなことを考慮に入れたものとしての〕そのような〔労働についての〕指標もまた、各々の関係者の目をとおして見られたものとしての状態ということに関する主観的な評価といったものに依存するため、〔そのような主観的な評価に依存するという限りにおいて〕そのような〔労働についての〕指標は、純粋に客観的なものではない、ということになるのである。<sup>(8)</sup>

⑤ このような基本的認識から出発して労働についての適切な指標を構築するということは、最新の統計技術をもってしてさえ、困難なことである。実際上は、スミスは、邪魔されことなく作動する市場メカニズムによって確立されるものとしての長期均衡要素報酬〔長期均衡賃金〕が労働についての〔あるいは労働の価値についての〕指標を提供すると、考えるのであった。

ダグラス (P. H. Douglas) が説明しているように、「スミスは、等しい単位数の、不効用という意味での労働は、いつかは等しい額の貨幣賃金によって償われるという事実を論証したと、信じていたのであった。スミスによれば、市場はこのようにして、労働を構成する種々の要素をひとつの共通の大きさに還元するのである<sup>(9)</sup>」。もちろん、短期的には、稀少性ということが、ある特定の等級の労働の報酬を、地域的に行きわたっている「通常率または平均率」(WN, p. 55. 大河内訳< I >, 94ページ)をこえて引き上げてしまう、ということはあるが、<sup>(10)</sup>長期的には、労働の移動性を仮定すれば、その職業への新規の参入が、賃金をふたたびその「自然的な」水準へと引き下げてしまうであろう。時間という試金石が、これらの稼ぎ〔これちの賃金〕が労働の価値についての真の尺度であるということを、証明するのである。そして、この長期均衡要素報酬 (long-run equilibrium factor rewards) が、〔真の価値指標としての〕労働・価値指標 (the index of labour-value) の代理 (proxy) の役割をつとめるのである。<sup>(11)</sup>

⑥ しかしながら、そのような指標〔つまり、労働についての（あるいは労働の価値についての）指標としての長期均衡賃金という指標〕は、いくつかの点で批判される。<sup>(12)</sup>

a：第一に、〔賃金という〕稼ぎは、情報のための費用も移動性ということに対する職業上や地理上の障害もない完全に競争的な労働市場において、労働の価値についての一尺度であるだけである。換言すれば、その指標が有効なものとなりうるためには、定住法や徒弟条例から生じてくるような市場の不完全性が除去されなければならないのである。さらに、そのようなことが実現される場合でさえ、それは、すべての人間は金銭だけによって動機づけられているわけではないという事実によって、くじかれるのである。なお、スミスは、惰性あるいは職業や住む所を変えることの不効用といったことに起因するところの、彼の労働・指標に残る要処理の要素については、何も述べてはいない、だがそれでも、スミスは、彼がヨリ率直な見解を述べている諸箇所の中の一つにおいて、「人間というものはあらゆる種類の荷物のなかで、もっとも輸送が困難である」(WN, p. 75. 大河内訳< I >, 127ページ) ということを認めているのである。<sup>(13)</sup>

b：第二の批判は、「あらゆる時と場所において」労働は価値の不変の標準 (standard) であるというスミスの確信 (WN, p. 33. 大河内訳< I >, 58ページ)

ジ)に、関係する。もしも労働の価値が均衡賃金・構造 (equilibrium wage-structure) でもって概算されるとするならば、このことは、経済成長および労働需要の増大と結びついて以前の世紀 (previous century) [スミスのいう今世紀 (present century)] をつうじてブリテンに長年にわたる (secular) 自然賃金の上昇があったというスミスの主張 (WN, pp. 200-201. 大河内訳 < I >, 328-329ページ) と、全く矛盾する。そのような1人当たり賃金の上昇は、ニュメレール商品の価格の上昇が存在していただけかもしれないのにニュメレール商品の量の増加といった印象をあたえ、国民所得の高を上方へと片寄らせてしまう<sup>(15)</sup>。また、国民所得の同様な歪曲は反対の方向にもはたらきうる。すなわち、バーバー (W. J. Barber) が指摘しているように、価値についてのスミスの労働・指標は「労働生産性が上昇するケース (すなわち、同一量の労働投入がより多くの産出量を生産する場合) を、うまく取り扱うことができない。たとえ賃金率が一定であったとしてもこのような事態のもとでは、達成目標とされているある産出水準の生産に必要な賃金総支払額は、以前よりも少ないということになるであろう。そして、もしそれゆえに諸産出物の価格の低落ということが次に起こるならば (このような状況のもとではよく起こることなのだが)、労働にたいする支配力による測定は、総産出量が実際には増大していたときでも、それが減少したかのような印象をあたえてしまうかもしれない<sup>(16)</sup>」のである。<sup>(17)</sup>

c : さらに、労働の価値の尺度として均衡賃金・構造をスミスが用いることにたいする第三の批判となるものは、つぎのようなことがありうるということである。すなわち、永久的に稀少な諸特殊技能の存在といったことのゆえにではないが——実際、スミスは、すべての人間はその人生の行路の出発点では非常に似かよった潜在能力をもつものである、と信じていた (WN, pp. 15-16. 大河内訳 < I >, 28-29ページ) ——教育ということによって課せられるところの、特殊技能を要する諸職業への巨大な諸参入障壁ということのゆえに、観察される長期的諸賃金水準のなかには、剰余あるいは地代といった要素が存在するかもしれない、ということである。<sup>(18)</sup>

d : いずれにせよ、もし市場における労働の需給が労働の価値をほどよく評価することができるのであるならば、財貨の需給が財貨の価値をほどよく評価しえないということの経済学的理由は存在しないはずである。そしてそうであるならば、価値の労働標準理論の全体は余計なものであるように思え



ることとなるのである。<sup>(19)</sup>

(注)

- (1) Reisman [1976], p. 143. なお、リースマンによれば、スミスの労働価値説については、一方で、スミスは労働を一つの安定的な価値尺度として使用していたにすぎないのであって労働を価値の源泉を説明するものとして使用していたのではなく、彼の労働説は指数問題への一つの素朴なアプローチにすぎないのだということもありうるし、他方でまた、スミスの労働説は、労働を価値の唯一の創造者として認定するものであり、そしてそのことは、資本家の利潤および地主の地代は付加価値に対する報償を表すものではなくて権力構造における地位を表すものであるという含意を伴っているのだということもありうるが、これら二つの解釈の社会学的含意は非常に異なるものである、とされる。そしてリースマンは、労働の搾取ということが一つの客観的事実として問題となってくるのは価値の源泉を説明するものとしての投下労働価値説の視点からなのであるが、この意味で、スミスが搾取の客観的存在ということについてどのような考えをいっていたのかということに関して中核的な地位を占めるものは、スミスの労働価値説の意味内容ということである、とみる。なお、リースマン自身は、スミスが労働価値説を提示する場合、そこでは、価値尺度についての支配労働説と価値の源泉についての投下労働説とが提示されている、とみるのであった。Reisman [1976], pp. 143, 164.

なお、搾取との関連での、リースマンによる、スミスの議論での価値の源泉、価値の創造を説明するものとしての、投下労働価値説、利潤や地代といった要因も加えた生産費説、といったことについての検討については、Reisman [1976], pp. 167ff. を見よ。

- (2) Reisman [1976], p. 164. リースマンはこの脈絡において、つぎのようなスミスの文言を引用している。「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう。彼の健康、体力、精神が普通の状態で、また彼の熟練と技能が通常程度であれば、彼はつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一部分を犠牲にしなければならない」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 57ページ)、労働は、「それ自身の価値がけっして変動しないため、そのみがかすべての商品の価値を、時と場所のいかんを問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準なのである」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 58ページ)。Reisman [1976], p. 164.

- (3) リースマンはつぎのようなスミスの文章を引用している。「労働は、価格のなかの労働に分かれる部分の価値だけでなく、地代に分かれる部分の価値、および利潤に分かれる部分の価値をも測るのである。」(WN, p. 50. 大河内訳〈I〉, 85ページ。) Reisman [1976], p. 164.

(注3は次ページにつづく)

なお、リースマンによれば、いま引用されたスミスのこの一節から、支配労働と投下労働という労働価値説へのスミスの二つのアプローチは互いに排除し合わなければならないものというわけではないということがわかる、とされる。すなわち、投下された労働 (labour-embodied) は価値の源泉を説明するのかもしれない、だがたとえそうであっても、支配される労働は経時的な価値の諸変化の説明に使用すべき一つの不変の測定物差しを提供するのであり、そして、もしそうであるならば、その二つのアプローチはお互いに代替的なものではなくて補完的なものであり、またそれらは互いに異なった種類の問題に関係しているのである、というのである。Reisman [1976], p. 257n. 26.

また、リースマンによれば、スミスは『国富論』では、財貨供給ということのなかにながれている基本的な傾向といったものをめぐっての価格の、短期的 (short-run) で、うつろいやすく、主観的で、純粋に配分に関する、諸変動にたいしてよりも、国富 (national wealth) およびその成長率という長期的 (long-run) なものに、したがってまた財貨供給における基本的な傾向そのものにヨリ多くの関心をいっていたのであるが、そこでの国富および国富の成長率とは、不変の労働・価値標準によって測定されるものとしてのそれであった、と捉えられる。Reisman [1976], p. 259n. 86.

- (4) リースマンによれば、ここでのスミスの議論では価値の源泉や諸要素所得の相対的な大きさといったことは問題にされてはいず、そしてそこには搾取の含意、階級間の支配・被支配関係といったことについての暗示といったものはなにも存在しない、とされる。Reisman [1976], p. 164.
- (5) Reisman [1976], p. 164.
- (6) リースマンは、この文章を、我々が本書の「27」で取り扱ったミークの著書、Meek [1956] の p. 62〔前掲邦訳、68ページ〕から、引用している。なお、引用文中の〔 〕内は、リースマンが引用にさいして抜かしている箇所。Reisman [1976], p. 165.
- (7) Reisman [1976], pp. 164-165. なお、リースマンによれば、ここにもスミスの人本主義、人間中心主義といったものの一つのあらわれをみることができるのであり、スミスにあっては経済学とは物についてのものではなくて人についてのものでなければならないのである、とされる。Reisman [1976], p. 165.
- (8) Reisman [1976], p. 165.
- (9) リースマンは、この文章を、我々が本書の「14」で取り扱ったダグラスの論文、Douglas [1927] の p. 87〔前掲邦訳、16ページ〕から、引用している。Reisman [1976], P. 165.
- (10) リースマンは、つぎのような指摘を加えている。すなわち、スミスは、たとえば炭坑夫や石炭仲仕たちの高い稼ぎについて語りつつ、つぎのように述べている、「そ

うした稼ぎは、たとえそれがどんなに法外なものにみえようと、もしも仕事の不快な事情をすべて償ってあまりあるほど大きければ、排他的特権がぜんぜんない事業の場合には、まもなく多数の競争者が現れて、そうした稼ぎを低い率に引き下げてしまうだろう」(WN, p. 104. 大河内訳 < I >, 174ページ), と。Reisman [1976], pp. 165-166.

- (11) Reisman [1976], pp. 165-166. ここではリースマンはつぎのようなことを考えているのであろう。すなわち、人間の社会的活動の交換を意味する商品の交換を基礎づけているところの、人間と人間との基本的な諸社会関係というものを強調したいがゆえに、スミスは一つの支配労働価値尺度説を提出しようとしたのであるが、そのさいスミスは、等量の労働にはつねに等しい犠牲が伴うという意味で労働の価値は不変であって、労働は不変な価値尺度である、とするとともに他方で、労働によってそれに伴う犠牲の大きさには差異があるという問題に直面したのであった。そして、このような異質労働の問題を克服して「支配される労働」で価値を測るために、スミスは實際上、価値の尺度としての労働そのものについての指標を、邪魔されることなく作動する市場メカニズムをつうじて成立するものとしての長期均衡賃金に求めたのであった。すなわち、スミスは、市場メカニズムの働きによって、各々同じ大きさの犠牲を伴う諸労働には、その各々について、長期的に成立する均衡賃金が存在することになる、と考えたのであった。したがって、スミスにあっては、労働に伴う犠牲の大小(労働の価値の大小)は、この長期均衡賃金の大小ということに還元されるのであり、この意味で、長期均衡賃金は、労働の種類、質の相違による犠牲の大きさの相違を測る指標、労働の価値の指標となるのである。すなわち、長期的に存在するものとしてのある一定額の賃金は、ある一定不変な大きさの犠牲を伴う労働を反映し、また、その犠牲の程度を客観化して表現するのであり、そして、より高い賃金は、あるより多くの一定不変な大きさの犠牲を伴う労働を反映するのである。したがって、ある事物がある一定額の長期均衡賃金の何単位に相当するかを知ることによって、その事物が、その賃金に対応するある一定不変の大きさの犠牲を伴う労働の何単位に相当するかということを、つまりその事物の価値を、知ることができるのである。この意味で、スミスは事実上、長期均衡要素報酬を、真の価値指標としての労働・価値指標の代理の役割をつとめるものと考えたのである。

- (12) Reisman [1976], p. 166.

- (13) Reisman [1976], p. 166.

- (14) ここではリースマンはおそらくつぎのようなことを言おうとしているのであろう。すなわち、スミスの議論では、等量の労働にはつねに等しい犠牲が伴うという意味で労働の価値は不変であって労働は不変な価値尺度であるとされるときにも、事実上、異なった種類、質の労働には異なった大きさの犠牲が伴うけれどもそ

の違いは、それらの労働に対して支払われる長期均衡賃金の大小によって表現され、そしてこのような長期均衡賃金を労働の指標として用いることによって労働による価値の測定が可能になる、とされている。つまり、異なった種類、質の労働には異なった大きさの犠牲が伴いながら同一の種類、質の労働には同一の大きさの犠牲が伴うとともにその犠牲の大きさは不変である。そして、同じ大きさの犠牲を伴う労働には、長期についてみれば、自由に作動する市場メカニズムをつうじて同一の大きさの均衡賃金が成立し、それと異なる大きさの犠牲を伴う諸労働についても、長期についてみれば、同様に、その犠牲の大きさに対応して各々均衡賃金が成立する。長期において成立するものとしてのある一定額の均衡賃金は、ある一定不変な大きさの犠牲を伴う労働を反映し、その犠牲の程度を客観化して表現し、長期において成立するものとしてのあるより高い額の均衡賃金は、あるより大きな一定不変の犠牲を伴う労働を反映するのである。諸労働に伴う犠牲の大小（労働の価値の大小）は、長期において成立するものとしての諸長期均衡賃金の格差に反映され、ある事物がある一定額の長期均衡賃金の何単位に相当するかを知ることによって、その事物はその賃金に対応するある一定不変の大きさの犠牲を伴う労働何単位に相当するかということを、つまりその事物の価値を、知ることができる。このように、程度の異なる犠牲を伴う労働の存在ということを認めるスミスの議論においては事実上、各々の労働に伴う犠牲に対応してそれぞれの労働には、長期についてみれば、長期において成立するものとしてのある一定額の均衡賃金が支払われる、つまり、あるより大きい犠牲を伴う労働には、長期についてみれば、あるより高い一定額の均衡賃金が支払われ、あるより小さい犠牲を伴う労働には、長期についてみれば、あるより低い一定額の均衡賃金が支払われ、それら各々の長期において成立する一定額の均衡賃金は、それらの均衡賃金の支払いを受ける労働に伴う犠牲の程度（それら均衡賃金の支払いを受ける労働の価値の程度）を指し示し、そして、様々な労働の各々に支払われる長期において成立するものとしてのそれぞれの一定額の均衡賃金の間の格差の構造（均衡賃金・構造）に照らして異なった大きさの犠牲を伴う諸労働（異なった価値をもつ諸労働）を互いに換算することをつうじて、労働による価値の測定が可能、ということになるのである。ところで、スミスは、「あらゆる時と場所において」労働は価値の不変の標準であるとし、事実上、異なった大きさの犠牲を伴う様々な労働を均衡賃金・構造に照らしてそれらの労働を互いに換算し合うことをつうじて異なった大きさの犠牲を伴う諸労働という問題を克服しつつ労働によって価値を測定することができる、とみつつも、他方でまたスミスは、18世紀をつうじてのブリテンにおける長年にわたる自然賃金「リースマンは、この自然賃金を、本文の⑤でみたように、長期均衡要素報酬としての長期均衡賃金として捉えている」の上昇ということを主張している。しかし、うえてみてきたように、スミスの議論では、労働が価値の尺度でありうるのは、等量の労働はつねに等しい

犠牲を伴い、労働によってそれに伴う犠牲の大きさには違いは存在しうるが等しい大きさの犠牲を伴う労働には長期的には等しいある一定額の賃金が支払われ、そしてその賃金の格差に照らして異なった大きさの犠牲を伴う労働を相互に換算し合うことができるからなのである。にもかかわらずスミスは他方で、世紀をつうじての長年にわたる自然賃金の上昇の存在ということを述べている。これと、うえのスミスの議論とは互いに矛盾するものである。

- (15) ここではリースマンはつぎのようなことを言おうとしているのであろう。すなわち、うえてみてきたように事実上スミスの議論では異なった大きさの犠牲を伴う労働の単位数を互いに換算し合うさいの指標となるものは各々の労働について長期において成立するものとしての諸均衡賃金の間の格差であったのであって、したがってたとえば、労働A 1単位当たりのそのような賃金が労働B 1単位当たり賃金の2倍であったとすれば、労働A 1単位は労働B 2単位に計算されるのであり、そしていま国民所得をそれが何単位の労働に相当するか、何単位の労働を支配しうるかということによって表示、測定するとすれば、たとえば労働A 10単位に相当する国民所得は労働B 10単位に相当する国民所得の2倍の大きさ、ということになるのである。こういった考えは、各々の労働について長期において成立するものとしての各々の一定額の諸賃金といったものにもとづいているのであるから、それは、自然賃金の長年にわたる上昇の存在といったスミスの主張とは矛盾するものであり、またそこでは2倍の賃金は2倍の労働単位数を意味しなければならないのである。したがって、いまかりに実際には二つの期における国民所得がともにある一定の大きさの犠牲を伴う労働Aの10単位に相当するもの、労働A 10単位を支配しうるものであったとし、そしてもし労働A 1単位当たり賃金が第2期においては第1期におけるよりも2倍の大きさのものに上昇していたとすれば、たとえそのとき他の諸労働の賃金も同じように2倍に上昇していたとしても、二つの期における国民所得の大きさを表示、測定する労働の単位数、支配労働量は同一のままであるにもかかわらずそのような賃金の上昇は、第2期における国民所得の大きさは第1期における国民所得の大きさの2倍ということの意味することになるのである。「そのような1人当たり賃金〔労働1単位当たり賃金〕の上昇は、ニュメレール商品の価格〔労働にたいする賃金〕の上昇が存在していただけかもしれないのにニュメレール商品の量〔(支配しうる)労働の量〕の増加といった印象をあたえ、国民所得の高を上方へと片寄らせてしまう」のである。
- (16) リースマンは、この文言を、我々が本書の「42」で取り扱ったバーバーの著書、Barber [1967] の pp. 34-35 [前掲邦訳、40-41ページ] から、引用している。(Reisman [1976], p. 166.) いうまでもなく、(産出物価格×産出物量)/(賃金率)、において、賃金率一定のもとで産出物価格の低下率が産出物量の増加率よりも大であれば、産出物の量そのものが増加してもその労働にたいする支配力は減少する

ことになる。

(17) Reisman [1976], pp. 166. さらにリースマンはつぎのような指摘をくわえている。すなわち、スミスは、「富裕で商業的な社会」においては「労働は高価となり製品は安価となる」ということを認め、そして、これら二つのことの同時発生は完全に自然的なことであるとみなしている (Scott, *Adam Smith*, pt. 3. ED, p. 322. 水田訳『国富論草稿』, 63ページ)。そのことは自然的なことであるのかもしれない、しかしそのことは、国民所得の諸変化を計算するのに労働価値説 (labour theory of value) を使用しようとする統計家にたいしては、大きな諸問題をつくり出してしまふのである。Reisman [1976], p. 257n. 38.

(18) Reisman [1976], pp. 166-167. このことに関連してリースマンはつぎのような説明を加えている。すなわち、そのような諸障壁は存続しそうなものであり〔リースマンは、このことについては、Reisman [1976], chap. 6. “The Lower Classes,” sec. 1. “The Division of Labour” を参照するよう、指示している。Reisman [1976], p. 257n. 40〕、そして事実それらの障壁は、機能上、きわめて大きな重要性をもつものである。すなわち、それらの障壁は、専門職従事者たちの稀少性をまもり、そのような人々の諸グループの所得および衛生的消費を高水準に保ち、そしてそのことによって、そのような諸グループが彼らの顧客の敬意をあつめることを保証するのである。スミスは、「我々は、自分たちの健康を医師に託し、また自分たちの財産、ときには生命や名声までも法律家や弁護士に託する。境遇がきわめていやしかったり低かったりする人たちには、そのような信頼をおこうとしても安心しておけるものではない。それゆえ、彼らの報酬は、その重大な信任にふさわしい社会的地位を彼らに与えるようなものでなければならない」(WN, p. 105. 大河内訳< I >, 174-175ページ) と述べている。また、スミスは、1782年にエディンバラで関税委員として、関税検査官たちに支払われる手数料の引き下げに反対したときに、(才能の上下序列が存在しないところでさえ) 所得の上下序列は機能上必要であるということに関して同様な主張をなしている。すなわち、もしそうならば「もし手数料が引き下げられるならば」「多くの職員の所得は、とうぜん彼らのものであるはずの社会層のなかで彼らが暮らしていくことが難しくなるほどにまで、引き下げられることになるかもしれない」(Quoted in Scott, *Adam Smith*, p. 17) と。スミスは、供給と需要によって決められる所得水準と社会的な地位や慣習によって決められる所得水準との間の矛盾の可能性ということには、全く気付いていないように思えるのである。Reisman [1976], p. 167, pp. 257-258n. 41.

さらに、リースマンによれば、スミスは他方でたとえば、「もっとも多く労働する者が、もっとも少なく得るのである。贅沢や娯楽にその大部分の時をすごしている富裕な商人は、彼の取引上の利益のうち、その仕事をするすべての番頭や会計係よりも多くの分け前を、享受している。これらの番頭や会計係もまた、多くのひま

な時間をたのしみ、出勤せねばならぬという制約以外にはほとんど何の苦痛もうけずに、彼らの指図をうけて彼らよりはるかにげしき孜々として労働する同数の職人たちの3倍よりずっと多くの生産物を、分け前として享受しているのである」、「人間社会の全組織をその双肩に」担っているピラミッドの底辺にある「貧しい労働者」はどうかといえば、彼は、「その重荷によってどん底におしひしがれて、建物の一番下積みに忘れさられているのである」(Scott, *Adam Smith*, pt. 3. ED, pp. 327-328. 水田訳『国富論草稿』, 51-52ページ), といった見解[なお、リースマンは、豊かさの代価と分配についてのこれと同様なスミスの見解については E. キャンナン編『グラスゴウ大学講義』原典の pp. 162-163 (Smith, *Lectures* [ed. Cannan], pp. 162-163. 高島・水田訳『グラスゴウ大学講義』, 325ページ) も見るよう指示している。Reisman [1976], pp. 257-258n. 41] を示しており、そしてこれは、スミスは「労働からの甘菓子」が不公平に分配されると少なくとも時おりには感じるものがあつた、ということを示唆しているのであるが、「犠牲の均等 (equality-of-sacrifice)」という視点から賃金・構造 (pay-structure) というものをみるというスミスのやり方をこのようなスミスの見解と調和させることは困難であり、問題はよりいっそう混乱させられることとなる、とされる。Reisman [1976], pp. 257-258n. 41.

- (19) Reisman [1976], p. 167. つづけてリースマンは、J. ロビンソン (J. Robinson) の述べているように価値とは「機能を果たすことのできるような内容をなにも持っていない。それはまさに一つの言葉にすぎないのである」(Joan Robinson, *Economic Philosophy* (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, published in Pelican Books, 1964 [first published, London: C. A. Watts, 1962]), p. 47. 宮崎義一訳『経済学の考え方』[1962年版の邦訳] (岩波書店, 1966年), 74ページ), としている。ただしまたリースマンによれば、とはいえ価値 (value) と価格 (price) とを区別することの社会学的意味そのものは忘れられるべきではない、とされる。Reisman [1976], p. 167.

## D. A. リースマン (1976年) についての覚書

リースマンは、スミスの議論では「価値尺度の問題」と「価値の源泉についての説明の問題」とは別個な問題であつたとみつつ、「価値尺度の問題」についてのスミスの議論に関して、スミスはそこでは、労働に伴う犠牲は不変であるという意味で労働の価値は不変であると考えたとともに、本質的には人間の社会的活動の交換を意味するところの商品の交換というものを基礎づけしかも貨幣価格というベールによっておおい隠されつつあつた人間と人

間との基本的な社会関係，ということを強調したかった，ということから，支配労働価値尺度説へと向かったのであり，そしてその尺度は商品の価値を測定するだけでなく，労働者，資本家，地主の所得といった諸要素分け前の価値さらに事実上，国富，国民所得およびその成長を測定すると考えていた，とみるのであった。また，リースマンによれば，スミスは，等量の労働にはつねに等しい犠牲が伴うという意味で労働の価値は不変であって，労働は不変な価値尺度であるとするのであるが，同時にまた，労働によってそれに伴う犠牲の程度には差異があるということを認めもする，しかしまた同時にスミスは事実上，自由に作動する市場メカニズムをつうじて，等しい大きさの犠牲を伴う労働には長期的には等しいある一定額の賃金，等しいある一定額の長期均衡賃金が支払われ，そして，異なる諸労働に伴う犠牲の大きさの相違はそれらの労働にたいする各々の一定額の長期均衡賃金の間の格差に客観的に表現される，としているのであって，そこでは事実上，ある一定額の長期均衡賃金はある労働に伴うある不変な大きさの犠牲を反映し，諸長期均衡賃金間の格差は異なる諸労働に伴う犠牲の大きさの間の格差を反映しうるゆえ，そのような長期均衡賃金，また，長期均衡賃金の格差というものをを用いることによって，結局労働による測定が可能，ということになっている，とみられるのであった。

そして，スミスの「支配労働価値尺度」についての議論を事実上そのようなものとして捉えたうえでリースマンはさらに，そのようなものとしてのスミスの議論にまつわる諸問題点を，とりわけ，自由に作動する市場メカニズムをつうじて成立する長期均衡賃金，また，長期均衡賃金の格差というものをを用いることによってうえのような形で結局「支配労働」による測定が可能となるといったような議論にまつわる諸問題点を，指摘するのであった。



## 60. R. H. キャンベルと A. S. スキナー (1976年)

1976年のグラスゴウ版『国富論』への編者の序文 (R. H. Campbell and A. S. Skinner, General Introduction to *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, by Adam Smith, general editors: R. H. Campbell and A. S. Skinner, textual editor: W. B. Todd, 2 vols., Oxford: Clarendon Press, 1976. 以下では、上掲の General Introduction を Campbell & Skinner [1976] と略記する) のなかで、R. H. キャンベル (R. H. Campbell) と A. S. スキナー (A. S. Skinner) はつぎのような見解を示している。

① スミスは『国富論』第1篇第5章のなかで真実価格 (real price) と名目価格 (nominal price) との間の区別について論じているのであるが、そのさい彼は熱心につぎのことを確証しようとした。すなわち、個人はごく自然に自分の収入の価値を貨幣のタームで測るのではあるが、厚生 (welfare) の真の尺度は貨幣の値打ちということをつうじて確立されるべきものであって、そしてその場合その貨幣の値打ちは、獲得されうる生産物 (すなわち、支配される労働) の量—— the quantity of products (i.e. labour commanded) which can be acquired——<sup>(1)</sup>によって確定される、ということである。<sup>(2)</sup>

② この第5章では、スミスは、異なる時期 (periods of time) における経済的厚生水準の比較を可能にするような不変の価値尺度 (invariable measure of value) を見つけ出すことにたいするほどには、ふつう理解されているようなものとしての交換価値 (exchange value) の問題にそれほど直接的に関心をいだいていたわけではなかった。<sup>(3)</sup>

(注)

(1) Campbell & Skinner [1976], p. 24.

(2) Campbell & Skinner [1976], p. 24.

(3) Campbell & Skinner [1976], p. 24. なお、キャンベルとスキナーによれば、スミスがいわゆる「価値のパラドックス」——スミスがすでに〔グラスゴウ大学での〕

60. R. H. キャンベルと A. S. スキナー（1976年）

「講義」で説明していたパラドックス——を『国富論』において〕提示しはしたけれども「解決」しようとはしなかったのは、おそらくこのような特殊な視点のためであった、とされる。Campbell & Skinner [1976], p. 24.

**R. H. キャンベルと A. S. スキナー（1976年）についての覚書**

「獲得されうる生産物量すなわち支配される労働量」というように捉えるキャンベルとスキナーによれば、スミスは『国富論』第1篇第5章では、ふつう理解されているようなものとしての交換価値の問題にそれほど直接的に関心をいだいていたわけではなくて、異なる時期における経済的厚生水準の比較を可能にするような不変の価値尺度を見つけ出すことに大に関心をいだいていたのであり、そしてその尺度を獲得されうる生産物（すなわち、支配される労働）の量に求めた、とみられるのであった。

## 61. P. シロス-ラビーニ (1976年)

1976年に公表された P. シロス-ラビーニ (P. Sylos-Labini) の一論文 (P[ao]lo Sylos-Labini, "Competition: The Product Markets," in *The Market and the State: Essays in Honour of Adam Smith*, edited by Thomas Wilson and Andrew S. Skinner, Oxford: Clarendon Press, 1976, pp. 200-232. 以下, Sylos-Labini [1976] と略記する) のなかでシロス-ラビーニがその議論を展開する過程で、スラッファ (P. Sraffa) の指摘しているように「リカードウ (D. Ricardo) が関心をもった価値の問題は、生産物の分割の諸変化の影響を受けない (invariant to changes in the division of the product) ような価値の尺度 (measure) を、どのようにして発見するか、ということであった」(Ricardo, *Principles* [ed. Sraffa], [editor's] Introduction, p. xlviii, 堀訳『原理』, 「編者序文」, lxvi ページ) のにたいし、スミスは主に、異なった諸時点および諸場所における異なった諸商品の価値にたいして技術の諸変化がもたらす諸帰結を分析するということに関心を抱いていたのであり、そしてまたスミスは「諸商品の」諸相対価格にたいして技術進歩 (technological progress) がもたらす諸帰結を研究することを意図していたがゆえにスミスは異時点間の比較 (inter-temporal comparisons) に使用される標準 (standard) を必要としたのである、といった捉え方を示すのであるが<sup>(1)</sup>、そのシロス-ラビーニの所論のなかには、そのようなものとしてのスミスの議論に関連して、以下のようなシロス-ラビーニの見方を見いだすこともできる、といえるであろう。

(I) 「シロス-ラビーニは、スミスが主に関心を抱いていた価値の問題を、「技術変化」ということとかかわりをもつうえのような問題として捉え、また、スミスが異時点間の比較のための標準を必要とした道すじをうえのようなものとして捉えるわけであるが、いま、そのような異時点間の比較のためのスミスの標準そのものについてのシロス-ラビーニの所説を取り扱うに先立って、またそれを取り扱うための一つの準備として、シロス-ラビーニの所論のなかに見いだされるスミスの議論における「市場価格」と「自然価格」

およびその変化といったことに関連するシロス-ラビーニの見方をとりあげておくとすれば、その内容はつぎのようなものとして示すこともできるかもしれないであろう。】：

① スミスの議論では、商品にたいする有効需要とは、「その商品の自然価格すなわち」その各々の自然率での「地代と労働と利潤との全価値を支払う意志のある人たち」すべてによって需要される数量であり (WN, p. 56. 大河内訳〈I〉, 96ページ), そして、「市場へもたらされる数量がちょうどうまく有効需要を満たしている場合は、市場価格は当然、自然価格と同一になるか、そうでなくても、ぎりぎりまでそれに近くなり」 (WN, p. 57. 大河内訳〈I〉, 97ページ), 市場にもたらされる数量が有効需要に及ばない場合には市場価格は自然価格をこえて上昇し、その反対の場合には市場価格は自然価格以下に低下する、ということになっているのであるが、事実上そのスミスの議論ではまた、参入障壁の存在が、商品の市場価格をその自然価格以上に、そして利潤だけでなく賃金をもそれらの自然率以上に、長きにわたって維持しておくことを可能にするのであって、競争の行われるところでは、市場価格が自然価格よりも高いものでありうるのはある限られた期間のあいだにおいてのみ、ということになっているのであり、その意味で、スミスの議論にみられる自然価格や自然率といった考えは、競争という考えと切り離されえないものであり、またその点で、「自然的な (natural)」という言葉と「競争的な (competitive)」という言葉とは、同義的なものとして把握されるのである。<sup>(2)</sup>

② また、スミスの議論における「自然価格」という考えを正しく理解するためには、このことに加えてさらに、つぎのことを認識しておくことも必要である。すなわち、こんにち経済学者たちの間に流布している視点とは違って、スミスは事実上、短期 (short run) と長期 (long run) との区別だけでなく、長い歴史的諸期間 (long historical periods) といったものと見分けのつかないものであるところの、我々ならこんにち——様々な分析上の目的のために——「諸発展段階 (stages of development)」と呼ぶであろうところのものをも、考えている、ということである。スミスにしたがえば基本的な段階は、前進的 (progressive), 停滞的 (stationary), 衰退的 (declining) といった三つのものであり (事実上、これら三つの段階そのものは、すでに交換経済を展開している社会に関しての三つの段階), また、スミスが注意を集中

するのはそれらのうちの前進的段階であるのであるが、スミスはその前進的段階をしばしば、さらに分けるのであって、スミスが自然価格および市場価格の動きを議論するさいには彼は事実上、短期、長期、そして発展段階 (stage of development) といった二つではなくて三つの枠組みで捉える三分割に基づく手法を用いていたのである。そしてそのスミスの議論では事実上、短期では市場価格は供給 (「市場にもたらされる数量」) と需要とに依存し、長期では、独占のもとにおいては市場価格はうえと同一の諸力に依存するのであるが競争のもとにおいてはその市場価格は、事実上賃金、利潤、地代の自然率が一定で自然価格の変化は技術変化のみによるという条件つきで、自然価格と、すなわち事実上生産費と一致する傾向をもち、さらに、一つの発展段階からもう一つの発展段階にかけてはその自然価格自体は、技術変化の結果としてだけでなく、賃金、利潤、地代の自然率の変化の結果としても、<sup>(4)</sup> 変動する、ということになっているのである。<sup>(5)</sup><sup>(6)</sup>

③ なお、限界主義経済学者たちが生産諸条件にたいするのと劣らないほどに消費者行動の心理的諸局面にたいして重要性を付する——それどころか、ヨリ大きな重要性をさえ付する——のとは対照的に古典派経済学者たちは消費者たちの性向を社会の一般的状态の結果と考えるのであるが、その古典派経済学者たちはさらに、消費を消費として抽象的に捉えるのではなくて必要消費 (necessary consumption) と不必要消費 (unnecessary consumption) とを、あるいは、生産的消費と不生産的消費とを、区別するのであり、そしてそこでは、前者は貯蓄によって可能にされるもので、「生産的労働者たち」による消費であって、社会的生産過程の反復あるいは拡大のための要件のうちの方のものに当たるものであるのであった。そしてまた、そこでの社会的生産過程の反復あるいは拡大のための要件のうちの方のものを与えるものが技術 (technology) ということになっていたのであるが、その技術そのものはまた、雇用されるべき生産的労働の量を決定することによって必要消費〔生産的消費〕の量を決定する手助けをなすということにもなっていたのであった。したがってまたそこでは、自然価格や市場価格といったことについての分析も、供給と需要そのものとの関連でというよりもむしろ、技術的諸生産方法また必要消費〔生産的消費〕の状態といったものと関連をもった形で、なされるべき、ということになっていたのであった。そしてこのようなことは、たとえばスミスの議論における、事実上技

術進歩による「自然価格」——競争のもとにおいては、市場価格が自然価格から乖離しうるのはある限られた期間のあいだにおいてのみであってそれをこえる期間では自然価格が市場価格となる——の低下の論理、といったことのなかにもあらわれているのであって、そのスミスの議論では事実上、有効需要が、生産されるべき数量を決定し、そして生産費が価格を決定するのであり、そして、時間の推移のうちに有効需要が増加していく傾向にあるならば（すなわち、市場の大きさが増大していく傾向にあるならば）、分業の進歩のゆえに、新しいそしてより効率的な諸生産方法が導入されることができ、そしてそのこと自体は、価格を低下させる方向に作用する、ということになっているのである。そこでは、有効需要は間接的にのみ、価格に影響を及ぼす、すなわち、有効需要は生産方法の変化を決定することによって価格に影響を及ぼす、ということになっているのである。<sup>(7)</sup> また、スミスの議論におけるうえでみられたような費用削減そして価格低下、といったものは、市場の持続的拡大によって引き起こされる分業の増進ということによって決定されるものであったのであり、そこでの収穫逦増（increasing returns）とは、時間の推移のうちに生じるところの逆行することのない諸変化の結果、ということになるのであるが、そのスミスの議論ではまた、そういった収穫逦増そのものはどこにでも行きわたるものというわけでもないのであった。収穫逦増は製造業やいくつかの一定の諸農業生産に行きわたる、しかし他のいくつかのタイプの生産においてはそれとは逆に、収穫逦減（decreasing returns）が行きわたりさえする、というわけである。そしてこの後者の場合には、生産の増加は費用逦増そして価格上昇という条件のもとで生じることになるわけであるがその生産の増加そのものは、需要の引き続く拡張ということによって引き起こされるのであり、ここでも需要は、直接的に生産高に影響を及ぼし、そして、生産方法の変化を決定することによって間接的にのみ価格に影響を及ぼす、ということになっているのである。<sup>(8)</sup>

（Ⅱ－１）〔さて、うえのようにシロス-ラビーニのみるところによれば、スミスの議論では、短期の一期間とそれにつづく短期の一期間との間での市場価格の変化は当該商品の直接の需給における変化の結果であるのにたいし、競争のもとでは、究極的には、長期の一期間とそれにつづく長期の一期間との間での市場価格の変化は当該商品の生産における「技術変化」の結果であり一つの発展段階とそれにつづくもう一つの発展段階との間での市場価

④ また、スミスは明示的には、安定的な賃金シェア (wage share) [つまり、「価格」のうち「賃金」の占める割合、 $\delta$ 、が安定的] といった仮定をなしているわけではないのではあるが、その仮定自体は、一国の発展の「前進的」状態において生じることに關するスミスの見解と兩立するものであるように思われる。事実、労働投入の縮小が与えられるとき、もし賃金率が上昇し、さらにもし利潤と地代が、全体としての非労働シェア [「価格」のうち賃金以外の分配上の分け前が占める割合] を一定に保つような形で変動するならば (簡單化のために地代を無視するとすれば、こんにち我々が資本・産出高比率と呼ぶものの適当な上昇ということを同時に仮定すれば利潤率低下を考慮に入れてさえある不変な利潤シェア [「価格」のうち「利潤」の占める割合が不変] といったことを仮定することができよう)、その場合には賃金シェアは、安定的なままでいることができるのである。<sup>(21)</sup><sup>(22)</sup>

⑤ なおまた、リカードは主に土地からの収穫逡減への傾向という理由から、「支配労働」と「体化労働」という二つの標準の間の同等性を否定する、少なくとも原則としては否定するのであって、リカードは事実上たとえば、もしある所与の量の食物と必需品を生産するのに必要とされる労働の量が増加するならば、労働者の購買力維持のためにそれと比例して貨幣賃金が増加するであろう、そして「この場合、食物と必需品は、その生産に必要な労働量によって評価されるならば、……騰貴しているはずである、しかしまた同時に、それらのものが交換されるであろう労働量で測定されるならば、それらは価値においてほとんど増加していないはずであるのである」(Ricardo, *Principles* [ed. Sraffa], p. 15. 堀訳『原理』, 17-18ページ。傍点の付されている箇所はリカードの原文でイタリック体となっている箇所)、としている。だが、これにたいしスミスの場合には、うえのような収穫逡減という傾向が農業において普遍的なものと考えるといったことから程遠かったのであって、とくに彼は、穀物は普通、費用不変という条件 (conditions of constant costs) のもとで生産される、と考えているのであり、<sup>(23)</sup>そしてスミスが事実上なしているその仮定のもとでは、 $\delta$  が一定に留まればたとえ賃金率が上昇するときさえ、<sup>(24)</sup>「体化労働」と「支配労働」という二つの物差しは同等物ということになるのである。<sup>(25)</sup>

(Ⅱ-2) 「なお、スミスの議論における事実上「技術進歩」にあたるものを分業の増進による労働能率向上として捉えるとともにそのような「技術

進歩」は生産された商品 1 単位当たり「直接的あるいは間接的に体化された労働の時間数」, 「体化労働」( $H$ ) の減少をもたらすと捉えるシロス-ラビーニの議論の示すところによれば, 価格のうち賃金の占める割合(賃金シェア,  $\delta$ ) 一定という仮定はスミスの議論と矛盾するものではなく, またその仮定自体はそれほど無理なものではなかったのであり, そしてそれが一定であれば, たとえ賃金率が変化するときさえ, 「支配労働」で示された一商品の価値(相対価格)の大きさ( $P/W$ )の経時的な動きは, その一商品の「体化労働」( $H$ ) の経時的な動きに対応し, 前者の経時的な動きは後者の経時的な動きを反映しうる, したがって「技術進歩」が生じた場合には, それは, 「支配労働」で示された当該商品の価値の低下ということに反映されうる, ということになるのであったのであり, そしてまたそのシロス-ラビーニの議論の示すところによれば, うえのような「体化労働」と「支配労働」との関係は「穀物」についても同じようにあてはまり, しかもスミスは事実上穀物生産において穀物の単位数量当たり直接的あるいは間接的に投入される労働量(「体化労働」)は経時的に一定, その意味で穀物生産における「費用不変」ということを仮定しているがゆえに, そこでは, 賃金シェア( $\delta$ ) が一定であるかぎり穀物の単位数量当たりの「体化労働」と同じように穀物の単位数量当たり「支配労働」も経時的に一定, ということになるわけであったのであるが, シロス-ラビーニはさらに, うえのような穀物生産における「費用不変」という仮定はまたスミスをして, 支配しうる穀物量という穀物標準をうえのような「支配労働」という労働標準の代用物として使用することを可能にしもしているとみつつ, つぎのような見方を示しているといえよう。]:

① ところで, 穀物は費用不変のもとで生産されるという仮定〔穀物の単位数量当たり  $H$  一定という仮定〕は, スミスをして, 異時点間の比較をなすのに労働の価格の代わりに穀物の価格を標準尺度として使用することを可能にする, という点で, その仮定は, スミスの分析において重要な役割を演じている。なお, スミスは, 「労働の価格が……多少とも正確にわかるということとはほとんどありえない」のにたいし穀物の価格は「一般により良く知られている」(*WN* p. 38. 大河内訳〈I〉, 65ページ)といった実際的な理由から, 労働の価格の代わりに穀物の価格を使用している。だが, そのような代替そのものは, 穀物は「労働者の生活資料(subsistence)の主要部分」



を代表するのであるがその穀物はほぼ費用不変で生産されるというまさにその理由のゆえにこそ、可能なのである。<sup>(27)</sup>

② また、スミスの場合、穀物はほぼ費用不変で生産されるということ〔穀物の単位数量当たり  $H$  はほぼ一定ということ〕自体は、一方での労働の生産力の向上による費用逡減傾向〔うへの  $H$  の逡減傾向〕と、他方での「農業の主要な用具」である家畜 (cattle) との関連での費用逡増傾向〔うへの  $H$  の逡増傾向〕<sup>(28)</sup>、という二つの対照的な力の帰結なのであった。<sup>(29)</sup> さらに、スミスの場合には、穀物の相対的に高い輸送費——金、銀の場合よりもかなり高い——ということが、異なる国々をある程度孤立させることとなっていたのであって、<sup>(30)</sup> そのような事情もまた、スミスをして、穀物の費用に影響を及ぼすうへの二つの対照的な力はあらゆる「発展段階」において相殺し合う傾向をもつということを主張するのを可能にすることにあずかっているのである。<sup>(31)</sup>  
<sup>(32)</sup>

③ なお、スミスは、それら二つの対照的な力の間の正確な釣り合いといったことは不可能であるということに気付いていた。しかし彼はつぎのように考えてもいたのであった。すなわち、長い歴史的諸期間を考えるさいには銀あるいは金ははるかに劣った標準であろう、なぜなら、新しい、豊富な諸鉱山の発見といったことから、あるいはまたそれとは対照的に既存の諸鉱山の徐々に枯渇（取引量は増しつつあると想定されているがゆえに）といったことから、時間の推移とともにそれらの金属の価値はかなり変動せざるをえないからである、と。スミスは、銀あるいは金は相対的に短い諸期間についてのみ使用されうるが長い諸期間あるいは非常に長い諸期間については、穀物のほうが選好されるべきである、と考えたのである。たしかに、前世紀の最後の四半世紀に生じた輸送手段における革命の後では、また、農業の用具としての家畜の、トラクターや他の諸機械による徐々に代替の後では、もはや穀物標準に関する以上のようなスミスの議論は適切なものではありえない、しかしながらスミスの時代にあつては、そのようなスミスの議論は理にかなったものでもありえたのである。<sup>(33)</sup>  
<sup>(34)</sup>

④ なおまた、スミスはさらに彼の分析を遠い過去へと押し広げているのであり、<sup>(35)</sup> そしてそのことは、たんに、自分の議論すべてを歴史的な展望のなかに置いてみるというスミスの方法の一例、というだけのことではなかったのであって、それは主に、つぎの事実に、すなわち、スミスは、実際のまた

潜在的な経済的および社会的な大変化といった時代に生きているということに気付いており、それゆえまた、長期的な比較というものがこれらの変化の方向および速度を理解するための一必須条件として重要なものであった、という事実<sup>36)</sup>に、起因していたのであるが、このことはまた、『国富論』第1篇第11章中に明らかに見受けられるのであって、そこでは穀物標準が、銀の相対的稀少あるいは豊富ということに起因する諸価格の動きを生産条件の変化ということによって決定される諸価格の動きから区別するために、使用されているのである。そしてそこでの要点は、「改良の前進」は一定の諸商品の「真実価格」を上昇させ、また他の諸商品の「真実価格」を低下させる、ということ（なお、ここでの「真実価格 (real price)」とは、労働タームでの価格もしくは穀物タームでの価格）、したがってまた異なった種類の諸商品の諸真実価格の動きは一国によって到達された発展段階についての一つの目安 (an indication) とみなされうる、ということなのであり（スミスの場合には、価格の理論と経済成長の理論とは絡み合っていたのである）、さらにまた、ヨリ正確には、『国富論』第1篇第11章中に含まれる長い「余論」——そこでは、穀物標準が、まさしく、銀の相対的稀少あるいは豊富ということに起因する価格変化というものを単独に取り出すために、使用されている——の主要目的の一つそのものは、ヨーロッパにおける金、銀の量の増大がなんらかの道すじで経済成長を促進したといった重商主義的見解を根絶するという<sup>36)</sup>ことであったのである。

⑤ いずれにせよ、スミスが心に抱いていた諸目的といったことを考慮すれば穀物標準は銀標準よりもうまく働くということは明らかであり、また、たとえ輸送革命および農業での機械使用の増大の後には穀物標準はその意義の多くを失ったとしても、穀物標準は、スミスによって研究された歴史上の時期については、また、前世紀の中頃まででさえ、「遠くへだたった時点と場所での」<sup>(37)</sup>諸価値の比較という目的のためには、有用なものでありつづけたのである。ただし、スミスの場合、穀物標準は、労働標準の代用物<sup>(38)</sup> (substitute) としてのみ使用されていたのである。

〔Ⅲ－1〕〔さて、シロス・ラビーニの所論のなかには、スミスの議論における事実上各商品の価値（相対価格）の大きさおよびその経時的な動きを確定するための標準としての「支配労働」という労働標準、またその代用物としての穀物標準、といったことに関連するものとしての以上のような見

方が見いだされるわけであるが、そのシロス・ラビーニの所論のなかにはさらにまた、スミスの議論における「年々の生産物」の大きさおよびその経時的な動きを確定するための標準といった関連からのつぎのような見方も示されている、といえる。〕：

① なお、スミスは主に、異なった諸時点および諸場所における異なった諸商品の価値にたいして技術の諸変化がもたらす諸帰結を分析するということに関心を抱いていたのであるが<sup>(39)</sup>、スミスの議論によればまた、資本蓄積は生産的労働者数の漸進的增加ということに存し、さらに、生産的労働者数のその増加は（分業の増進ということから）必然的に生産的労働者たちの能率向上ということを伴い、そしてそのような技術進歩は、諸商品の労働支配力を減少させる、ということになるのであった。だがまたそこでは、総産出すなわち「年々の生産物 (annual produce)」の増加率は少なくとも一般には、生産的労働者数の増加率〔生産的労働の投入量の増加率〕よりも高い、ということにもなるのである（総産出増加のもとで技術不変の仮定をなす可能性といったものは、スミスと相容れるところのないものなのである）。そしてうえのような議論に現れてくるようになるはずのものとしての「支配労働 (labour commanded)」と「年々の生産物」との違いそのものは、「交換価値 (value in exchange)」と「使用価値 (value in use)」との違い、さもなくば「価値 (value)」と「富 (riches)」との違い、といったことに符合するはずのものである。<sup>(42)</sup>

② 〔したがってまたそこには、各商品の「価値」（相対価格）を「支配労働」タームで示せば、先でみられたように、たとえおおよそにはあれ実際に、技術進歩の存在は当該商品の「価値」の低下という形で反映されることが可能であるのではあるが、その反面で、たとえ技術進歩そのものは経済のすべての生産部門において生じるわけではないとしても、多くの部門でそれが生じているといった状況のもとで総産出の物量そのものが現実増加しているときには、たとえば、総産出の物量のその現実の増加にもかかわらず「支配労働」タームでの総産出は一定のまま、ということもありうる、といった問題が存することとなるのであって、そのような観点からすれば、〕現代の言葉で言えば、たとえおおよそそのものとならざるをえないとしても、「価値」の最善の尺度が「賃金デフレーター」で「富」の最善の尺度は「物価デフレーター」である、とすることも可能なのであるが、スミスの場合、彼は

〔事実上〕、『国富論』を「富」の考察から開始したのではあるけれどもその後みずからの分析を「諸価値」に集中したのであったのであって、その点からいえば、彼がほとんどもっぱら賃金デフレーターを使用したということも正当化されることもできるのである。しかしながら「ほとんどもっぱら賃金デフレーターを使用しつつ」スミスはまた他方で、たとえば『国富論』の「序論および本書の構想」さらにまた幾つかの箇所において、しかしいつも付随的に、「年々の生産物」それ自体の動きを、あるいはまた、大多数の消費者たちとの関連で、すなわち全住民との関連で、あるいは、スミスにしたがえば生産的労働者たちの能率また総人口のうち生産的労働者たちからなる部分の割合といったものにその水準が依存するところの、我々がこんにち1人当たり所得と呼ぶものとの関連で、「年々の生産物」の動きを、考えてもいたのであった。<sup>(44)</sup>

③ ところで、たとえばいま、 $Y$  を貨幣タームでの「年々の生産物」、 $P_y$  を物価水準、 $\pi_y$  を全体としての生産性、 $E$  を生産に直接的に雇用された生産的労働者の雇用量、とすれば、我々は、つぎのような恒等式、

$$Y/P_y = \pi_y E \quad (a)$$

をもつこととなるはずである。つぎに、 $Y_c$  を1人当たり実質所得（現代の意味での「実質 (real)」）、 $E_s$  を生産的雇用の量のシェア、として、(a)式の両辺を総人口で割れば、

$$Y_c = \pi_y E_s$$

ということになる。<sup>(45)</sup> また、 $W_y$  を生産的労働者1人当たり賃金として、(a)式の両辺を  $P_y/W_y$  で掛ければ、

$$Y/W_y = \pi_y E P_y / W_y \quad (a')$$

ということになる。<sup>(46)</sup> つぎに  $r$  を利潤率、さらに  $1+r=\alpha$  として、つぎのようなタイプの価格方程式

$$P = \alpha W_y / \pi_y \quad (a'')$$

を考え、そして、(a'')式を全体としての経済に適用して(a'')式を(a)式に代入すれば、

$$Y/W_y = \alpha E \quad (b)$$

ということとなる。<sup>(48)</sup> そしてこの(b)式は、もし利潤と賃金との間の所得分配が一定と仮定されれば<sup>(49)</sup> 生産的労働への需要の変動は賃金単位で測られた「年々の生産物」の変動に対応する、<sup>(50)</sup> ということを示しているのである。<sup>(51)</sup>

④ また、もし輸入原材料を考慮に入れるときには、産出物 1 単位当たり原材料の貨幣価値を  $M$  で表すとすれば、価格方程式は、

$$P = \alpha(W_y/\pi_y + M) \quad (c)$$

ということになる。そして、全体としての経済については、

$$\frac{P_y}{W_y} = \frac{\alpha}{\pi_y} \cdot \frac{P_y}{P_y - \alpha M_y} \quad (d)$$

を得ることとなり、また、(d)式を(a')式に代入すれば、

$$\frac{Y}{W_y} = E\alpha \frac{1}{1 - \alpha M_y/P_y} \quad (e)$$

を得ることとなる。<sup>(54)</sup>そしてこの(e)式は、輸入原材料を考慮に入れるときに、〔全体としての経済での産出物 1 単位当たり〕原材料の投入量が一定と仮定する場合には、生産的労働への需要 ( $E$ ) の変動と賃金単位で測られた「年々の生産物」( $Y/W_y$ ) の変動との間の対応を規制する条件は、つぎの二つのもの、すなわち、分配シェア ( $\alpha$ ) の安定性、そして、原材料価格と完成品価格との間の比率の安定性、<sup>(55)</sup>である、<sup>(56)</sup>ということを示しているのである。

⑤ そして、いま、労働によって支配される諸商品の量というもの、すなわち、実質賃金（現代の意味での「実質」）というものを考えるとすれば、我々は、

$$W_y/P_y = \pi_y/\alpha \quad (f)$$

を得る、<sup>(57)</sup>あるいはまた、もし(c)式を用いるとすれば、

$$\frac{W_y}{P_y} = \pi_y \left( \frac{1}{\alpha} - \frac{M_y}{P_y} \right) \quad (g)$$

を得る。<sup>(58)</sup>そしてこの(g)式は、解放経済においては、 $\alpha$  が所与で  $M_y/P_y$  という比率も所与であれば、「実質賃金」の変動は生産性 ( $\pi_y$ ) の変動に対応する、ということを示している、そしてまたそれは、 $\alpha$  と  $M_y/P_y$  とが所与であるならば、もし生産性が変化しなければ  $P_y$  の動きは  $W_y$  の動きと一致しうる、ということを示している。したがってそのようなケースでは、物価の変動と賃金の変動とは同歩調で進行し、それゆえ、〔物価デフレーターと賃金デフレーターのうちの〕どちらのデフレーターが使用されるかということは、問題となるべき事柄ではない、<sup>(59)</sup>ということになるのである。

(Ⅲ-2) 〔シロス-ラビーニによれば事実上、異なった諸時点および諸場所における異なった諸商品の価値（相対価格）にたいして技術の諸変化がも

たらず諸帰結の分析というスミスの関心といった観点からは価値の大きさおよびその経時的な動きを確定するための標準としての「支配労働」標準(賃金デフレーター)というスミスの考えは実際に有効なものでありうる——またスミスの場合、労働を支配するという商品の属性として捉えられたものとしての「価値」が資本蓄積の最善の標準ということになっている——のではありませんけれども、スミスの言うような「年々の生産物」というものの大きさおよびその経時的な動きの確定そのものといったことのためには賃金デフレーターよりも物価デフレーターのほうが良好なものであるはずである、とみられたのであった。だが同時に、シロス・ラビーニの所論の示すところによれば、「年々の生産物」の測定そのものためには物価デフレーターのほうが賃金デフレーターよりも良好なものであるはずであるにもかかわらずスミスはそこでも賃金デフレーターを用いているのであるが、論理的には、ある一定の諸条件が満たされるところでは、賃金デフレーターで測られた「年々の生産物」の動きは「年々の生産物」の生産に直接的に雇用された生産的労働者の雇用量の動き(生産的労働への需要の動き)と符合するとともに、賃金デフレーターで測られた「年々の生産物」の動き(したがってまたそれと符合する生産的労働への需要の動き)は、物価デフレーターで測られた「年々の生産物」の動きと符合する、ということは可能である、ということになるのであった。事実上このような考えを示しつつそのシロス・ラビーニは、スミスの議論における賃金デフレーターによる「年々の生産物」の測定ということに関連してさらに、つぎのような見方を示している、ともいえるであろう。】：

① 周知のように、ケインズ(J. M. Keynes)は、「一般物価水準」とは不確かではっきりしないものであって、「歴史的および統計的叙述の分野」にヨリ適したものであるといった理由から、物価指数よりもむしろ賃金単位を使用することを選好したのであった。<sup>(60)</sup>なお、ケインズは、スミスと同じように、雇用量を規制する諸力を分析することに関心をもっていたのではあるが、ケインズの場合には、技術(technology)は所与、と考えられていたのであった。したがって、賃金単位のもつより少ない不確かさということはさておくとして、賃金単位というものはケインズの理論においては、スミスの理論においてそれが演じているような役割を演じているわけではない、<sup>(61)</sup>ということになるのであって、スミスにとっては、まさに技術変化とその結果として

の労働の「生産力」の向上ということこそが、近代の諸経済機構の本質的特質であったのである。それゆえまた、ケインズにおける賃金単位は物価指数によって代替されうるといふ見解は十分な根拠をもつとしても、スミスのケースでは、そのような見解は、そのように十分な根拠をもつというわけではない、ということになるのである。そしてまた実際のところ、〔たとえ「年々の生産物」およびその経時的な動きの確定そのものといったことのためには賃金単位は物価デフレーターよりも劣ったものであるとしても、技術変化が存在する場合にも「年々の生産物」を測ることによって労働需要・雇用量の動きを安定的に指し示しうる可能性、という点では、〕賃金単位は、原理的には、物価デフレーターよりも良好なものであるのである。<sup>(63)</sup>ただし、〔そのような脈絡での〕その賃金単位といえども、「完全な精密さ——それらの量の実際の値について、我々の知識が完全あるいは正確であるかどうかは別として、我々の因果分析が要求するような完全な精密さ」(Keynes, *General Theory*, p. 40. 前掲邦訳, 40ページ)といったことを満たすものではない、<sup>(64)</sup>のではあるか。<sup>(65)</sup>

(注)

- (1) Sylos-Labini [1976], pp. 206, 212.
- (2) Sylos-Labini [1976], pp. 201-202.
- (3) なお、シロス・ラビーニによれば、スミスは事実上、短期 (short run) について語るときには、‘occasionally’ あるいは ‘temporarily’ といった表現を、また、長期 (long run) について語るときには、その ‘long run’ (「長期」) という表現か、‘considerable time’ といったような ‘long run’ と同等な他の諸表現を、さらに、諸発展段階 (stages of development) について語るときには、‘states’, ‘conditions’, ‘general circumstances of the society’, あるいは、‘different periods of improvement’ といった表現を、使用している、とされる。Sylos-Labini [1976], p. 202.
- (4) シロス・ラビーニは、つぎのようなスミスの文章を引用している。「自然価格そのものは、賃金、利潤、地代というその構成部分……の自然率とともに変動する。そしてどんな社会においても、この率は、それらの社会の状況 (circumstances) に従って、すなわち、それらの社会の貧富、それらの社会の進歩的、停滞的、あるいは衰退的状态 (condition) に従って、変動するのである。」(WN, p. 62. 大河内訳 I, 107ページ。) Sylos-Labini [1976], p. 202.
- (5) なお、その論理にしたがえば、たとえば短期 1 での市場価格とそれにつづく短期

2での市場価格との間に相違があったならば、その相違は、短期1と短期2との間で需給における変化があったことの結果、ということになるであろう。

また、独占のもとでの長期1での市場価格とそれにつづく長期2での市場価格との間に相違があったならば、その相違は長期1と長期2との間で需給における変化があったことの結果、ということになり、他方、競争のもとでは長期においては市場価格は、自然価格と、すなわち自然率での賃金、利潤、地代の合計としての事実上生産費と、一致する傾向がある、つまり、そこでは、自然率での賃金、利潤、地代の合計としての事実上生産費に等しい自然価格が市場価格となる傾向があるのであり、そしてたとえば長期1での自然価格（競争のもとでの長期1での市場価格）と長期2での自然価格（競争のもとでの長期2での市場価格）との間に相違があったならば、その自然価格（競争のもとでの市場価格）の相違は、長期1と長期2との間で賃金、利潤、地代の自然率そのものに变化があったことの結果ではなくて、ただ、長期1と長期2との間で技術変化（とそれに帰因する生産費の変化）があったことの結果、ということになるであろう。

そして、競争のもとでは長期においては市場価格は自然価格と一致する傾向があったのであるから長期よりも長い期間としての発展段階に関しても、競争のもとでは市場価格は自然価格と一致する傾向がある、ということになり、また、発展段階と発展段階との間の場合には、技術だけでなく賃金、利潤、地代の自然率そのものも変化しうるのであるから、たとえば発展段階1での自然価格（競争のもとでの発展段階1での市場価格）とそれにつづく発展段階2での自然価格（競争のもとでの発展段階2での市場価格）との間に相違があったならば、その自然価格（競争のもとでの市場価格）の相違そのものは、ここでは、発展段階1と発展段階2との間で、技術変化（とそれに帰因する生産費の変化）があったことの結果、あるいは、賃金、利潤、地代の自然率の変化（とそれに帰因する生産費の変化）があったことの結果、あるいはそれらの変化の両方がなんらかの組み合わせで存在した（そしてそれによって生産費が変化した）ことの結果、ということになるわけであろう。

- (6) Sylos-Labini [1976], pp. 202, 204. なお、シロス・ラビーニによれば、スミスは、『国富論』第1篇の第7章では短期および長期における諸価格の動きを体系的に論じ、第8, 第9, 第10[および第11]章では、「改良の前進 (progress of improvement)」の様々な段階 (periods) における賃金、利潤、地代の「自然率」の動きを論じている、とされる。(Sylos-Labini [1976], p. 203.)

そしてまたシロス・ラビーニはさらに、「すべての収入の三つの本源的な源泉」としての「賃金」、「利潤」、「地代」の自然率の変動についてのスミスの分析の性格を、スミスの価格理論 (theory of prices, なお、シロス・ラビーニは、スミスの価格理論を、誤ったものというよりもむしろ不決定のもの、とみる) ということと関連させつつ、論じようとするのであるが、それについては Sylos-Labini [1976], pp.



203-204 を見よ。なお、そこで示されているシロス・ラビーニの所論からして、スミスの議論における「賃金」、「利潤」、「地代」の「自然率」の動きということそのものについてはシロス・ラビーニは事実上つぎのような捉え方をしている、ということもできるであろう。

すなわち、社会の前進的段階 (stage) においては労働需要が増大するのであるが、「人間の生産 (the production of men)」の増加そのものは、各労働者が「ヨリ多数の子供を育て」なければならないゆえ〔各労働者がそのために要する費用の増加、という意味で〕通増的費用という条件のもとで可能となりうる。「もしも〔労働にたいする〕需要がたえず増加するならば、労働の報酬が必然的に、たえず増大するその需要を労働者たちがたえず増大する人口によって満たすことができるよう労働者たちの結婚と増殖を刺激するにちがいない」(WN, p. 80. 大河内訳〈I〉, 136ページ。〔 〕内はシロス・ラビーニ) のであり、「労働にたいする需要がたまたま増加しているか、停滞しているか、あるいは衰退しているかに応じて、言い換えるとその労働にたいする需要がたまたま人口の増加を、人口の停滞を、あるいは人口の衰退を要求しているのに応じて、労働にたいする需要というものが、労働者に与えられるべき生活の必需品および便益品の数量を決定し、そして労働の貨幣価格は、この数量を購入するのに必要なものによって決定される」(WN, p. 85. 大河内訳〈I〉, 145ページ) のである。そこでは、労働需要の増加は、当分の間は、ヨリ大きな人口増に必要とされる水準にまで賃金を引き上げることができる。しかし、ひとたびこのヨリ高い賃金水準が到達されると、たとえ労働需要が増加しつづけるときでさえ、人口したがってまた労働供給がそれと同じ率で増加するかぎり、賃金はその〔ヨリ高い〕水準にとどまるであろう。だが、労働需要が持続的に人口よりも速く増加するときには、賃金は上昇しつづけることができるのである。労働需要の拡張が、〔各労働者の〕人間を生産するための費用に影響を及ぼし、そして社会の一般的状态によって必要とされるこの費用が、ある所与の発展段階での賃金を規制する、ということもできるであろう〔以上、「賃金」について〕。他方、社会の富 (wealth) が増加しつづける状態にあるか衰退しつづける状態にあるかということは、利潤の変動を決定しもある。そしてそのさい利潤はしばしば、賃金の変動の方向と反対の方向で変動するのである〔以上、「利潤」について〕。また、「改良の前進」という状態においては地代は上昇する傾向をもつ。第一に、土地の生産物にたいする需要の拡張は土地自体の一般的稀少性ということに直面するがゆえに (この広い意味においてのみスミスは土地地代を独占価格と言う)、第二に、土地の生産物にたいする需要の拡張は、(家畜を飼育するための改良されていない荒地、なんらかの特定の生産物に適したある一定の諸タイプの土地、鉱山、といったような) 特定の諸稀少性ということに出合うがゆえに、地代は上昇する傾向をもつのである〔以上、「地代」について〕。したがってまたそこでは、需給というものが役割を演じるとし

でもその役割は限界主義経済学者たちの議論におけるものとは異なったものであり、そして、ある発展段階に存在する「賃金」、「利潤」、「地代」の各々の自然率、また、その発展段階から別の発展段階に移行するさいに生じうるそれらの自然率各々の変化の率そのものは、究極的には、厳密に経済的な諸力というよりもむしろ発展段階における社会の一般的状態、またその社会の一般的状態の変化、というものに依存しているのであり、それらの自然率またその変化の率そのものは究極的には、厳密に経済的な諸力によって決定されるものというよりもむしろ、社会の一般的状態またその変化というものによって与件として独立的に与えられるもの、ということになるのである。

(7) なお、シロス・ラビーニは、この脈絡で、スミスのつぎのような文章を引用している。「需要の増加というものは、……初めのうちは、時には財貨の価格を引き上げることもあるけれども、長いあいだには (in the long run), 必ずそれを引き下げずにはおかない。なぜなら、需要の増加は生産を奨励し、それによって生産者たちの競争が激しくなり、そしてその生産者たちは、互いに他より安く売るために、そうでもなければとても思いつきもしないような新しい分業や技術 (art) の新しい改良に訴えるからである。」(WN, p. 706. 大河内訳〈Ⅲ〉, 94ページ。) Sylos-Labini [1976], pp. 205-206.

(8) Sylos-Labini [1976], pp. 205-206.

(9) なお、すでにうえてみられてきたこととの繋がりでここでのシロス・ラビーニの論理を捉えたとすれば、それは、以下のようなものとして把握することもできるかもしれないであろう：

まず、スミスの議論からすれば短期の一期間とそれにつづく短期の一期間との間においては、各商品の市場価格は当該商品の直接の需給の変化の結果として、変化し、他方、「技術変化」はすべての商品生産部門において一様な形で生じるわけではないのであるが、競争のもとでの長期の一期間とそれにつづく長期の一期間との間においては各商品の市場価格は、当該商品の生産における「技術変化」(それによる生産費の変化)の結果として、変化し、また、競争のもとでの一発展段階とそれにつづく一発展段階との間においては各商品の市場価格は、当該商品の生産における「技術変化」(それによる生産費の変化)の結果として、あるいは要素価格の変化(それによる生産費の変化)の結果として、あるいはまた、それら両変化の組み合わせ(それによる生産費の変化)の結果として、変化する。そして、変化後の時点では、各商品は、その変化後の時点での各々の市場価格に従って相互に交換され、変化後の時点での諸商品間の交換関係したがってまたその時点での各商品の相対価格(その時点での各商品の価値)が確定する、ということになる。

そしてそのさい、「技術変化」ということが生じうる長期の一期間とそれにつづく長期の一期間との間および一発展段階とそれにつづく一発展段階との間について

は、つぎのようなことが言えることとなる。すなわち、競争を前提とするときこのような時点間では、生産費に等しい商品の市場価格は、うえのような要因の変化の結果として、変化し、そして変化後の時点では、各商品は変化後の時点での各々の市場価格に従って相互に交換され、変化後の時点での諸商品間の交換関係、その時点での各商品の相対価格（その時点での各商品の価値）が確定するわけであるが、この場合には、同一時点での諸商品間の交換関係を規制するものは、それらの商品の（1単位当たり）生産費なのである。そして、スミスの議論からすれば要素価格の大きさそのものはすべての商品生産部門に共通に与件として独立的に与えられることになるのであるから、いま諸生産要素の投入量を一つの全体としての要素投入量として捉えたとすれば、それら諸商品間の交換関係を規制するものは結局のところ、それらの商品1単位当たり要素投入量（それらの商品各々の生産の条件）、ということになるのである。したがってここでは、うえの変化後の時点での諸商品間の交換関係、その時点での各商品の相対価格（その時点での各商品の価値）は、その時点での諸商品1単位当たり要素投入量の間の関係を表していることになるのである。そして、1単位当たり要素投入量のヨリ多い商品1単位は、ヨリ多くの単位数の他商品と交換され、ヨリ大きい相対価格（価値）をもつ、ということになるのである。他方またここでは、たとえばすべての商品生産部門において同じ程度の技術進歩（通常、全要素投入量に対する産出量の比率の上昇として捉えられるもの：「技術変化」の一つ）が生じていたとすれば、変化後の時点での諸商品間の交換関係も、また、その時点での各商品の相対価格（その時点での各商品の価値）の大きさそのものも、変化前の時点でのそれと同じ、ということになるのである。しかし、スミスの議論では、「技術変化」はすべての商品生産部門において一様な形で生じるというわけではないのであった。したがって、変化後の時点での諸商品間の交換関係、また、その時点での各商品の相対価格（その時点での各商品の価値）の大きさそのものは、変化前の時点でのそれと異なったものでありうる、ということになるのである。

そしてスミスは、事実上このような事情をうけて、同一時点での諸商品の諸相対価格（価値）の比較——なお、このような比較のためには単位として何を用いても差し支えないはずである——を可能にするだけでなく各商品各々の相対価格（価値）の異時点間での比較をも可能にする単位は何であるかということの問題にしようとするのであるが、そのさい、諸商品の諸相対価格にたいして技術進歩がもたらす諸帰結（つまり、生産に技術進歩の生じた当該商品の相対価格（価値）にたいしてその技術進歩がもたらす帰結）を研究することを意図していたスミスはまた、その問題を事実上、各商品の相対価格（価値）を何のタームで表現すれば、その相対価格（価値）の動きが、当該商品の生産における技術変化の存在またその程度を反映しうることになりうるか、といった形で取り扱おうとしたのであった。そしてスミス

は、貨幣として使用される貴金属のまさしく生産の条件が時間の推移のうちに変化をこうむるということから、適切な単位としては貨幣を退けたのである。

すなわち、たとえばいま、競争が行われている状況での、技術変化の生じうる時間的間隔をもった時点1と時点2（たとえば、長期1とそれにつづく長期2、あるいは、発展段階1とそれにつづく発展段階2）といったものを考えとしよう。時点1においては、各商品は、その時点でのそれぞれの生産費に等しい「市場価格」をもち、そして各商品は、各々の市場価格に従って相互に交換される。そしていま、各商品の相対価格（価値）の大きさを表示する単位として貴金属を採用するとすると、各商品の相対価格（価値）の大きさは、それら各商品が支配しうる貴金属の量という形で表現され、その時点1での諸商品の諸相対価格（価値）の比較は、その時点1において各々の商品が支配しうる貴金属の量を比較することによってなされる、ということになる。また、その時点1において各商品が支配しうる貴金属の量そのものは、結局のところ、その時点1での貴金属1単位当たり要素投入量（貴金属の生産の条件）に対する当該商品1単位当たり要素投入量（当該商品の生産の条件）の割合によって決まるのである。さらに、技術変化はすべての商品生産部門において一様な形で生じるわけではないがそれが生じうる時間的間隔の後の時点2においては、うえてみられた要因（長期1とそれにつづく長期2との間では技術変化、発展段階1とそれにつづく発展段階2の間では技術変化と要素価格変化）の作用を反映した形で各商品は、この時点2でのそれぞれの生産費に等しい「市場価格」をもち、各商品は各々のこの時点2での市場価格に従って相互に交換され、また各商品のこの時点2での相対価格（価値）の大きさは、それら各々の商品がこの時点2において支配しうる貴金属の量という形で表現され、この時点2での諸商品の諸相対価格（価値）の比較も、この時点2において各々の商品が支配しうる貴金属の量を比較することによってなされ、そしてここでもまた、各商品が支配しうる貴金属の量そのものは、結局のところ、この時点での貴金属1単位当たり要素投入量に対する当該商品1単位当たり要素投入量の割合によって決まるのである。そしていま、時点1での貴金属を単位にして表現された各商品の相対価格の大きさ（各商品が支配しうる貴金属の量で示された各商品の相対価格の大きさ）と時点2での同じく貴金属を単位にして表現された各商品の相対価格の大きさを比較することとする。そしてそのさい、もし時点1と時点2との間で貴金属1単位当たり要素投入量（貴金属の生産の条件）に変化がなかったならば、つぎのようなことになる。すなわち、まず時点2での貴金属を単位にして表現された相対価格（価値）の大きさが時点1でのそれと等しかった商品については、時点1と時点2との間でその商品1単位当たり要素投入量は不変であった、つまり、その商品の生産においては技術不変であった、ということになる。また、時点2での相対価格（価値）が時点1でのそれに比べて低下した商品については、時点1と時点2との間でその商品1単位当

たり要素投入量は減少した、つまり、その商品の生産において技術進歩が存在した、ということになる（また、その相対価格の低下がより大きければ、それだけより大きな程度の技術進歩が存在したということになる）。他方、時点2での相対価格（価値）が時点1でのそれに比べて上昇した商品については、時点1と時点2との間でその商品1単位当たり要素投入量が増加した、つまり、その商品の生産においては技術進歩と逆のことが存在した、ということになるのである。（なお、ここでは、たとえば、その生産において技術進歩のあった商品の相対価格は、より小さな程度の技術進歩しかなかった商品あるいはそのなかった商品あるいはまたそれと逆のことが生じていた商品の相対価格に比べて相対的に低下している、ということになるのであるが、そのような脈絡での変化の結果そのものは、言うまでもなく、時点2での、諸商品の諸相対価格の大きさの間の関係に反映されているのである。）ここでは、貴金属を単位にして表現された諸商品の諸相対価格（価値）の動きは、それぞれの商品の生産における技術変化の存在およびその程度を反映しうる、ということになるのである。だがまた同時に、貴金属がそのような機能を果たしうるためには、うえて触れられたように、貴金属自体の生産の条件が時点1と時点2との間で不変でなければならないのであって、そのような条件が満たされない場合にはうのようなことは当たらないのである。貴金属の生産の条件は経時的に変化するとみるスミスの議論では、適切な単位としては、貨幣（貴金属貨幣）は退けられる、ということになるのである。

- (10) シロスラビーニの所論の示すところからすれば、スミスは事実上つぎのように考えようとした、ということになるであろう。すなわち、競争の行われている状況での長期の一期間あるいは一つの発展段階においては、各商品は、その時点でのそれぞれの生産費に等しい「市場価格」をもち、そして各商品は、各々の市場価格に従って相互に交換され、各商品はそれぞれの市場価格に対応したそれぞれの相対価格（価値）をもつのであるが、各商品のそれぞれの相対価格（価値）の大きさを表示する単位として普通労働の賃金率を用いることとし、各商品の相対価格（価値）の大きさを、それぞれの商品が「支配しうる労働」量のタームで示すこととする。また、長期の一期間とそれにつづく長期の一期間との間では技術変化が、一発展段階とそれにつづく一発展段階との間では技術変化にくわえて、要素価格の自然的な大きさの変化が、生じうるのであるが、そのような変化が生じうる時間的間隔の後の長期の一期間あるいは一発展段階においても、競争のもとでは、各商品は、長期のその一期間あるいはその一発展段階におけるそれぞれの生産費に等しい市場価格をもち、そして各商品は、各々の市場価格に従って相互に交換され、各商品はそれぞれの市場価格に対応したそれぞれの相対価格（価値）をもつこととなる。そしてこの時点でも、各商品のそれぞれの相対価格（価値）の大きさを表示する単位として普通労働の賃金率（なお、競争のもとでは、長期の一期間あるいは一つの発展段

階に成立する現実の賃金率は自然率での賃金率ということとなり、そしてその自然率での賃金率の大きさそのものは、長期の一期間とそれにつづく長期の一期間との間では不変であるが、一発展段階とそれにつづく一発展段階との間では変化しうる)を用いることとする。そしてさらに、各商品について、長期の一期間における当該商品の相対価格(価値)の大きさそのものとそれにつづく長期の一期間における当該商品の相対価格(価値)の大きさそのものとを、あるいはまた、一発展段階における当該商品の相対価格(価値)の大きさそのものとそれにつづく一発展段階における当該商品の相対価格(価値)の大きさそのものとを、比較することとする。そうすれば、この「支配労働」量のタームで表現された相対価格(価値)の大きさに変化のなかった商品については、その商品の生産においては技術不変であったということとなり、また、相対価格(価値)の大きさが低下した商品については、その商品の生産に技術進歩が存在した(また、その相対価格の低下がより大きければ、それだけより大きな程度の技術進歩が存在した)ということとなり、あるいはまた、相対価格(価値)の大きさが上昇した商品については、その商品の生産に技術進歩と逆のことが存在したということとなり、各商品の相対価格(価値)の動きが、それぞれの商品の生産における技術変化の存在およびその程度を反映することとなる。各商品の相対価格(価値)の大きさを、普通労働の賃金率を単位として用いることによって「支配労働」量のタームで示せば、その相対価格(価値)の動きは当該商品の生産における技術変化の存在およびその程度を指し示しうるのであって、単位としての普通労働の賃金率、また、それと結びついた「支配労働」は、そのような機能を果たしうるのである、とスミスは考えようとしたのである、というわけである。

(11) Sylos-Labini [1976], p. 206.

(12) なお、シロス・ラビーニによれば、スミスのこの考えは、「商品の残余 (commodity residue)」を無視することはできないという理由から繰り返し批判されてきたし、またその批判は正当なものである、とされるとともに、そのシロス・ラビーニによればまた、簡単化のために地代を無視するとすれば、スラッファが彼の『商品による商品の生産』(Piero Sraffa, *Production of Commodities by Means of Commodities: Prelude to a Critique of Economic Theory* (Cambridge, etc.: Cambridge University Press, 1960). 以下、Sraffa, *Commodities* と略記する。菱山 泉, 山下 博 訳『商品による商品の生産——経済理論批判序説——』(有斐閣, 1962年。))の第6章のなかで示しているように、この「商品の残余」は、スラッファが「日付けのある労働量への還元 (reduction to dated quantities of labour)」と呼ぶ方法を適用することによってすきなだけ小さなものになされうるのであって、それによって我々は価格を賃金と利潤に「分ける (resolve, 分解する)」ことができるのである、とされる。Sylos-Labini [1976], p. 207n. 6.

(13) つまり、 $\delta$  は、(産出 1 単位当たり総賃金) / (価格)，であって、それは、「価格」のうちから「賃金」に「分かれる (分解する)」割合、「価格」のうち「賃金」が占める割合であり、そして、 $\delta = (\text{産出 1 単位当たり総賃金}) / (\text{価格}) = (1 \text{ 時間当たり賃金率}) \times (\text{直接的あるいは間接的に体化された労働の時間数}) / (\text{価格}) = WH/P$ ，であるから、 $WH = \delta P$ ，となる，というわけである。

(14) シロス-ラビーニはここでは (Sylos-Labini [1976], p. 207)，スミスの議論における事実上「技術進歩」にあたるものを、生産された商品 1 単位当たり「直接的あるいは間接的に体化された労働の時間数」の減少ということにあらわれるものとして、捉えているわけであるが、そのシロス-ラビーニの場合にはまた、スミスの議論における事実上「技術進歩」にあたるものは、分業の増進による労働能率向上として捉えられている，といえる (Sylos-Labini [1976], p. 213 を見よ)。シロス-ラビーニは事実上、スミスの議論での商品生産における「技術進歩」を、当該商品の生産における分業の増進による労働生産性の向上として捉えるとともに、スミスの議論ではその「技術進歩」は当該商品 1 単位当たり「直接的あるいは間接的に体化された労働の時間数」の減少としてあらわれることになっている，とみるのである。

(15) なお、価格が賃金、利潤、地代という三つの部分に分かれるとすれば、価格のうち賃金の占める割合 ( $\delta$ ) が一定であれば、価格のうちに利潤と地代の合計としての非賃金所得の占める割合 ( $1 - \delta$ ) も一定，ということになる。

(16) つまり、期間 1 については、 $W_1 H_1 = \delta_1 P_1$ ，したがって、 $H_1 = \delta_1 \cdot \frac{P_1}{W_1}$ ，期間 2 については、 $W_2 H_2 = \delta_2 P_2$ ，したがって、 $H_2 = \delta_2 \cdot \frac{P_2}{W_2}$ ，という関係が成立するゆえ、 $\frac{H_1}{H_2} = \frac{\delta_1 (P_1/W_1)}{\delta_2 (P_2/W_2)}$ ，ということになる。そして  $\delta_1 = \delta_2$  であるのであるから、 $\frac{H_1}{H_2} = \frac{P_1/W_1}{P_2/W_2}$ ，ということになる，というわけである。

(17) Sylos-Labini [1976], p. 207. そこでは、 $H_1 : H_2 = (P_1/W_1) : (P_2/W_2)$  なのである。

言い換えれば、 $WH = \delta P$  であるゆえ  $H = \delta \frac{P}{W}$  となるのであるが、そのさい  $\delta$  が一定なのである。それゆえそこでは、「支配労働」タームでの当該商品の価値 (相対価格)  $\frac{P}{W}$  の変化の方向および変化の率は、当該商品に「直接的あるいは間接的に体化された労働の時間数」 $H$  の変化の方向および変化の率に対応しうるのであり、(たとえ、単位時間当たり——1 時間当たり——賃金率  $W$  が一定でなくとも) 前者  $\frac{P}{W}$  の動きは後者  $H$  の動きを指し示しうる，ということになるのである。したがってまたそこでは、もし、当該商品の生産において分業の増進による労働能率向上としての「技術進歩」が生じてその結果として当該商品 1 単位当たり「直接的あるいは間接的に体化された労働の時間数  $H$ 」が減少するといったことがあった場合には、

そのような事情を、「支配労働」で捉えられた当該商品の価値  $\frac{P}{W}$  の動きは反映するのであり、当該商品の生産における技術変化とその結果としての労働の「生産力」の向上は、当該商品の労働支配力の低下として指し示される、ということになるのであり、また、「技術進歩」は当該商品の労働支配力を減少させる、当該商品の価値を低下させる、ということになるのである。

なお、シロス・ラビーニは、事実上、分配上の諸分け前の割合が一定であれば「支配労働」という標準の変動は「体化労働」で表現される変動に対応するという考え自体は新しいものではないとしたうえで (Sylos-Labini [1976], pp. 206-207)、本文でみられたような議論を展開しているのであるが、そのような考えに関連する見方については、我々がすでに本書で取り扱ったものとしては、たとえば本書前出「49」の本文⑤、注10で触れられたM. ドップ (M. Dobb) の見方を見よ。

(18) つまり、「価格」のうち「賃金」の占める割合が100%ということ。

(19) ここでは、各商品についての  $\delta$  の大きさは経時的に一定であるのであるから、す

でうえの (II-1) ②、注17でみられたように、同一商品については、 $\left(\frac{P_1}{W_1}\right) : \left(\frac{P_2}{W_2}\right) = H_1 : H_2$ 、といった意味で、「支配労働」で捉えられた当該商品の価値 (相対価格) の動きは、当該商品に「直接的あるいは間接的に体化された労働の時間数」の動きに対応しるのであり、またその意味で、「支配労働」標準は「体化労働」標準と同等物でありうる、ということになるわけである。

(20) Sylos-Labini [1976], pp. 207-208.

(21) つまり、発展の「前進的」状態にあるがゆえに、ある商品の生産に技術進歩が生じて当該商品の生産に直接的あるいは間接的に投入される労働量 ( $H$ ) が減少するとき、もし、同じく発展の「前進的」状態にあるがゆえに賃金率 ( $W$ ) が上昇し〔発展の「前進的」状態での「賃金」、「利潤」、「地代」の水準 (自然率) の動きについてのスミスの議論に関するシロス・ラビーニの所論については、本章の前出注6を、また、Sylos-Labini [1976], pp. 203-204 を、見よ〕、さらにもし「価格」のうち賃金以外の分配上の分け前——ここでは利潤と地代との合計——が占める割合 (全体としての非労働シェア、全体としての非賃金シェア) を一定に保つような形で、価格のうちの利潤となる部分および地代となる部分の大きさが変化するならば、ここでは、価格のうち賃金が占める割合 (賃金シェア) は安定的なままでいることはできるのであり、さらにまた、いま簡単化のために地代を無視するとし、同時に、資本・産出高比率の適当な上昇、したがって当該商品の生産においてその商品1単位当たり投入される資本量の適当な増加、といったことを仮定するならば、利潤率低下といったことを考慮に入れてさえある不変な利潤シェアといったことを仮定することは実際に可能で、したがってまたそこでは、賃金シェアは不変、ということ



になる、というわけである。

- (22) Sylos-Labini [1976], p. 208. さらにまたシロス・ラビーニによれば、近代における——たとえば第二次世界大戦に先立つ100年における——賃金シェアの相対的安定性、といったことを説明することを意図された多量の文献——ということを考えれば、結局のところ、安定的な賃金シェアという仮定はそれほど無理なものとは思えない、とされる。Sylos-Labini [1976], p. 208.

- (23) なお、ここでのシロス・ラビーニの議論の脈絡からして、シロス・ラビーニはここでは、「費用不変 (constant cost)」という用語を、一商品の生産量の増大にさいしてその商品1単位当たりの労働投入量が不変といったことを指すものとして用い、また、「収穫逦減」という用語を、一商品の生産量の増大にさいしてその商品1単位当たりの労働投入量の増加としての「費用逦増 (increasing cost)」に対応する事情を指すものとして用いている、ということがわかるであろう。

- (24) なお、このようなことに関連してシロス・ラビーニは、事実上のスミスの仮定およびリカードウの仮定といったことに言及しつつ概ね以下のような内容をもった説明を与えている。すなわち、まず、スミスの場合にもリカードウの場合にも、賃金は上昇する。だが、リカードウの場合には、そのような賃金の上昇は、穀物生産における労働タームでの費用逦増〔穀物の生産量の増大にさいしての穀物の単位数量当たり  $H$  の逦増〕ということによって必要とされるのにたいし、スミスの場合には、賃金の上昇は、このようなことに依存するのではない〔それについては、たとえば本章の前出注6を見よ〕(なお、ここでも単位は、紙幣タームでのもの、あるいはまた、貨幣として商品が使用されるケースでも  $\delta$  一定とされるときには、賃金と反比例して変動する労働量をもって生産される商品のタームでのもの〔つまり、 $P = \frac{1}{\delta} \cdot WH$  において  $\delta$  が一定で、 $W$  と  $H$  が反比例して変動する商品、したがって、

価格  $P$  が一定となる商品、のタームでのもの〕、とする)。そして、リカードウの場合、収穫逦減〔穀物の単位数量当たり  $H$  の逦増〕ということ、および、穀物タームでの賃金の購買力 ( $W/P$ ) [なお、ここでの  $P$  は、穀物の単位数量の価格] 一定ということ、が仮定されているため、穀物の価値〔穀物の単位数量当たりの価値〕は、体化労働 ( $H$ ) によって評価されるならば、〔収穫逦減 (穀物の単位数量当たり  $H$  の逦増) の仮定から、〕上昇することとなり、それにたいし、支配労働 ( $P/W$ ) によって測定されるならば、うえの第二の仮定 [ $W/P$  一定の仮定] から、まったく上昇しないということとなるのである。(また、 $\delta$  の上昇は、うえの二つの仮定の必然的帰結なのであり〔つまり、 $\delta = (W/P) \cdot H$  において、( $W/P$ ) が一定で  $H$  が増加、したがってまた、たとえば、 $H$  が2倍になれば  $\delta$  は2倍になる〕、そしてリカードウにとっては、 $\delta$  の上昇は利潤シェアの低下を含意するということになるのである。) それにたいし、穀物は費用不変のもとで生産される〔穀物の単位数量当

り  $H$  は不変] ということ仮定するスミスの場合には、[穀物価格のうち賃金が占める割合]  $\delta$  が一定に留まりさえすれば [したがってまたそこでは、穀物価格のうち利潤と地代の合計の占める割合——地代を無視すれば、利潤の占める割合、利潤シェア——も一定]、たとえ賃金率が上昇するときにさえ、[支配労働 ( $P/W$ ) によって測定された穀物価値は、体化労働 ( $H$ ) によって測定された穀物価値と同じように、一定であるのであって、]「体化労働」と「支配労働」という二つの物差しは同等物ということになるのである。そして、以上のことを数字例で示せば、たとえば：

リカードウ						スミス					
$H$	$W$	$WH$	$\delta$	$P=WH/\delta$	$P/W$	$H$	$W$	$WH$	$\delta$	$P=WH/\delta$	$P/W$
1	5	5	0.25	20	4	1	5	5	0.25	20	4
2	10	20	0.5	40	4	1	10	10	0.25	40	4

(出典：Sylos-Labini [1976], p. 209.)

といったものとして示すこともできるのである。Sylos-Labini [1976], pp. 208-209.

(25) Sylos-Labini [1976], pp. 208-209.

(26) すなわち、穀物生産において穀物の単位数量当りに直接的あるいは間接的に必要とされる労働の量 ( $H$ ) が一定という意味で、穀物生産では収穫不変で穀物は費用不変のもとで生産されるのであれば、たとえ賃金率が変化するときでさえ賃金シェア ( $\delta$ )、穀物価格のうち賃金が占める割合が一定に留まるかぎり、穀物の単位数量当りに「体化された労働」の量と同様、単位数量の穀物によって「支配される労働」の量も経時的に一定、穀物の労働支配力も経時的に一定、ということになるのであり、したがってそこでは、なんらかの一商品の単位数量が支配しうる穀物量の異時点間での変化は、その一商品の単位数量当たり「支配労働」量のその異時点間での変化と対応関係をもち、したがってまたその一商品の単位数量当たり「体化労働」量のその異時点間での変化とも対応関係をもつことになる。そこでは、その一商品の価格を穀物の価格で割ることによって得られるその一商品が支配しうる穀物量の異時点間の動きは、その一商品の価格を労働の価格で割ることによって得られるその一商品が支配しうる労働量の異時点間の動きと対応するとともに、それらの動きはともに、その一商品に体化された労働量の動きを反映しうるのであって、異時点間の比較をなすのに労働の価格の代わりに穀物の価格を標準尺度として使用することも可能、というわけである。

(27) Sylos-Labini [1976], p. 209. つまり、スミスの議論では、穀物の価格は労働の価格よりもより良く知られておりまた穀物は「労働者の生活資料の主要部分」を代表するものということになっているのであるが、穀物価格のうち賃金が占める割合  $\delta$  が経時的に一定ということを実事実上仮定しているスミスをして、異時点間の比較を

なすのに労働の価格の代わりに穀物の価格を標準尺度として使用することを可能にしている理由そのものは、穀物の単位数量当たりの  $H$  が経時的に（ほぼ）一定という仮定であった。すなわち、 $\delta$  が経時的に一定と事実上仮定されるスミスの議論において、さらに穀物の単位数量当たりの  $H$  も経時的に（ほぼ）一定と仮定されていたがゆえに、穀物の単位数量当たりの労働支配力 ( $P/W$ ) が経時的に（ほぼ）一定となり、任意の一商品の単位数量が支配しうる穀物量の異時点間の動きは、その一商品の単位数量当たり「支配労働」量のその異時点間での動きに、したがってまたその一商品の単位数量当たり「体化労働」量のその異時点間での動きに、（ほぼ）対応することができるのである。したがってそこでは、各々の時点における穀物の価格を標準尺度として用いることによって、その各々の時点において支配しうる穀物量のタームで一商品の価値（相対価格）の大きさを示せば、その商品の価値の異時点間での動きは、労働の価格を用いた場合の「支配労働」量タームで大きさが示されたその商品の価値のその異時点間での動きを（ほぼ）指し示すとともに、その動きは、その商品の単位数量当たり「体化労働」量のその異時点間での動きを、したがってまたその商品の生産における技術変化（価値の低下の場合には技術進歩）の存否とその程度を、（ほぼ）指し示すことができるとことになる、というわけであろう。

(28) シロス・ラビーニによれば、スミスの場合、初期の時代にあつては広大な面積の「未耕の荒地」の存在のゆえに家畜はほとんど自由財であるのであるが、その後、「未耕の荒地」が不十分なものとなり、そして家畜は、通増的な度合いで、労働によって飼育されなければならない、ということになっている、とされる。(Sylos-Labini [1976], p. 209.) なお、シロス・ラビーニは、そのことの引証のために、『国富論』第1篇第11章中の「過去4世紀間における銀の価値の変動に関する余論」の第27パラグラフ〔WN, p. 186. 大河内訳〈I〉, 308-309ページ〕をあげている。(Sylos-Labini [1976], p. 209n. 7.)

(29) なお、事実上このようなことを言っているものと思えるシロス・ラビーニの叙述そのものについては、Sylos-Labini [1976], p. 209 を見よ。

我々は、シロス・ラビーニはそこでのスミスの考えをつぎのようなものとして捉えようとしている、とみているのである。すなわち、穀物の生産に必要な「農業の主要な用具」である家畜は、労働によって飼育されなければならない度合いが通増していく、ということになっているスミスの議論では、一方で労働の生産力の向上、他方で穀物生産活動の一環としての家畜飼育のための労働量の通増、ということから、結局のところ、穀物生産において穀物単位数量当たりに直接的あるいは間接的にかかわることになる労働の量  $H$  はほぼ一定、その意味で、ほぼ、穀物の単位数量当たり費用不変、ということになる、というわけである。

(30) なお、シロス・ラビーニは、『国富論』第1篇第11章第2節「ときには地代を生じ、

61. P. シロス・ラビーニ (1976年)

ときにはそれを生じない土地生産物について」の第21パラグラフ〔WN, pp. 167-168. 大河内訳〈I〉, 280ページ〕, 同じ第1篇第11章中の「過去4世紀間における銀の価値の変動に関する余論」の第38パラグラフ〔WN, p. 190. 大河内訳〈I〉, 314-315ページ〕, 第4篇第1章の第12パラグラフ〔WN, p. 404. 大河内訳〈II〉, 88-89ページ〕を見るよう指示している。Sylos-Labini [1976], p. 209n. 8.

(31) つまり、穀物の輸送費は金や銀の輸送費よりもかなり高いといったように相対的に穀物輸送費は高いということから、穀物の市場ということに関しては異なる国々はある程度まで孤立させられることとなる、それゆえまた、それぞれの国における穀物生産は遠隔地としての外国の穀物生産ということから影響を受ける度合いは相対的に低く、穀物生産に関しては一国のなかでの事情ということが相対的により大きな重要性をもつこととなり、そして一国においては「発展段階」の経時的な進行につれて一方で穀物の単位数量当たり生産にかかわる労働の量  $H$  を減少させる力が作用するとともに他方でそれを増加させる力も作用することによって、あらゆる「発展段階」においてそれら二つの力が相殺し合い、すべての「発展段階」をつうじて穀物の単位数量当たり生産にかかわる労働の量  $H$  はほぼ一定ということになる、というわけであろう。

(32) Sylos-Labini [1976], pp. 209-210. なお、シロス・ラビーニはまた、リカードウはスミスの穀物標準について非常に批判的であるのであるが、リカードウはどこにも、以上でみた二つの対照的な力ということに関する議論あるいはまた相互に比較された輸送費といったことに関する議論について論じてはいない、としている。Sylos-Labini [1976], p. 210.

(33) なお、シロス・ラビーニの見解では、スミスがそのように考えたことそれ自体は正しいことであった、とされている。Sylos-Labini [1976], p. 210.

(34) Sylos-Labini [1976], p. 210.

(35) シロス・ラビーニによれば、『国富論』第1篇第11章に含まれる「過去4世紀間における銀の価値の変動に関する余論」のなかでスミスは、彼の時代に先立つ五つの世紀における穀物の価格を考察し、そして、三つの期を区別したのであるが、それらのうちの第2期(1560年-1640年〔スミスの原典では1570年ごろから1640年ごろ〕)はいわゆる「価格革命(Price Revolution)」の支配する時期にあたる、とされるとともに、スミスは彼の諸仮定に基づきつつ、穀物価格の変動を主に、銀価値の変動に帰したのであり、そしてそのさい穀物価格が銀価値の尺度であるのであった、とされる。そしてまたシロス・ラビーニによれば、自分の知るかぎりでは、物価史の研究に重要な関連をもつスミスのうへの解釈は、経済史家たちからの異議申し立てには出合っていない、とされる。Sylos-Labini [1976], p. 210n. 9

(36) Sylos-Labini [1976], pp. 210-211. なお、シロス・ラビーニはつぎのようなスミスの文章を引用している。「ヨーロッパにおける金、銀の量の増大と製造業や農業の

発展とは、ほぼ同じ時期に起こったものではあるが、きわめて異なる原因から生じ、相互にほとんどなんの自然的関連のない二つの出来事なのである。前者は単なる偶然から生じたものであって、それにはなんの叡知も政策も関与しなかったし、そうした関与の可能性もなかった。後者は封建制度の崩壊から生じたものであり、産業にたいして必要な奨励だけを与える政府、すなわち産業にその労働の果実を享受させるかなりの保証を与える政府が確立したことから生じたものなのである。いまでも封建制度が依然として行われているポーランドは、今日もアメリカの発見以前と同じくらいみじめな国である。……スペインとポルトガルは鉱山をもっている国ではあるが、多分ポーランドに次いでヨーロッパで最もみじめな二つの国である。……スペインとポルトガルでは封建制度は廃止されたが、それは、もっと良い制度によってひきつがれたわけではなかったのである。」(WN, bk. 1, chap. 11, 'Conclusion of the Digression concerning the Variations in the Value of Silver,' pp. 238-239. 大河内訳〈I〉, 第1篇第11章, 「銀の価値の変動に関する余論の結び」, 386-387ページ。) Sylos-Labini [1976], p. 211.

なお、シロス-ラビーニによればまた、うえのようなスミスの所見は、価格革命が経済成長を強く刺激したといった我々の時代のいくらかの経済専門家や経済史家たちによって主張される見解に対する厳しい批判を含意している、とされる。Sylos-Labini [1976], p. 211n. 10.

- (37) なお、シロス-ラビーニによれば、リカードは土地からの収穫逓減ということを強調したのであるがそのこと自体はそれはそれで、彼の時代の事情と、すなわち、穀物価格が非常に高水準で変動し、そして、多分ナポレオン戦争によって引き起こされた輸送のはるかに高い費用と危険といったことから、彼が心に描いた諸帰結を伴いつつイングランドで穀物耕作のかかなりの拡大がなされた、といった彼の時代の事情と、なんらかの道すじで結びつきをもってもいた、とされる。Sylos-Labini [1976], p. 211.

そしてシロス-ラビーニはまた、スミスによれば1700年-1770年の期間では小麦1クォーターの平均価格は40~50シリングの水準のあたりを変動し、また、トゥック(T. Tooke)とニューマーチ(W. Newmarch, なおシロス-ラビーニの原文ではNewmarkとなっているが、それはNewmarchとすべきところであろう)によれば(T[homas] Tooke and W[illiam] Newmarch, [A] *History of Prices* (6 vols., 1838-1857), [reproduced], [with an Introduction by] T. E. Gregory (London: P. S. King & Son, 1928)によれば) 1770年から1790年にかけては平均価格は非常に大きくは変動しはしなかったが、1790年から1820年にかけては平均価格ははるかに高水準へと上昇したのであり、まず、1クォーター当たり60~70シリングあたりを行ったりきたりし、そしてその後、100シリングを超える最高値を記録しつつ80~90シリングあたりを行ったりきたりし、また、それにつづく30年もしくは40年では、小

61. P. シロス-ラビーニ (1976年)

麦の平均価格はもとの水準へと低下し、上昇傾向も下降傾向も示すことなしに55シリングあたりを行ったりきたりした、としている。Sylos-Labini [1976], pp. 211-212n. 11.

なお、シロス-ラビーニによればさらにまた、経済史家たちが比較的非常に古い時期の経済を研究するさいには、現代でもなお彼らは、穀物標準を使用している、とされる。しかしまた同時に、前世紀の後半から研究を始めるときには労働の価格に関するデータは、スミスの時代以前およびスミスの時代にそうであったよりもより完全なもの、また、頼りなさのより少ないものであった、ともされる。Sylos-Labini [1976], p. 212.

(38) Sylos-Labini [1976], pp. 211-212.

(39) なお、本章の冒頭でもみられたようにシロス-ラビーニによれば、これにたいし、「リカードウが関心をもっていた価値の問題は」、スラッフアの指摘しているように、「生産物の分割の諸変化の影響を受けないような価値の尺度を、どのようにして発見するか、ということであった」とされたわけであるが、そのシロス-ラビーニによればまた、リカードウはその問題を取り扱うさい、体化労働 (labour embodied) から出発したのであるがそのあとで「大多数の商品の生産に使用される平均量にもっとも近い割合の兩種資本〔固定資本と流動資本〕を用いて生産される」抽象的貨幣 (abstract money) を一尺度として導入することによって (Ricardo, *Principles* [ed. Sraffa], chap. 1, sec. 6, par. 3. 堀訳『原理』, 第1章第6節第3パラグラフ, 引用文中の〔 〕内は中川) みずからの立場を修正した、とされる。また、シロス-ラビーニによればさらに、そのような道すじに沿っての最終段階はスラッフアの標準商品 (standard commodity) であって、それは実際、厳密に、それ自体の生産手段の観点からみて「生産物の分割の諸変化の影響を受けない」もの、なのである、とされる。Sylos-Labini [1976], p. 212.

(40) 本章前出 (II-1) の②以下を見よ。

(41) なお、シロス-ラビーニによれば、スミスの場合、いま本文でみられたようなことから、事実上、資本蓄積の最善の標準は、労働を支配するという商品の属性として捉えられたものとしての「価値」ということになる、とみられる。Sylos-Labini [1976], pp. 212-213.

(42) Sylos-Labini [1976], pp. 212-213. なお、シロス-ラビーニによれば、価値と富との違いといったことは古典派経済理論においてある重要な役割を演じたのであるがその違いは、現代経済理論においてはぼんやりしたものになってきたのであって、現代経済理論は、「生産の条件」および時間の推移における「生産の条件の変化」といったことへの注意を犠牲にして効用 (使用価値) に、はるかに大きな重要性を置いている、とされる。そしてまたシロス-ラビーニによれば、J. B. セー (J. B. Say) が、このような理論的展開の先触れとなった人物と正当にみなされうる、と

される。Sylos-Labini [1976], p. 213n. 13.

- (43) なお、シロス・ラビーニはいま本文でみられたようなことに関連してつぎのような指摘をなしている。すなわち、もしそうであるならば支配労働 (labour commanded) という考えについての J. A. シュムペーター (J. A. Schumpeter) の批判は十分な根拠をもつものではないということになる。シュムペーターは、スミスは「彼の時代にすでに発明されていた指数方法を知らなかった」ために、支配労働という標準を採択したのだ、と考えたのである〔本書の「24」で我々が取り扱った Schumpeter [1954] の、p. 188 (前掲邦訳、第 1 分冊、392 ページ) を参照せよ〕。また、たしかに物価デフレーターといったものは必然的に、指数というものを暗に意味するのではあるが、普通労働の賃金率が単位として用いられるとすれば賃金デフレーターそのものは指数ということを暗に意味するわけではないのである。

Sylos-Labini [1976], p. 213n. 14.

- (44) Sylos-Labini [1976], p. 213.

- (45) つまり、

$$\frac{(\text{貨幣タームでの「年々の生産物」} Y) / (\text{物価水準 } P_y)}{(\text{総人口})} =$$

$$\frac{(\text{全体としての生産性 } \pi_y) \times (\text{生産的労働者の雇用量 } E)}{(\text{総人口})} =$$

$$(\text{全体としての生産性}) \times \frac{(\text{生産的労働者の雇用量})}{(\text{総人口})},$$

つまり、 $Y_c \equiv \pi_y E_s$  というわけである。

- (46) つまり、 $(Y/P_y)(P_y/W_y) = \pi_y E(P_y/W_y)$ 、したがって、 $Y/W_y = \pi_y E P_y / W_y$ 、ということになる、というわけである。

- (47) したがって、全体としての生産性  $\pi_y$  をある期 (ある年度) における生産的労働者 1 人当たり産出高とすれば、一つの期 (一つの年度) においては、

$$\text{産出物価格} = (1 + \text{利潤率}) \times \left( \frac{\text{生産的労働者 1 人当たり賃金}}{\text{生産的労働者 1 人当たり産出高}} \right)$$

$$= (1 + \text{利潤率}) \times (\text{産出物 1 単位当たり賃金費用})$$

ということになり、また、

$$\frac{(\text{産出物価格})}{(\text{産出物 1 単位当たり賃金費用})} = (1 + \text{利潤率})$$

ということになるとともに、

$$(\text{産出物価格}) \times (\text{生産的労働者 1 人当たり産出高}) =$$

$$(1 + \text{利潤率}) \times (\text{生産的労働者 1 人当たり賃金})$$

ということになる。

- (48) すなわち、物価水準  $P_y$  は、

61. P. シロス-ラビーニ (1976年)

$$(1 + \text{利潤率}) \times \frac{(\text{生産的労働者1人当たり賃金})}{(\text{生産的労働者1人当たり産出高})}, \text{つまり}, \alpha \cdot \frac{W_y}{\pi_y},$$

に等しい, とすれば, (a)式は  $Y/P_y = \pi_y E$  であるから,  $\frac{Y}{\alpha \cdot \frac{W_y}{\pi_y}} = \pi_y E$ , したがって,

$$\frac{Y}{W_y} = \frac{\alpha}{\pi_y} \cdot \pi_y \cdot E, \text{つまり}, \frac{Y}{W_y} = \alpha E, \text{ということになる, というわけである.}$$

- (49) ここでは,  $\alpha = 1 + r$  で  $Y = \alpha W_y E$ , したがって,  $Y = W_y E + r W_y E$  つまり  $Y = (1 + r) W_y E$  であるから, 利潤 ( $r W_y E$ ) と賃金 ( $W_y E$ ) との間の所得分配が一定と仮定することは,  $1 + r$  が一定,  $\alpha$  が一定, つまり, 賃金 ( $W_y E$ ) にたいする「年々の生産物」の割合 ( $\frac{Y}{W_y E}$ ) が一定と仮定することを意味することとなる。

- (50) つまり, 需要されそして「年々の生産物」の生産に直接的に雇用された生産的労働者の雇用量  $E$  の変動。

- (51) Sylos-Labini [1976], pp. 213-214.

- (52) つまり,

$$\text{産出物価格} = (1 + \text{利潤率}) \times$$

$$(\text{産出物1単位当たり賃金費用} + \text{産出物1単位当たり原材料費用})$$

ということになる。

- (53) つまり, うえと同様に  $P_y$  は物価水準, そして  $M_y$  を全体としての経済での産出物1単位当たり原材料の貨幣価値とすれば,  $P_y = \alpha \left( \frac{W_y}{\pi_y} + M_y \right)$ , となり, そこでは  $W_y = \frac{\pi_y}{\alpha} (P_y - \alpha M_y)$ , となる。したがって,  $\frac{P_y}{W_y}$  は  $\frac{P_y}{\frac{\pi_y}{\alpha} (P_y - \alpha M_y)}$  に等しい, つまり,  $\frac{\alpha}{\pi_y} \cdot$

$$\frac{P_y}{P_y - \alpha M_y} \text{に等しい, ということになる, というわけである.}$$

- (54) つまり, (a')式は  $\frac{Y}{W_y} = \pi_y \cdot E \cdot \frac{P_y}{W_y}$  であるのであるが,  $\frac{P_y}{W_y} = \frac{\alpha}{\pi_y} \cdot \frac{P_y}{P_y - \alpha M_y}$  であるため,  $\frac{Y}{W_y}$  は  $E \cdot \alpha \cdot \frac{P_y}{P_y - \alpha M_y}$  に等しい, つまり,  $E \cdot \alpha \cdot \frac{1}{1 - \alpha \frac{M_y}{P_y}}$  に等しい, ということになる, というわけである。

- (55) なお, ここでは事実上全体としての経済での産出物1単位当たり原材料の投入量が一定と仮定されているのであるから, 原材料価格と完成品価格 (物価水準,  $P_y$ ) との間の比率が安定的であれば, 完成品価格 (物価水準,  $P_y$ ) にたいする全体としての経済での産出物1単位当たり原材料の貨幣価値 ( $M_y$ ) の割合  $M_y/P_y$  は安定的となるのである。

- (56) Sylos-Labini [1976], p. 214.

- (57) つまり, 輸入原材料を考慮に入れないケースでの価格方程式(a'')は,  $P = \alpha \cdot \frac{W_y}{\pi_y}$ ,



であった。したがって、うえにおけるのと同様に  $P_y$  を物価水準とすれば、 $P_y = \alpha \cdot \frac{W_y}{\pi_y}$  となり、それを変形すれば、 $\frac{W_x}{P_y} = \frac{\pi_y}{\alpha}$  が得られる、というわけである。

それゆえここではまた、分配シェア ( $\alpha$ ) が所与であれば、実質賃金の変動は、全体としての生産性 ( $\pi_y$ 、生産的労働者 1 人当たり産出高) の変動に対応することとなる。さらに、 $\alpha$  が所与で  $\pi_y$  も一定であるならば、 $P_y$  の動きは  $W_y$  の動きと一致しうる (実質賃金一定) ということとなり、したがってそこでは、物価の変動と賃金の変動とは同歩調で進行し、それゆえ、賃金デフレーターを用いて測定された「年々の生産物」( $\frac{Y}{W_y}$ ) の動きは、物価デフレーターを用いて測定された「年々の生産物」( $\frac{Y}{P_y}$ ) の動きに対応しうる、ということとなる。

- (58) つまり、輸入原材料を考慮に入れるケースでの価格方程式 (c) は、 $P = \alpha(W_y/\pi_y + M)$  であった。したがって、うえと同様に  $P_y$  を物価水準、 $M_y$  を全体としての経済での産出物 1 単位当たり原材料の貨幣価値とすれば、 $P_y = \alpha(W_y/\pi_y + M_y)$  となり、それを変形することによって、 $\frac{W_x}{P_y} = \pi_y \left( \frac{1}{\alpha} - \frac{M_y}{P_y} \right)$  が得られる、というわけである。

(59) Sylos-Labini [1976], p. 215.

- (60) シロス-ラビーニは、ケインズがそのような考えを示している箇所として、John Maynard Keynes, *The General Theory of Employment, Interest and Money* (London: Macmillan, 1936)——以下、Keynes, *General Theory* と略記する——, chap. 4 [塩野谷祐一訳『雇用・利子および貨幣の一般理論』(『ケインズ全集』第 7 巻, 東洋経済新報社, 1983 年) [1973 年の原書『ケインズ全集』第 7 巻の邦訳], 第 4 章] をあげる。そしてまたそのシロス-ラビーニによれば、ケインズとスミスとの間には、賃金単位ということ、また、所得分配への非常に限られた関心および労働需要への大きな関心ということ、さらに、賃金と物価との間の関係の問題ということ、といった幾つかの共通点が存在する、とされる、しかしまた同時に、ケインズ理論とスミス理論との間の類似点は非常に興味のあるまたある程度重要なものではあるが彼らの間の類似といったものは非常に程度にまで及ぶものではなかったのであり、いま一つだけ彼らの間の重要な相違をあげるとすれば、たとえば、ケインズは、スミスとちがって、技術進歩の経済的諸帰結といったことには関心をもってはいなかったのである、ともされる。Sylos-Labini [1976], p. 215n. 15.

- (61) シロス-ラビーニのみるところによれば、スミスの議論での賃金単位は事実上、一方で、たとえおおよそにはあれ、商品生産における技術変化とその結果としての労働の「生産力」の向上を、当該商品の労働支配力の低下として指し示す、という役割を演じるのであり、さらにまたスミスの議論でのその賃金単位は「年々の生

産物」およびその動きを測るものでもあったのであるがそのさいその賃金単位は、技術を所与として取り扱うことなしに、これまたおおよそにはあるが、事実上、「年々の生産物」を測りそしてそれをつうじて「年々の生産物」の生産に直接的に雇用された生産的労働者の雇用量の動き（生産的労働への需要の動き）を指し示す、といった役割を演じている、ということになるのである。

- 62) たとえばうえでみられた輸入原材料を考慮に入れないケースについてのシロス・ラビーニの議論を利用してここでのシロス・ラビーニの所説を捉えたとすれば、それはつぎのようなことを言っているものとして示すこともできるであろう。すなわち、輸入原材料を考慮に入れない場合には、(b)式  $Y/W_y = \alpha E$  の示すところによれば、(1+利潤率)という内容をもつ分配関係を示す  $\alpha$  が一定のときには生産的労働への需要・生産に直接的に雇用された生産的労働者の雇用量 ( $E$ ) の動きは賃金単位で測られた「年々の生産物」( $Y/W_y$ ) の動きに符合することができ、また、(f)式  $W_y/P_y = \pi_y/\alpha$  の示すところによれば、もし  $\alpha$  にたいする全体としての生産性 ( $\pi_y$ ) の割合が一定であれば、物価水準でデフレートされた賃金・実質賃金 ( $W_y/P_y$ ) も一定、ということとなり、そこでは、賃金デフレーターで測られた「年々の生産物」( $Y/W_y$ ) の動きは、物価デフレーターで測られた「年々の生産物」( $Y/P_y$ ) の動きに符合しうる、ということになるのであった。そしてまた、恒等式(a)  $Y/P_y = \pi_y E$  の示すところによれば、 $\pi_y$  が一定であれば物価デフレーターで測られた「年々の生産物」( $Y/P_y$ ) の動きも  $E$  の動きに符合しうるのである。つまり、 $\alpha$  とともに  $\pi_y$  も一定であるならば、賃金デフレーターで測られた「年々の生産物」( $Y/W_y$ ) の動きと物価デフレーターで測られた「年々の生産物」( $Y/P_y$ ) の動きとが符合しうるとともにそれらの動きはまた「年々の生産物」の生産に直接的に雇用された生産的労働者の雇用量・生産的労働への需要 ( $E$ ) の動きに符合しうるのである。したがって、労働需要・雇用量を規制する諸力の分析ということに大きな関心をもつとともに技術を所与（したがって  $\pi_y$  所与）として取り扱うケインズの場合には、 $\alpha$  が一定であれば、 $Y/W_y$  の動きと  $Y/P_y$  の動きとは符合しうるとともにそれらの動きはまた  $E$  の動きに符合しうるのである。それゆえそこでは、賃金単位のもつより少ない不確かさといったことはさておくとすれば、ケインズにおける賃金単位は物価指数によって代替されうるといった見解は、それなりの根拠をもちうるのである。それにたいし、スミスの場合には、一方でケインズにおけるのと同じように労働需要・雇用量を規制する諸力の分析ということに大きな関心がもたれていたのではあるが、他方でまた、技術変化とその結果としての労働の「生産力」の向上ということが近代の諸経済機構の本質的特質として捉えられてもいたのであった。したがって、 $\alpha$  が一定であることによって  $Y/W_y$  の動きは  $E$  の動きに符合しうるということになるということにはかわりはないとしても、ここでは  $\pi_y$  一定という条件は満たされがたいものとなるため、 $Y/W_y$  の動きと  $Y/P_y$  の動きとが符合しうるとともにそれらの動き

はともに  $E$  の動きに符合しうるといったことは、実現されがたいこととなる。それゆえまたそこでは、賃金単位は物価指数によって代替されうるといった見解は十分な根拠をもちえない、ということになるのである。技術変化とその結果としての労働の「生産力」の向上ということを近代の諸経済機構の本質的特質として捉えるとともに労働需要・雇用量を規制する諸力の分析ということに大きな関心をもつこのスミスの場合には事実上、 $\pi_y$  を一定と仮定することができないがゆえに、労働需要・雇用量の動き ( $E$  の動き) は、 $Y/P_y$  の動きによってか  $Y/W_y$  の動きによってかといえば  $Y/P_y$  の動きによってではなく  $Y/W_y$  の動きによって捉えられなければならない、ということになるはずであるのである。しかしまたそこでは、 $\pi_y$  は変化しうるが  $\alpha$  は一定と仮定されるため  $\pi_y/\alpha$  は一定であることが困難となるゆえ、 $Y/W_y$  の動きそのものは、「年々の生産物」およびその動きの確定それ自体のためにはヨリ優れたものである物価デフレーターで測られた「年々の生産物」( $Y/P_y$ ) の動きとは符合しがたい、ということになるのである。

- (63) すなわち、たとえばうへの恒等式(a)  $Y/P_y = \pi_y E$  の示すところによれば、物価デフレーターで測られた「年々の生産物」の動きが「年々の生産物」の生産に直接的に雇用された生産的労働者の雇用量の動き（生産的労働への需要の動き）を安定的に指し示しうるのは、 $\pi_y$ （全体としての生産性）が経時的に安定的であるときにのみであって、技術変化が存在して全体としての生産性（ $\pi_y$ ）に変化があるときには、それは不可能ということになるのである。

なお、このように、シロス・ラビーニは事実上、「年々の生産物」を測ることによって労働需要・雇用量の動きを安定的に指し示しうる可能性という点では（少なくとも技術変化ということを考慮に入れるときには、）賃金デフレーターが物価デフレーターよりも優れている、とみているわけであるが、「年々の生産物」およびその経時的な動きそれ自体の測定ということについては、すでに触れられてきたように、賃金デフレーターよりも物価デフレーターのほうが優れている、とみているのである。しかしまた同時に、シロス・ラビーニは事実上、たしかにこの後者の脈絡では物価デフレーターは賃金デフレーターよりも優れたものであるのではあるがこの後者の脈絡での物価デフレーターといえどもそれはおよそのものたらざるをえない、とみてもいたのであり、そしてシロス・ラビーニは事実上、物価デフレーターがこの後者の脈絡においてそのようにおよそのものとならざるをえなくなる事情の例としてたとえば、もし技術変化ということを考慮に入れるとするとその場合には新製品 (new goods) ということに関連して問題が生起してもくるのであって、その新製品というものは、とくに、長期では、どんな物価デフレーターをも非常に曖昧なものにしてしまう、といった事情をあげている、と解することも可能であろう。Sylos-Labini [1976], pp. 215, 216 を見よ。

- (64) すなわち、賃金単位で測られた「年々の生産物」が「年々の生産物」の生産に直

# 61. P. シロス-ラビーニ（1976年）

接的に雇用された生産的労働者の雇用量の動き（生産的労働への需要の動き）を正確に指し示しうするためには、たとえば、輸入原材料を考慮に入れないケースについてのうへの(b)式  $Y/W_y = \alpha E$  の示すところによれば、技術変化ということを考慮に入れるときに充足困難な  $\pi_y$  一定（全体としての生産性が一定）という条件を満たす必要はないとしても、それでも、 $\alpha$  一定（つまり、一経済における賃金所得  $W_y E$  にたいする「年々の生産物」の割合、 $\frac{Y}{W_y E}$ ，が一定、そしてシロス-ラビーニの示す議論の枠組みのなかではそのためには利潤率  $r$  が一定でなければならない）

という条件が満たされなければならないのであった。〔なお、本章の（Ⅱ－1）でもみられたように、シロス-ラビーニの議論の枠組みからすれば、技術変化ということ考慮に入れるとき、賃金単位で測られた商品「価値」の動きが当該商品の生産における技術変化を正確に反映しうするための条件は、 $\delta$  一定（つまり、当該商品の価格のうち賃金が占める割合、 $\frac{WH}{P}$ ，が一定、ただし、ここでは  $\delta$  一定のためには単位時間当たり——1時間当たり——賃金率  $W$  は一定でなくてもよい）ということであったのであり、その意味で、この脈絡での賃金デフレーターもおおよそのものたらざるをえない、ということになるのであるが、同時にまた、シロス-ラビーニの目からすれば、すなわち、 $\delta$  を安定的と考えることそれ自体はそれほど無理なことではなかったともみるとともに、輸入原材料を考慮に入れないケースにおいて賃金単位で測られた「年々の生産物」の動きが労働需要・雇用量の動きを指し示しうするためのうへのような条件さらに輸入原材料を考慮に入れたケースで賃金単位がそのような役割を果たしうするための付加的条件といったことを論じるシロス-ラビーニの目からすれば、賃金単位は、労働需要の変動ということを取り扱うさいというよりもむしろ、技術進歩の帰結といったことを取り扱うさいに、相対的にヨリ良好に機能しうる、ということになっているようである。Sylos-Labini [1976], p. 216 を見よ。〕

なお、たとえば本章の冒頭でも触れられたようにシロス-ラビーニは「リカードウが関心をもった価値の問題は、生産物の分割の諸変化の影響を受けないような価値の尺度を、どのようにして発見するか、ということであった」とみたわけであるが、そのシロス-ラビーニはまた、事実上、リカードウの問題を、技術所与のもとでの所得分配の諸変化から生じる諸相対価格の諸変化の測定の問題として捉えつつ、つぎのような見方を示しているといえる。すなわち、我々が「年々の生産物」あるいは「富」の変動を考察しようとするときには我々はデフレーターとして物価指数を用いてもよいかもしれないし、また、〔賃金単位は、「年々の生産物」を測ることによって「年々の生産物」の生産に直接的に雇用された生産的労働者の雇用量の動き（生産的労働への需要の動き）を指し示すことも、またそれよりも相対的に

より良好に、商品生産における技術変化とその結果としての労働の「生産力」の向上を、当該商品の労働支配力の低下として指し示すことも、できるのであるから、]我々が労働需要の変動を、あるいは、それよりもより適切には、技術進歩の帰結を、考察しようとするときには、我々は賃金単位（支配される労働）を用いてもよいかもしれない。（ただし、うえのような道すじでのそれら二つの標準はともに、必然的に、おおよそのものである。）しかし、技術所与のもとでの所得分配の諸変化から生じる諸相対価格の諸変化を測定するのに使用されるべき標準は、まさしく「完全な精密さ——それらの量の実際の値について、我々の知識が完全あるいは正確であるかどうかは別として、我々の因果分析が要求するような完全な精密さ」といったような精密さが求められるゆえに、我々がリカードの問題を考察しようとするときには、我々は、うえの二つの標準とは別の、厳密な標準を用いなければならないのである〔なお、シロス・ラビーニは事実上、そのような厳密な標準となるものをスラッフアの標準商品、とみているのであろう。本章の前出注39を見よ〕。Sylos-Labini [1976], p. 216.

- (65) Sylos-Labini [1976], pp. 215-216. なお、シロス・ラビーニはまた、「支配される労働」は、一つの標準としては、経済発展の理論のなかでの使用が推奨されるべき一分析用具であるだけでなくそれはまた、いくつかの実践的用途を持ってもいる、としつつ、つぎのような内容をもった指摘をなしてもいる。すなわち、実際のところ我々が外国を訪問するとき、自国と訪問先の国とでの財貨の価格を比較するのに為替レートといったものには頼ることはできない。「支配される労働」という物差しを使用することによって有意義な比較をなすことができるのである。そしてまた我々は実際、その物差しを使用している——たとえその事実に十分気付いていなくとも——のであり、さらに、我々が発展段階の全く異なった国あるいは根本的に異なった制度をもつ国を訪問するときには、このことは、より差し迫って必要なことにさえなるのである。Sylos-Labini [1976], p. 216.

## P. シロス・ラビーニ（1976年）についての覚書

1976年のシロス・ラビーニの論文では、スミスの議論での「自然価格」や賃金、利潤、地代の「自然率」といった概念にみられる「自然的な(natural)」という言葉は事実上「競争的な」という言葉と同義的なものであったと捉えられるのであるが、さらにまた、スミスの議論には事実上「短期」と「長期」さらにその長期よりも長い期間としての「発展段階」といった期間に関する把握が存在するとされるのであった。つまり、一発展段階としての一つの期間は「長期」という期間よりも長く、さらに長期という一つの期

間そのものは、「短期」という期間よりも長い、というわけである。そしてまた、スミスの議論における期間ということに関してうえのような見方をとるシロス・ラビーニによれば事実上、スミスの議論では、技術変化だけでなく賃金、利潤、地代の「自然率」にも変化が生じうるのは一つの発展段階からそれにつづく別の発展段階に移行するさいにおいてであり、それにたいし、長期のある期間からそれにつづく長期の別の一期間のあいだでは技術変化は生じうるが賃金、利潤、地代の「自然率」そのものは一定、ということになっており、さらに、スミスのその議論では「賃金」、「利潤」、「地代」の各々のその自然率、また、ある発展段階からそれにつづく別の発展段階に移行するさいに生じうるそれらの自然率各々の変化の率そのものは、究極的には、厳密に経済的な諸力というよりもむしろ発展段階における社会の一般的状态、またその社会の一般的状态の変化、というものに依存しており、それらの自然率またその変化の率そのものは究極的には、厳密に経済的な諸力によって決定されるものというよりもむしろ、社会の一般的状态またその変化というものによって与件として独立的に与えられるもの、ということになっている、と捉えられるのであった。

そしてそのシロス・ラビーニの所論の示すところによれば、スミスの議論においては事実上、商品の市場価格がその商品の需給に依存する短期の一期間とそれにつづく短期の一期間とのあいだでの市場価格の変動は、需給関係の変化の結果として生じるのであり、それにたいし、独占のもとでは市場価格が需給に依存するが競争のもとでは市場価格そのものが自然率での賃金、利潤、地代各々の総額の合計としての生産費に依存するところの「自然価格」に等しくなるといった長期、さらに発展段階、といった期間については、つぎのようなことになるのであった。すなわち、長期の一期間とそれにつづく長期の一期間とのあいだでの「自然価格」（競争のもとでは「市場価格」はそれに一致）の変動は、技術変化（による生産費の変化）の結果として生じ、他方、一発展段階とそれにつづく一発展段階とのあいだでの「自然価格」（競争のもとでは「市場価格」はそれに一致）の変動は、技術変化（による生産費の変化）さらに賃金、利潤、地代の自然率の変化（による生産費の変化）、あるいはさらにそれらの変化の組み合わせ（による生産費の変化）の結果として、生じる、というわけである。

そしてまた、シロス・ラビーニの所論の示すところによれば、スミスの議

論においては事実上、「賃金」、「利潤」、「地代」の自然率およびその変化の率そのものは、うえのように、究極的には厳密に経済的な諸力によって決定されるというよりもむしろ社会の一般的状態またその変化ということによって与件として独立的に与えられるものということになっていたのにたいし、「技術変化」は事実上経済的な力に依存するものということになっていたのであり、そして、技術変化とそれによる生産費の変化、「自然価格」としての「市場価格」の変化といったことそのものは、つぎのような形で捉えられている、ということになるのであった。すなわち、需要（スミスのいう「有効需要」）の増加＝市場の拡大＝生産されるべき数量の増大→分業の進歩＝より効率的な生産方法の導入→生産物1単位当たり生産費の低下→価格の低下、というわけである。したがってまたそこでは、需要は、生産されるべき数量を決定し、そして、生産方法の変化を決定することによって間接的に価格に影響を及ぼす、ということになっていたのである。しかしまた同時にそのシロス・ラビーニの所論の示すところによれば、スミスの議論では事実上、うえてみられたようなものとしての収穫増そのものはどこにも行きわたるものというわけではなく、それは製造業や一定の農業生産に行きわたるが他のいくつかのタイプの生産においてはそれとは逆に、収穫減が行きわたり、生産の増加が生産物1単位当たり生産費の上昇→価格の上昇という条件のもとで生じる（なお、ここでも、需要は、生産高に直接的に影響を及ぼし、そして、生産方法における変化を決定することによって間接的にのみ、価格に影響を及ぼす）、ということにもなっていたのであった。

このようにシロス・ラビーニのみるところによれば、スミスの議論では事実上、競争のもとでは商品の「市場価格」は商品の「自然価格」に等しくなる、つまり、競争のもとでは「自然価格」が「市場価格」となるのであるが、その「自然価格」そのものは生産費によって決まるのであり、そして、その生産費の大きさおよびその変化を左右するのが、一方での、厳密に経済的な力というよりも社会の一般的状態およびその変化というものによって与件として独立的に与えられる要素価格とその変化、そして他方での、当該商品の生産における技術および、当該商品の生産高に直接的に影響を及ぼす当該商品への需要という経済的な力に依存するところの生産方法の変化つまり技術変化、ということになっていたのであった。そしてまた、そのような経済的な力に依存するものとしてのその技術変化というものは、長期の諸期間のあ

いだにおいても諸発展段階のあいだにおいても生産費の大きさに影響を与えるものであったのであるが、他面で、その技術変化そのものは諸生産部門のあいだで様な形で生じるというわけではなかった、したがってまたその違いに応じて、競争のもとでの諸商品の「市場価格」である諸商品の「自然価格」も多様な形で変化しうる、ということにもなっていたのであった。

さて、事実上シロス-ラビーニによってうえのようなものとして捉えられたスミスの議論からすれば、競争のもとでは、「市場価格」の大きさおよびその変化はうえでみられたような要因によって決まり、ある時点においては、各商品は、その時点でのそれぞれの市場価格をもち、そして各商品は、各々の市場価格に従って相互に交換され、そこには、それぞれの市場価格に対応した各商品の相対価格が存在し、また、それにつづく一時点においても、うえでみられた要因の作用を反映した形で各商品はこの時点でのそれぞれの市場価格をもち、そしてそれらの市場価格に従って諸商品が交換され、各商品はそれぞれの市場価格に対応した相対価格をもつ、ということになるわけであるが、そのシロス-ラビーニはまた、事実上、スミスの議論における商品「価値」を当該商品の「相対価格」として捉えつつ、スミスの議論における商品「価値」の尺度ということに関する議論を展開していたのであった。そしてそのさいシロス-ラビーニは事実上、価値についての議論においてスミスは主に、異なった諸時点および諸場所における異なった各商品の価値にたいしてそれら各商品各々の生産における技術変化がもたらす帰結を分析するということに、関心を抱いていたのであるが、スミスは、各商品の価値にたいして当該商品の生産における技術進歩がもたらす帰結の研究という彼の意図から、各商品の「価値」の異時点間の比較に使用される標準を必要としたのであった、とみるのであった。すなわち、事実上シロス-ラビーニの議論の示すところからすれば、スミスはつぎのような機能を果たす標準を必要とした、ということになるのであった。つまり、その標準はもちろん、たとえば時点1での各商品の相対価格（価値）の大きさを表示し、その時点1でのそれらの諸商品の諸相対価格の大きさの比較を可能にし、また時点2での各商品の相対価格（価値）の大きさを表示し、その時点2でのそれらの諸商品の諸相対価格の大きさの比較を可能にするのであるが、その標準そのものはさらに、その時点1と時点2との間で生産に「技術変化」（これは、長期の一期間とそれにつづく長期の一期間とのあいだにおいても一発展段階とそれ



につづく一発展段階とのあいだにおいても生じうる)があった商品については、その「技術変化」の存在およびその程度を反映した形で当該商品の相対価格(価値)の大きさを表示している、といった機能を果たすものであって、スミスはそのような機能を果たしうる標準を必要としたのである、ということになるのであった。

そして、スミスの議論における価値尺度の問題を事実上、うえのように「技術変化」、またその一つとしての「技術進歩」の存否およびその程度ということを反映した形で商品「価値」の大きさを表示するような価値の標準の問題として捉えるシロス・ラビーニによれば、商品価値の大きさを何のタームで示めせばその価値の動きが当該商品の生産における「技術進歩」の存在およびその程度を指し示しうることになるかといった問題にたいしてスミスは、貨幣として使用される貴金属の生産の条件は経時的に変化をこうむるということから適切な単位としては貨幣(貴金属貨幣)を退けたのち、単位として普通労働の賃金率を用いるという方法を採用した、つまり、単位として普通労働の賃金率を用いることによって当該商品の価値の大きさを当該商品によって「支配される労働」の量で示そうとした、とみられたのであった。すなわち、シロス・ラビーニによれば事実上、スミスの議論での商品生産における「技術進歩」は当該商品の生産における分業の増進による労働能率向上であり、そしてその「技術進歩」は当該商品1単位当たり「直接的あるいは間接的に体化された労働の時間数」(「体化された労働」の量)の減少としてあらわれることとなっているのであるが、スミスは、当該商品の生産におけるそのような「技術進歩」の存在およびその程度は普通労働の賃金率を単位として表現された当該商品の「価値」の動きに反映されうる、と考えたのである、とみられたのであった。

そしてまたそのシロス・ラビーニによれば、スミスはそのさい事実上商品価格のうち賃金が占める割合が経時的に安定的ということを仮定していた、とされるときにも、スミスの議論の枠組みからすれば、もし実際に商品価格のうち賃金が占めるその割合が経時的に一定であるならば、普通労働の賃金率を単位として用いることによって「支配労働」で示された商品「価値」の動きは、事実、当該商品1単位当たりの「体化労働」の動き(その意味での当該商品の生産の条件の変化)に対応することができ、したがってまた、当該商品の生産における「技術進歩」は、当該商品の労働支配力の低下、当該

商品の価値の低下として、反映されることができることとなる、とみられ、さらに、そこではまたうえのような意味で、その「支配労働」標準は事実上、いわゆる「投下労働」標準（「体化労働」標準）と同等物でありうるということになる、ともされるのであった。

また、スミスの議論における商品「価値」の標準ということに関してうえのような見方をとるシロス-ラビーニによれば、スミスはたしかに、一方で、「体化された労働」は「資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態において」のみ交換価値を規制するといったことを述べ、他方で幾度か、「支配される労働」と「体化された労働」という二つのものをあたかも同等物であるかのように論じてはいる、しかしその場合、スミスは事実上、前者では商品価格のうち賃金の占める割合が100%であるケースでの諸商品の間での交換価値の規制に関する問題（各々の時点における諸商品間の交換関係の規制といったことに関する問題）を取り扱っているのにたいし、後者では、同一商品の価値（なんらかのある一定の他商品——労働を含めて——の量のタームでその大きさが示された同一商品の価格）の異時点間比較に関する問題を取り扱っているのである、と解することができるのであり、それゆえ、うえのようなスミスの二つの論述は矛盾したものとされなければならないわけではないし、また、スミスは「支配される労働」と「体化された労働」という二つの標準の間でぐらついていたとされなければならないというわけでもない、ともされたのであった。

さらに、シロス-ラビーニによれば、スミスは商品価格のうち賃金の占める割合が経時的に安定的といった仮定を明示的な形でなしていたわけではなけれども事実上はなしていたのであり、そしてまたそのような仮定自体は、一国の発展の「前進的」状態において生じることに关するスミスの見解と両立するものである、とされ、さらにまた、そのような仮定それ自体は、実際にも、それほど無理なものであるというわけではなかった、ともされたのであった。

なお、シロス-ラビーニのみるところによれば、スミスの議論では事実上、商品価格のうち賃金の占める割合は、異なる諸商品の間では相違しはするがそれらの各々の同一商品については経時的に安定的であるとともに、他方で、技術変化は諸生産部門のあいだで一様な形で生じるというわけではなかった、ということになるのであるが、さらに、スミスの議論における、穀物生

産において穀物の単位数量当たり必要とされる労働量、穀物の単位数量当たり「体化労働」量（穀物の単位数量当たり「直接的あるいは間接的に体化された労働の時間数」）を、事実上「農業の主要な用具」である家畜を飼育するための労働をも含めたうえでの労働の量として捉えるシロス・ラビーニによればまた、スミスの議論では、諸商品のうち穀物の生産にあたっては、穀物の単位数量当たり必要とされる労働量、穀物の単位数量当たり「体化労働」量は経時的にほぼ一定、その意味で穀物はほぼ費用不変のもとで生産される、と考えられていたのであり、したがってまたたとえ明示的な形でなくとも事実上商品価格のうち賃金の占める割合は同一商品については経時的に安定的ということ仮定していたスミスの議論では、たとえ賃金率が変化するときさえ、穀物の単位数量当たり「支配労働」量の動きは穀物の単位数量当たり「体化労働」量の動きに対応するというだけでなくそれよりもむしろその「体化労働」量それ自体およびその「支配労働」量それ自体が経時的に安定的ということになる、と捉えられていたのであった。そしてまたシロス・ラビーニは事実上、スミスの議論ではこのようなことから、穀物標準は「支配される労働」という労働標準の代用物たりうるということとなっていた、ともみていたのであった。

すなわち、事実上同一商品についてはその商品価格のうち賃金の占める割合は経時的に安定的ということが仮定されているのであるから当該商品1単位当たり「体化労働」量の経時的な変動は当該商品1単位当たり「支配労働」量の経時的な変動と互に対応するのであるが ( $H = \delta \frac{P}{W}$  ——  $H$  は当該商品1単位当たり「体化労働」量、 $\delta$  は当該商品の価格のうち賃金が占める割合、 $P$  は当該商品の価格、 $W$  は単位時間当たり賃金率、 $P$  と  $W$  は、ある抽象的な紙幣のタームであるいはある所与の商品のタームで示されたもの——において、 $\delta$  が安定的)、穀物の場合には、穀物価格のうち賃金が占める割合が経時的に安定的ということに加えて、穀物の単位数量当たり「体化労働」量は経時的にほぼ一定（その意味で、穀物生産においてはほぼ費用不変、また、生産の条件はほぼ不変）ということが仮定されているのであるから、穀物の単位数量当たり「支配労働」量もほぼ一定、ということとなる ( $H = \delta \frac{P}{W}$  において、 $H$  がほぼ一定で、 $\delta$  も安定的)。したがってそこでは、なんらかの任意の一商品が支配しうる穀物量の異時点間での変化は、その一商品の単位数量当たり「支配労働」量のその異時点間での変化と対応関係をもち、したが

ってまたその一商品の単位数量当たり「体化労働」量のその異時点間での変化とも対応関係をもつことになるのである。そこでは、その一商品の価格を穀物価格で割ることによって得られるその一商品が支配しうる穀物量の異時点間の動きは、その一商品の価格を労働の価格で割ることによって得られるその一商品が支配しうる労働量の異時点間の動きと対応するとともに、それらの動きはともに、その一商品に体化された労働量の異時点間の動き（その意味で、その一商品の生産における単位数量当たり費用の動き、また、その一商品の生産の条件の動き）を反映することができるのである。労働の価格が多少とも正確にわかるということはほとんどありえないのにたいし穀物の価格は一般にヨリ良く知られているといった状況のもとにおいて穀物標準は、「支配労働」という労働標準の代用物たりうる、というわけである。ただし、シロス・ラビーニによればまた、スミス自身は、「支配労働」という労働標準の代用物としてのみ穀物標準を使用したのである、とみられたのであった。

なお、そのシロス・ラビーニはまた、スミスの議論においては銀あるいは金は相対的に短い諸期間についてのみ使用されうるが長いあるいは非常に長い諸期間については穀物が選好されるべきということになっている、ともみつつも、スミスの議論におけるうえのようなものとしての労働標準の代用物としての穀物標準ということに関連してさらに、スミスの議論に積極的な評価を与えつつ自らの論述を展開したのであった。そしてまた、そこにはたとえば、『国富論』第1篇第11章のなかでは穀物標準は、銀の相対的稀少あるいは豊富といったことに起因する諸価格の動きを、生産の条件の変化ということに起因する諸価格の動きから区別するために使用されており、そしてそこでは、[一国経済の]「改良の前進」は一定の諸商品の、労働もしくは穀物のタームでの価格を上昇させ、また他の諸商品の、労働もしくは穀物のタームでの価格を低下させる、ということになっており、それゆえまた、異なった種類の諸商品のうえのようなタームでの価格の動きは一国によって到達された発展段階についての一つの目安とみなされうる、ということになっているのであり、また、まさしく銀の相対的稀少あるいは豊富ということに起因する価格変化というものを単独に取り出すために穀物標準が使用されているその第11章中に含まれる「余論」の主要目的の一つは、ヨーロッパにおける金、銀の量の増大がなんらかの道すじで経済成長を促進したといった重商主

義的見解を根絶するというにであったのである、といった見方も示されていたのであった。

ところで、うえてみられたようにシロス・ラビーニによれば、スミスは、主に、異なった諸時点および諸場所における異なった各商品の価値にたいして当該商品の生産における技術変化がもたらす帰結を分析することに関心を抱き、そして、事実上商品価格中に占める賃金の割合が安定的ということを保定しつつ、技術変化、生産の条件の変化を反映した形での長い時間的間隔における商品価値の比較を可能にする標準を、「支配労働」という標準（またその代用物として穀物標準）に求めようとしたのであって、そこでは、技術進歩そのものは当該商品1単位当たり「体化された労働」量の減少としてあらわれ、そしてその「体化労働」量の減少という動きは、当該商品1単位当たり「支配労働」量の減少という動き、当該商品の価値の低下という動きに反映される、ということになっていた、と捉えられていたわけであったのであるが、そのシロス・ラビーニによればまた、スミスの議論では、資本蓄積＝生産的労働者数の増加→（分業の増進）→生産的労働者の能率向上・技術進歩〔商品価格中に占める賃金の割合が安定的という仮定のもとでの商品1単位当たり体化労働量の減少〕→「支配労働」タームでの当該商品の価値の低下、といった脈絡で、事実上、労働を支配するという商品の属性として捉えられたものとしての「価値」が資本蓄積の標準ということになっていた、とみられていたのであった。そしてさらにまた他方で、そのシロス・ラビーニによれば、スミスの議論では「支配労働」はまず、技術変化、生産の条件の変化を反映した形での商品価値の異時点間の比較を可能にする標準であったのではあるが、一経済の総産出としての「年々の生産物」それ自体の動きをあるいはまた1人当たり所得との関連での「年々の生産物」の動きを考えようとしたスミスは、この脈絡のなかでも「支配労働」という標準を用いようとした、とみられもしたのであった。

そしてそのさい、スミスは事実上商品価格のうち賃金の占める割合が安定的という仮定をなしておりまたその仮定自体は実際にそれほど無理な仮定というわけではなかったとみるシロス・ラビーニは、一方で、うえのような脈絡での商品価値の標準としての「支配労働」標準の有効性を認めつつも、「支配労働」という標準そのものはうえのような「年々の生産物」の動きの測定ということそれ自体のためには、スミス自身の論理からしてもそれほど適し

たものではありえないはずのものである、とみるのであった。そしてそこでのシロス・ラビーニの論理は事実上、概ねつぎのようなものであったと捉えることもできるであろう。すなわち、まず総産出増加のもとで技術不変の仮定をなす可能性といったものはスミスと相容れるところのないものである。そして、生産物価格中に占める賃金の割合が安定的と仮定されるところでは、技術進歩が存在して当該生産物1単位当たり「体化労働」量が減少する場合には当該生産物1単位当たり「支配労働」量そのものは減少することとなる、それゆえそこでは、総産出そのものの増加率は、少なくとも一般的には（というのは経済のすべての生産部門において一様に技術進歩が生じるわけではないから）、「支配労働」タームでの総産出の増加率よりも高い、ということになり、「支配労働」タームで捉えられた「年々の生産物」の動きは現実の総産出としての「年々の生産物」の動きを正確に反映することができない。そこでは、賃金デフレーターよりもむしろ物価デフレーターのほうが相対的により良好に機能するはずである、というわけである。

しかしシロス・ラビーニは他方でまた、輸入原材料を考慮に入れないケースおよびそれを考慮に入れるケースでの賃金単位で測られた「年々の生産物」の大きさおよびその変動といったことに関する議論を展開し、そしてたとえば前者の輸入原材料を考慮に入れないケースについては、 $P = \alpha \cdot \frac{W_y}{\pi_y}$  といった価格方程式（ $\alpha = 1 + r$  で  $r$  は利潤率、 $W_y$  は生産的労働者1人当たり賃金、 $\pi_y$  は全体としての生産性）を考え、そしてそれを全体としての経済における物価水準の内容を示すものとして捉えなおしつつ、 $\alpha$  が一定であれば（なお、シロス・ラビーニの示す議論の枠組みでは、これはまた、事実上、一経済における賃金所得にたいする「年々の生産物」の割合が一定、ということの意味する）賃金デフレーターで測られた「年々の生産物」の動き（ $Y/W_y$  の動き、なお、 $Y$  は貨幣タームでの「年々の生産物」）そのものは、その「年々の生産物」の生産に直接的に雇用された生産的労働者の雇用量  $E$  の変動（生産的労働への需要の変動）と符合しうる、といった論理を示そうとするのであった。

そしてまたそのシロス・ラビーニの示す議論の枠組みのなかでは、たとえば輸入原材料を考慮に入れないケースでの実質賃金は、うえの価格方程式から、 $W_y/P_y = \pi_y/\alpha$  となり（ $P_y$  は物価水準）、そこでは、 $\alpha$  が一定であれば、実質賃金の変動は  $\pi_y$  の変動に対応することとなり、さらに  $\pi_y$  も一定であれ

ば、実質賃金そのものが一定、物価水準が変動するときには  $W_y$  も同一步調で変動するということになるのであり、そして、そのように  $\alpha$  も  $\pi_y$  も一定となるところでは、一方で、賃金デフレーターで測られた「年々の生産物」の動きは物価デフレーターで測られた「年々の生産物」  $Y/P_y$  の動きとが符合するとともに、他方で、それらの動きはともに  $E$  の動きに符合しうる、ということになるのであった。

だが同時にまた、シロス・ラビーニの所論の示すところからすれば、「年々の生産物」の大きさおよびその変化の測定そのものという観点からは物価デフレーターは賃金デフレーターよりも優れたものではあるが、その物価デフレーターによって測られた「年々の生産物」の動きが  $E$  の動きを正確に指し示しうるためには、全体としての生産性  $\pi_y$  が一定でなければならないゆえ ( $Y/P_y \equiv \pi_y E$ )、この後者の脈絡ではその物価デフレーターは、技術変化とそれによる生産性の変化といったことが生じる状況には適用しがたいものであるはず、ということになるのであった。またそれゆえ、スミスが「年々の生産物」の動きを捉えるにさいして賃金デフレーターを用いたということは、「年々の生産物」の動きの測定それ自体という観点からすれば決して好都合なことではなかったとしても、その反面で、技術変化とその結果としての労働の「生産力」の向上ということを近代の諸経済機構の本質的特質として捉えるとともに労働需要・雇用量を規制する諸力の分析ということに大きな関心をもつスミスといった視点からすれば、スミスがそのように、「年々の生産物」の動きの測定のために物価デフレーターではなくて賃金デフレーターを用いたことには、それなりの適合性も見いだされる、ということにもなるのであった。

なお、うえでも触れられたように、シロス・ラビーニは、「年々の生産物」の測定それ自体のためには物価デフレーターは賃金デフレーターよりも優れたものであるとするのであるが、そのシロス・ラビーニの議論の示すところからすればまた、たとえば、「新製品」といったものは、とくに、長期では、どんな物価デフレーターをも非常に曖昧なものにしてしまうといったように、「年々の生産物」の測定それ自体のためのものとしての物価デフレーターといえども、それはおおよそのものたらざるをえない、ということになるのであった。またそれと同時に、そのシロス・ラビーニの議論では、「年々の生産物」を測ることをつうじて雇用量の動きを指し示す機能を果たすものとし

ての賃金デフレーターについても、さらに、商品「価値」を測ることをつうじて当該商品の生産における技術変化とその結果としての労働の「生産力」の向上を当該商品の労働支配力の低下として指し示す機能を果たすものとしての賃金デフレーターについても、それらもまた、おおよそのものたらざるをえない、ということになっていたのであった。すなわち、そのシロス・ラビーニの示す議論の枠組みからすれば、 $Y/W_y$  の動きが正確に  $E$  の動きを指し示しうるためには、たとえば、先で触れられたような価格方程式が考えられるとともにそれが全体としての経済における物価水準の内容を示すものとして捉えなおされる輸入原材料を考慮に入れないケースでは、(たとえ、例えばそのような価格方程式そのものの妥当性、等々といったような点は別としても、)  $Y/W_y = \alpha E$  から、 $\alpha$  が一定つまり一経済における賃金所得にたいする「年々の生産物」の割合  $\frac{Y}{W_y E}$  が一定でなければならず(また、先で触れられたような価格方程式が与えられているところでは、 $\alpha = 1 + r$  であるため、 $\alpha$  が一定であるためには利潤率  $r$  が一定でなければならない)、さらに、輸入原材料を考慮に入れるケースについては、そこでは、うえのような条件にくわえてさらなる条件が満たされなければならないのであった。また、商品生産における「技術変化」とその結果としての労働の「生産力」の向上といったことのあらわれとしての当該商品1単位当たり「直接的あるいは間接的に体化された労働の時間数」 $H$  の動きが正確に、賃金デフレーターで測られた当該商品の「価値」の大きさの動きに反映されうるためには、 $H = \delta \frac{P}{W}$  から、単位時間当たり(1時間当たり)賃金率  $W$  は一定でなければならないというわけではないが  $\delta$  一定という条件、つまり当該商品の価格のうち賃金が占める割合  $\frac{WH}{P}$  が一定という条件が、満たされなければならないのである。(ただし、事実上賃金デフレーターがうえのような諸機能を果たしうるために満たされなければならない条件といったことに関して概ね以上のような見方をとるとともに  $\delta$  を安定的と考えることそれ自体はそれほど無理なことではなかったともみたシロス・ラビーニによればまた、賃金デフレーターそのものは、うえの前者の脈絡におけるよりもむしろ後者の脈絡におけるほうが、相対的により良好にその機能を果たしうる、ともみられていたのであった。)

このように、シロス・ラビーニのみるところによれば、「年々の生産物」の変動ということそのものを取り扱うさいには賃金デフレーターよりも物価デ



フレーターのほうが優れたものではあるが、その脈絡における物価デフレーターといえども厳密な形でその機能を果たしうるものというわけではなく、他方、労働需要の変動、また、技術進歩の帰結といったことを取り扱うさいにおける賃金デフレーターも、厳密な形でその機能を果たしうるものではないのであった。しかしまた同時にそのシロス・ラビーニによれば、事実上うえて触れられたような要件がなんらかの程度で満たされうるという条件つきで、賃金単位（賃金デフレーター）は、おおよそのところにおいてではあるが、一方で「年々の生産物」を測ることによって労働需要の変動・雇用量の変動を指し示すことができ、また他方で、商品生産における技術変化とその結果としての労働の「生産力」の向上を当該商品の「価値」の低下として指し示すことのできるものであったのであり、そしてまた事実上そのような意味で、「支配される労働」は、一つの標準としては、経済発展の理論のなかで実際にその有効性を発揮しうる一つの分析用具たりうる、ということになるのであった。そしてさらにそのシロス・ラビーニは、その「支配される労働」はそればかりか、たとえば、発展段階の全く異なった国あるいは根本的に異なった制度をもつ国と自国とでの財貨の価格の有意義な比較をなすための物差し、といったような、実践的用途をもつものでもある、ともみるのであった。

## 62. B. ショシュキチュ (1976年)

1976年に公刊された B. ショシュキチュ (B. Šoškić) の一研究 (Branislav Šoškić, “Smith’s Theory of Value Compared with Ricardo’s: Two Aspects,” in *200 Jahre Adam Smith’ „Reichtum der Nationen“: Internationales Kolloquium, vom 30. 9. bis 1. 10. 1975 in Halle (DDR), Protokoll*, Herausgeber: Peter Thal, Berlin: Akademie-Verlag, 1976, S. 63–68. 以下, Šoškić [1976] と略記する) においてショシュキチュは, スミスの価値理論 (Smith’s theory of value) およびカードウ (D. Ricardo) の価値理論はそれぞれ取り扱う対象に関してどの程度の普遍性をもつものとして, また, 取り扱う時間的広がりに関してどの程度の普遍性をもつものとして, 構想されていたのかという二つの局面に問題を限定しつつスミスの価値理論を論じまたそれをリカードウの価値理論と比較しようとするのであるが<sup>(1)</sup>, そこで展開されているショシュキチュの議論のなかには, ショシュキチュのつぎのような内容をもった見解が含まれている。

スミスは, 価値の, ありうる一決定因 (determinant) として効用を退け, 商品の価値の決定要因は労働の量であるとして労働価値説を唱えたのであるが<sup>(2)</sup>, なによりもまず諸商品の「交換価値 (exchangeable value)」, 「自然価格 (natural price)」を分析しようとしたスミスは事実上, 一方でこの労働価値説が妥当する商品とは自然独占 (natural monopoly) が存在せずさらに人為独占 (artificial monopoly) も存在しない自由競争の行われる領域での商品のみであると考えるとともに, 他方で, 労働と労働力との区別をなすことに成功せずしかも労働者の労働と, その労働者が (賃金という形で) 獲得する労働の生産物との交換, ということに関心をいだいていたスミスはまた, それらの商品についてはいかなる時代についてもそのような労働価値説が妥当すると考えていたわけでもなく, それらの商品について労働価値説が妥当するのは, それらの商品が, それらの商品が体現 (represent) している労働の量 [それらの商品に含有されている労働の量] と同一量の労働と交換されうる資本の蓄積と土地の私的所有に先立つ社会段階においてのみであり, 資本

の蓄積と土地の私的所有の行われる社会では利潤、地代の存在のゆえにそれらの商品は、それらの商品が体现している労働の量〔それらの商品に含有されている労働の量〕よりも大きい量の労働と交換されるのであって、そのような社会においてそれらの商品の価値を決定することになるものは賃金、利潤、地代といった所得なのであり、これらのものが労働に代わってそれらの商品の交換価値の源泉（source）となる、とし、労働価値説に代えて後に生産費説として知られることとなる別の価値理論を提示したのであった。<sup>13)</sup>しかしながらまた他方でスミスは、ある所与の商品と見返りに買われうる労働の量というものは諸商品の価値の標準（standard）さらに賃金、利潤、地代といったこの価値の全構成部分の標準でありつづける、と考えたのであった。スミスは価値の不変の標準として役立つような商品を見つけ出そうとしていた。そのようなものにとっての必須条件は、その商品の価値が変化しないということである。スミスは、労働こそがその商品であると考え、「労働の価値は変化しないゆえに」「すべての商品の価値は時と場所のいかんを問わず労働によって測定されることができる」(WN, p. 33. 大河内訳くI), 58ページ)としたのであった。<sup>14)</sup>

(注)

- (1) なお、ショシュキチュは、「我々は、我々の著書、„Theory of Value—Classical Economic Analysis“, Institut za ekonomska istraživanja, Savremena administracija, Beograd 1971 のなかでスミスの価値理論およびリカードウの価値理論を検討した」と注記している。(Šoškić [1976], S. 63 Anm. 1.) なお、ショシュキチュが言及している上記文献は、中川にとって未見のものである。
- (2) Šoškić [1976], S. 63. なお、ショシュキチュはいまみたような内容の指摘にくわえてさらに、明白で疑う余地のない形でスミスは労働価値説をみずからの立場として表明したのであって、スミスは「労働のみを、…すべての商品の価値がつねにまたどこでも評価し比較されうる究極で真の標準（standard）として」宣言したのであり、スミスによれば「労働が、価値についての唯一の普遍的なまた唯一の正確な標準（standard）、そして、我々がつねにまたどこでもさまざまな商品の価値を比較しうる唯一の標準（standard）なのである」、としている。(Šoškić [1976], S. 63.) なお、ショシュキチュはうえの二つの「」内の文言を A. Smith, Wealth of Nations, New York 1937 (我々が本書で使用しているモダン・ライブラリー版『国富論』にあたるもののように思える), Book I, Chapter IV (これはVの誤りと思

## 62. B. ショシュキチュ (1976年)

える), p. 33 (大河内訳 < I >, 58ページ) and p. 36 (大河内訳 < I >, 63ページ) から引用した旨を注記しているが (Šoškić [1976], S. 63 Anm. 2), それらの「」内では、モダン・ライブラリー版『国富論』の中の該当箇所の原文におけるいくつかの語句について変更がくわえられたものが示されている。『国富論』からのショシュキチュによる以下における引用についても同様であり、そこでの文言の訳は、ここでも同様、ショシュキチュの示している文言からの訳である。

- (3) なお、なぜスミスが資本の蓄積と土地の占有の行われる社会については労働価値説を放棄したのかということに関してショシュキチュが与えている議論をもう少し詳しく示すとすれば、そこでのショシュキチュの議論はつぎのようなものである。

スミスが労働価値説を放棄することとなった理由は、スミスが分配ということと交換ということとを区別しないで論じているということのなかにと同様に、分配の領域にあらわれた諸変化ということのなかにも、見いだされる。すなわちスミスは、いわゆる現代の段階の社会が育成しつつあったときに分配の領域に現出した諸変化に気付いていた。労働者は、もはやみずからの仕事の全生産物を所有することなく、それを利潤という形で資本の所有者とまた地代という形で地主と分け合わざるをえなくなったのである。そして、分配のなかに発生した諸変化 (価値の異なった分割) といったものは価値の決定における諸変化といったこととは関係がない、すなわち価値を決定する諸要因といったこととは関係がないはずなのであるがスミスは、彼が生きている社会ではすでに価値の法則 (principle of value) の営みが変化してしまっているのだという結論を引き出したのであった。なお、スミスがそのような結論に到達した原因は、彼が労働の諸生産物の交換ということよりもむしろ労働者の労働とその労働者が (賃金という形で) 獲得する労働の生産物との交換ということを問題にしようとしたことにある。いわゆる社会の本源段階においては労働者は、彼の労働の見返りに (あるいは、スミスの言葉の用い方からすれば、ある一定量のその労働者の「商品労働 (commodity labour)」の見返りに)、直接的にあるいは交換をつうじて、それと同一量の労働を含有 (contain) する生産物を獲得した。しかし、資本の蓄積という状況のもとでは労働者はもはや、彼の労働の見返りにあるいはある一定量の彼の「商品労働」の見返りに、直接的にも交換をつうじてでも、それと同一量の労働を含有する生産物を獲得しはしない。いまや労働者は、ある一定量の彼の労働 (商品労働) の見返りに、それより少ない量の労働しか含有しない生産物を獲得するのである。このことが、諸商品——そこでは労働も一つの商品と考えられている——はそれらの諸商品が体現 (represent) している労働の量と交換されないという結論をスミスが出したことの理由なのである。労働者がもはや彼の労働の生産物の全部は獲得することができないような分配というものは、スミスにしたがえば、労働価値原理から逸脱している交換ということを暗に意味しているのである。スミスは彼の労働価値説を、それが、第一に資本の役割およびその結果とし

ての利潤の役割をまた第二に土地所有の役割およびその結果としての地代の役割を説明することの助けにならないということのゆえに、放棄したのである。スミスは労働と労働力との区別をなすことに成功しなかった。スミスの出発点は、労働者は彼の労働——彼の労働力ではなく——を売るということであったのである。資本と労働との間の交換は、実際、あるより小さい量の体现された労働 (labour materialized) のあるより大きな量の人間労働との交換である、ということから、人は、労働価値原理はもはや有効ではないという結論を引き出すかもしれない。このことが、スミスが彼の住む社会での諸商品の価値を決定する要因として諸所得を強調したことの理由なのである。彼によれば労働に代わって諸所得というものが交換価値の源泉になってしまっているのであり、そしてそれらの所得とは賃金であり、利潤であり、また地代であるのである。かくして彼は、労働価値説の代わりに、後に生産費説として知られることになる別の価値理論を構成する諸要素を強調するのである。Šoškić [1976], S. 65-66.

- (4) Šoškić [1976], S. 63-66, 67, 68. なお、スミスの議論における価値標準としての労働ということについてのいまみたシヨシュキチュの説明はつぎのようなものとして理解することができよう。すなわち、スミスの議論においては、労働の価値は不変であって、そして事物によって購買されうる労働の量によって時と場所のいかに問わずその事物の価値が測定されうるのであったのであり、商品の価値はその商品によって購買されうる労働の量によって、また資本の蓄積と土地の占有の行われる社会での商品価値の諸構成部分としての賃金、利潤、地代といった諸所得の各々の価値もそれら各々によって購買されうる労働の量によって、測定されうる、ということになっているのである。

## B. シヨシュキチュ (1976年) についての覚書

シヨシュキチュは、「価値の原因、決定」と「価値の尺度」またスミスの議論における「価値の原因、決定」と「価値の尺度」といったことについて明確な言及をなしているわけではなく、また、シヨシュキチュ自身一方で、スミスの議論には労働の量を価値の決定因と考える労働価値説に相当するものがあるとしつつそのことを例示するものとして価値の真の標準 (standard) としての労働ということに関するスミスの文言を引用するといった形で、価値の真の標準ということについての言及をなしているのではあるが、うえてみられたように、シヨシュキチュは、そのような事実上スミスの議論における価値の源泉、価値の決定といったことにかかわる問題を論じたのちに、あらためて、スミスはまた価値の不変の標準 (standard) として

## 62. B. ショシュキチュ (1976年)

時と場所のいかんを問わず価値の測定を可能にする価値の変化しない商品を見つけ出そうとしていたといったことに関する言及をなすのであったのであり、このようなショシュキチュの議論の流れからみて、少なくとも1976年のこのショシュキチュの研究に関するかぎり、ショシュキチュ自身は、価値に関するスミスの議論を論じるさい「価値の原因、決定」と「価値の尺度」とを別個なものとして取り扱っている、あるいは、スミスの議論ではそれらは別個なものとして取り扱われているとみている、とうけとることもできるであろう。

そして、ショシュキチュによれば、なによりもまず諸商品の「交換価値」、  
「自然価格」を分析しようとしたスミスによって展開された価値理論においては、事実上そこでの考察対象の中心となる商品は自然独占が存在せずさらに人為独占も存在しない自由競争の行われる領域の商品であったのであり、そしてそのような領域における商品については、スミスは、資本の蓄積と土地の占有に先立つ社会段階では商品の価値の源泉は労働であり、商品はその商品に投下されてその商品が含有したその商品に体现されている労働の量と同一量の労働と交換されて商品に投下された労働の量（商品が体现している労働の量）がその商品の価値を決定することになるが、資本の蓄積と土地の占有の行われる社会では商品はその商品に投下された労働の量（その商品が体现している労働の量）とは異なった量の労働と交換されることになり、労働価値説は妥当しないことになるのであって、そこにおいては、商品の価値の源泉となりまたその商品で購買しうる労働量をつまりその商品の価値を決定するものは、ここでの商品の価値を構成する賃金、利潤、地代といった諸所得である、とした、とみられるとともに、スミスの議論では「購買されうる労働の量」が価値の不変の標準としてつねに商品の価値を測定するものでありつづけたのであり、また、資本の蓄積と土地の占有以後の商品の価値の構成部分となるものつまり賃金、利潤、地代の、価値を測定するものでもあった、とされるのであった。

### 63. M. オラルドと R. トルタジャーダ (1976年)

1976年に公刊された M. オラルド (M. Hollard) と R. トルタジャーダ (R. Tortajada) とによる一研究 (M. Hollard/R. Tortajada, „Über das Reduktionsproblem,“ in *200 Jahre Adam Smith' „Reichtum der Nationen“: Internationales Kolloquium, vom 30. 9. bis 1. 10. 1975 in Halle (DDR), Protokoll*, Herausgeber: Peter Thal, Berlin: Akademie-Verlag, 1976, S. 134-138. 以下, Hollard/Tortajada [1976] と略記する) のなかには, つぎのような内容をもったオラルドとトルタジャーダの見解が含まれている。

① スミスは, 商品の交換価値の尺度 (Maß) としての労働を検討するさい, 労働の熟練および強度の相違ということ述べている。<sup>(1)</sup> それゆえスミスにとっては「還元 (Reduktion)」の手続きというものが必要なものであったのであるが, その還元問題についてのスミスの考えに関して強調されるべき点の一つは, スミスが異なる等級の労働の強度の還元, 異なる等級の労働の熟練の還元という二重の還元の存在を明示的に示している, ということである。<sup>(2)</sup>

② しかしながら, ここでは, それら二重の還元のうち後者のものについてのスミスの考えを取り上げるとすれば, その問題についてのスミスの考えはつぎのようなものであった。すなわち, スミスは, 労働者が自らの生産手段を意のままにする「未開」状態にある社会についてと同じように, 賃金という範疇さらに, スミスにしたがえば商品としての労働といった範疇, の存在するより高度に発達した社会についても, 労働の還元という問題を提出するのではあるが, そもそも, 一商品の購買しうる生きた労働の量によるその商品の価値の規定 (Bestimmung, 規制, 決定) というスミスの理論そのものは, 還元準尺は賃金準尺であるということ前提としていたのであって, 賃金は資本家の購買しうる生きた労働の量を明らかにし, 賃金格差は異なる労働熟練度に対応する, と考えられているのである。たとえばスミスはつぎのように述べている。「職人の習熟した技能は, 労働を促進, 短縮しまた一定の経費がかかりはするがその経費を利潤とともに回収するような事業上の一

つの機械または用具と同じようなもの、と考えてさしつかえないのである」(WN, p. 266. 大河内訳〈I〉, 430ページ)。「なみなみなならぬ技能と熟練を必要とするある種の職業のために多くの労働と時間をかけて教育された人は、こうした高価な機械の一つになぞらえることができよう。彼が習得する仕事は、普通の労働の平常の賃金に加えて、彼の全教育費を、少なくともそれと同等の価値ある資本の通常の利潤とともに回収するだろう、ということが期待されるにちがいない。またこれは、人間にくらべるといっそう確実な機械の耐用年数にたいして考慮が払われるのと同じく、人間のきわめて不確実な寿命を考慮して妥当な期間内に実現されなければならないことである。／熟練労働の賃金と普通の労働の賃金との差異は、この原理にもとづくのである」(WN, p. 101. 大河内訳〈I〉, 168-169ページ。／は原典において行変えが行われていることを示す<sup>(4)</sup>)。

③ このように、〔熟練度の異なる労働という〕異種類労働の還元の過程は理論的に基礎づけられているかのようにみえる。だがそれにもかかわらず、我々には、還元のこの過程は受け容れることのできないものであるように思えるのである。すなわち、スミスによって提案されているような還元の過程においては、さまざまな賃金は、労働者たちを生産するということによって生じさせられることとなる費用をつうじて、つまり、通常の賃金に加えて一つの機械と同じようなものとみなされるところの熟練というものを習得するための費用をつうじて、客観的なものとして、決定(determinieren)され、熟練労働者は、熟練という機械の、すなわち、それからその熟練労働者がそれと同じ価値をもつ資本からと同じように通常の利潤を獲得することができる場所の熟練という機械の、所有者でもある、ということになるのである。しかしながら、実際には、熟練の習得の始まる瞬間および熟練の習得の終わる瞬間を確定するといったことは非常に困難なことである。そしてそのため、資本家である者〔ここでは、熟練という機械を所有する者としての資本家〕とそうでない者とを識別することはできない、ということとなるのである。賃金という範疇自体が、このような意味の拡大をつうじて、その有効性を失うこととなり、したがってまた、スミスによって提案されたような還元の過程も、その有効性を失うということになるのである。そしてまた、スミスは労働を一つの商品とみなすといったようにスミスのばあいにおける還元手続きは労働力〔これが一つの商品とみなされるべきものであり、これが、賃金、



労働力の所有者である労働者の生活維持に必要な生活手段等々といったことに、関係すべきははずのものなのである〕と労働との混同ということに基礎を置いているのである。<sup>(5)</sup>

(注)

- (1) オラルドとトルタジャーダはつぎのようなスミスの文章を引用している。「1時間の辛い作業におけるほうが、2時間のやさしい仕事におけるよりも、いっそう多くの労働があるかもしれない。また、習得するのに10年の労働がかかる職業に1時間はげむばあいのほうが、平凡なわかりきった業務で1ヶ月働けばあよりもいっそう多くの労働があるかもしれない。」(WN, p. 31. 大河内訳〈I〉, 55ページ。) Hollard/Tortajada [1976], S. 134.
- (2) Hollard/Tortajada [1976], S. 134.
- (3) なお、本章で扱っているオラルドとトルタジャーダとの研究では「価値の決定あるいは規定(規制)の問題」と「価値の測定の問題」との区別といったようなことは問題にされてはいず、しいて言うとするれば、価値を決定あるいは規定するものすなわち価値を測るもの、といったように考えられている、と言えよう。
- (4) Hollard/Tortajada [1976], S. 134-135.
- (5) Hollard/Tortajada [1976], S. 135. なお、オラルドとトルタジャーダは、以上のような内容の指摘につづけて、つぎのような内容の問題を検討しようとする。すなわち、マルクス理論においては労働力と労働との混同はないのであるがそのようなマルクス理論に基づく労働による価値規定の数学モデルのなかにおいても、スミスの議論のなかに見いだすことのできるような労働力を生産するための異なった費用ということに依る還元手続きを利用することができるか、という問題である。そしてこのことが、ここで扱っているオラルドとトルタジャーダとの研究の主要テーマでもあるのである。なお、オラルドとトルタジャーダによれば、マルクスの価値理論の枠内ではそのような還元手続きを採用することはできないという結論が可能であるように思える、とされる。詳しくは Hollard/Tortajada [1976], S. 135-138 を見よ。

## M. オラルドと R. トルタジャーダ (1976年) についての覚書

オラルドとトルタジャーダは、スミスは商品の交換価値の尺度としての労働を検討するさいに労働の強度および熟練の相違という問題を提示し、そしてそれらの相違ということを克服して労働(購買されることのできる生きた労働)を交換価値の尺度として使用できるようにするために強度の異なる労

働また熟練度の異なる労働を互いに換算し合えるようにするといった問題を取り扱っている、とみるのであった。

そしてオラルドとトルタジャーダは、スミスの議論にみられるその二重の還元問題のうち後者の、熟練度の異なる労働を互いに換算し合えるようにするという問題についてのスミスの取り扱いを取り上げるのであるが、オラルドとトルタジャーダによれば、この問題にたいするスミスの対処は事実上、賃金は労働者を生産するのに要する費用をつうじて、すなわち、通常の賃金および熟練習得の費用をつうじて、客観的なものとして、決定されるのであり、熟練度の差異は賃金格差に反映されるのであって、熟練度の異なる労働間の還元準尺となるものは賃金準尺である、つまり、賃金を準尺として用いることによって熟練度の異なる労働を互いに換算し合うことができるというものであった、とみられるのであった。

しかしまたオラルドとトルタジャーダによれば、熟練度の差異を賃金の差異でとらえようとするスミスのそのような対処においては、熟練は一つの機械という形での資本と同様なものとみなされており、したがってまた、熟練労働者を生産するのに要する費用をつうじて決定されるものとしての熟練労働者が受け取る賃金そのものは、普通の労働者の受け取る通常の賃金の大きさに加えて、その熟練習得に要した費用を、その費用に見合う通常の利潤とともに回収するに足りる大きさのものとなる、と考えられているのであるが、実際には熟練習得の開始およびその終了の時点といったものを確定することは非常に困難なことであって、そのため熟練という機械を所有する一種の資本家としての熟練労働者とそうでない労働者とを識別することはできないということとなるのであり、そして、賃金の意味のうえのような拡大をつうじて賃金という範疇自体がその有効性を失うこととなり、またそれゆえ、スミスのその対処の仕方自体もその有効性を失うこととなる、とみられるのであった。さらにまたオラルドとトルタジャーダによれば、スミスのそのような対処は、労働を一つの商品とみなすといったように、本来一つの商品とみなされまたそれに対して賃金の支払いがなされると考えられるべきところのものである労働力と、それと区別されるべきところの労働との、混同のうえで、考えられている、とみられるのであった。

## 64. H. D. クルツ (1976年)

1976年に公表されたH. D. クルツ (H. D. Kurz) の一論文 (Heinz D. Kurz, „Adam Smiths Komponententheorie der relativen Preise und ihre Kritik: Zur Genesis der objektivistischen Wert- und Preistheorie,“ *Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft*, Bd. 132 (H. 4, Oktober 1976), S. 691-709. 以下, Kurz [1976] と略記する) のなかには, クルツのつぎのような内容の見解が含まれている。

① スミスは相対価格としての長期均衡価格, 「自然」価格の決定 (Bestimmung) に関して, 「資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態」については〔投下〕労働価値説を主張するとともに, 資本の蓄積と土地の占有の行われる社会状態については生産費説を主張しそしてこのような社会状態においては一商品のなかに凝結された *geronnen* 労働量 (投下された労働 *labour employed* あるいは体化された労働 *labour embodied*) とその商品を所有することによって支配することのできる *kommandierbar* 労働量 (支配される労働 *labour commanded*) とは等しくなくなり, 利潤と地代の存在のゆえに後者はつねに前者よりも大きくなるとするのであるが, その支配される労働という概念はまた, 一商品の「真実価値 (real value)」あるいは「真実価格 (real price)」というスミスの考えの基礎になっているのであって, 彼は, 「支配される労働」という意味での労働が「すべての商品の交換価値の真の尺度である」(WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ) としているのである。<sup>(1)</sup>

② スミスにとって, 支配される労働という数量化可能な大きさは, 労働の苦痛という主観的で数量化不可能な部類のものを客観化して価値尺度 (Wertmaß) として使用できるようにする, そういうものとして役立つのである。<sup>(2)</sup>

③ かくして, もし,  $j$  番目の生産物価格を  $p_j$ , 賃金率を  $w$ , とすれば, その生産物の「真実価値」 $\hat{p}_j$  は,  $\hat{p}_j = p_j/w$  として得られることになるのである。<sup>(3)</sup>

(注)

- (1) Kurz [1976], S. 691-693.
- (2) Kurz [1976], S. 693-694 Anm. 10.
- (3) Kurz [1976], S. 693-694.

## H. D. クルツ (1976年) についての覚書

クルツによれば、スミスは事実上長期均衡価格の決定に関しては、「資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態」については〔投下〕労働価値説を、資本の蓄積と土地の占有の行われる社会状態については生産費説を主張するのであるが、他方でスミスは「支配される労働」を、労働の苦痛という主観的で数量化できないものを客観化して彼のいう「真実価値」の大きさを測る尺度となるものとしており、そしてスミスの議論での生産物の「真実価値」の大きさとはその生産物価格を賃金率で割ることによって得られることとなる、とみられるのであった。

## 65. P. L. ダナー (1976年)

本書の「41」で1964年に博士論文として承認され1965年にその著作権が成立したP. L. ダナー (P. L. Danner) の一労作中に見いだされるダナーの見解が取り扱われたのであるが、その後の1976年にもともと公表された彼の一文 (P[eter] L[yn] Danner, "Sympathy and Exchangeable Value: Keys to Adam Smith's Social Philosophy," in *Adam Smith: Critical Assessments*, edited by John Cunningham Wood, 4 vols. London & Canberra: Croom Helm, 1983-1984, vol. 1, pp. 628-639. [Source: *Review of Social Economy*, vol. 34 (no. 3, December 1976), pp. 317-331.] なお、ここでは上掲書所収の上掲論文を使用するのであるが、ここで取り扱うダナーの研究の発表年の区分については、その論文がもともと公表された年、1976年をとり、そして、以下では、上掲書中のダナーの上掲論文を Danner [1976] と略記することとする) の内容を検討してみるとそのなかにも、以下のようなものとして捉えることもできるであろうようなダナーの見方が見いだされるといえるであろう。

① スミスは、交換比率 (exchange ratio) それ自体の本質や原因を確定することの重要性といったことは感知してはいなかったのであって、彼は、価値を有する諸事物 (things of value) は交換されることができる (exchangeable) という常識的な理解を起点として研究することで満足していたのであった。<sup>(1)</sup>

② そして、価値 (value) という用語と exchangeable value という用語を事実上ほとんど互換可能なものとして使用しつつうえのような理解を起点として研究しようとするスミスの議論には、価値 (value) と、価値を有する事物それ自体とが同一視されている、といった面があったのであって、そのスミスの議論では、exchangeable value とは、たとえば「生活の必需品と便益品」といったような物質的事物に内在するある有用な性質ということを意味したのであるが、それはまた、そのような有用な性質を内在的にそなえた物質的事物それ自体を意味してもいたのであり、そしてまたそのスミスの議論

では、国富 (national wealth) の真の大きさとその増加とは、exchangeable value の一国全体での総額の大きさとその増加、ということになっていたの<sup>(2)</sup>であった。

③ そしてまたスミスの場合、その exchangeable value の大きさを測定する自然的な尺度 (measure) となるものは、支配することのできる労働というものであったのであるが、そこで言われている労働そのものは、労働時間 (labor-time)、労働エネルギー (labor-energy)、労働の熟練 (labor-skill)、労働の効用生産性 (labor-utility-productivity) としての労働ではなくて、労働不効用 (labor-disutility) としての労働であるのであったのであり、スミスは、生産的労働であろうと不生産的労働であろうとすべての労働は時と場所のいかんを問わず不変の不効用を伴うのであって、労働不効用は一つの尺度として、不変かつ普遍的なものである、と考えようとしたのであった。<sup>(3)</sup>したがってまたそこでは、exchangeable value の大きさそのものは、結局のところ、労働の重荷を他の人に移転させる力の大きさとして捉えられている、ということになるのである。<sup>(4)</sup>

(注)

(1) Danner [1976], p. 634.

(2) Danner [1976], pp. 632, 634-635. なお、ダナーによれば事実上、スミスの議論では、そのようなものとしての exchangeable value の創造にあずかることになる労働が「生産的労働」ということになっていたのであり、また事実上スミスは「富 (wealth)」と「所得 (income)」とを区別していないのであるが、それは、スミスにとって重要なことはただ、収入 (revenue) がどのように支出されるかということであったという事情によっているのであって、そこでは、生産的労働の維持、資本財の追加に支出される収入は新しい exchangeable value を産み出し、他方、不生産的労働に支出される収入は、たとえその労働が社会的にいかにも望ましいものであろうと、exchangeable value を破壊してしまう (WN, p. 322. 大河内訳 < I >, 530-531 ページ) ということだけがスミスにとって重要なことであったのである、とみられている。(Danner [1976], pp. 635-636.)

また、ダナーによれば事実上、スミスの議論では、自然の力、また、土壌や気候さらに地形といったものが与えられたなかで人間は、みずからの能力を使用するとともにみずからの安逸を犠牲にすることによって、生存や生活に必要な諸事物を獲得するのであり、そしてこれこそが、あらゆる物の究極の費用なのであって、究極的な交換とは、人間の努力と、生存を維持しさらにそれをより心地よいものにする

物質的な財貨との間の、交換である、ということになる、とみられるとともに、さらにまた、このようなことからスミスは、たとえば、「労働……は、国民に……生活の必需品と便益品を……供給する源 (fund) である」(WN p. lvii. 大河内訳 < I >, 1 ページ) といったような形で、労働を、exchangeable value の生産においてある独特な機能を果たすものとして捉えようとしている、とみられる。そしてまた同時にそのダナーによれば、スミスの議論では、労働はこのように独特なものなのであるとしても労働そのものは、資本財、原材料といったようなものなくしては労働は何物をも生産できないといった意味で、exchangeable value の唯一の原因 (cause) というわけではない、ということになっているのであるが、スミスの議論ではまた、労働が生産物の父であり土地がその母であるといったような意味で労働がつねに主原因であるということにはかわりはなく、また、資本と土地も原因であるからそれらもまた生産された exchangeable value における分け前にあずかる、ということとなっている、とみられる。(Danner [1976], pp. 636-637.)

- (3) なお、ダナーによれば、スミスは、異なった種類の労働に伴う不効用は互いに異なりうるのであるがそれらの間のおおよそのところでの相当関係は「市場のかけひきや交渉によって」確立されることになるとした、とみられる。そしてまたそのダナーによれば、スミスはまた、賃金の一般的な水準そのものは生計の一般的費用や労働生産性の一般的な水準に応じて国によって異なりうるということ、また、労働生産性は熟練の向上や経験の増加から、あるいはより大きな分業もしくは技術の改良の結果として、変化しうるということ、また、不生産的労働と区別されるものとしての生産的労働はつねに剰余の exchangeable value を生産するということ、さらに、賃金は社会的に最低限な水準以上に上昇しうるということ、主張したりあるいは認めたりしもしている、とされる。しかしまた同時にそのダナーによれば、スミスの議論では、たとえうのような事情があるとしても、あらゆる労働に伴う労働不効用それ自体は時空をつうじて不変であって、一つの尺度として、労働不効用は不変かつ普遍的なものである、ということにはかわりはない、ということになっている、とみられるのである。(Danner [1976], p. 636.)

- (4) Danner [1976], p. 636.

## P. L. ダナー (1976年) についての覚書

以上のようなものとしての我々の理解からすれば、ダナーのこの論文のなかにも、本書の「41」で取り扱われた彼の研究のなかでのものに似た見方をみてとることができる、ということになるのであるが、ダナーはここでは、スミスは「交換比率」それ自体の本質や原因を確定することの重要性といったことは感知することなく、価値を有する諸事物は交換されることができる

という常識的な理解を起点として研究することで満足していた、とするとともに、スミスの議論では価値 (value) という用語と exchangeable value という用語はほとんど互換可能なものとして使用されていた、とするのであった。

そしてまたダナーのこの論文のなかには、事実上、たとえばつぎのような見方も、すなわち、スミスの議論には価値 (value) と、価値を有する事物それ自体とが同一視されているといった面があったのであって、そのスミスの議論では、exchangeable value は物質的事物に内在するある有用な性質ということの意味するとともに、そのような有用な性質を内在的にそなえた物質的事物それ自体を意味してもいたのであり、また、国富の真の大きさとその増加は exchangeable value の一国全体での総額の大きさとその増加ということになっていた——なお、スミスは富 (wealth) と所得 (income) とを区別していなかったのであるが、それは、生産的労働の雇用に向けられるものが新しい exchangeable value を産み出すのにたいし不生産的労働の雇用に向けられるものは exchangeable value を破壊してしまうということにスミスが注意を集中していたということによる——のであるが、そのようなものとしての exchangeable value の大きさを測定する自然的な尺度となるものをスミスは、あらゆる労働に伴う労働不効用は時空をつうじて不変であると考えつつ、労働不効用としての労働にたいする支配力というものに求めようとしたのであったのであり、したがってまたそこでは、exchangeable value の大きさは、労働の重荷を他の人に移転させる力の大きさとして捉えられていることになる、といった見方も、みてとることができる、ということとなるのであった。



## 66. L. デュモン (1977年)

1977年にその英語版が刊行された L. デュモン (L. Dumont) の一著書 (Louis Dumont, *From Mandeville to Marx: The Genesis and Triumph of Economic Ideology*, Chicago & London: University of Chicago Press, 1977. 以下, Dumont [1977] と略記する。なお, 上掲書のフランス語版は, Louis Dumont, *Homo aequalis*, [I]: *Genèse et épanouissement de l'idéologie économique*, Paris: Gallimard, [1977]) のなかでデュモンは, 価値, 価格に関するスミスの議論についての検討をなす過程で, 以下のような内容をもった見方を示している, といえよう。

① 『国富論』第1篇第5, 第6, 第7章は価値 (もちろん交換価値 <exchange value>) および価格 (price) を取り扱っているのであるが, 第5章は本質的には, 価値とは労働に存するということおよび労働のみが価値を真に測定しようということを, 主張しており, それは, 一つの大いに形而上学的な主張である。それとは対照的に第7章はきわめて経験的なものであって, それは, 経験的知識から「自然」価格として定義されるものをめぐっての, 市場価格の振動ということを叙述する。そしてそれらの章の間にある第6章は, 第5章と第7章との間の転調をできるだけ論理的に示すことを, 試みているのである。<sup>(1)</sup>

② スミスは, 労働が価値の本質であるということを述べることで満足せずに, 労働が価値の尺度でもあることを欲するのであり, 第5章の冒頭パラグラフの終わりの部分で彼は, 「労働は……真の尺度である」, としている。<sup>(2)</sup>

③ また, スミスは, 同じ第5章の少しさきに進んだところで, 「等量の労働は, 時と場所のいかんを問わず, 労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう。彼の健康, 体力, 精神が普通の状態で, また彼の熟練と技能が通常程度であれば, 彼はつねに, 自分の安楽, 自由, 幸福の同一部分を犠牲にしなければならない。彼が支払う代価は, それと引き換えに彼が受け取る財貨の量がどうであらうと, つねに同一であるにちがいない。……それゆえ, それ自身の価値がけっして変動することのない労働だけが,

すべての商品の価値を、時と場所のいかんを問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準である。労働はすべての商品の真実価格であり、貨幣はその名目価格であるにすぎない」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 57-58ページ), と述べている。しかしながら, ここには「混同」が存在する。すなわち, マルクス (K. Marx) が特徴づけているように, ここではスミスは, 同時に価値の実体 (substance) を形成するところの内在的尺度 (immanent measure) としての価値尺度を, 貨幣は価値の尺度であるといった意味での価値尺度と混同し, そして, ある不変の価値をもつがゆえに価値の一標準として使用されうるといった一商品を, 追求しているのである, あるいはまた, 労働そのものについてしたがってまた労働の尺度すなわち労働時間 (労働の継続期間〈duration of labor〉) について妥当することを——つまり, 諸商品の価値は, 労働の価値いかにかわらず, それらの諸商品に実現されている (realized) 労働時間につねに比例するという——, 変動する労働の価値にたいして要求しているのである。<sup>(3)</sup>

④ では, なぜ, また, どのようにして, スミスはこのような失敗をおかすにいたったのか。なぜ, という問題に対する答えはつぎのようなものである。すなわち, スミスの関心は労働を価値の実体 (マルクスのいうように) として措定することであった。もしもある自足的な存在物が経時的に安定的, 不変的, 一定的なものであるということが示されうるならば, その存在物はより堅固に定着させられることになる。このような連想的連関で, 労働の諸量という考えが, 尺度という考えへと, 通じていったのである。なお, 長さというものは長さについてのある標準によって測定されるといったように, 一つの尺度あるいは標準とは, その尺度あるいは標準によって測定される大きさと同一種類の大きさに属するものである。ここから, 価値を測定する労働は, ある価値である (ある価値をもつ) ように思われる, ということとなったのである。かくして, 一つの奇妙な転倒が, たぶん「価値」の絶対的な意味 (富〈wealth〉, 財産〈property〉!) といったことをつうじてもたらされたところの一つの奇妙な転倒が, 生じることとなったのである。また, どのようにして, という問題に対する答えはつぎのようなものである。すなわち, ここでスミスをして道を踏みはずさせてしまったものは, 彼が個別的な主体あるいは行為者というものにうったえたということである。つまり, スミスは, 「価値」を, 社会的な場というものから完全に切り離してしまい, そし

てさらに、たぶん不注意に、個々の存在としての、自然の人間というものによって、その人間に、その人間の労働の価値についてたずねたのである。<sup>(4)</sup>

⑤ うえの③のなかで見たような言説をなしたスミスはそれにすぐつついて、実のところ、労働の経済価値あるいは労働の価格をあらためて導入せざるをえなかった。矛盾を回避しようとして彼はあらゆる種類の予防措置を講じつつそのことをなしている。すなわち、まず、労働者を「雇用する」人物の観点から、しかもそこでは価値についてではなくて「通俗的な意味」での労働の「価格」(真実 <real>「価格」および名目「価格」)について語り、そして最後に労働者の観点到立ち帰り、「労働者が富んでいるか貧しいか、その報酬がよいかわるいかは、彼の労働の真実価格に比例しているのである…」(WN, p. 33. 大河内訳 <I>, 58ページ)、とするのである。ところで、ここでのその「真実価格」とは(財貨での)本当の、社会的な価格であるのであり、そしてスミスはこの考えを、少なくとも暗黙裡に、相次いで採択しているのである。かくして、混乱は完全なものとなる。すなわち、諸商品に関しては、それらの商品の真実価格は、それらの商品の労働での価格であり、それらの商品の名目価格は、それらの商品の貨幣での価格である、だが、労働に関しては、労働の(通俗的な意味での)真実価格は、その労働の財貨での価格(そういうものとしてはほとんど確定することのできないものである)なのである。しかもそのうえスミスは諸商品の真実価格と労働のそれとを同一視し、「諸商品と労働について、その真実価格と名目価格とを区別するのは、たんなる思索の問題ではない」(WN, p. 33. 大河内訳 <I>, 59ページ)とするのである。<sup>(5)</sup>

⑥ ところで、スミスは価値の原理(principle)についての研究を、事実上自然の状態というものから始め、そしてロック(J. Locke)が財産の原理を労働のなかに見いだしたのにたいしスミスは、価値の原理を労働のなかに見いだし、さらに彼は、この研究結果を、事物の文明化された状態すなわち事物のこんにちの状態へ適用する試みをなそうとしたのであった。そのさい彼は、自然の状態、本源的な状態については、財貨に含まれる(contained)あるいは体化された(embodied)労働の量というもの(生産における価値の規定 <definition, 決定>、体化された労働量による価値規定)を主張し、他方、事物の文明化された状態については、商品の価格は三つの要因からなり

(WN, p. 50. 大河内訳〈I〉, 85ページ), 「賃金と利潤と地代は, すべての交換価値の三つの本源的な源泉であり, 同時にすべての収入の三つの本源的な源泉でもある」(WN, p. 52. 大河内訳〈I〉, 88-89ページ)といった労働量説 (quantity-of-labor theory) とは何の関係もない考えを示すのであるが, 同時に彼は, 「ここで注意しなければならないのは, 価格のすべての異なる〔構成〕部分の真実価値は, そのおのおのが購買または支配しうる労働の量によって測られる, ということである。労働は価格のなかの労働に分かれる部分の価値だけでなく, 地代に分かれる部分の価値, および利潤に分かれる部分の価値をも測るのである」(WN, p. 50. 大河内訳〈I〉, 85ページ。〔 〕内はデュモンが引用にさいして抜かしている箇所) としており, 事実上, 財貨の所有者が直接もしくは間接にその財貨と交換することのできる労働量——その財貨が購買あるいは支配することのできる労働量——というものの(交換をつうじての価値規定, 支配労働量による価値規定)を主張する, すなわち, 彼は「生産における価値規定」から「交換をつうじての価値規定」へと移行するのである, そしてそのことによって, 彼においては, すべての事物を作り出す究極の実体は労働であるといった考えを, 文明化された状態にもあてはめることが可能になるのであった。<sup>(6)</sup>

⑦ なお, スミスは, 実際に比較をなすさいには, 長期 (long periods) については穀物をそして短期 (short periods) については貨幣を使用するのであって, 労働を使用するわけではない。うへの⑥のなかでみたような形でスミスが尺度としての労働に言及する場合, そこでは, そのように労働を<sup>・</sup>尺度とすることによって, 労働は利潤や地代を含めてすべてのものを包み込むものであるということを示し, さらに, 「尺度」といったレベルにまで訴えることによって労働量による価値規定が確たるものであるということを示そうとしているのである, そしてまたそこでは, たんなる測定問題以上のこと, すなわち, 生産の本質, あるいはむしろ生産上の唯一の実体, といったことにかかわることが, 問題になっているのである。<sup>(7)</sup>

⑧ シュムペーター (J. A. Schumpeter) の言うようにはスミスは彼の労働価値説の妥当性を自然の状態に限定することを意図してしたわけでも労働を一つの尺度あるいはニュメラルとして選んだにすぎないというわけでもなく, (1)労働が全生産物を生産するという命題, (2)たとえ体化された労働ではないとしても少なくとも交換をつうじて獲得される労働が商品の価値を説

明 (account for) するという命題、(3) 価格のすべての構成部分は結局のところ労働のタームで測定されうるという命題、これら三つの命題は、労働価値説を文明化されたケースにも一般化しようとするにさいして遭遇した障害の結果として生じてきたものであり、それらの命題は、労働価値説の残存的言説 (residual statements) のようなものである。スミスは現実の取引を叙述することを欲したのであるが、彼は、本源的な状態についての彼の理論すなわち彼の存在論的理論をこの現実の取引と調和させようとするにさいして困難性に出合った、そしてこの困難性のゆえに、スミスの理論は、(1) 生産における価値の規定は彼の見るところではこんにちの状態を取り扱いえないということから、交換をつうじての価値の規定のほうを選択するとともに、(2) 労働を、価値の実体と考えるだけでなく、技術的尺度としても、すなわち、そのみが利潤や地代といった明らかに異質的な要素をも包み込むことができたがってまた存在論的な主張を支持することのできる価値尺度としても考える、という二つの特徴をもつこととなったのである。<sup>(8)</sup>

(注)

(1) Dumont [1977], p. 88.

(2) Dumont [1977], p. 192. なお、『国富論』第1篇第5章の冒頭パラグラフにたいするデュモンの評釈については、Dumont [1977], pp. 191-192 を見よ。

また、デュモンによれば、スミスは第5章第2パラグラフの最初の文章で「あらゆる物の真実 (real) 価格、すなわち、あらゆる物がそれを獲得しようとする人にたいして真に (really) 費やさせるものは、それを獲得するための労苦と骨折りである」、と述べているが、この文章は、「第5章冒頭パラグラフで示されているような」交換という社会的局面をこえて問題の根源へと、すなわち、事物を「獲得する」ために激しく骨折って働く個々の存在としての個人というものへと、注意を向けさせようとしているのであり、そしてそこでの「真実 (の) (real)」、「真に (really)」とは、超経済学的、存在論的な地平への移行ということを表しているのである、とされる。Dumont [1977], p. 193.

さらに、デュモンによれば、スミスは第5章第4パラグラフのなかで、異なった種類や等級の労働の数量的な比較という困難な問題を提起し、そしてその問題にたいして、「市場のかけひきや交渉」ということを持ち出し、それが、たとえ正確にではなくても少なくとも必要にして十分な程度に、この困難な仕事を遂行する、ということで終えているのであるが、ここでは、ロックの多数決原理 (Locke's majority rule) におけるように、ひとたび根本的な原理 (principle) が定められれば、

「日常生活の業務」は、その原理を適用することを重んじるであろう、と考えられている、とされる。Dumont [1977], pp. 195-196.

- (3) Dumont [1977], p. 196. なお、デュモンが指摘しているスミスの議論にたいするマルクスのこの特徴づけについては、Marx, *Mehrwert* < I >, S. 121, 48 [大内・細川 訳『剰余価値学説史』< I >, 158ページ, 58ページ] を、参照せよ。
- (4) Dumont [1977], pp. 196-197. なお、デュモンは、本文のうえの③のなかで見たスミスの一節に関してつぎのような指摘をくわえている。すなわち、ミュルダール (G. Myrdal) は、スミスのこの一節を「心理学的不効用」としての労働という古典派の一般的な想定を物語るものとみなし、そしてそれを「自然における人間の位置という形而上学的な考え方」と関連づけるとともに、『『人間』[という言葉] はつねに単数形で用いられた』、としている (Gunnar Myrdal, *The Political Element in the Development of Economic Theory*, translated from the German by Paul Streeten (London: Routledge & Kegan Paul, 1953), p. 74, p. 228n. 26. 山田雄三, 佐藤隆三 訳『経済学説と政治的要素』[上掲英語版の邦訳] (春秋社, 1967年), 116-118ページ, 117-118ページ注26. 引用文中の〔 〕内は中川)。スミスのいう自然の人間にとっては、仕事 (work) とは一つの災いなのであり、そしてその心理は、18世紀個人主義のふつうのあらわれであったのである。事実、キャンナン (E. Cannan) は、スミスがその師ハチスン (F. Hutcheson) と同一線上にあることを示すハチスンのつぎのような一節を引用している、すなわち、「一日分の発掘または一日分の耕作は、千年まえも現在も、一人の人間にとっては同じように苦しい」(WN, Editor's Introduction, p. xlvii [大内兵衛, 松川七郎訳『諸国民の富』(全2冊) (岩波書店, 1969年), < I >, 「編者の序文」, 39ページ])。Dumont [1977], p. 197.

さらに、またデュモンによれば、本文のうえの③のなかで見たスミスの一節は、貨幣の変動が事象をおおい隠してはいるけれども労働や、生存のための財貨が、ある不変性というものをもつのだ、ということを強調しているのであり、我々はここで、労働にたいする強調ということに関連するヨリ一般的な事項に、すなわち、「貨幣的分析 (monetary analysis)」から「実物的分析 (real analysis)」への移行ということに、触れることになる、とされる。[なお、デュモンは、我々が本書の「24」で取り扱った Schumpeter [1954] の, pp. 276ff. (前掲邦訳, 第2分冊, 578ページ以下) を参照するよう指示している。] Dumont [1977], p. 197.

- (5) Dumont [1977], pp. 197-198.
- (6) Dumont [1977], pp. 88-89, 203, 204. なお、デュモンは、スミスが交換をつうじての価値規定、支配労働量による価値規定を導入し、それに移行したことについての、スミスにそくして見た場合の理由はつぎのようなものであった、とみているといえる。すなわち、本源的な状態のもとにおいては「生産における価値規定」(体化された労働量による価値規定) と「交換をつうじての価値規定」(支配労働量に

よる価値規定)とは同じことになるのであるが、後者の公式は、つぎの二点でまざっている。第一に、スミスにおいては生産と交換とは密接な結びつきをもつものであるが、この後者の公式は、理論上、生産と交換とを包み込むものである。第二に、そしてこれが主な点であるのであるが、スミスの考えでは、この後者の公式のみが、本源的な状態をこえて文明化された状態にも一般化できるものであり、またそれによって、生産における究極の実体としての労働という考えを文明化された状態にも適用することができるようになる、というわけである。Dumont [1977], p. 89.

なお、デュモンは、スミスがうえの二つの公式のうちの前者の公式は現実の状況には適用することができないと考えるにいたったのはなぜかということについて、また、前者の公式から後者の公式に移行するさいにスミスがなしている議論について、検討をくわえている。それについては、Dumont [1977], pp. 89ff., 198ff. を見よ。

(7) Dumont [1977], pp. 89, 203.

(8) Dumont [1977], pp. 98, 203-204.

## L. デュモン (1977年) についての覚書

デュモンによれば、スミスは『国富論』第1篇第5、第6、第7章において価値(交換価値)および価格の問題を取り扱い、第5章のなかでは価値の本質等々といったことに関するきわめて形而上学的な主張を示し、それにたいして第7章では「自然価格」および「市場価格」に関するきわめて経験的な議論をなし、そしてそれらの章の間にある第6章には第5章および第7章でのそれらの議論の間の橋渡しといった役割を与えようとした、とみられるのであった。

そしてデュモンによれば、労働が価値の本質であるとするだけでなく労働が価値の真の尺度でもあるとしようとするスミスは、異質労働の問題にも言及しながらその議論を展開する過程で、同時に価値の実体をも形成するところの価値尺度(価値の内在的尺度)と、貨幣は価値の尺度であるという意味での価値尺度とを、混同し、しかも、労働はある価値である(ある価値をもつものである)とみるとともに、さらに個々の存在としての個人といったものにうったえつつその価値自体は変化することのないものであるとみることによって、それ自体の価値がけっして変動することのない労働だけがすべての商品の価値の尺度を提供するのである、とした、とみられるのであった。

さらにデュモンによれば、うえのような議論を展開したスミスはそれについて労働の経済価値あるいは労働の価格といったことをあらためて論ぜざ

るをえなくなったのであるが、スミスは商品の「真実価格」および「名目価格」をそれぞれその商品の労働での価格およびその商品の貨幣での価格としていたのにもかかわらずここでのスミスの議論にしたがえば労働の（通俗的な意味での）「真実価格」は、その労働の財貨での価格ということとなるのであり、しかもスミスは商品の真実価格と労働のそれとを同一視して「諸商品と労働について、その真実価格と名目価格とを区別するのは、たんなる思索の問題ではない」としている、とされるのであった。

さらにまたデュモンによれば、価値の原理についての研究を事物の自然の状態というものから始めたスミスは、そのような状態のもとにおいては財貨の価値はその財貨に体化された労働量によって規定（決定）される（生産における価値規定）という考えを示すのであるが、他方、事物の文明化された状態については、商品の価格は賃金、利潤、地代という三つの要因からなるといった労働量説とは何の関係もない考えを示すと同時に、価格のそれらの構成部分の真実価値はそれらの構成部分が支配しうる労働量によって測られるとし、事実上、財貨の価値はその財貨が支配しうる労働量によって規定される（交換をつうじての価値規定）という考えへと移行することとなっている、とされるのであった。

ただし、デュモンによれば、スミスは、実際に価値の比較をなすさいには長期については穀物を、短期については貨幣を、尺度として使用しながらも、労働が価値の本質、実体であるという考えをより明らかなものにしたかったことから、労働が真の価値尺度でもあるのだということを示そうとするにいたったのであり、そしてまた、労働量（たとえ体化された労働量ではないとしても少なくとも、支配されうる労働量）による価値の説明が、価値の本質、価値の実体としての労働といった考えが、生産の本質、生産上の唯一の実体としての労働といった考えが、資本の蓄積と土地の占有の行われる社会状態という現実の社会状態にもあてはまるということを示したいがために、このような社会状態における商品の価格の構成部分の真実価値は労働を尺度とすることによって測られる、としたのであり、したがってまた、スミスは彼の労働価値説の妥当性を資本の蓄積と土地の占有に先立つ社会状態に限定しようとしていたわけでも、労働をたんなる一つの尺度あるいはニュメーラルとして選んだにすぎないというわけでもないのである、とみられるのであった。



## 67. W. ジャッフエ (1977年)

W. ジャッフエ (W. Jaffé) は、1977年に公表された彼の一論文 (William Jaffé, "A Centenarian on a Bicentenary: Léon Walras's *Eléments* on Adam Smith's *Wealth of Nations*," *Canadian Journal of Economics*, vol. 10 (no. 1, February 1977), pp. 19-33. 以下, Jaffé [1977] と略記する) のなかでその論文に関して、「ここは、アダム・スミスが価値についての人を当惑させるような彼の様々な言説によって真に何を言おうとしたのかということを知り明かすに適した場ではないし、また私にはそれをなす資格もない」とするのであるが、<sup>(1)</sup> ジャッフエのその論文のなかにも、以下のようなものとして捉えることもできるであろうような彼の見方を見いだすことはできる、といえるであろう。

① スミスは決して労働を、交換価値 (value in exchange) をもつ唯一のものとして描写しなかったし、また、たぶん、スミスにとっては労働は、価値の源泉 (source)、価値の実体 (substance)、あるいは価値の尺度 (measure) であったのであろうが、スミスは主に、価値の尺度ということに関心を抱き、価値の源泉 (origin) についてはただ末梢的かつ推測的にのみ考えたのであって、『国富論』中のあちこちの語句はスミスが少しは価値の究極的な源泉 (source) ということに関心をもっていたということを示しているかもしれないとしても、そのような価値の究極的な源泉<sup>(2)</sup> といったことは、明らかに、スミスの主要関心事ではなかったのである。

② また、森嶋は、マルクス (K. Marx) にとって労働価値理論 (labour theory of value) は「(i) 現実の価格が経時的にそれをめぐって変動するところの、諸商品の均衡価格 (あるいは交換価値, exchange values) を説明し、また、(ii) それをタームとして多数の産業……が集計されるところの、アグリゲーター (aggregators, 集計因子) あるいは集計のウエイト (weights of aggregation, 荷重因子) を提供する」という二つの機能を果たした、と言うのであるが、<sup>(3)</sup> 「実価格 (real price) と名目価格」との区別ということに向けられた『国富論』第1篇第5章でのスミスも、主として、事実上うえと同

一の二つの観点から価値というものに関心をもっていたのであり、またそこでのスミスにとっても、労働価値理論は本質的にはうえと同一の二つの機能を果たすものであったのである。<sup>(4)</sup>

③ なお、うえの集計ということに関しては、集計の原理という点ではうえのような意味でマルクスの場合とスミスの場合とは同一なのではあるが彼らの各々のその集計の用途という点では異なっているのであって、マルクスの場合には、全体として捉えられた資本財生産「部門」と全体として捉えられた消費財生産「部門」との間の経済における関係を分析するために彼の集計を使用したのにたいし、スミスはそれをもって、「富裕 (opulence)」の前進を、すなわち、経時的なしかも様々な統治政策体系のもとでの、国民の全体としての産出高の動きを、測定すること、あるいは少なくともそれを概算することを、望んでいたのであったのである。<sup>(5)</sup>

(注)

- (1) Jaffé [1977], p. 25.
- (2) Jaffé [1977], pp. 24, 25.
- (3) Michio Morishima, *Marx's Economics: A Dual Theory of Value and Growth* (Cambridge, etc.: Cambridge University Press, 1973), p. 10. 高須賀義博訳『マルクスの経済学——価値と成長の二重の理論——』(東洋経済新報社, 1974年), 13ページ。
- (4) Jaffé [1977], p. 24.
- (5) Jaffé [1977], p. 24. なお、以上でみられてきたところからして、ジャッフエは事実上、価値の源泉 (source, origin) の問題、均衡価格に対応するものとしての価値の大きさの決定の問題、また、価値の尺度の問題は、それぞれ別個な三つの問題であり、そして、スミスの「労働価値理論」は後者の二つの問題にかかわるものであったのであり、また、スミスの議論における価値尺度の問題は集計としての一国の産出高の動きを測定もしくは概算するためのアグリゲーターあるいは集計のウエイトの問題であった、と捉えている、ともいえるであろう。

## W. ジャッフエ (1977年) についての覚書

事実上、価値の源泉の問題、均衡価格に対応するものとしての価値の大きさの決定の問題、価値の尺度の問題はそれぞれ別個な問題であると捉えているともいえるジャッフエによれば、スミスの場合には価値の源泉ということ

は主要関心事ではなかったとされるときにも、他方でまた、スミスは主に価値の尺度ということに関心を抱いていたとされるのであったのであり、そしてそのさい、ジャッフェは事実上、スミスの議論における価値尺度の問題は集計としての一国の産出高の動きを測定もしくは概算するためのアグリゲーターあるいは集計のウェイトの問題であった、と捉えている、ともいえるのであった。

そしてまた、そのジャッフェによれば事実上、『国富論』第1篇第5章ではスミスは価値の問題に主として、現実の価格がそれをめぐって変動するところの均衡価格に対応するものとしての価値の大きさの（決定の）説明およびうえのような目的のために使用されるべきアグリゲーターあるいは集計のウェイトといった二つの観点からアプローチした、とみられるとともに、その第5章ではスミスは事実上うえのような二つの事柄を取り扱うその脈絡のなかで彼の「労働価値理論」を展開したのである、とみられているのであった。

## 68. J. T. ヤング (1978年)

1978年に刊行された J. T. ヤング (J. T. Young) の一著書 (Jeffrey T. Young, *Classical Theories of Value: From Smith to Sraffa*, Boulder, Colo.: Westview Press, 1978. 以下, Young [1978] と略記する) のなかでヤングは、つぎのような見解を示している。

① スミスは、彼の価値分析を価値のパラドックスから始め、そしてそこから、『国富論』第1篇第5章において、労働は「すべての商品の価値を、時と場所のいかんを問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準である。労働は、すべての商品の真実価格 (real price) である……」(WN, p. 33. 大河内訳 < I >, 58ページ) という考えに基づく彼の有名な支配労働説 (labor command theory) を展開するのであるが、スミスがこの議論において言おうとしていることは、現実の交換価値 (exchange values) の決定 (determination) ということよりもむしろ、指数 (index numbers) の問題なのである。<sup>(1)</sup>

② スミスは、古典派の伝統の展開にたいして四つの主要な貢献をなしたのであるが、そのうちの第四の貢献とは、スミスは、適切な価値尺度 (measure of value) ということについてかくもリカードウ (D. Ricardo) を悩ませたところの長きにわたる論議を、開始した、ということである。<sup>(2)</sup>

③ スミスは、異なる諸国民間および異なる諸時点間の比較をするという問題を明確に理解していたのであり、そして彼は、つぎのような尺度、すなわち、当該商品が交換されうる労働量が変化してしまうようなその商品の生産要件 (production requirements, 生産条件) に変化があったときにのみ、その商品の本当の価値における変化を表示するといった形で、すべての時点と場所に適用できるような尺度、そのような尺度を開発することを、試みたのであった。<sup>(3)</sup>

④ なお、スミスは労働は不変なものと考えていたため、つぎのような理由から絶対価値 (absolute value) の概念がスミスの分析では意味を持つことになるのである。すなわち、交換において支配される労働量における変化は、

商品および労働双方の相対価値 (relative value) の変動といったことにかかわらず、ただ商品の真実価値 (real value) の、変化<sup>(4)</sup>ということを指し示すであろう、からである。

(注)

- (1) Young [1978], pp. 24-25, p. 49n. 6. なお、ヤングによれば、スミスがすべての商品の本当の価値 (true value) としての〔支配〕労働ということを強調したということが、スミスが究極的には投下労働価値説 (labor embodied theory of value) よりもむしろ生産費説をとるにいたった<sup>(4)</sup>ということにたいする一つの説明を提供する、とされる。Young [1978], p. 49n. 6, p. 25.

また、ヤングによれば、スミスは、つづく第6章において投下労働原理 (labor embodied principle) への最初の言及をなし、さらに、価格の構成要素として賃金、地代、利潤を取り出し、第7章は市場価格と自然価格との区別を持ち出し、そしてそこから、分析は、賃金、地代および利潤の自然率の決定ということを探究することとなっている、とされる。Young [1978], p. 25.

さらに、ヤングは、スミスの議論についての理解における混乱の主要な源泉は、『国富論』第1編でスミスは少なくとも四つの価値理論 (four theories of value), すなわち、支配労働説、投下労働説、労働不効用説 (disutility of work theory), 生産費説を提出していたということであり、また、究極的にはスミスは生産費説もしくは合算説 (adding-up theory, 加算説) をとった、とし、そしてスミスがそのような立場をとるにいたった論理を示そうとしている。このことについては、Young [1978], pp. 25-26 を見よ。

- (2) Young [1978], pp. 26, 27. なお、他の三つの貢献についてのヤングによる説明については、Young [1978], pp. 26-27 を見よ。
- (3) Young [1978], pp. 27-28.
- (4) Young [1978], p. 28. なお、ヤングは、我々が本書の「49」で取り扱った M. ドップ (M. Dobb) の一著書の、上製版の p. 48 [我々が Dobb [1973]] として略記することとしたペーパー・バック版の p. 48, 前掲邦訳、64-65ページ] を参照するように指示している。Young [1978], p. 49n. 13.

## J. T. ヤング (1978年) についての覚書

ヤングによれば、スミスは『国富論』第1篇第5章で支配労働説を展開するのであるがそこで問題となっているのは現実の交換価値の決定ということよりもむしろ指数の問題である、とされ、また、スミスが適切な価値尺度と

68. J. T. ヤング (1978年)

ということについての論議を開始したということが、古典派の伝統の展開にたいするスミスの主要な貢献の一つである、とされるのであった。そしてヤングは、スミスの議論における本当の価値、「真実価値」を、生産要件（生産条件）の変化ということを反映する絶対的な価値として捉え、スミスの議論では「支配労働量」の変化は「真実価値」の変化を指し示すと考えられている、とするのであった。

## 69. P. ディーン (1978年)

1978年に刊行された P. ディーン (P. Deane) の一著書 (Phyllis Deane, *The Evolution of Economic Ideas*, Modern Cambridge Economics [Series], Cambridge, etc.: Cambridge University Press, 1978. 以下, Deane [1978]と略記する。なお, ディーンの上掲書には, 中川にとって未見の邦訳, 奥野正寛訳『経済思想の発展』(岩波現代選書), 岩波書店, 1982年 がある) の第2章「アダム・スミスの価値理論 (Adam Smith's Theory of Value)」においてディーンは, 価値に関するスミスの議論を検討する過程でつぎのような見解を示している, といえる。

① 価値理論の検証という点からも, 使用可能なタームで実際に価値を測定することができるということが必要なのであるが, スミスは価値に関する彼の議論の一部として価値の測定ということに関する問題を取り扱っている。<sup>(1)</sup>

② なお, 諸国間の比較あるいは経時的な比較をなすことができるように価値を測定するためには, 空間的にも時間的にもそれ自体が相対的に安定的なものである一つのニュメレールが必要となる。ところで, 価格は通常, 貨幣タームで表現されるのであるが貨幣それ自体は一つの不定的な物差しである。<sup>(2)</sup> このような問題に対する一つの解決法としてスミスは穀物を検討したのであるが,<sup>(3)</sup> 結局のところスミスは, 「労働が……唯一の正確な価値尺度であることはもちろん, 唯一の普遍的な価値尺度でもある, 言い換えると, 労働が, いついかなるところでも, 様々な商品の価値を比較することのできる唯一の標準である」(WN, p. 36. 大河内訳 <I>, 63ページ) という見解をとることとなったのであった。<sup>(4)</sup>

③ なお, スミスは彼の労働価値尺度 (labour measure of value) ということによって厳密にはどういうものを意味していたのかということに関しては多くの議論が存在してきたし, また, 彼は実際にはその尺度を経験的に用いたことがけっしてなかったため, 論争の余地は大いにある。だが, すべてを考慮してみると, 『国富論』における議論は, スミスが資本主義経済にお

ける「唯一の正確な価値尺度」とみなしたものは商品に<sup>⑤</sup>体化された (*embodied*) 労働ではなくて商品によって<sup>⑤</sup>支配される (*commanded*) 労働であったということを示唆している、というように思えるのである。

④ スミスが資本主義社会での「諸商品の交換価値を規制する原理」についての彼の考察の最初で提示した諸問題のうちの第一の問題、つまり、諸商品の交換価値の真の尺度はなんであるか、すなわち、すべての商品の真実価格はいったいなにに存するか、という問題にたいするスミス自身の解答は、つぎのものであった。すなわち、諸商品の交換価値 (*exchangeable value*) の真の尺度は、市場においてそれらの財貨によってその時々<sup>⑤</sup>に支配される労働である、そしてその理由は、実質所得の、貧困あるいは富裕の、究極の尺度となるものはこれであるからである、ということである。たとえばスミスはつぎのように言っている。「人が富んでいたり貧しかったりするの、人間生活の必需品、便益品および娯楽品をどの程度享受できるかによる。だが、分業がひとたび徹底的に行きわたるようになったあとは、一人の人間が自分の労働で充足できるのは、このうちのごく小さな部分にすぎない。彼は、その圧倒的大部分を他の人々の労働に仰がなければならないのであって、彼は、自分が支配できるその労働の量、または自分が購買することのできるその労働の量に応じて、富んでいたり貧しかったりするにちがいない」(WN, p. 30. 大河内訳 < I >, 52ページ)。<sup>⑥</sup>

#### (注)

- (1) すなわち、ディーンによれば、なんらかの受け容れることのできる価値理論 (*theory of value*) を考案するにさいしては、①一商品が価値を獲得するのは、どのようにしてか、また、何故にか、ということの説明 (*explain*) すること、②一方での一財貨あるいは一サービスのなんらかの内在的、永続的 (必ずしも不変な属性というわけではないが) なものとして考えられる価値と、他方での、貨幣タームもしくはなんらかの他の諸財貨あるいは諸サービスのタームで表されたその財貨あるいはそのサービスの市場価格との間の、複雑で変わりやすい関係を解きほぐすこと、③その価値理論を一つの所得分配理論に関連づけること、④使用可能なタームで実際に価値を測定 (*measure*) するということ——というのは、もし価値が測定できないならば、その理論は検証できないから——といった四つの主要な内的に関連する問題が伴うのであるが、『国富論』第1篇でスミスが価値についての彼の議論を開始したつぎの一節では、スミスはこれらすべての問題に顔を向けていたのであって、



その一節とは、「注意しなければならないのは、価値という言葉に、二通りの異なる意味があって、あるときはある特定の対象物の効用をあらわし、あるときはその所有がもたらす他の財貨にたいする購買力をあらわす、ということである。前者は『使用価値』、後者は『交換価値 (value in exchange)』と呼ぶことができよう。最大の使用価値をもつ物が、しばしば交換価値をほとんどあるいはまったく、もたないことがあり、これとは反対に、最大の交換価値をもつ物が、しばしば使用価値を「ほとんどあるいは」まったく、もたないことがある。水ほど有用なものはないが、水ではほとんどなにも購買できないし、それと交換にほとんどなにも入手できない。反対にダイヤモンドは、ほとんどなんの使用価値ももっていないが、それと交換に非常に大量の他の財貨をしばしば入手することができる。／諸商品の交換価値 (exchangeable value) を規制 (regulate) する原理を究明するために、私はつとめてつぎの諸点を明らかにしようと思う。／第一に、この交換価値の真の尺度はなんであるか、すなわち、すべての商品の真実価格 (real price) はいったいなにに存するか。／第二に、この真実価格を構成し、あるいはつくりあげている様々な部分とはどんなものであるのか。／そして最後に、価格のこうした様々な部分のいくつか、またはすべてを、ときにはその自然率ないし通常率以上に引き上げ、またときにはそれ以下に引き下げる様々な事情とはどんなものであるのか。あるいは、諸商品の市場価格すなわち現実の価格がそれらの自然価格と呼べるものと正確に一致するのをときとして妨げる諸原因は、いったいどんなものであるのか」(WN, pp. 28-29. 大河内訳〈I〉, 49-50ページ。／は原典において行変えが行われていることを示す。以下同様。〔 〕内は引用にさいしてディーンが抜かしている箇所), といったものである、とされる。Deane [1978], pp. 23-24.

- (2) ディーンは、スミスは真実価格と名目価格とを区別した、とし、さらにつぎのようなスミスの文章を引用している。「同一の真実価格はつねに同じ価値をもつ、しかし金銀の価値の変動のゆえに、同一の名目価格は時として、非常に違った価値をもつのである。」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 59ページ。) Deane [1978], pp. 25-26.
- (3) ディーンによれば、スミスは、「穀物で納めることになっている地代は、貨幣で納めることになっている地代にくらべて、鑄貨の名称が変更されなかった場合でも、その価値をはるかによく保持してきた」(WN, p. 34. 大河内訳〈I〉, 60ページ)し、また同様に、貧しく沈滞した経済では一労働者の生計をまかなうのに求められる穀物の量は相対的に不変的であるのではあるが、しかし、成長しつつある経済では、つまり、「富裕にむかって前進しつつある社会」では、そのような穀物の量もまた変動的なものになるであろう、とした、とされる。Deane [1978], p. 26.
- (4) Deane [1978], pp. 25-26.
- (5) Deane [1978], p. 26. このことに関してディーンはつぎのような説明をくわえて

いる。すなわち、もしスミスがその尺度を用いていたとすれば、彼はおそらく、当該財貨の生産に必要とされる労働に関するデータを尋ねるのではなくて、市場においてその時々にはその財貨が交換される労働量に関するデータを尋ねていたことであろう。もちろん、スミスの指摘しているように、「資本 (stock) の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態」にあっては、商品に体化された労働とその商品によって支配される労働とは同じことになったことであろう。だが、「労働の全生産物がつねに労働者に属するとはかぎらない」資本主義経済においては、この二つの指標は、(のちにリカードウ〈D. Ricardo〉が指摘したように) 賃金が労働生産性と歩調を合わせて動かないかぎり、換言すれば、賃金が生産物の総価値のなかの不变な割合を構成しないかぎり、異なった結果をもたらすのである〔なお、ディーンは事実上、このことについては Ricardo, *Principles* [ed. Sraffa], p. 14 (堀訳『原理』, 16ページ), および、我々が本書の「49」で取り扱った M. ドップ (M. Dobb) の一著書の、上製版 p. 49 に付されている、数字例を示す脚注 (我々が Dobb [1973] として略記することとしたペーパー・バック版の、p. 49, pp. 49-50n. §, 前掲邦訳, 66ページ, 330ページ注32を見よ), を参照するよう指示している〕。Deane [1978], p. 26, p.26n. 20.

さらにディーンは、以上の説明につづけてつぎのようなスミスの文章を引用している。「したがって、およそ商品の価値は、それを所有していても自分では使用または消費しようとはせず他の商品と交換しようと思っている人にとっては、その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しい。それゆえ、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である。／あらゆる物の真実価格、すなわち、あらゆる物がそれを獲得しようとする人にといて〔真に〕費やされるものは、それを獲得するための労苦と骨折りである。あらゆる物が、それを獲得してしまった人にとって、またそれを売りさばいたり他のなにかと交換したりしようと思う人にとって、真にどれほどの値打ちがあるかといえば、それによって彼自身がはぶくことができ、またそれによって他の人々に課することのできる労苦と骨折りである。」(WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52-53ページ。〔 〕内は引用にさいしてディーンが抜かしている箇所。) Deane [1978], pp. 26-27.

(6) Deane [1978], p. 27.

## P. ディーン (1978年) についての覚書

ディーンによれば、価値理論の検証という点からも、価値を実際に測定できるということが必要なこと、となるのであるが、スミスは価値に関する彼の議論の一部として価値の測定ということに関する問題を取り扱い、そして、時間的にも空間的にも安定した価値尺度として機能しうるものを求め、その

ようなものとしては貨幣を退けさらに穀物の適格性を検討するのであるが結局のところ彼は労働こそがそのような機能を果たしうるものであるとした、とされるのであった。

さらにまたディーンによれば、実際にはスミスはその労働という価値尺度を経験的に用いることはなかったのではあるけれども、事実上資本主義社会における「唯一の正確な価値尺度」とスミスがみなした労働とは、「体化された労働」ではなくて「支配される労働」であったと思えるのであり、実質所得の程度についての、貧困あるいは富裕の程度についての究極的な尺度を提供することとなる「支配される労働」という意味での労働こそが諸商品の交換価値を測定する真の尺度であるとスミスは考えていたのである、とみられるのであった。

## 70. H. アルント (1979年)

1979年に刊行された H. アルント (H. Arndt) の一著書 (Helmut Arndt, *Irrwege der politischen Ökonomie: Die Notwendigkeit einer wirtschaftstheoretischen Revolution*, München: C. H. Beck, 1979. 以下, Arndt [1979] と略記する) のなかでアルントは、つぎのような内容をもった見解を示している。

① 財貨の真の価値を規制 (bestimmen, 決定, 規定) する原理を究明するために、スミスは、つぎの二つの問題、すなわち、1. 経済的評価のための真の尺度 (Maßstab) とは何であるか、2. 市場において市場価格という形でみえるようになる経済現象が「自然価格」——彼の見解によれば市場価格はこの「自然価格」に引きつけられる——と相違するのはなぜか、という問題を提出するのであるが、スミスは、真の価値、経済的な「物自体 (Ding an sich)」と、時間および空間において変動する市場価格、経済現象とを、区別しており——この区別は、経済理論においては現代でもなお生きたままにされている——、そして彼にとってその真の価値とは、そののみがみることのできるものであるところの市場価格の背後に、隠されているものなのであった。<sup>(1)</sup>

② ところで、スミスにとっては、「絶対的な尺度」は、労働であるのであった。<sup>(2)</sup> だが、時間および空間において生じる諸変化をつうじて相対化されるような社会では、スミスが探求したような絶対的な尺度は存在しはしないのである。発展しつつある社会においては、商品に固着している労働の量も質も、不変なものに留まりはしない。労働生産性向上 (また、原材料の質的改良) とともに、一生産物を作り上げるのに平均的に必要とされる労働の量は少なくなる。同時に、国家の団結禁止令の崩壊以後には、ヨリ強力な自治的労働組合の存在をつうじて実質的な時間給は、時期時期に上昇する——またそれは、装備される機械類のおかげで労働生産性が高まるとき、またそのかぎりでは、引き上げられうる——。ハンマーや鎌の製造のためには、こんにち、スミスの時代のような労働時間のうちのほんの一部だけが必要とされる

だけなのに、一方では、異なる各々の種類の労働にたいする実質賃金は、いづれの場合にも、ずっと高いものに、引き上げられるのである。<sup>3)</sup>

③ 諸価値と諸価値関係は、諸生産物とそれらの生産物が交換される諸市場と同様に、時間的にも空間的にも同一であることのないものなのであり、時間や空間から独立的な経済価値といったものは、形而上学者が地上世界の外に捜し求めた「物自体」と同じように、存在しはしないものである。諸価格や諸賃金とは、ソビエト連邦のような諸国家におけるようにそれらが国家によって命令されるのでないかぎり、社会的なそして時間的にも空間的にもたえず変化している評価の、結果なのである。<sup>5)</sup>絶対的な価値といったものは、政治におけるのと同様に経済においても存在しないのである。したがって、把握できないものを把握しようとする企て、すなわち、相対的な・一時的な・経済的な大きさのためのある絶対的な価値尺度を定め<sup>6)</sup>て需給のそのおりの関係をつうじて規制される市場価格の背後に真の本体(Sein)を見つけ出そうという企ては、一つの誤謬なのであったのである。

(注)

- (1) Arndt [1979], S. 10.
- (2) アルントは、『国富論』第1篇第5章を参照するよう指示し、さらに、つぎのようなスミスの文言を引用している。「商品の価値は、それを所有している……人にとっては、その商品で彼が購買できる……労働の量に等しい。」(WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ。) Arndt [1979], S. 11, S. 223 Anm. 3.
- (3) Arndt [1979], S. 11.
- (4) このことについてのアルントの説明については、Arndt [1979], S. 11-12 を見よ。
- (5) アルントによれば、スミスの信じているようには、市場価格は、存在しもしない「自然価格にむかって、不断に」引きつけられているのではなく、需給のそのおりの関係のなかに現れるところの時間的にも空間的にも変動する稀少性(Knappheit) ということをつうじて、規制されるのである、とされる。Arndt [1979], S. 12.

また、他のところでアルントは、「財貨の交換価値は、市場において生じるその経済的評価の結果であり、そして、その程度はその商品の自然的な諸性質に従うのではなくて、需給の関係に、したがってまた時間的にも空間的にも変化する稀少性ということに、従うのである」、と述べている。Arndt [1979], S. 17 (傍点の付されている箇所は、アルントの原文ではイタリック体)。

なお、うえのことからして、アルントは事実上、市場価格の決定すなわち交換価

## 70. H. アルント (1979年)

値の決定とみている、といえるであろう。

(6) Arndt [1979], S. 12.

### H. アルント (1979年) についての覚書

アルントによれば、時間的および空間的に変動する市場価格の背後に時間や空間から独立的な経済価値、絶対的な価値としての真の価値が存在すると考えるスミスは、財貨の真の価値を規制する原理を究明するために、一つには、経済的評価のための真の尺度とは何であるかという問題を提出し、そして、そのような真の尺度、「絶対的な尺度」を労働に求めたとされるのであった。だが同時にまたアルントによれば、現実の世界においては、時間的にも空間的にも不変な絶対的な価値尺度といったようなもの、さらに、時間や空間から独立的な絶対的な経済価値といったようなものは、そもそも存在しはしないのであって、ある絶対的な価値尺度によって市場価格の背後にあるものとしての真の価値、絶対的な経済価値をつきとめようといったような企ては、把握できないものを把握しようとする一つの誤謬である、とみられるのであった。

## お わ り に

以上において、19世紀末以降1970年代末までに海外で発表されかつ筆者が見ることのできた限りでの「スミス価値尺度論」に関連する諸研究の一つひとつを、基本的にはそれらの研究の公表された年順にとりあげつつ、それら諸研究各々のもつそれぞれの内容そのものを把握してそれを明らかにすることそれ自体を主要目的とした研究が、行われてきた。

もっとも、論文等他人の労作中に示される研究そのものを完全に理解するといったことそれ自体は、実際のところ、もともとほとんど不可能なことであろうし、まして異なった背景をもつ異なった言語で構想され書かれたものについてはなおさらのことであるのであるが、しかしまたその反面で、むしろそうであるからこそ、一つひとつの研究の内容をできるだけ正確に把握し、それらを、我々による今後の各々の研究に活用しうるような形で提示しておくことは、それ自体意義を持つことになるはずである。事実上このような考慮にもよりつつ、本書は、本書「序」で触れられた研究構想の一環としてと同時にそれ自体としても存在に値するはずのものとして、公にされることとなったわけである。

なお、本書のその「序」で触れられたように我々は次の機会に、本書で行われた研究作業の結果を踏まえつつ、そこで取り扱われた諸研究のなかにみられる個々の見解を相互に比較することをつうじて、それら個々の見解のもつ意味さらにそれらの見解をその内容として含む諸研究のもつ意味をより明らかにするとともに、それらの研究が我々に提起していることになる諸論点およびその含意、さらにまた、それらの研究をしてそれらの論点を論点として我々に提起させているその背景となっている諸認識、諸事情を、できるだけ明らかにする、という試みをなす。したがって、以上で取り扱われてきた諸研究の各々がもつそれぞれの内容は相互にどのような関係のなかに位置づけられることができるか、といったことそれ自体は、その、次の機会での研究をつうじて、自と明らかになってくるであろうゆえ、ここでは、そのような観点からというよりもむしろ、以上でなされてきた研究をどちらかといえば総体的な観点からふりかえりつつ、本書において以上のような範囲と形で

研究をすすめようとしてきた筆者の述べておきたいこと、その最小限を述べることによって、本書を終えることとしよう。

まず、本書の「序」でも触れられたように、また事実、以上で取り扱われた諸研究のその内容が示されている諸文献のうちのいくつかのものからもうかがえるように、スミスの議論における「価値の尺度」ということは、それに論及されることがしばしばであってもそれ自体としてまとまった形でとりあげられることの比較的少なかった問題であるように思える。他方でまた、「スミスの価値尺度論」と言われた場合「なぜいまさらスミスの価値尺度論なのか」といった感を抱く人もおられるかもしれない。しかしながら同時にまた、少なくとも以上で取り扱われた諸研究を総体としてみた場合にそれが訴えようとしていることの一つは、「スミスの価値尺度論」という問題は、価値に関するスミスの議論一般についての理解ということと、そしてさらに、スミスの経済学の性格、スミスの経済学一般についての理解ということと、深いかかわりをもつとともに、それらの理解のためには「スミスの価値尺度論」といわれるものに関する理解は一つの重要な要件である、ということなのである。そしてまた、多くの場合「スミスの価値尺度論」といわれるものの中心的な部分を提供している箇所として捉えられる『国富論』第1篇第5章は、たとえば本書の「55」でその議論が取り扱われた D. P. オブライエン (D. P. O'Brien) によって「偉大な一経済学者のペンから生まれることとなった恐らく間違いなく……最も入り組んだ章」とされ (O'Brien [1975], p. 82), そして事実その言葉に対応するかのように、少なくとも以上で取り扱われた諸研究では、事実上その第5章でのスミスの議論さらにそれとの関連で他の箇所でのスミスの議論に関して、きわめて多様な見解がそれぞれ正当なものとして主張され、その当否の判断を我々に求めているのであった。以上のような範囲と形のもとに取り扱われた諸研究の訴えているところによれば、「スミスの価値尺度論」というテーマは、少なくとも経済学の歴史の研究という観点からすれば、とりあげられるに値しないテーマではなくてとりあげられるに値するテーマなのであり、解決済みのテーマではなくて解決されなければならないテーマであるのである。

また、以上では、諸研究を基本的には公表年順にとりあげ、そして、それら諸研究の類型また内容の当否といったことは特に問うことなしに、もっぱらそれら諸研究一つひとつのもつ内容そのものをできるだけ正確に把握し、



提示していく、という形で研究がすすめられたのであり、そしてそのような方法をとった意図の一つにはもちろん、主に今世紀に入って以来の「スミス価値尺度論研究」の海外における展開の跡をできるだけ生のままで追体験する、ということがあったのであるが、そこにはまた実は、時間の推移のなかでどのような内容をもったどのような研究が出てきたかというその事情を、できるだけ手を加えずに示すことによって、それらの研究そのものをして、「スミスの価値尺度論」に関連する研究は海外において、たとえばスミスの議論における価値の内在的尺度と外在的尺度との混同等々といったような見解にみられる視点を数ある視点の一つとして含みつつも、様々な視点から、様々な形で、なされてきたという事実それ自体を語らしめたい、という狙いもあったのである。

そしてまた、事実、以上の研究結果は、たとえばうえのような視点からなされた議論、あるいはまたたとえば、M. ブラウグ (M. Blaug) のような、また、V. W. ブレイドゥン (V. W. Bladen) のような、さらにまた、P. シロスラビーニ (P. Sylos-Labini) のような、諸視点からなされた諸議論、等々といったように、多様な視点から多様な形でなされた諸研究が海外に存在してきたことを示しているのであった。ただし、以上ではことさらに問わなかったことであるが、多様なそれら諸研究またそこに含まれている諸見解のうちのいずれかのものが当を得たものであるかもしれないし、あるいはまたそのいずれのものも誤ったものであるかもしれない。他方また、たとえば『国富論』に示されるスミスの論述のなかには様々な解釈を招来する要素のあることも事実であろうし、さらに、およそ古典と呼ばれるものは異なった時代や場所でもたそこにおける異なった個人によって様々な形で読まれ、解釈されうるものであって、『国富論』もそのような古典の一つと考える、といった事情もある。とはいえ、「アダム・スミスの価値尺度論」に関する解釈においてどのような立場をとるにしても、以上でみられてきたような多様な諸研究の存在を意識しておくことそれ自体は、意味のあることであろう。すでになんらかの立場を確立している人にとっては、それらの研究は、その立場を確認したそれをより堅固なものにするうえで貢献しうるであろう。また、これから立場を形成しようあるいは改めて形成しようとする人にとっては、それらの研究は、その作業をより自覚的な形ですすめるうえでの助けを提供しうることであろう。

## あ　と　が　き

本書は、約十五年を費やすこととなってしまった筆者の研究の、一つの結果である。

もちろん、このようなささやかな研究結果といえどもそれ自体は、筆者が賜ってきた多くの学恩があつてはじめて成立しえたものである。とりわけ、筆者は神戸商科大学大学院に在籍中、高木正雄先生からアダム・スミス研究の手ほどきをいただき、松代和郎先生に社会科学上重要ないくつかの原典を一对一で読んでいただき、保坂直達先生から基礎的な現代経済理論を教えていただいた。その三人の先生から賜ったご指導があつたからこそ、本書で取り扱われたような諸文献にたとえ不十分にではあれ取り組むことができたのである。また、筆者の所属する「経済学史学会」の根岸 隆先生からは、本書のもととなった拙稿のいくつかのものにたいして請うまゝに有益で親切なコメント、ご教示を与えていただき、中村廣治先生には広島での研究会等をつづじて直接、間接に様々なお教えをいただき、またそれ以外の会員の方々からも多くの示唆、刺激を与えていただけてきた。そして、筆者の勤務先広島経済大学にあっては、奥田秋夫先生をはじめ学問の世界における大きな諸先達に出会う幸運に恵まれ、それらの先生方のそれぞれの人格によって筆者の研究生活は直接、間接に支えられ勇気づけられてきた。さらに、関西大学の原田聖二先生、広島大学の小村衆統先生をはじめ、ここで一人ひとりお名前を挙げるこののできない他の多くの方々からも、文献収集等を含め様々な面で多くのご助力をいただけてきた。賜ったものに報いるほどの仕事を達成していないことを詫びるとともに、心からの感謝をささげる次第である。

そして最後になったが、本書の刊行にさいしてお世話をいただいた広島経済大学地域経済研究所長 狭田喜義先生をはじめ多くの方々にたいして、また、研究の場さらに本書刊行の機会を与えてくださった広島経済大学にたいして、心から感謝の意を表したい。

なお、本書中にあるであろう不備、誤りはすべて筆者自身の責任によるものである。ご批判、ご教示を賜ることができれば幸いである。

## 著者略歴

中川 栄治 (経済学史)

1946年 大阪府に生まれる。

1969年 関西大学経済学部卒業

1974年 神戸商科大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学  
関西女子短期大学専任講師

1975年より広島経済大学専任講師，助教授を経て

1987年より広島経済大学教授，現在に至る。

この間1984年9月より1年間，英国グラスゴウ大学に留学

現住所 〒739-17 広島市安佐北区口田二丁目8-20

---

平成7年12月20日発行

「アダム・スミスの価値尺度論」

に関する海外における諸研究

——19世紀末から1970年代末——（下）

広島経済大学研究双書 15

（非売品）

著 者 中 川 栄 治

発行／広島経済大学地域経済研究所

〒731-01 広島市安佐南区祇園5-37-1

Tel (082) 871-1664

---

印刷／中本総合印刷株式会社